女子文壇

都會の婦人

第二增刊
六年第七號

女子文壇社發行

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

●婦人一生中に最も心配なる事實

（政治上實業上に外交の繁き良夫を持つ夫人は日々數多の賓客に接する婦人は殊更注意せよ恐るべき難産と流産と不妊症は必ず來るべし）

婦人は身體の構造上種々雜病に對し病毒の發源地となりて他に感染せしめ又病毒の繁殖地となりて自己の膣子宮を害し血の道にて苦む故婦人の持病と諦め腰より脚部へ冷る如く感ぜば婦人は冷え込む天性と自覺して帶下、白帶下、赤帶下の惱むも冷込と速斷し他人の擧兒を羨むと共に我が子寶なきを嘆きながら之も例の冷込みと誤信して見當違の暖め藥等を內用する故遂に永引は畢竟誤療の結果と知るべし元來婦人の生殖器は天然的受身に構造せられ即ち人類の田畑なれば病菌の播殖するは當前にて結婚の機會に病毒侵入し其田畑を荒すゆゑ子宮血の道に惱み倍々荒せば荒す程其肉落ち身體の衰れるは實際瘠き土地の田畑に滿足の農產なき道理なり婦人科學上婦人病の療法は局部の治療を第一義とし局處の外用する藥劑の要求は[illegible]なるに至る余は藥劑師にて衞生の天職上茲に傍觀するに忍びず積年苦心慘憺研究の末方今婦人科學の泰斗として[illegible]上實地の練達一世を壓する獨逸伯林のフロインド博士の研究と其實驗に成る處方に則る藥液をして直接に婦人の局處に作用すると同時に吸收せられて其藥効を發揮すべく可要球[illegible]多の婦人科醫に之が實驗を諮めたるに子宮內膜炎にて下腹痛み常に帶下ありて白帶下又赤帶下に惱み腰より下腹へ筋張り更に胸先きへ差込み。子宮糜爛して痛み。子宮出血して褌を汚染し。厭な處に惡臭ありて他に嫌れ又は燃え立つ搔痒を起し搔ば痛む症。月經時の疼痛と月經過多に惱み或は黴毒性子宮病等の諸症に用ゆれば何れも其効力神速にして驚ろくべき顯著なりとの賞賛を受たり「可要球」は最新の學理に適合し最も親切なる良劑にて恰も田畑に完全の肥料を與ふるが如き直接に其藥効を顯すを以て婦人の妊娠すべき局處と田畑の道理を思ひ彼是と迷ふ事なく殊に婦人病には必ず「可要球」を外用して速に根治し給ふべし尚病毒の媒ある婦人は避妊唯一丸を內用せば拭ふが如く其病毒を去り面白き程治癒す故に良夫あれば相互に其病毒を驅除する事を忘るべからず

「可要球」定價三球入貳拾錢、八球入五拾錢、十八球入壹圓、四十球入貳圓。唯一丸 定價三日分四拾錢、七日分八拾錢、十四日分壹圓五拾錢、三十日分參圓（いづれも內地郵送無料）。東京市本鄕區湯島天神表門中坂上

發行所 藥劑師 **中西莊吉**

（振替貯金東京口座一千五百番）

女子文壇
第二増刊

都會の婦人

目次

東京の地と東京の女

芝居の書割のやうな不忍池畔……馬場孤蝶
新しい觀察の盡きざる都會……蒲原有明
大いなる未成品……戸川秋骨
西と南の郊外……吉江孤雁
張りつめた力……小川未明
雪の夜の銀座……服部嘉香

街頭を歩める女の印象

植物園で逢つた女……北原白秋
僅に殘れる印象……水野葉舟

街の夕月……森川葵村
三人の女（對話）……吉井勇
油繪に入る女……木下杢太郎
詩に現れたる都會……河井醉茗
暗愁に囚はれたる都會の女性……澤村文學士
西の郊外より……水野千枝子
南の郊外より……荒川澄子
日比谷太神宮結婚式の記事……遊蝶花
上野より（對話）……うす雪
婦人席にて……さわらび女
東海道線……羅漢柏

東京印象記

銀座……くに子
神樂坂……白百合
魚河岸……萬壽子
日比谷……春子
根津……華子
不忍……はま子
芝公園……やゑ子
谷中……霞子
神田……樂子
西片町……千歳
美しい動物園……しげを
深川……ふち

都會の渦
捲に漂ふ

若き女の眞情

濁つた室に輝く電燈……やゑ子
入京記……長曾我部菊子
闘ひ疲れて……白山吹
熱涙冷涙……湖畔の女
造物主は何故私の鼻の土を倹約したのでせう……常世草
心の活動寫眞……夕はし

（其の三）

湯屋の三階に不快を感ず……萩花
開放されたのか落伍したのか……葉隠れの花
欺かれたる工女の懺悔……沼倉磯子
東京、大阪、京都……菊子

都會の實際的生活

生活の階級……霞子
卒業式の前……つゆ草
バザーの當日……靜江
菓子講習に遊ぶ……白菊
お孃様のお供……森英子

創作

卵（小說）……浜花子
山みち野みち（散文）……草子
白鳥（詩）……田中落葉子
灰色の波（歌）……原田琴子
木の芽（俳句）……波留子

表紙（兩國ゆき）
口繪（東京の女）
コマ繪……竹久夢二
うすぎぬ（山口工學士夫人）令孃（高橋文子、土田繼路子、樋口夏子）郊外。陰影……寫眞版

女子文壇（八月十日）第三増刊

地方の婦人

原稿募集の主意

既に[illegible]に掲げたる如く[illegible]は地方の●婦人●[illegible]るべから[illegible]、[illegible]人[illegible]都[illegible]婦人[illegible]こ婦人に[illegible]作らて[illegible]思想の變遷[illegible]欲するものにて[illegible]各地の[illegible]人、全[illegible]如何なんと[illegible]此主意に基き、[illegible]の[illegible]方面にて定しき故、[illegible]婦人の思想[illegible]方面をま實際の方面とを[illegible]し[illegible]されたる●し、且[illegible]の方面に於て[illegible]自らの思想、感情●の告白を有りの儘に語れば充分なり、實際の方面とは婦人の風俗、女學生の●状態、處女の日々の生活等を記するに在りて、併せて其地の見たる山の美、水の美など天然の印象記をも大いに歡迎●すべし、此の雜誌發行の當時は盛夏旅●行の期節なれば、諸君が其の知れる土地の山水の美を描寫して、地方の婦人の手に成れる天然の印象記を天下に發表するも亦好個の興味なることを信ず。要するに山青く雲白き天然を背景とし[illegible]

[illegible]地方の女子を中心として、一篇の[illegible]と[illegible]せんとするもの。なれば、[illegible]て原稿を投寄あるべし。

▲[illegible]二十字詰[illegible]行以上二百行以内[illegible]假名をつけ[illegible]地方の婦人[illegible]添えること

▲**創作** 小説[illegible]、小品文、和歌に限り募集す、小品文は一行二十四字詰[illegible]行以内、天然を題材とすべし、和歌は題隨意、一人十首以内に限る、

▲**寫眞** 未だ世に發表されざる各地の好風景、及び各地方婦人の風俗、素封家の令嬢、各地女學校の倶樂部等の寫眞を乞ふ（用濟次第返送す）

報酬

創作を除いて採用したる原稿には全部報酬を呈す一等金十五圓、以下原稿の等級に應じ正金又は物品を以て贈與するものとす。創作は何れも一等金五圓、二等以下數人に贈呈す、寫眞は採用したるものには各一部宛一地方の婦人一冊を呈す、特に優勝のものあれば[illegible]報酬す

▲**原稿締切** 六月廿五日

募集發行所　東京市[illegible]　女子文壇社

両國ゆき

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

萬物製法秘術寶典

（目錄）輕便電氣燈製法●輕便電話機製法●輕便晴雨計製法●煙火製法●糊精玉製法●齒磨製法●石鹼製法●洗粉製法●香水製法●紙石盤製法●のみ取粉製法●萬年草紙製法●メッキ法●リモナーデーやラムネの製法●ジンジャエル製法●滋養酒製法●蜜柑水製法●甘酒製法●味噌製法●醬油製法●水彩繪具製法●其外器械いらず**早取寫眞法**（器械不用）**早印刷法**等が百餘種記載してあるが皆諸君の家にあり合せの道具で出來る樣にしてある殊に早取寫眞術は最新の發明にて名の如く器械を用ひず僅かの藥品を混合して器械にて寫せし者と少しも變らぬやうに人物風景其他如何なる者にても大小の別なく何枚にても速座に鮮明に寫し得る輕便大愉快なる寫眞法である、藥品無き地方は弊店より送ります、又器械にて寫せし通りに寫らざれば**返金**も致します、又早印刷法は箱一つあれば繪でも文字で何時にても大小の論なく速座に數百枚印刷する事が出來るから名刺書籍引札其他如何なる者にても奇麗で安價に印刷する事が出來ます、一つ覺えても優に五十錢以上の價値があります、夫れを僅かの金で是れ程澤山覺へたならば隨分安い者であらうと思ふ。

代價郵稅共廿二錢 郵便切手ナレバ二十四錢

弘報館

奇々妙々 手品種あかし

著者は少年の時より手品は大好きである皆さんも亦好きだろう、だが人のする手品を見て笑つたり悦だりして居ても面白みが薄いから本書を讀で酒席又は多人數集會の折り手品をして見せたならば拍手大喝采疑ひなしである。（記載目錄）●豆腐ノ上ニテ奏樂ヲ爲ス術●紙ニ水ヲ入レル術●火ヲ喰フ大奇術●熱湯中ニ手ヲ入レル術●空ノまつち箱ヨリまつちヲ見セル術●帽子ノ中ヨリ色々ノ物品ヲ出ス法●黑インキヲ金魚ニスル法●紙製ノ蝶ヲ自由ニ飛バス術●三尺ノ棒ヲ丸呑ミニスル大奇術●針ヲ水上ニ浮ス法●水ヲ燃ス法●清水ヲ牛乳ニスル法●銅貨ヲ水ニ溶ス術●すてつきヲ帽子ノ中ニ隱ス術●白紙ニ煙ヲ吹キ掛ケ文字ヲ顯ス術●及物ノ先ヨリ水ヲ出ス術●水中又ハ机上ニテ鷄ノ形ヲ踊ラス法其他面白き手品が澤山載せてあるが皆小供でも出來る者計りである

郵稅共廿二錢 郵券代用は廿四錢

三重縣桑名 弘報館

學理應用 世界奇術大全

一週間に思ふ樣に白色となる法●人間百歳迄生きる法●人の生死を前知する法●必ず子を姙む法●必ず子供の出來ぬ法●胎内の兒の男女を知る法●他人の年齢を當る法●**催眠術**●胎内の兒を男女自由にする法●顏を櫻色にする法●眼を閉いで字を書く法●白日夜眠らずとも氣力衰へぬ法●歌がるた人に必ずまけぬ法●老人でも白髪とならぬ法●其外斯の如き奇術を澤山集めたる書物は廿二錢（郵券代用は廿四錢）

◉振替貯金口座番號 東京壹六九貳八番

三重縣桑名矢田磧 弘報館

實地應用 最新大秘術傳法

有効確實無効返金 一字千金前代未聞

の秘傳奇術法を百三十餘種を記載せる大有益の書物は郵稅共二十二錢

道具不要 輕便 食パンに並和洋菓子製造書

諸君の家に有り合せの道具で米より費用少くて美味で一度に廿分も拵へて置ける食パンや和洋菓子が小供にても手輕に製造出來る樣にしてある書物は郵稅共二十錢郵券代用は廿二錢

三重縣桑名矢田磧 弘報館

日本全國 不思議集

目錄大略、化物屋敷●幽靈と物語●姥捨山●怪猫退治●狸ヶ腹つゞみ●馬の化抜藝の大騷動●讃ヶ淵●歩く地藏●鎮岩●龍宮城●越後七不思議●大蛇騷動●八幡の森●狐火●其他珍談奇談を澤山集めたる破天荒の快書は郵稅共廿錢（郵券代用は廿二錢）

弘報館

一讀千笑 滑稽頓智笑話

ワア〳〵讀み給へ大評判の頓智笑話をアゴをはづさぬ用心して腹をおさへて讀み給へ、日本一の面白い本は是である笑ふ門には福來る、泣いて暮すも一生笑ふて暮すも一生なれば本書を讀みて面白く退屈せぬ樣に暮すべし、本書を讀みて笑はぬ者は馬鹿か仙人か……定價廿錢（郵券代用は二十二錢）

簡易 素人治療法

感冒治法●子宮病治法●寢小便治法●わきが治法●痔の療法●目藥製法●凍瘡治法●男女陰部諸病治法●リウマチ必治法●頭痛治法●毛を生す法●白髮を黑くする法●肺病治法●サメハダ治法●拔毛を止める法●子宮洗滌法●淋病治法●耳ダレ治法其他諸種の病氣を高價なる醫藥によらず手輕に治療し得る書物は廿二錢

弘報館

男女 無上の快樂

郵稅共十八錢 郵券代用廿錢

●粹な歌集

郵稅共十八錢 郵券代用廿錢

講談 一休和尚

郵稅共十八錢 郵券代用廿錢

●運勢早見

郵稅共十八錢 郵券代用廿錢

滑稽狂歌 百人一首

郵稅共十八錢 郵券代用廿錢

●禮法及婚姻法

郵稅共二十錢

牧畜全書

養鷄●養鴨●養豚●養兎●羊等の飼方繁殖、利益、治病、種類、飼料其他養殖に關する事柄は一も洩らさず記載せり

價郵稅共二十錢

以上十五種の書物は何**百年後**にても買つて居るから此廣告を見て思ひついた時買ひ給へ、

●**割引** 三冊ヨリ六冊郵稅共一圓、十冊一圓五十錢、郵券一割增、御注文は前金の外送らず、照會は往復ハガキの外返事せず

◉振替貯金口座東京一六九二八番

三重縣桑名矢田磧 弘報館

新輸入 [illegible]料 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても本劑之を用ゆれば漸次肉體に**純白色に變化**し、肌を滑にし皺を伸し汚れ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ゐて奏効なき人は速に本劑を試みよ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の美容新劑 價並製壹圓廿錢 特別製二圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる內服藥 サーサパリラ

價 壹劑二圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

英國ロンドン「バーゴイン」氏製出の「サーサパリラ」は峻烈なる**淨血劑**にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒瘡毒リウマチス等の病毒及び男女體內の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の內服水劑なり（注意）從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり（今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候）色白新劑と「サーサパリラ」と內外双方併用せば效効頗る迅速確實なり

●色白・特効 ペーアス石鹼

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹼は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王なることは苟も婆內の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辭を要せず唯だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質**を治するは此石鹼固有の靈効なり且つ此石鹼は香氣の佳良にして使用後芳香の永く身體に附着し居るは館主人の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に出る粗製惡品と同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は既に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む）

以上三種

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

●有效保險 前代未發 秘傳奇術

全壹册正價郵稅共要拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

（日錄法要）神經衰弱の新療法●痰害病を必治する新法●陰〇の臭止を去大る●●消溫を必治する法●頑癬の必治法●人遺尿香の製法●ト鑿香水す法法香設製法●發顔クリーム製造法●脊髮を齊良にする法●鑑拍即製製法●髮の脫落するを止むる法●化粧石鹼製法●內洋白粉製法●ご製藥生●●見汗治法●白髮を染る法●變毛の光淨を美にする新藥●齒磨粉め法●內洋儀漸製造新法●にきび即治法●はくろを落す法●ピァトル消製法を夏日室內を爽凉にするに●蛙秒顔を汚せるイヽャ斑血を除く法●製瓜長一年新鮮に野よ法●蚤を驅除する良法●●水を即明鉄造する法●白年海毒の奇法●生理病に催らざる奇法●人の生死を除知する法●船中百り容の底を見る法●百日眠らず體奇へざる法●拔毛劑新法●腋人たるよにずへしむる法●禿頭病必治法●發人りたる男女の心中を治こ法●白書まを卵治法●百十の驗姿を二八の額に戀ずる法●脚氣病必治法●妖怪な化す見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛肴い神術●滋人な見變はか神術●女に〇れらる丶藥法●取き毛髮を柔飲、する法樂兆ふ女を顯〇必す藥法●堅き女の氣を〇〇す藥法●除〇を長たにする見法●そば〇す〇治法●女を〇〇にて泣す神藥●夢に戀人と器る秘術●氣染し女をかに忘れる神法●待人來る神術●一生戀中戀らぬ秘術へ●深き女を手する●法●國中の秘藥●即紫に男精を增す法●毒出ににたる時顔め治効藥館避食の仙術●神速に精力を強む法●即畢陰身術●人な眠らす秘特即ら制眠術●顔水く吹出物生ずるを治する法●過勝を治する妙法●多法を邦孕する秘法●色歡なき女に情を〇せしむろ法●寵臨力を增進する情●女術みの仙術●男女梅癢の有舞を知る法●遅姑觀破の奇術●懇字夜法の奇●●老人莊身腋取りの奇衛●腋與を治する法●色を白くする內服光新法腹實丹の器法●襲痛遺治法●痔劑病の癬法●生たる鮮な遂闘へ送劑法●頁痛を治する法●齒痲を治する法●骸肌を直す秘法●味增の眼じるるをるす法●す病の治法●月經の不敏を治する法●癒氣の紗爪●鑛痛た治す●法●陰部の臭きを治する法●陰部の梟を去ろ法●にきびをたるを新法法頭癬を長くすろ法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便痒必最の新巾●下痔を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●歸病必治の治藥●●風踊防の新法●陳痛の妙法●衣服に消のしみたるを洗はずして新す法●火傷即治の秘法●シャクリ即治法●擧を能くする術術●白變嫌落新法法土聾の鼠穴を瘞ぎ再び明けぬ法●療小便を治する秘法●頭奇を防する●●耳だれを治する法●いぼを取る法●おざを拔く新法●孔ゞ出治勉藥目除部の踏齋治する法●疾列拉病療治關易法●樹零隙防の奇法●るよ時をく竃す法●年麗により勝導の度數●病氣錦知の奇術●男女会證恐の色白くし且つ難美ならしむる法●毒酒を製流する法●窩を造るの秘法●一時に數拾匿ゞ鼠を纖種する砂法●夏新子孩潔森法●疊の術染を秘す新法●新しき鐵釜の纖鐵を止を法●鯛鷄癸纐衛新法●衣暇こ漸ゞ付たるな養す其法▲以下贅拾法雪す著金即鮮遂本す

（各部書百四十法あり）

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館商店**

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御添を乞ふ

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一ばい毒根治特効の

黴毒根治新劑

難病なり故に黴毒及淋毒に關係して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。痔等。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓って根治**すること確證す從來醫療實驗等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絕し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分壹圓六拾錢

生殖機病特効新劑……（獨逸新輸入藥）

●內服 **ヨヒンビン**

拾錠入壹劑 藥價送料共 壹圓九拾錢 郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授博士スピーゲル氏の發見に係る

男女**生殖機不能**即ち**陰萎病。腎虛。神經衰弱**。遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖虛弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不姙娠。冷症。發育不全等に用ひ天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力を增進**し生殖器を强健ならしめんと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効藥に**如電光**世にありふれたる無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓効は高名なる醫師に就て

●奏効確證 美容新劑 **やせる藥**

壹劑分價送料共壹圓廿錢 貳劑分六圓廿錢特別製分九圓廿錢着金即刻送藥す

本劑（藥名ヨードチン錠）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり あぶらぶとり、酒ぶとり、顏赤くなりて、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

▲世界唯一 **痳病消渇の根治新藥**

痳滅（りんめつ）

痳滅は最も進步したる最新の痳病消渇即治痳[illegible]なり、本劑はありふれたる普通の一賣藥と異なり殺菌學上効力顯る峻烈なる一新藥を主劑とし是を內服して**痳病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する良方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑頑症は特別製分にて必ず奮て根底より**根治**するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり發効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ　藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢

郵券代用貳割增しの事

わきが **腋臭** 全治確證 新發見藥

醫療實藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても忽**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ　價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓參拾錢着金即刻送藥す

●**毛の必ず生る確證藥**

特別製分金五圓三拾錢 大瓶貳圓卅錢 中瓶壹圓廿錢

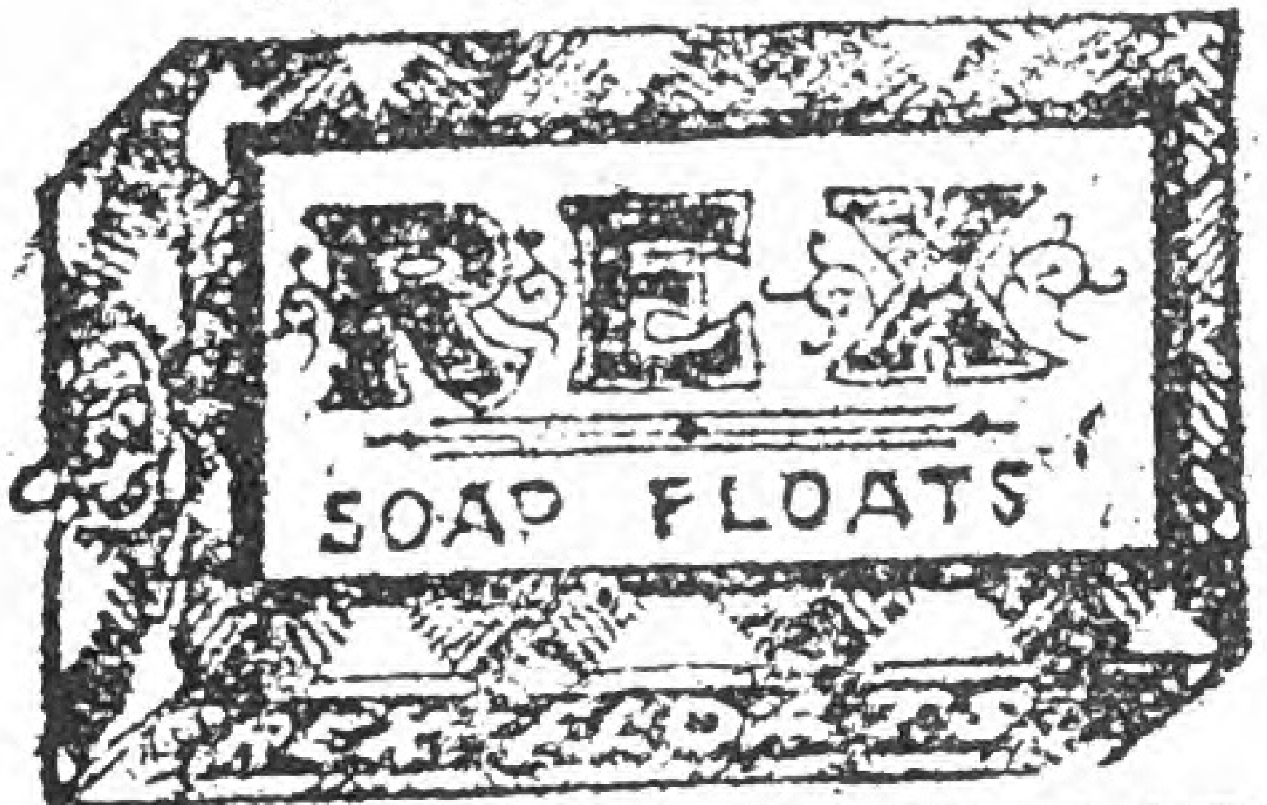
本劑は獨逸醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、まゆげひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる雜多の毛はゑ藥とは其効力勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉石混同視すること勿れ

以上六藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

ケーバー石鹸

舶來石鹸界の覇王にして亦本邦製品の企て及ぶ能はざる特色を有する本品は江湖の高評に酬ふる爲め原料を精選し品質に一大改良を施したり

レツクス



實用浮石鹸

英國ホツソンエンドシンプソン會社特製品

會社の自慢本品特點

香氣の高きは本品の特點なり

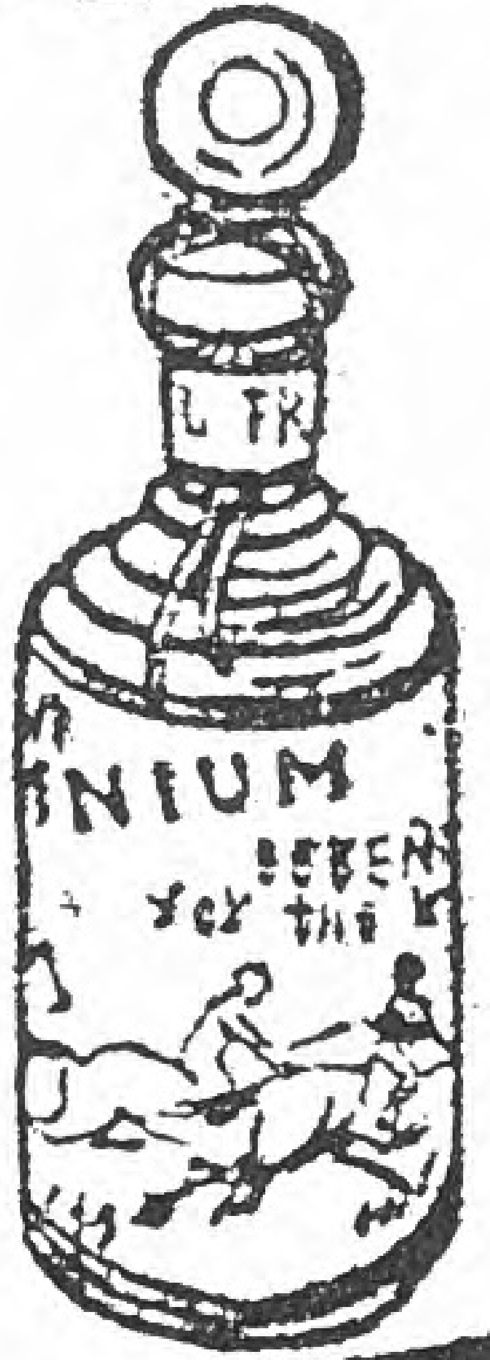
價格の廉きは本品の特點なり

實用に適するは本品の特點なり

上流界に好評を博すは會社の自慢とする所也

論より證據實地御使用を乞ふ

ケーバー香水



●全世界を通じて流行品

最も紳士貴婦人間に愛用せらるゝはケーバー香水

定價

小瓶	金廿五錢
中瓶	金一圓
大瓶	金二圓
特瓶	金五圓

東洋一手代理店

竹間商店

●賣捌所は全國到る處の信用ある舶來小間物店及び化粧品店に有り升

うすきぬ

工學士山口金太郎氏夫人ますゞ子

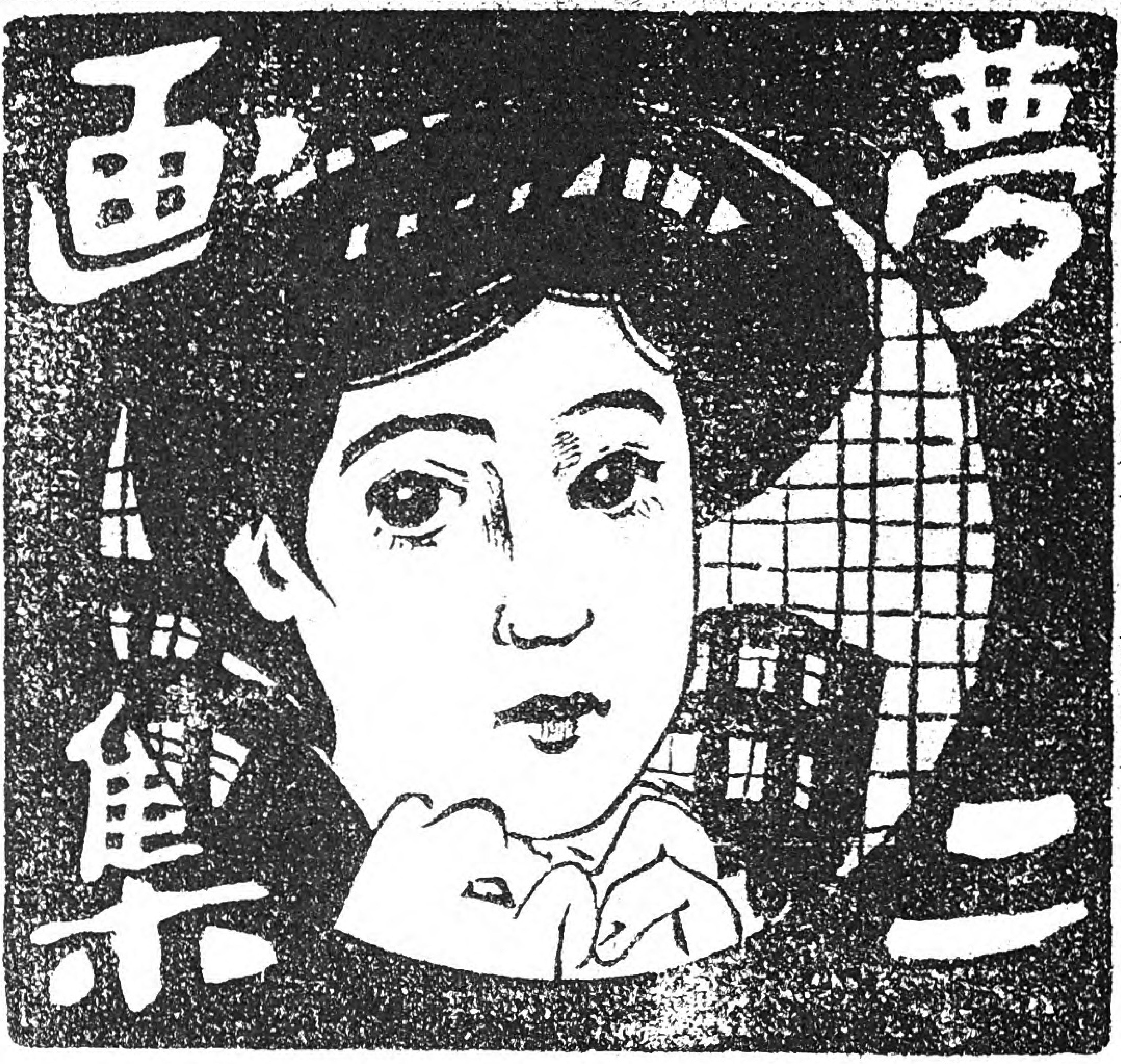
名士の令嬢

冷蔵株式會社専務取締高橋虎太氏姪文子（宮城縣高女卒業）

上田政次郎氏令嬢越路子
（學習院女子部卒業）

橋口兼清氏令嬢夏子（お茶の水高女在學）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



『夏の巻』出づ
三版一日にして盡き四版出來
定價金五拾錢
送料金八錢

『春の巻』六版
定價金五拾錢
送料金八錢

花の巻 近刊
旅の巻 近刊

世のうら若き婦人たちよ！

愛の失せた男が遊所へゆくのを氣にして、急に藝者風情の言葉やスタイルを眞似て、男の心を奪取らうとなさる、婦人たちの果敢（ハカ）ない企てを心から悲しく思ふ。何故、藝者よりも女優よりも、以上に美しいスタイルとチャームフルな會話とを研究なさらない。男といふものは、藝者とか女優とかいふその名を欲するのでないのです。彼等の優婉な容子と巧妙な話振りを好むのです。ではどうすればいつまでも男の心を捕へることが出來るか？それに答へるものは『夢二畫集』です。

みなさんは此頃の若い婦人たちの間に流行してゐる『夢二式の女』『夢二式の眼』と云ふ言葉を御存じで居らつしやいませう。それですよ。醜業婦のスタイルに打つて更つて、新しい時代の要求に應じて生れた、最も近代的なスタイルは『夢二式の女』なのです。

さよう、『夢二式の女』こそ實に近代的の男の心を開くたゞ一ツの鍵（キイ）です。

實に尊い、然しながら極めて安價な鍵です。

發行所
東京麹町二丁目二番地
振替口座東京二〇一九四番
洛陽堂

●らい病根治新劑

▲藥名……レプロイス

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病[illegible]媒介によ
る傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の起因發見學理を基礎と
し幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始て完成發
明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること[illegible]
他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に
調合せし粗雜極まる無効劑式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へら
れたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌
を撲滅し病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ。輕症は壹貳劑重症
は特別製分以上にて治癒の目的を達す

[illegible]

●美き聲の出る新藥

價送料共壹劑
分壹劑拾五錢
特別製壹圓廿
五錢

發聲藥は古來甚だ多し然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし到り本劑の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり本劑は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑也何程音聲惡しき方又は聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發することを確證す

腦病を根治し記臆力を增進する靈劑

滋養回春 記臆增進丸

（定價）七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢三週分二圓三拾錢壹週分八拾錢（送料）各拾錢宛

本劑は獨逸大學ヌグリーホアー氏の新腦力に基ける醫學的の元理に據し多年實驗の上其發効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば**腦病、神經病**を根本的に**根治**し精神爽快智力活潑となり**記臆力大に增進**し人世百般の見聞事に當るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力乏しき者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に增進すること曾て實驗する所なり論より證據實試一劑遂に其著名顯著なる奇効を知れ

月やくおろし

流下すべき[illegible]ければ二三ヶ月間滯りてもキレーに流下す又特別製分を連用せば半年以上の月經閉止[illegible]**快通**

及び**血塊**につきても必ず安全に流出す且つ月經不通月經不調より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其效力極めて**峻烈**なれば**姙者**なるも恐るゝも病生無害なり諸君安心して試藥あれ價は一人劑分七拾錢特別製分壹圓廿錢參劑分壹圓[illegible]（注意）本劑の**大盛**時なるに從ひ樣々近似しき無**類似僞藥**は[illegible]用藥者は深く注意あり「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ

世界無類

最新發明藥

あざ

入墨は**廿日** **ほくろ** **そばかす、なまず、いぼ**は**拾日**日に必ず美麗に除去すること[illegible]

險附新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも決して**痕跡**を殘さず無痛にて除去し得らるゝことを確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完うせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥也本劑は其なまず[illegible]を二種に[illegible]いぼの二種を除去するものとす故に注文者は各自除去せんと欲む所の病名及患部の[illegible]左すれば其症に適應する藥を送附す（患部の面積大なる人は大劑を求むる方）[illegible]代用郵券[illegible]小包郵送す

以上專賣元 東京市神田五軒町拾九番地

日新館藥房

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

東宮侍講本居豐穎先生題辭
文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題歌
國學院學士小森松風君編

美文作法

美文の作り方最も明瞭に解說し、加ふるに大家の名文を模範として擧げたれば、文章を作り、文章を愛する者には寸時も座右を離すべからざる良書なり

全一冊大判
二百三十頁
特價貳拾錢
郵稅四錢

報知新聞記者中村木公君編著

實地精査 女子遊學便覽

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め、自ら學校の撰擇に迷ふ諸孃も之を讀め、一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

全一冊中形
校長寫眞入
特價廿五錢
郵稅四錢

東京京橋區大鋸町　女子文壇社出版　（振替東京一七二九）

◀賣捌全國書店▶

ちゞれ毛くせ毛
一大奇法
毛はへうけあい

本法は女髮結師安部歌子女史の多年實地研究したる秘法にて是迄の使用者を悉く滿足せしめたる一大奇法なり照會者は往復はがきにて申込あれ

東京麹町區三番町六十七　小林濟世園

毛生藥

私生へ際に禿ありし處專賣特許の發明藥にて直に毛生せし故廣く同病者に告たし望の方は郵劵三錢封入御申越あれ詳報す

東京市東兩國横網町一丁目十九番地　西森汎友

家庭の改良は臺所の改良に始まる。
臺所の改良は瓦斯の使用に依りて完し。

神田錦町
東京瓦斯株式會社

電話本局（一三、二五六、五四八、五七〇、二三〇三、三一五二、三二三九、）

女子文壇の廣告より御申込の節は其旨御申添を乞ふ

樂器新販賣法

●期限僅（かに）一ヶ月●臺數に制限（あり）●申込は迅速（を要す）

四百円のピアノ拾五圓

八十円のオルガン五圓

西洋音樂の流行に伴れ今や都鄙の別なくピアノ、オルガンの聲を聞ざるなし。然れども價格の高値なると其販賣法の容易なるものなかりしため未だ樂器の普及を看る能はざりき、弊社茲處に鑑み這回歐米各國に專ら行はるゝ新販賣法を應用し從來の賃借料に等しき僅少の金額を月賦拂込金となし貴需に應ぜんとす申込期限極めて短く且つ臺數に制限あれば即時申込あらんことを希ふ終に松本製ピアノ、オルガンの眞價は新進音樂家の一般に推賞せらるゝ處にして好評嘖々たり

（最新月賦販賣明細書申越次第送呈）

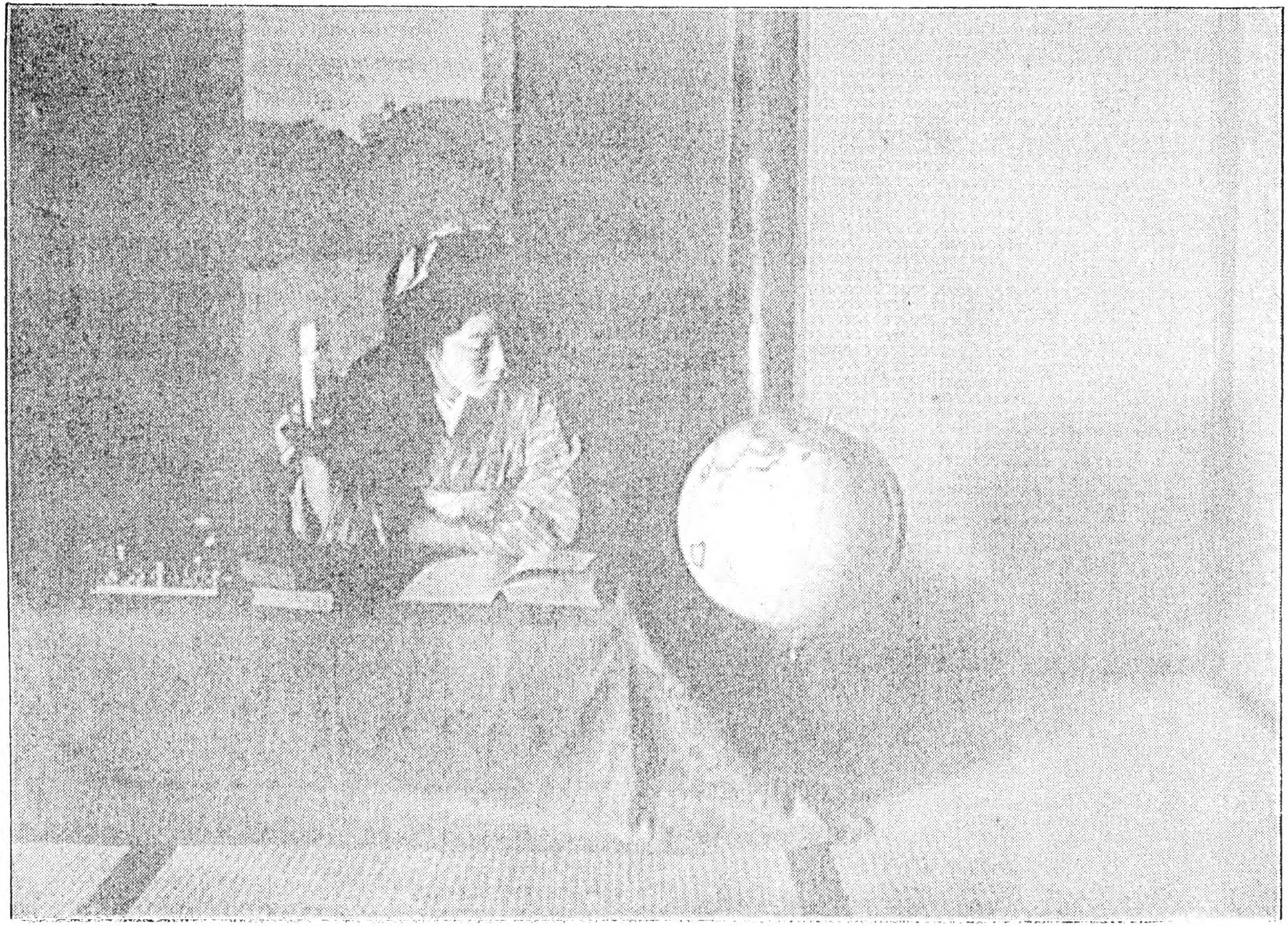
東京銀座四丁目四番地

松本樂器合資會社

電話新橋二二九八

郊外

陰影



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

活氣　清[illegible]

第拾卷拾壹號

趣味　清新

秀才文壇

口繪

◎凪ぎたる日……（原色寫眞）△多摩川

△現代の閨秀作家△五月の花△誌友の面影等

□「ボヴァリー夫人」のモデル……長谷川天溪

□極樂のたそがれ……森川葵村

□我等二人……秋元蘆風

□四十女……小野小峽

▽新文藝の文章……相馬御風

▽綠蔭文話……田岡嶺雲

◎愛情（小說）……太田水穗

▽文壇側面觀……樋口龍峽

▽半島の春……佐藤綠葉

□瞳の色……水島尺草

□挿畫三葉……竹久夢二

○つゝましさ……黑田露羽

○窓から……矢野峰人

○冬祭……重山紫翠

○雨の夜……高山玄嶺

◎青年文壇各欄懸賞發表……

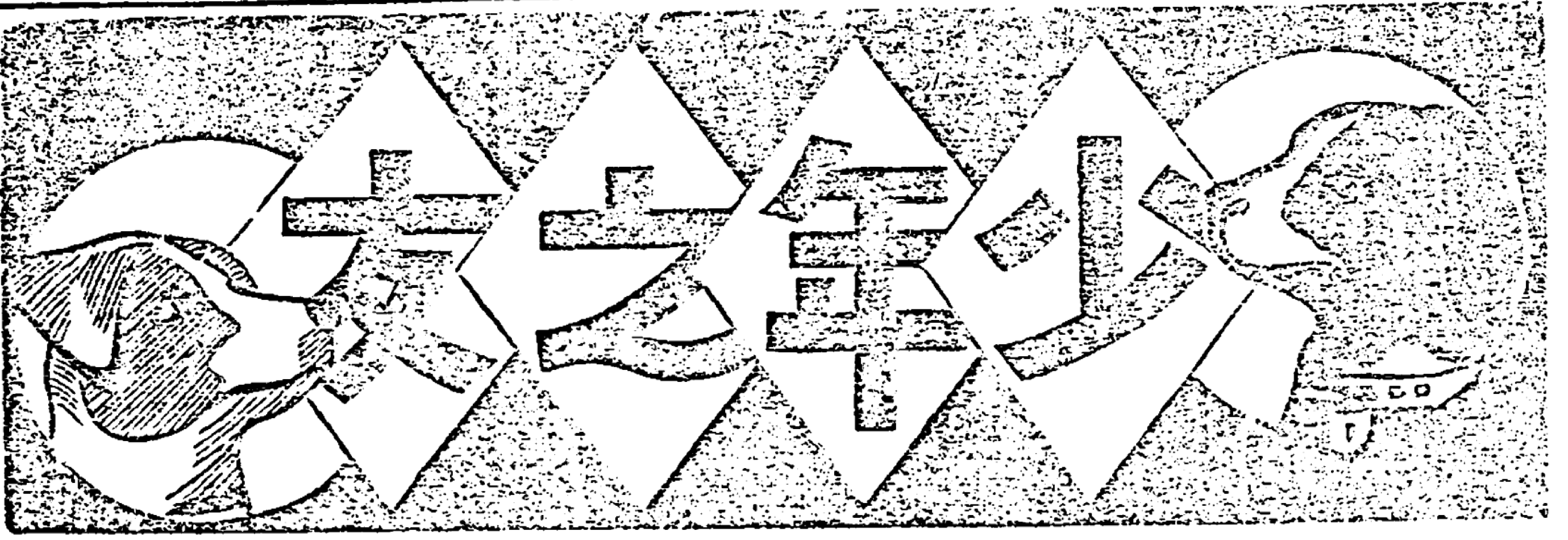
▽五月十五日發行◎正價（一冊郵稅共金拾四錢）（半年分金壹圓七拾錢）

發行所　東京神田旅籠町一丁目　文光堂（振替口座一九五五五）

賣捌　東京堂○東海堂○北隆館○良明堂○至誠堂○上田屋

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



五巻五號 ▷五月號要目◁ 一日發行

口繪 ◎大きいだらう！（美麗原色寫眞）△最新快速自動車 △端午の節句と鍾馗 △象の力 △諸國風景……（三圖）

△南洋ブラジル國に行く養育院の孤兒……記者

△音樂の好きな動物のいろ〳〵……ながを

◎（冒險的遠洋漁業）勇敢なる日本の船員……海老沼雨華

◎吉公ばなし（色刷）……水野葉舟

◎海の妖怪（英國奇譚）……木村思水

◎（冒險實話）猛獸狩（二）……栩芳

◎（人間より）利口なる西洋の警察犬……秀峯

◎（誰にでも出來る）飛航機の作り方……猪熊忠次

◎始めて入つた寄宿舍生活（二）……白茗

◎（田舍の）貧民の子大學校長となる……一記者

△（少年史談）赤坂城……犀川

△なかよし（繪とき）……夢二

△忠犬シロ……恒志

△其他面白い讀物……澤山

定價 一冊（郵税共）拾壹錢 半年分 六拾參錢

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂 （振替口座一五一九五）

賣捌 東京堂 東海堂 ○ 北隆館 良明堂 ○ 上田屋 至誠堂

（綴付の二）

子のできる器及子のできない器 懐姙避姙自由自在器

（◆兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自療器）

醫學得業士

（齋藤乙吉先生發明）

實用新案登錄特許

アトシア

atocia,

（膣内挿入小器具）

本器は產科婦人科日東病院長醫學得業士齋藤乙吉先生の發明に係る最も簡易安全にして毫も無害なる懐姙避姙自由自在器兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自宅治療器也即ち本器により膣内へ姙孕を補助する藥劑を入れる時は人工的に**懐姙**することを得らる故に子の無き人は用て目的を遂すべく又本器により膣内へ姙孕素を消失する藥劑を入れる時は決て姙娠せず子澤山の婦人は夫に秘密に用て**避姙**の目的を遂し得らる而も共に衛生無害なるは發明者多年實驗上確證する所なり且つ本器へ病毒豫防藥を入れ應用する時は**梅毒淋病**其他の病毒を皆て傳染することなく子宮を損傷する患なし又慢性子宮内膜炎膣炎**子宮諸病**患者は本器へ是等治療藥液を入れ應用せば自宅にて容易に**自身治療**することを得るものなり本器は彼のルーデサック及子宮サックの如き不快の念なく天然の感觸を鋭敏強劇ならしむる世界唯一の理想的新發明品にて一度買へば拾數年間保存し得る婦人衛生上必ず攜ふべき要用の具器なり。但し詳細なる説明書及使用法并に應用諸藥劑處方書は現品に添附し小包郵便密封にて送付す。（正價）ニッケル製壹圓拾五錢。純銀特別製參圓拾五錢。郵劵代用貳割增し。着金即刻送品す。

世界一手專賣元
東京市神田區五軒町十九番地
（電話番號下谷五百四十六番）
日新館藥房

枕易齋先生編輯

吉凶夢判斷

洋裝頗ル美本
全一冊定價十五錢
郵稅四錢
（郵劵一割增）

口繪には大學生の夢と女學生の夢と極鮮明に寫した三色版の者二枚を挿み内容は總て夢を見たる事を目次に依て頁數を見て判斷すれば吉凶忽にして判る奇世の珍本なり苟も世に處するもの紳士淑女は申すに及ばず女學生諸君の缺くべからざる無類の珍本なり今幸に枕易齋主人之を公にせり江湖の士此の期を逸せず速に一本を備へよ

希世之珍本

發兌元
東京市神田區猿樂町二番地
春水堂

根治新藥

わきが腋滅

重症量器金壹圓
輕症量器金五拾錢
試用分器金貳拾錢
送料各四錢

本劑は皮膚病專門大醫和田先生御實驗の靈劑にして如何に難治の劇症と雖ども必滅の偉効を奏す本病に御惱の方は一度御實驗あらんことを

調製發賣所
神田區旅籠町壹丁目（外神田大時計下）
池上藥房

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

新美文

全一冊二百卅頁
口絵數葉入美装
定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

現代の若き女子は如何なる感情を抱きつゝありや又如何なる趣味を持ちつゝありや之を窺んとする者は本書を見よ、或は家庭を材とし或は自然を描き或は人事を歌ひ或は都會を寫す百人百樣の觀察は讀者をして送迎に遑なからしむ、選擇の嚴正にして批評の痛切なる蓋し最新式の文章を學ばんとする者には無双の寶典たるべし

附錄

◎小寒日記……薄田泣菫
◎裏の家……吉江孤雁
◎憧憬……小川未明
◎一霧懺……高須梅溪
◎女床屋……兒玉花外
◎拾て犬……岡田八千代
◎火葉……澤村胡夷

家庭日記

全一冊二百卅頁
口給數葉入美裝
定價二拾錢
郵税一錢五厘

本書內容

▲お七夜の赤飯と棟上の餅拾ひ
▲草生水日記
▲初めて丸髷に結ふ
▲大呉服店のバーゲンデー
▲憚る處なき女學生の境遇
▲開放したる心の扉
▲晴れの日が近くなる
▲同じ女と生れながら陰と日向の違つた身上
▲未來の博士達の爲に
▲舞臺に出づる迄と出たる後
其他數項

——（附錄）——

最近の日記

三宅花圃
大塚楠緒子
與謝野晶子
岡田八千代子
長谷川時雨
國木田治子
尾島菊子
荒川澄子

短篇小說

全一冊二百卅頁
口絵數葉入美裝
定價廿錢
郵税壹錢五厘

▲奉公人……島崎藤村作
▲水死……森田草平作

懸賞傑作

◉破壘……秋葉清子
◉女客……加藤貞子
◉町の出水……赤崎愛子
◉桃代……佐藤増子
◉朝顏……吉田駒子

其他美文、書簡文、新躰詩、日記文、和歌、俳句、論文、小說總評
豐富滿載

女子名文 新作家

全一冊二百卅頁
口給數葉入美裝
定價二拾錢
郵税一錢五厘

應募作物と對照し其人物を一目瞭然たらしむ。

若き女子が大懸賞（應募）の小說、美文、詩歌、俳の文藝を興味ある新式編輯法にて統一せるもの。別に日課表あり登載各家自の住所年齡

附錄

◎閨の夜……服部貞子
◎敗者……加藤菊子
◎火事……永代美千代
◎氣まぐれ者……太田樂子
◎新粧……尾島菊子
◎六月……山田くにえ
◎姉……故田中久子

東京市京橋
大鋸町十二番地
女子文壇社出版
（振替口座東京第壹七貳九番）
賣捌全國書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

文學に親まざる女子は品格低し

女子文壇

（毎月一日發行外年四回增刊）定價一冊拾五錢　郵税壹錢五厘　各・號・好・評

一日發刊　五月號　六年六號要目

口繪

◎名畫景色（原色版）
◎虎の門（石版極彩色……太田三郎筆）

寫眞

◎星ヶ丘茶寮に於ける誌友會出席者と來賓◎名門の二夫人◎名家の三令孃◎室内◎海外の愛讀者◎誌友七八面影

▲產（小說）……森しげ女

▲美人の系統……山路愛山

▲美くしくて善き娯樂……横井時敬

▲女子文壇誌友會の記

星ヶ丘茶寮に開かれたる女子文壇第一回誌友會の記事は幹事となりし女子の手に依りて委曲洩らさず描き出されたり紙數を割くこと約二十頁、猶足らざるを憾とす

▲夜の色……金子薰園

▲斷片……若山牧水

▲一葉と晶子……相馬御風

▲女子容貌論……一色醒川

其他青春の女子が熱血を注げる新案**懸賞應募**の詩文百餘頁は雜誌界唯一の盛觀也

內容充實　實物に就て見よ論より證據

發行所　東京京橋區大鋸町　**女子文壇社**　（振替口座東京第壹七貳九番）　最寄書店品切ならは本社へ注文あれ取扱あり

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

大好評　紀念保存の價値あり　増刷出來

女子文壇 紀念號 満五週年

一月一日發行　例號二倍　三百廿頁◎本號限り　定價三拾錢　郵税貳錢五厘

松の葉……泉鏡花

敵地……中村星湖

市街を散歩する人の心持……木下杢太郎

脚本 落潮……河井醉茗

額繪附録 **温室**（石川寅治筆）（石版極彩色）妙齡の一美人、温室の戸を開いて草花を剪る所、其表情の嬌艶と色彩の鮮美とは一見して恍惚たらしむ、新春無類の粧飾。

光澤紙刷 **口繪** ◎名畫雪みち（原色版）外◎山階宮、東伏見宮兩妃殿下◎鷹司公爵松平伯爵兩夫人◎徳川家達公三令嬢◎一條實孝公夫人◎加藤弘之男家庭◎金子子爵令嬢◎跡見玉枝女史と其門下◎仲小路遞信次官の室外和樂◎盛裝の六嬢◎誌友面影◎鳥海山外二景の十四頁（寫眞）

◎釣……森鷗外

◎演劇の種類……坪内逍遙

◎女性の文藝……片上天弦

◎T氏とK氏……眞山青果

◎月のたまもの……蒲原有明

◎響動……吉江孤鴈

◎三味線林……小島烏水

◎赤色……兒玉花外

◎金ほうけ……與謝野晶子

◎落葉林……若山牧水

◎憂愁の庭……三木露風

◎薄暮の瞳……川路柳虹

◎黄落集……前田夕暮

◎女學生と小說……柳川春葉

◎御題と御歌所……松原良文

◎弱者……溝口白羊

◎歐米の若き婦人……寺木定芳

◎婦人の寂淸生活……木下尙江

◎文士と家庭……佐野天聲　國木田治子

◎花束の用ゐ方……水野葉舟

◎男性の爲に與へられたる刺戟　五人女

◎露西亞婦人の過激なる活動……エリミヤ、ベルト、バザン

◎**名流婦人の日記** ○跡見花蹊○山脇房子○加藤照麿夫人○石川博士夫人○嘉悦孝子○羽仁もと子○佐々木雪子○長谷川千代子○北川美那子○加納國子○谷内せい子○木下良子○吉田賢子○たけ子○千鳥○棚橋絢子

◎形式的の艶書……マツクスオレール

◎表情體操……白井規矩郎

◎女性と色彩の觀念……澤村胡夷

◎お琴の先生と其流派……さきく

◎英文……星野久成

投稿傑作（百四十頁）滿載……

東京京橋大鋸町　女子文壇社發行（振替口座東京壹七貳九）　賣捌 全國雜誌書店　若し品切の時は發行元へ速に御注文あれ

（添付の六）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

大好評殘部僅少

二十才の聲……
時代に覺まされたる一人
ひとりごと……
樂に受けたる文部省檢定試驗…
（富士裾野に於ける外國人一家の夏季生活）…
成るは嫌なり想ふは成らず…
若き夫と共に味ふ生活の苦痛…
子爵家に乳母を世話した事…
級友の行衛……

夕の星の冷たき笑ひ…
女學生と新聞紙…
夜の淺草公園……
デヤレスト……
お才さん……
暗中の文字……
若き憂ひ……
男の世……
快樂……

手枕……
結婚後に發揮すべき女性の權威
戀を捨てゝ運命に服從せんとする心の渦捲……
若い女……
女學生氣質……
肺病に罹りし實驗談
獨身の私が媒酌したる記
新樂……
靜かなる霜月のひとゝき……

女子文壇
二月十五日
第一增刊

若き婦人

紙數二百卅頁
美麗口繪數葉
定價金貳拾錢
郵稅壹錢五厘

晴着の見立……
破りし柵……
迷ひすぎて婚期を逸したる
政治家のお孃さん……
兄を氣遣ふ……
夢……
秘密の夏……
憐れなる女中の身上話
繋がれた女……

家事實習會……
伊豆の溫泉……
桃太郎の感化……
土佐の女學校の現在…
鬱黄のはちまき……
わが決心を姉樣へ……
心あかせし友の許に……
卒業後の悔……
緣の沈默……

春の家……
春曙抄……
隣の人……
繼母……
汽車の音……
歸途……
若き婦人の後に……

東京京橋大鋸町
女子文壇社發行
（振替口座東京第壹七貳九番）
全國賣捌
雜誌書店

肥滿病新藥

（米國新輸入劑）

小供の折**美愛**と稱せられし人を年頃になりてよりぶとく肉太りたるため左圖の如く**醜婦**となる人少なしとせず本劑はパークデビス會社の模範製劑にて脂肪多き人◎ぶと〱ふとり血太り肉太り酒太り水太りにきび顔赤◎ふき出物多き人◎脹滿◎ぶつ〱逆上頭等經症は一二劑如何程の惡性も三劑分適服せば色は**艶白**となり程よくやせて誓つて**美**顔窈窕たる美人となる事を保證す……

諸嬢姉の福音

藥價
一劑一圓五拾錢
二劑二圓九十錢
三劑四圓卅錢
送料十錢宛

▲肥藥性に苦む人は他藥に迷はず速に服用あれ

◎世界唯一

月やく下し藥

……見……病める婦人
よ……月經なき女子

專門博士賞贊指導の新發見良藥

▲勿驚……藥力最強度……其効極て峻烈……有効無害……保險藥

TSUKIZARHE
登錄
商標
改良
女月丸

本劑は婦人二三ヶ月の**月經**不順月經閉止月經**滯**りは一二劑にて必ず流下す**四五月**以上又は**血塊**にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち**流經**す夙に各婦人病院に於て効力卓絕なりと賞贊せられたるは此の女月丸なり滯り又は不順にて苦む人は速に服用あれ

▲藥價一劑六十錢、二劑一圓十錢、特製二圓廿錢、別製分三圓卅錢、送料四錢

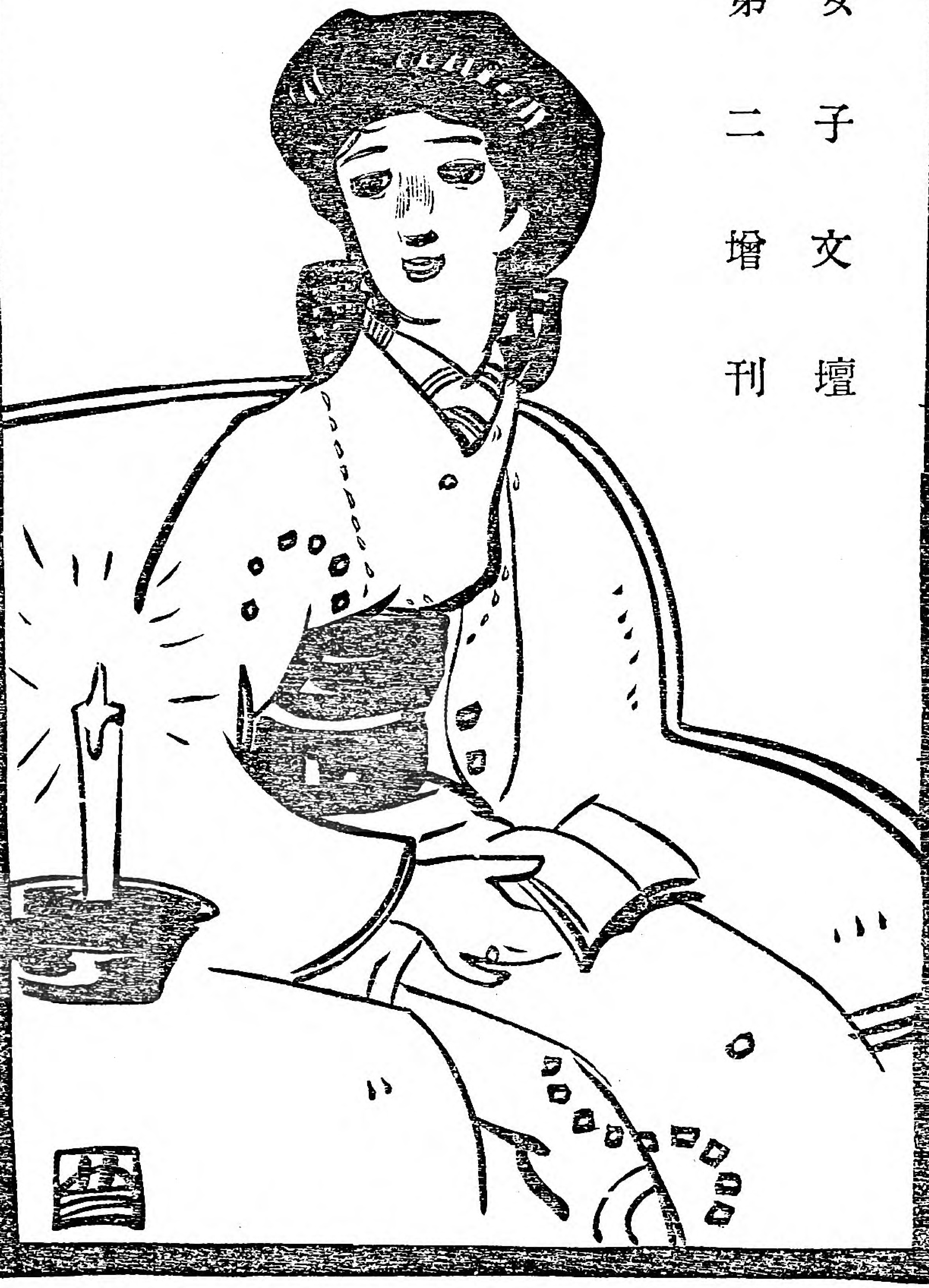
發賣本舖

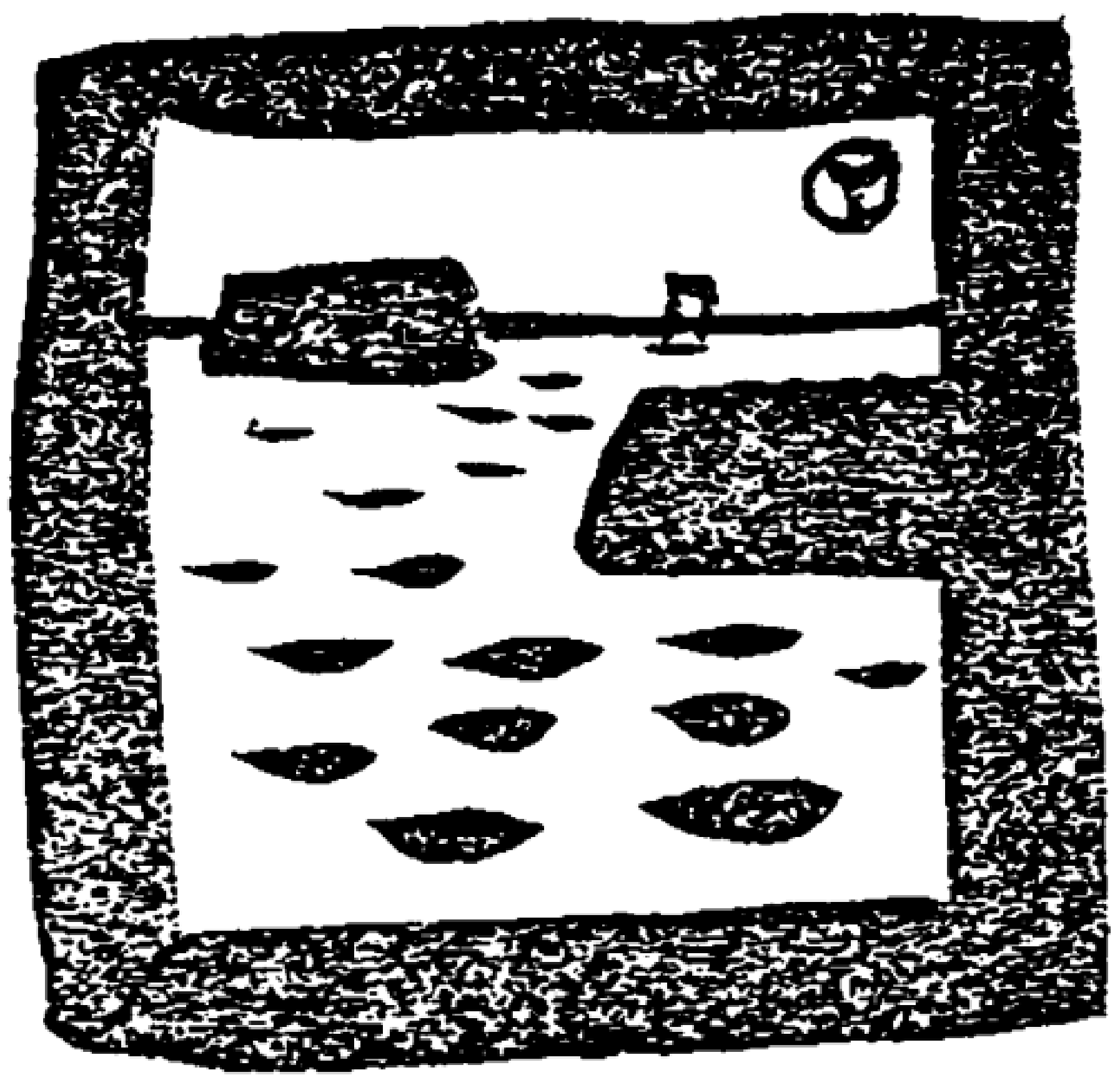
東京京橋區中橋和泉町
振替口座一〇六七七番

小宮愛生堂

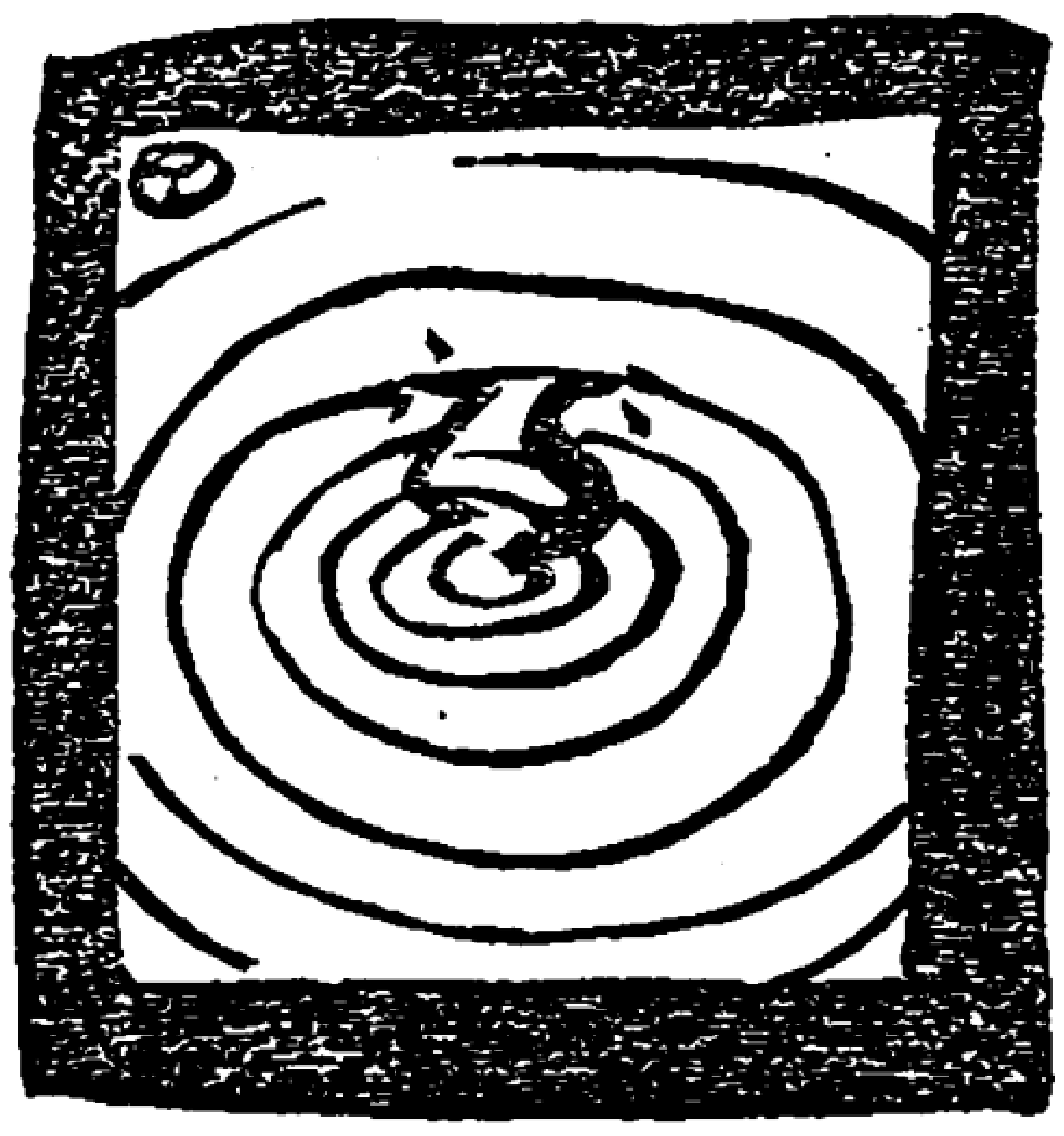
都會の婦人

女子文壇
第二增刊





東京の地と東京の女



芝居の書割の樣な不忍池畔

馬場孤蝶

都會にあつて天然の風景は求めるといふことはむつかしい、僅に人造物が永久い間保存されて、自然の一部分となるやうなもので、つまり人の造つた物が土臺となつて、それがきれ〴〵に殘つてゐるのである。それで其きれ〴〵の所々を私は愛するのである。

私の好む所はまづ、不忍池のまはりである、夕方此あたりをさまよふと、南側仲町の待合などの灯が、誰やらの言つた事ではないが、丁度芝居の書割の樣に見えて、實に美しい眺めである。七軒町の方に廻ると、夕轟、町の活動のこゑ、心の奥までひゞいてゆく樣でまことに心持が宜い。

殊に晩秋の夜などであると、一面に薄い霧がおりて、茫とした空の方から遙かに雁の鳴く聲など聞えてくる仰いでも姿は見えずにたゞ翼のきしる音ばかり、かう寂しく聞えてくるなど言ふに言はれぬ物なつかしさが胸に湧いてくる。

次に外濠線の、牛込見附から四ッ谷見附の附近で、土堤の方の松のたてこんでゐる處、東宮御所の下など

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を見ると、何となく大森林のこぐちを見る樣な氣がしてうれしく、新見附のあたり、兩方わづかの濠が四角にくぎれて、青い水が動かず、人通りの絶えた時、或は夜の灯のともつた時など、やはり私は好きである。

それから又小石川の傳通院から水道町、金富町あたりの高臺から、牛込、早稻田あたりを見ると、小さい丘がそこゝにあつて、夜になるとそこらあたりに灯火がちら〱輝き出すなども宜い。

此他新佃島の海岸を灣をへだてゝ見ると、其さまざまに突出してゐるさま、又そこに並んでゐる建物などを見るのもおもしろく思ふのである。

東京の女はさばけてゐる

女に對しての智識は甚だ淺薄でお話にならないが、まづ私などの目から見て、夏の女を美しいと思ふ。日本の女は歐米の女の樣に、巧みな表情はなしえないが、夏の女は體質の上から言つても何となく平均がとれてゐて、どちらかと言へば羽織や綿入を多く着た姿より、いきな浴衣や帷子をきた姿の方がよろしいと思ふ。

全體東京の女は、かなりな肉づきであつても、夏などは殊にどことなくすらりとして、桶の樣な形にならず、さつぱりと快く見えるのが其特徵である。

從つて其氣質から言つても、まけぬ氣のものとか、又おだやかにあきらめのいゝ——と言つて泣きねいりをするのでなく、よく感情をおさへておだやかに居ると言ふ樣な、どちらにしろはつきりした心だてのものが多い。

例へば一家の事情の爲、女が戶主に成つて自ら生活してゐる人、又いかに自ら思ひこんだ事でも、親とか先輩とかがよく言つて聞かせればあきらめてしまふ、別に敎育によつてかうなるのでなく、ものの道理のわかりが早い事など、どうも地方にあまり見られぬ、東京の女の特徵であらう。

それから又、處世の法と言ふ事を早くからのみこんでゐて、なか〱人をそらさないところなど、地方の

女の一寸まねの出來ぬ所であらう。

然しこれが發達しすぎて、却つて缺點と成つてゐる人も亦多い。

かう言ふ人になると一寸見た人でも、もう十年も知り合ひの樣に、所謂お世辭をふりまいて、來た人に却つて不快を與へる樣な事が間々ある。

私の知つて居た或る婦人なども、まことにお世辭の好い人であつたが、死んだ後で其人の書いたものなど見ると、案外、今までなれ〳〵しくして居た人々の事をも妙にひがんで書いてあつたりなどした事があつたが、總じて人あつかひの大切な事をのみこんでゐるのはよいと思ふ。然しこれが外面と共に內容を、もつと進步させて一方婦人として社交の媒介になる樣に成つたら誠によろしい事だけれど、今のところでは惡く言ふと酒の相手によい位なものが多いのは、東京の女の考ふべき事であらうと思ふ。從つてかう言ふ方から言ふと、東京の女は熱烈な戀と言ふ樣な事をするか否かは疑問である。私などの考へるには、一時の發作的の情にまかせて情死などもする樣に思はれる。

繰返して言つて見ると、東京の女の特徵は、一寸逢つて話すのに、よく理解力が發達してゐて、執着のないのが其すぐれたる所であらう。

故一葉女史など其父上の代から東京に居られたのであるから、女史はまづ純粹な江戶ッ子で、殊に父上の商賣が商賣であつたから、東京での生粹の人だちの出入がしげく、其中で人となつたのであるから、實に話上手で又さつぱりとしてゐて逢つてこゝろもちよい人であつた。

さて次に言葉から言ふと、田舍の人はいたづらに高調子であるが、東京の女はやゝ疳走つた、透る澄んだ聲で、抑揚のある言葉を發する。どちらかと言へば男でも田舍の人より東京の人の方がかう言つた所はあるが、女は殊にそれが現はれてゐる。すべて言葉には抑揚があると、殊更其意味が強く響く。

上流の人たちがどうも結構なお品で御座いますと言ふよりも、普通の女があらまあきれいですことと言つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た方が、はるかに意味が強くはつきりと其こゝろもちが響いてくる。

言葉は音調がともなはないと、文字を讀むのと選ぶ所がないのだから、此點から言つて東京の女の言葉は音調と抑揚とが程よく調和してゐるので、話が面白く聞える所、地方の女よりたしかに勝れてゐる。

縹緻の方から言ふと、目鼻だちは割合に整のつてゐなくても、見てなつかしい快い美しい人が多い樣に思ふ。つまり精神の活動と共に顏の表情も都會的に鍛錬されるのであらう。

新しい觀察の盡きざる都會

蒲原有明

東京に住んでゐるものが、東京の話をするのは却つてむつかしいかも知れない。私は東京で生れて東京に住んでゐるのであるが、今こゝと、一つはなして好む所を言へと言はれゝばちよつと困る。

何しろ今の東京市全體は、實に統一のない調和のないガサ〳〵した所で、之を二十年前の東京にくらべると、趣味の上から言つても劣つてゐると言はなければならない、さうしてそれが漸次統一調和されつゝあるとも言ひかねる有樣である。

其道路と言ひ、其建築と言ひ、いかにも間に合せのものばかりで、これが明治の東京の名殘であると言つて殘るものは一つもない樣に思ふ。

然しそれを見、そこに住みつゝある心から言ふと、そこに一種はなれがたいなつかしみがある。

東京は地勢から云つても武藏野の一部であるだけに土地に上下起伏があつておもしろく、其低い方、卽ち

下町の方には濠割があつて、其沿岸の複雜した生活の狀態など、自然の風景として見れば實に其色彩が妙である。

山の手の方は又、坂だの谷だの丘だのがあつて、そこは都としては其樹立の深さもうれしく、今から五月頃の爽やかな氣候に投げられる光線の工合、早い朝一面に薄くおりてゐる水蒸氣が靄などにうるんだ光がかかつた時などは、そこに言ひがたい「深み」と言つたやうなものを味はふ事も出來る。

京都は東山にしろ、西山にしろどこにしろ、もう古來の藝術家によつて畫かれもし歌はれもしてあるので、其以上新らしいものを見出すと言ふ事は困難であらうが、東京はまだこれと言つて手をつけてないのであるから、そうじて印象があざやかで、其統一のない茫漠とした所が却つて吾々の新らしい見かたをするのに便があるのである。それだからどこと言つて部分的に特殊な印象がある譯ではなくて、今の私の視る東京はどこでも好いと言へば言へるのである。

然し、强ひて特殊の印象を語るなら、それは子供の時、芝浦や品川邊から見た海の色であらう。

大きく成つて方々を旅行して海も多く見た。殊に瀨戸内海の紺青の水の色などは最も私の目を喜こばせたものであつたが、どう言ふものか子供の時、品川邊から見た海の色の樣な美しい(？)色は、遂に見る事が出來ないのである。今品川邊へ行つて海を見ても、昔見て今心に殘つてゐる其水の色は見られないのである

庇髮

女については大たいの上から言つて智識が淺いけれど、とにかく都會と女と言ふものは兩々相俟て一國の美をなすものであらう、それはいかに廣大な建築よりも、いかに美麗な公園よりも女と謂ふ者があつて、其生活の狀態が、都會の花やかさや、美しさは勿論、都會全體の情調を現はすものであらう、又現はさなければならないのである。然し現代の日本の女はまだそこまでには行つてゐない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

例へば衣服などの側から言つても、かく〳〵の精神からかく〳〵の模樣を產んだと言ふ所までは至らない、たゞ商人の商賣品として賣り出す模樣を追つて動いてゐる有樣である、從つて流行は轉々として——と言つて轉ずるのが流行であるけれど——元祿がはやるすぐ桃山にうつる、其間に何等東京市民の要求によつて動いたと言ふものがないのである。

東京には女子大學がある、三越がある、……と言つて、さあ之が東京市の代表であると言ふ事は出來ない地方の人が東京に來れば、まづ上野より淺草より三越と言つてはいつてゆくが之が東京市の特色であるとは言へない。

此間友達とよりあつて、もし明治と言ふとしが、四十三年きりで消失してしまうとすれば、そこに明治の名殘として殘るものは何であらうと話し合つたが、どうも殘るものは女の庇髮位なものだらうと言ふ事になつたが、とにかく庇髮は、新らしい女學生のタイプとしてたゞ上べばかりの流行でなく、精神との調和がある。之がまづ新らしい時代の女の要求から起つた流行で明治の特色と言へば言はれるくらゐなものであらう。然し今は昔の江戸趣味と言ふものが絕滅に近く、意氣とか粹とか言ふ樣なものは下流社會にすら殘らない樣な有樣で、たゞもう關西の勢力の下に壓倒され、從つて色彩模樣も華麗にして濃艷に向きつゝある。

女の着物の色彩や模樣が華麗になるのは構はない、たゞ關西風の濃厚な趣味は、元來の江戸趣味とは相容れない、白粉の塗り方なども、むやみに厚くすると、人形然たる京都女のやうになる、派手やかなのは好いが、こつてりはいけない。

さつぱりとしていきであつた、所謂江戸趣味なるものは、文化文政德川幕府の文明の極のデカダン（と言へば語弊があるかもしれないが）趣味であつて、それが破壞されて今また新らしい時代には、どこまでも華やかに明るい色彩を用ゐるのが、若い少女の風俗としては時代に適したものであらう。

大いなる未成品

戸川秋骨

是は大へんむつかしい問題であるが又面白い問題と思ふ。

然し不意にかう言ふお尋ねをうけてはむつかしいだけ、早速まとまつたお答が出來かねる。

それで私は此題にはたして適して居るか否かを問はず、どちらもつまりは相通うてゐる問題であるから、たゞ東京と言ふものについて私の感じてゐる事だけ述べておく事にする。

此頃の東京の生活は（地方の生活もさうであるが殊に東京は）西洋風、殊にアメリカ風が盛になつた樣に思ふ。それも向ふの善い所でなく、惡い所がはいつてきて、日本從來の美しい所が日に日に衰へてゆく感がある。

從つてアメリカなどにある社會問題などが其まゝ我が社會問題となる樣な事が出來て來た。

例へば女中がなくなつて來たとか、女の職業が增えて來たとか言ふ事から、それに伴なふさま〴〵の問題が起つてくる。建築なども、弱々しい西洋造りに、便利の爲かは知れないけれど、ランプを廢して電燈とか瓦斯とかを點ずる樣になり、遂には食事も家ではめんだうだと言ふので外で食ふと言ふ樣な、實に無趣味な事をする人さへも見うけられる樣になつてきた。

かう言ふ樣に、社會外部の形狀の變つて來たのは、つまり內部精神の變つて來たので、從來の東京は根本から一變化せんとしつゝあるのである。

生活と言へば大きい問題になるが、概して生活の方から、昔の江戸ッ子肌では、もうおしとほす餘裕がなくなつて來た。所謂、通がりで、宵ごしの錢は持たぬ

とか、着物なども見榮を張るとか、ざう言ふ風ではおし通せなくなつて來たのである。

昔の江戸の女は概して經濟は下手であつた。極の見榮ばうで、人が來れば食はせるもの、祝儀を氣張る……と言ふ風にすべてが派手で押通せたが、今日はそれではとてもやり切れない、つまり田舍の人の彼の着實な生活が此度は都の人の生活の狀態にならねばならぬ樣になつて來たのである。

近頃下流社會でしきりに、名古屋の勢力が入りこんで來たと言ふこと、あれは自然のなりゆきで、其經濟的の手腕の鋭さを、いやでもまねなければ成らぬ樣に成つた。

私は今の東京を好まない、殊に其建築の淺はかな、明日にもつぶれさうな西洋まがいの家や、其道路の混雜した不潔や、まことに好ましくないのである……が然し、私は東京で生ひたつた所からかも知れないが、其淺はかながや〳〵とした、汚ないもののなかに、何となくやがてよくなるものの要素がある樣に思はれて其處に一ばん心がひかれる。

それは丁度今の文學が不健全なものであるにもかゝはらず、何かしら後によき何物かを出す要素をふくんでゐる樣な氣がして、親しみの深いのと同じ樣である。

つまり私は整頓した小さいものよりも、ごた〳〵とした不汚なもののなかに、何物かを含むでゐる大なる未成品をよろこぶのである。

西と南の郊外

吉江孤雁

東京で私の好む場所と言へばやつぱり郊外である。

然し郊外と言つて本所深川邊の郊外や又　千住邊な

どをさすのではない。あそこらの郊外では田や畑は見られるけれど、背景が如何にも單調で物たりない思ひがする。こゝから言うて私はやはり山の手邊の郊外を好むのである。

其背景にはたゞ田とか畑とか言ふものばかりでなく山らしいものがある。森がある丘がある原がある。かうした豐な、美しい自然の背景の中に住むのは、あの何等背景のない市內生活の無趣味なのにくらべて、實に私ははなれがたい思ひがする。

其中でも北に向つて發展してゐる雜司ゲ谷邊は、やや陰氣な、暗い樣な所があるが、大久保品川邊は南向に發展して、何となく明るい陽氣な感じをあたへる樣な氣がする。

殊に代々木、目黑などは、海に向つて靜かにゆく水の流れが所々にあつて、廣い〳〵武藏野の感じが一層ゆたかに胸にはいつてくる。

今私の家は大久保にあるが、是は私の一身上の都合からこゝに住むので、出來うべくは代々木か目黑邊に住みたいといつも私の心の願ひである。

若き女のシーズン

東京の女は美しい。其美しいのは第一に眼であると思ふ。

旅行などして見るに、田舍の女の眼は小さく、細いのが多い、そして其眼はまことに表情に乏しい。

東京の女の表情に富んだ眼、さわやかに動くそれによつて言葉の足りないのを補うてゐる所、如何にも美しい快い感じを與へる。

それから次に姿であるが、東京の女の姿の美しく見えるのは、殊に今時分から夏にかけて著るしく目につく樣に思ふ。

白味がゝつた、すつきりしたものを着て、すつすと歩んで居る姿は、他方で見る事の出來ない美しさである。

京都の女も美しいが、どちらかと言ふと京都の女の美は濃厚である。服裝の色彩から、身のふりに至るま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で、すべてけば〱とした艶な美である。

東京の女はさつぱりと粹に美しい。

それであるから京都の女は室內に於て美しく、物思ひに沈んだ樣子が、かへつて其美を助ける程であるが東京の女は考へたり沈思したりしてゐる姿よりも、戶外を步む姿、室內でも談話してゐる時の方がいかにも活々として美しい。京都の女を靜止的の美と賞するなら東京の女は活動的の美と讃へべきである。從つて京都の女は秋から冬にかけて美しく、東京の女は春から夏にかけて美を現はす。

夏の夜、日比谷公園の音樂堂の邊で見る女は、殊にすぐれて美しく見える。

彼のオーケストラの樣なものでも、從來のやうに狹い樂堂などで奏でた所が、廻りの混雜にまぎれて、とても深く味ふ事の出來ないのが、それが夏の晴れ渡つた夜、爽かな木立を渡る風の音に和して響てくる其音を、うつとりとして聞いてゐる女の姿は、其廣々とした周圍によく調和して、爲に其曲全體が、いかにも自然にあたりに流れてゐる樣な氣がする。

いつであつたか、それはたしか海軍の軍樂隊が、やはり日比谷・樂堂で、彼のサッポーの戀に狂亂して海に身を投げる所をかなでた時であつた、夜目に白い着物を著た一人の女が、髮など風にやゝ亂れて、すつきりした立ち姿のまゝ、恍惚として聞き入つて居つた所其音樂と其宵景とにしつくりと調和して一寸のすきもない樣であつた。私はそれを見た時つくづく東京の女の美のタイプ其ものを見る樣な心もちがしたのであつた。かくして東京の女は他方とちがつた大なる美の一方面を持つてゐるのである。と私は思ふ。

だから動く處に美しい若い女のシーズンは、東京の人の最も能く動く春の暮から、夏の終までゞあらう、さうして一日の中で云へば、都會の塵埃が撒水に鎭靜つて、大陸的の涼風が晝の熱氣を遠くへ運び去る頃からであらう。空には美しい星の輝く頃、都會にはいきいきした女の瞳が輝いて、瓦斯や電氣の光の下に、新しいスタイルした女の姿が隱顯するのである。

張りつめた力

小川未明

夏の東京は印象が強い。

烈しい日光が瓦屋根の上や白じやけた道路に射す正午、或はそれに近い午後、其光線が白色に輝いてゐる所の強い印象は心の底まで鑄りつく樣な感をあたへるいはゆる印象派の畫家はかう言ふ心持を現はしたものであらう。

午後三時頃、橋とか塔などの上に立つて眺めると、めくるめくまでに強い烈しい特殊な力と色彩とを持つた光線の、微細な變化を見る事が出來る。フイスラーの畫などによく此心持が現はれてゐる。

そうじて夏の東京は繪畫的氣分によつて瓦の屋根も煉瓦の建物も、ガラスもトタンも、あらゆる色彩のコントラストが一種の調和をなして強い印象をあたへるのだと思ふ。

又私は電車などにのつて、外を眺めつゝゆく時、レールに沿ふた街の複雜した建築を見ると、物質文明と言ふものが、いづくまで續いてゆくかと言ふ事を深く思ふ。

人間がありのまゝにしてゐれば、滅びてしまうのが目の前に見えて居るやうで、張り切つてゐる心が少しでもゆるめば、ゆるんだゞけは元始的の自然狀態にかへると言ふことを思うて、絶えざる人間の努力と言ふ事が強く感じられる。例へば普通の道などでも、少し人が踏まなければ、そこへはたゞちに草が生える、レールの修繕を少し怠ればすぐに車輪の通行に故障がおこるなど、かう言ふ事を思ふと文明と人と言ふものの休まざる働きをたよりない樣に思ふのである。

彼の女子大學のある邊など、行つて見るたび家が增

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

えてゐる、それを見ても都會と言ふものがどこまでのびてゆくかを思つて、努力のそれをしのぶのである。

又淺草などの物騒がしい、色彩や音調の低いもの見の場所にゐる、俗を通りこして寧ろレフワインな、墮落を通りこしてむしろ美しいやうな人たち、又は烈しい市内の中心にある貧民窟の「生」と言ふものに棄身に成つてゐる人たちを見ると、私たちの樣に中心をはなれて、山の手や郊外などに住んでゐる、目的あり希望あるものは、生を棄身にする事が出來ないため、かう言ふ所にエスケープしてゐるのだと思うて、つまり人に其日〳〵を刹那的に、どこにすんでもいゝと言ふそこまでゆくのがおもしろい樣に思はれる。

それで私の好む所は、やはり銀座や濱町あたりの、活動的混雜な所である。

此外女の心に深い印象を殘してあるものは、私がまだ新聞社に勤めて居つた頃、夜の十二時頃にしづまり切つた社の二階で、電車の音をきゝながら、三版を締切つて、牛込の方へ歸つてくる途中、それは大ていもう青い灯か赤い灯の電車になつてゐるので、乘合せてゐる人も極少なく、外を見ると家々は悉く戸を閉して夜霧が一面におりてゐるなかに、街燈が寂しげに點つてゐる、丁度死んだ都會と言つた樣ななかをギー〳〵と軋る電車の響を聞きながら、此沈み切つた夜の町のうしろに、毎日の新聞にのる所の、人殺や盜賊がおこなはれつゝあるかと思ふと、大いなる暗いものに心が掩はれてしまふ、其こゝろもちを忘れられない。

又私は河岸の白壁のかず〳〵が、水にうつるあたりの雜閙を見て、遠く元祿の昔をしのび、淺草や吉原などを思ひ過去の江戸趣味の追懷に更けるのもすきである。

女子教育を疑ふ

先づ女と言ふものについては極端に解放すべきものであるかどうかと言ふ事を、多くの人の疑がつてゐる樣に私も疑がつてゐる。

イブセンによつて描かれてある樣な、あゝいふ、自

覺して自らの道を開いてゆく樣なものがあつたらとにかく、今の日本の女はまだそこまではいつてゐないと思ふ。

さうして見ると、教育をうけぬ女では、地方の女と東京の女とに懸隔もあらうが、教育をうけた、又うけつゝあるものの心の中は、殆んど同程度であらうと思ふ。

地方の教育をうけたものと、東京の教育をうけたものと、心の上から言つて違つた所がある、と言へば言へるが、例へば平塚明子の樣な女を出した都會の教育もまだあれだけではつまらないものである。

要するに現日本の女は過渡時代の女であつて、そこに何物をか見出さうとするのはむづかしい事であらう。

雪の夜の銀座

服部嘉香

東京市内に特別に好む場所があるかと聞かれゝばまづないと答へなければならない。ないから私は不便をしのんで此の郊外へ逃れて來てゐる。

然し東京と言ふものについての私の感じはいろ〳〵とある。

私の生れたのは日本橋の濱町二丁目、その緣故で幼名も濱二郎と云ふのであるが、四つの年から十六年の間、父の故鄕、伊豫の松山の方に行つて居つたので中學もそこで卒業した。卒業すると直ぐ、三十七年の四月十九歳の時再び東京へ出て來た時は、幼い時の記憶はなし、殆んど始めて東京を見ると言つても差支へないほどであつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其の時迎へに出てゐてくれた從兄弟などと芝の公園をぬけて、麻布の從姉の家まで行つたのであつたが、萬事が目新しく、混雜した、汚い町を不思議さうに眺めた眼で、其公園の物靜かな、深い樹立の下を潜つて石垣の古い苔を見た時の、何とも言へぬ心もちは今もあざやかに心に殘つてゐる。

麻布の家にいつて見ると、家がせまくて暗い樣で、窓から眺めると家の外は四つ辻の下のだら〳〵坂一方は舊藩主久松家の石垣に成つてゐる其の間に、自分の假りの住居があるのを見て、何となく東京と言ふ所はせまくるしい所だと言ふ感じを與へられてしまつた。

然し其の久松家の石垣を見、又一方芝公園の杉の樹立、松並木、德川家の靈廟などを見、或は紅葉館や增上寺の古風な建物などを見て、そこらあたりに江戸のにほひの殘つてゐるのを如何にもなつかしく思つた。と同時に田舍に居た頃、ものの本などでロンドンやパリーの大な市街、高莊な建物の下を行く人の、蟻の樣に見える畫が頭にしみこんでゐて、且は自分の生れ故鄕を立派なものと思ひたがる少年のプライドが手傳つて、東京と言ふ所をロンドンやパリーに劣らぬ所とばかり思つて居つたのが、實地に銀座だの本鄕だのの通りを歩るいて見て、其の汚ない半可通な光景に驚かされて私は少なからず失望した、期待した處が多かつた爲であらう。

此頃は市區改正などの結果、銀座などもだん〳〵都會らしくなつて來たが、殊に雪の夜の銀座はさすがに深いなつかしみを感じさせる。見渡す街は白い雪に更けて、瓦斯や電燈の光が靜寂に其の上に投げられてゐる、それを見ると田舍などの茫漠たる雪景色を見て居つた目には「都會の冬の夜の沈默」と言つた樣な一種の新らしい感じがしみ〴〵と胸に迫つてくる。モーパッサンの書く小說の、一つのシーンとなりさうにも思はれる。

つまり都會に入つて初めて見た芝公園一體の第一印象、それと雪の夜の銀座とが、私には捨てがたく思はれる。

夏の女の美

現今の東京は所謂東京と江戸との戰爭中である。是を背景にして見る今の都會の女は、一般としても亦個人としても、江戸の女と東京の女との戰爭中であらうと思ふ。

私は今の所謂東京の女は好まない。今の東京の女はまだ都會の女とはなつてゐない、丁度田舍ものが東京言葉をつかつてゐる樣で、都會の女としてのおちつき調和と言ふものがない。

であるから私は、山の手の女よりも下町の女が好き又女學生などよりも却つて柳橋や葭町の藝妓のなかに江戸の血汐のいく分か殘つて居るのがなつかしい。

然しそれも其の女を幾分か江戸の面影を殘してゐる根岸あたりに置いてしまつてはそこに何等の興味もない、其の場所が柳橋などであるからなつかしいのである。つまりは東京と言ふものを背景とした江戸の女、それが好きである、藝者に通用なおきやんな所是は鏡花氏の小說などから感化をうけて如何にも好ましく思つてゐるが、それにさつぱりとして、はぎれのいゝ、日本元來の女の趣味を、或る程度まで保留してゐる女を、東京と言ふ都會に置いて見ると、そこに矛盾する樣に見えて何とも言へず調和を存してゐるのが面白い

次に形の方から言ふと、夏の女が美しい。

冬の女も姿として見ては美しい、殊に丸髷などに結うて、吾妻コートをきた、若い奧樣とか、藝者などにあるすらりとした姿は如何にも好ましい。

けれども夏の若い女を見ると、姿ばかりでなく、肉附までがあり〳〵と外から見える。何となく官能の勝利と言つた樣な、強い美しさを感ずるのである。

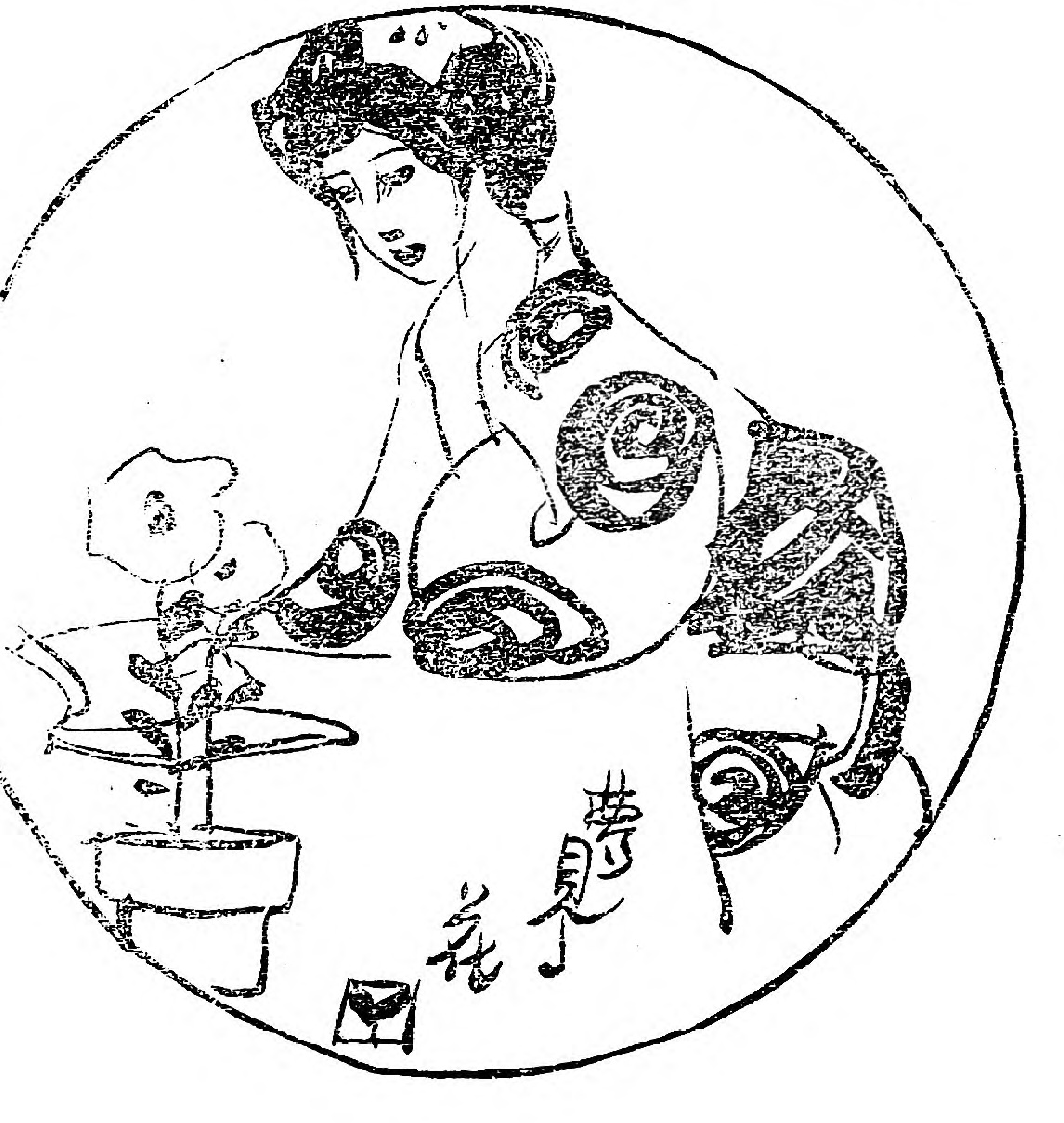
其輕々しいうすい衣が、肌に密着してきながされて小さい袖口をこぼれる紅いちりめんの襦袢の袖が、白い手にからんだ所、すつきりとした肩のあたりから水の流れる樣に羅いショールをかけたところ、いかにも自由な解放されたやうな感じがする。つまり女が裸體に近づく美しさを現はしていかにも我々の世界だと言

ふ觀がある。

夏は男も快よい。齒の浮くやうなハイカラな、輕薄な安紳士は癪に障るが、然し全體から、又外觀から云つて見れば、夏の男は瀟洒 輕快の趣があつて、さつぱりとした涼しげなネクタイもなつかしく、男の眼に映ずる若い女、女の眼に映ずる若い男、それが所謂Any Wife to any Husband" Any man to any woman とでも云ふやうな、愉快な暢びやかな感じを持たしめる。

かう言ふ感じは藝者からはうけない、やはり若い少女にかぎるのである。

つまり私は、今の東京の女の外觀は夏の若い女子を美しく思ひ、内觀は東京を背景とした藝者などをなつかしく思ふのである。



街頭を歩める女の印象

植物園で逢つた女

北原白秋

I

植物園溫室内の午後四時ごろ、入口の扉を排けて二人連の不恰好な女學生が這入つてきた。さうして表情のない顔にこゝろもち不思議な微笑を湛へて、タコノキや圓葉檳榔やヘゴやセンネンボクの奇異な南洋くさい植物の葉が菱形の硝子屋根を透して青緑に反射す内と外の光を仰ぎながら、暫時佇んだまゝ意地惡さうな沈默を續けてゐた。丁度、その時、左手の別室に通ふ水色のペンキ塗のはげた低い階段のところに黄ばんだ日の光がさして、そこから靜かな囁がきこえる、若い園丁の、梔子色の頸まである莫大小のシャツに黒い胸掛をあてたのが三人のびのびと足を投げ出して休憩してゐるのだ。後から四十位の女園丁が喇叭節を唄ひながらバケツに水をたぷ〳〵させて出て來て腰かける。そこから靜かな雲の往來が見える。啞の女學生は右手の室のアンスリヤムの赤い鷄冠のついた奇妙な花の咲いてる方へ重い足を運んでゆく。若い園丁の群はそれを機會に盲啞學校出身の盲目同士が夫婦になつた話、その女の兒の可愛ゆいことそれがまた盲人の兒にしては不思議なほど黒い清しい目をしてゐること、それからあんな啞の

女の執念ぶかいこと、それにある貴族の片輪同士の姉と弟の戀――姉さんが啞で、弟の十五六で夭死した綺麗な薄盲目の若樣がよくこんなシユロチクのかげで、白い點字の本を讀んでゐらしつたことなど、それからそれへと新しい案外にロウマンチックな會話が取り換される。私はそれを聽いてゐるうちに、何だか丈の高い、長い葉のサラリンサラ〳〵と戰いでゐるタコノキの彼方側の幹下の椅子に、柔かいフランネルを着て休憩んでゐる如にも思はるゝ少年の靜かな呼吸を感ずる白い冷たい十の指の間の愁ふかい感覺……溫室の隅には水のしと〳〵と滴る音がして硝子窓のそとには枯艸の間に水仙の新芽が微風に戰いでゐる、啞の女學生はどうしたのだらう。何時までも何時までも彼方に行つたきり出て來なかつた。

II

今日も植物園に行つて見た。例の藥艸畑の濕つた黑い土に痛いほど茴香や苦蓬の新芽のにじみ出てゐる傍の徑の向ふにコブシの花が半分ほど咲きかけて居るのが目についた。何といふ狂氣じみた花だらう。その靑みを帶びた淡黃色の白い濁が見るからにヒステリカルだ、そんな花のかげをよく下町の河岸では油のにじんだ白い胸掛をかけた四十位の髮結さんが疲れたやうに通りかゝる。こゝへは支那の女留學生が三人小さい畸形の足を傷々しいほど持てあまして步いて來た、そして一寸立ち留つて何か鈍い口調で話しながら心配さうに額をよせる。その靑い光澤のある黃い月琴型の顏、淫性な、そして間の拔けた、顴骨が高くて、大きな――病人の靈の如に濕んで何物をも吸ひよせる強くして黑い瞳。それが日本風に海老茶の袴をつけてゐるからなほさら奇異な感じを起させる。そしてその髮の靑いリボンに冷たいけれど快い四月上旬の風が吹く。その三人の支那の處女の危ふげな後姿が私をしてしみじみと未だ見ぬ北京あたりの郊外の頹廢した早春の哀愁を忍ばせる。…………

III

三月下浣のある日の午前、溫室前の例の人工的な精

圓や長方形の花壇にヒヤシンスや薄黄水仙の芽が二寸ばかりまだ冷めたい早春の風に微いでゐる邊を、愼しさうに一人の年增が歩るいてゐた。白粉やけのした顔の凛とした、何となく粋な女でした。丸髷に結つてね、目のふちのすこし青みを帶びた、そして時々ハンケチを唇にあてゝ小さい咳をして居ました。遠くのオガタマノキの白い花が散りかけた小徑に丁字杖を兩腋に挾んで歩るいてゆく一本足の少年の姿が見える。女は温室の左手の端から硝子屋根の内面に匍ひくねつてゐる蛇シャボテンの軟毛のある青い曲線の圓味を寥しさうに見入つたり、褪紅色の毛蟲のやうなアカリフアサンデリアナの花穗を見て怖ろしさうに眉根を寄せたりしてゐたが、別に待つてゐる人もないやうな風でした。しと〳〵と絹の如な小雨が降り出したので最寄の小亭に這入つて老緑色の金屬性の長椅子に休憩みながら黒い帶の間から小さい煙艸入を出して、銀の吸口の洒落れた煙管で靜かに莨を吹かしてゐましたがね、私にはその女の素性が何だかわかりませんでした。丁度、沈丁花の一番強く匂ふころで、歩行いてゐる私の心持も何となく濕つぽいやうな、物足りないやうな、さうして、甘い潤ひのなかにも苦い底力のある植物園の空氣が何だか病院じみた情調に感じられました。恰かもその女も私も、知合の病人を見舞に行つた時、生憎その病室に主治醫が見えられたので、診察の濟むまで遠慮して、裏庭の邊に出てゐる時のやうにも思はれたのです。

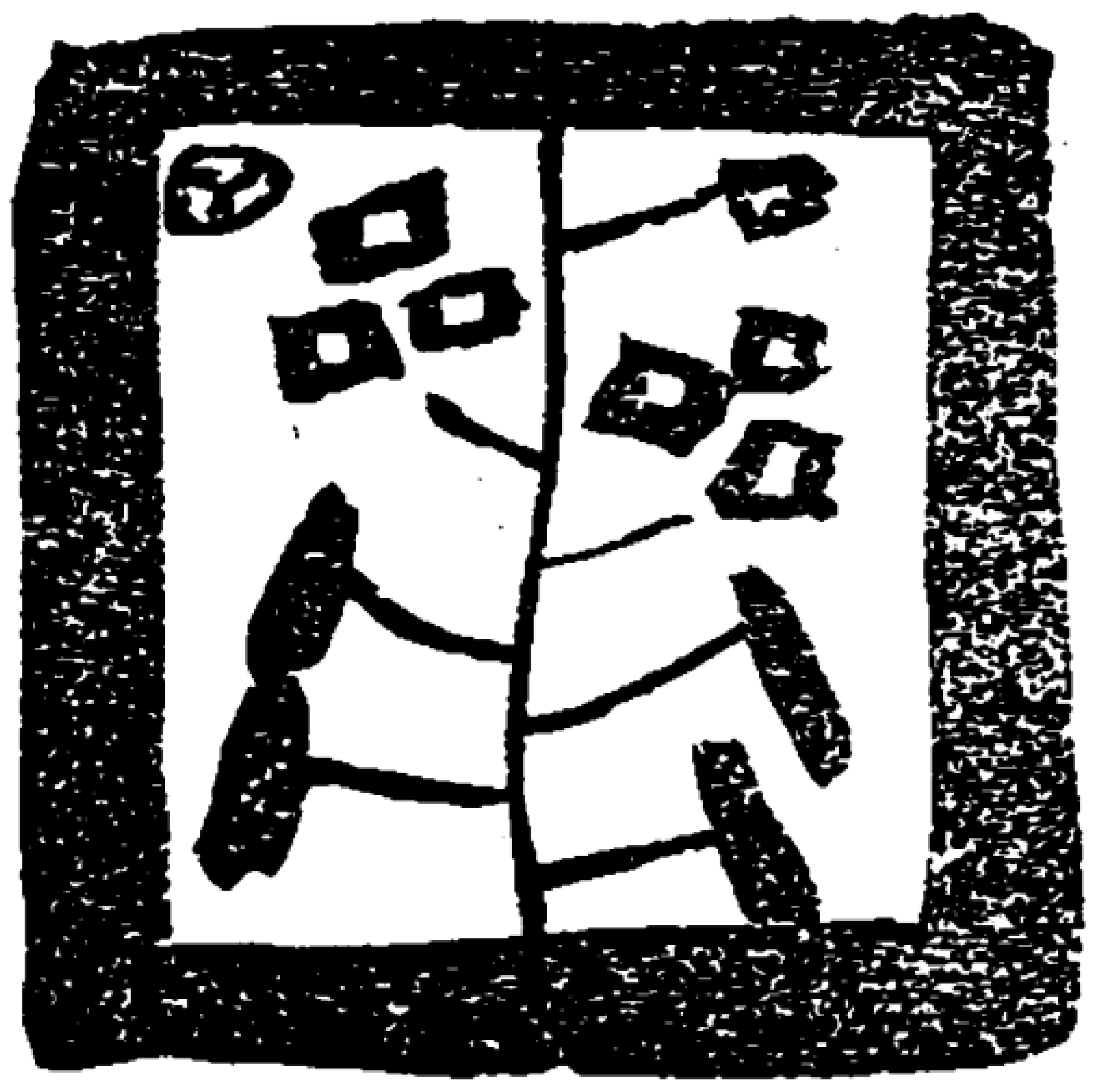
IV

ある日の午後、園内のハリエニシダの黃い花に夕日がくわつと反射す邊から、齒が痛むのか、面中白い繃帶を卷きつけた若い小學教員らしい男が、片眼だけ泣き出しさうに覗かせて歩行いて來た。年增の女をつれてゐる。ほんとに田舍田舍した風の、丸髷の根のゆるいそして馬鹿に大きな、襟元をはたげた、肉付の厚い、農家の淫奔女のやうな腋臭をたてる女だつた、何處か鈍い顔に粗白粉のまだらなのが、懶るさうに足を運ばせながら絶えず身體を男に擦りつけるやうにしてゐた

氣の弱さうな男は涙ぐんで仕方なしに案内してゐる風だつた。而して雜多な強い刺戟から逃れやう逃れやうとしてゐるらしく見うける。女は先刻から無理に溫室の中を見せて貰つたり、沈丁の咲いてる徑や、赤い椿の咲いてゐる下の砂利道を步行きたがる。加之、如何にも間延のした田舍言葉で話しかけてはをかしくもない事に笑つたり、甘つたるい樣子をする。

彼等がサンシユユの高い枝が悉く黃色の細花をつけて寒さうに顫へてゐる木かげに步み入つた時二人はふと新しいテレビン油の潤つぽい臭に氣がついて立ち留つた、若い下手な畫家が生々しい色を使つて赤い椿を描いてゐる。齒の痛い男はその強い色彩や聽きなれぬ油繪具の臭を嗅がされて苦しくて堪らないといふ風だつたが、女が『一寸寫眞を撮つてゐるから御覽なさいよ』と云つてその儘立つたきりなので、泣き出しさうになつてゐる。そのうちに女はそそくさと左の袂を探してゐたが、ボツ／＼と黑い齒で落花生を嚙りはじめた、無論男の手にも握らせたのさ。

氣の弱い敎育家は愈極り惡さと齒が痛いのとで涙を流さんばかりに悄氣てゐた。



僅に殘れる印象

葉舟生

私は今、自分の書齋の中に坐つて居る。丁度もう、一週間ばかりの間、斯うやつて日を送つた。私にはこれが常態である。

しかしこの週間は特別に忙しかつたやうな心持がす

る。今迄なげやりにしてあつた事が、載積して居た、それを一つ〳〵始末して來たのだ。實に氣忙しかつたで、集會があつても、それにも出席せず、落ち付いて人にも逢ふ機會が無かつた。さて、今日になつた。せつせとやつて居た仕事が二つ三つ片付いたので、何となく一安心した。

で、此間から河井さんにはがきで催促されて居るこの問題――河井さんから斯う言ふ事を書いて送れと言つて來られた、この「都會を歩ける女の印象」と言ふ題目について考へた。

だが、この題目について今私は頭の中に、何もはつきりと思ひ浮べる事が出來ない。私は先づ東京の市街を想像して見た。十日ばかり前に、また花がほんのちらほらし始めた頃に、歩いた時の事を思ひ浮べた。すると何處となしに、興奮して浮き立つた、ざわついて居る心持が胸に映つた。しかし、一人も今、鮮かに胸に映つて來る特殊の人が無い。私は春になつて行く都會の賑かな「心持」を感じはした。が、一人の人の顏――女によらず、男によらず――、姿、何にも心に映つて居なかつた。と見える。私は近頃、あまり閉ぢ籠りすぎて居た。

ぢや、何時だつたか、ずつと前に見て心に殘つてる或る話を書きませう。これが都會らしい「心持」を表はして居るか如何か、そこになると私は少し、この題目に外れはせぬかと、心懸りに思はれる。

もうずつと古い事でした。まだ東京に電車が無かつた。鐵道馬車が新橋から上野まで、品川から新橋までと東京の町にたつた一條の帶をしたやうに敷かれた線路の上を動いて居た。私はその頃早稻田の學生になつた初めで、矢來の叔父の家に寄宿して居た。

丁度、やはりこの晩春の頃でした。五月の末だつたらう。何であつたか用事は忘れたが、芝にある實家に往つた歸り道だつた。その頃は札の辻まで出て、あれから新橋まで馬車に乘り、新橋から今の須田町の處まで馬車に乘り次いで、あそこから牛込まで歩いて來な

ければならなかつた。

　實家に歸つて見ると、春休みの時に他家から貰つて播いて置いた草花の中で、雛罌粟がもう五つ六つ花をつけて居た。それを根から拔いて叔父の家にお土産に持つて行く事にした。處で、父にも逢ひ、用事もすませて、家を出たのは夕方の五時頃だつたらう、日がもうすつかり傾きかゝつて居た。

　それとも一つ、私はその時の自分の姿を覺えて居る襟付の無恰好な學校服を着て、焦茶色の中折れ帽子を冠つて居た。もう、學校の方でも、夏の試驗が間近かなので、何かのノートを持つて居た。片手にはその草花の根を新聞紙に包んだのを持つて……と言つたやうな姿だつた。

　私は平生の通りに札の辻から、鐵道馬車に乘つた。それから新橋の橋手前で降りて、上野行きに乘嗣ぐにはあの橋を渡るのだつた。それを渡つて上野行きの馬車に乘らうとすると、そこに若い丈の低い、小肥りに肥つた女が立つて居た。たゞ立つて居るのを見たと言ふだけで、私は別に心を引かれるのでも無かつた。たゞその女は白絣の單衣を着て居るのが私には目立つて見えた。私はまだ黒いメルトンの冬服を着てるのだつた。

　私が馬車の端れの停留場だつた、博品館の前に來ると、女は前からそこに立つて待たらしい。やがて馬車に乘るやうになつた時に、私の前に立つて車の中に入つて行つた。

　その女と言ふのは、斯う言ふタイプのだつた。近頃でもまだ女の學生の或る階級には、そんなスタイルをして居るのを見かける事がある、それは白絣の着物の裾が足袋にまつはるやうに長く着て、メレンス位だらう、不意氣な模樣の帶——割合に幅の狹い帶をきちッと結び、割に大きい帶上げをして居る。心持で言つたらば、糊の落ちた着物が、肥つた身體にぴたりと纏り付いて居る。その身體も着物も、埃と油とで何處となく汚れて居ると言つたやうな、まあそんな心持のする女であつた。

馬車の中に入ると、馬車は大變すいて居た。私もその女も西側に腰を掛けた。やゝ人の三人も間を置いて並んで腰を掛けた。女は私の右手に坐つて居た。

馬車が新橋から日本橋に行く中に、次第に人が乘つて來た。女は順々に私の方に寄つて來た。遂と二人はちやんと並んで居た。

丁度京橋を渡つて暫く行くと、馬車は人が込んで來て私の前には、下げ革につかまつて立つて居る人さへあつた。私はその中で、自分の手に持つて居る花を氣にしてもまれぬやうにとかばつて居た。すると突然、

「まあ、何の花でございます？」と、隣に腰を掛けて居たその女が言つた。私は驚いた、知らぬ若い女から大膽に——とその時は思つた、無遠慮に話しかけられたので、胸がドキ〳〵した。

「雛罌粟です。」と答へた。

「もうそんなに花が咲きましたかネ。」と馴れ〳〵しく言つた。私は默つて振り向いた。人の澤山居る中で若い女に話しかけられたので、恥と恐れとを感じた。

やがて、日本橋を渡つた。ふつと振り返つて馬車の窓から西の空を見ると、暗い黄昏の空に夕映が濃い色をして照つて居た。私は思はず、

「あゝ、美しい。」と言つた。すると、

「本當に……」と隣の女が言つた。それから又話の緒口を開いて、こんな對話をした。

「もう試驗が近うございますね。」

「えゝ。」

「どちらに居らつしやるのですか？」

「早稻田です。」

「アラ、早稻田ならば私のよく知つてる方がありますのよ。」

「さうですか。」

私はそれから、馬車が「萬世」に着くまでに、その女から種々の事を聞かされた。勿論、私にはその女が何であるかと言ふ事が分らなかつた。私にはたゞ女の學生とも思はれなかつた、と言つて、別に私にその外にその女が如何なものであると思ふ程の知識が無つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で、ともかくも目鏡で降りた。その女も降りた。そして私と並んで歩いて來た。馬車の中で、私に行く先きを聞いたので、私は牛込だと答へてあつた。降りた時にはもう暗かつた。私は默つてあの今は郵便局が建つて居るが、あすこが廣場だつた、そこを何方ともつかず、その女と並んで七八間歩いた。するとそこに居た車夫が戯つて聲をかけた。私は急に逃げ出したくなつた。で、

「さよなら」と言ふと、その女の傍を離れて、淡路町の方に向いた。すると、

「あなたのおいでの方は、此方ですよ。こつちの方が近いのです。」と後から聲を掛けられた。私は恐ろしくなつた。振り返つて見ると女はそこに立ち止つて居る私は恐ろしいやうな氣がしてその儘、行つてしまはうとしたが、何となく心持が惡い。何かその女に引き戻されるやうな氣がして、

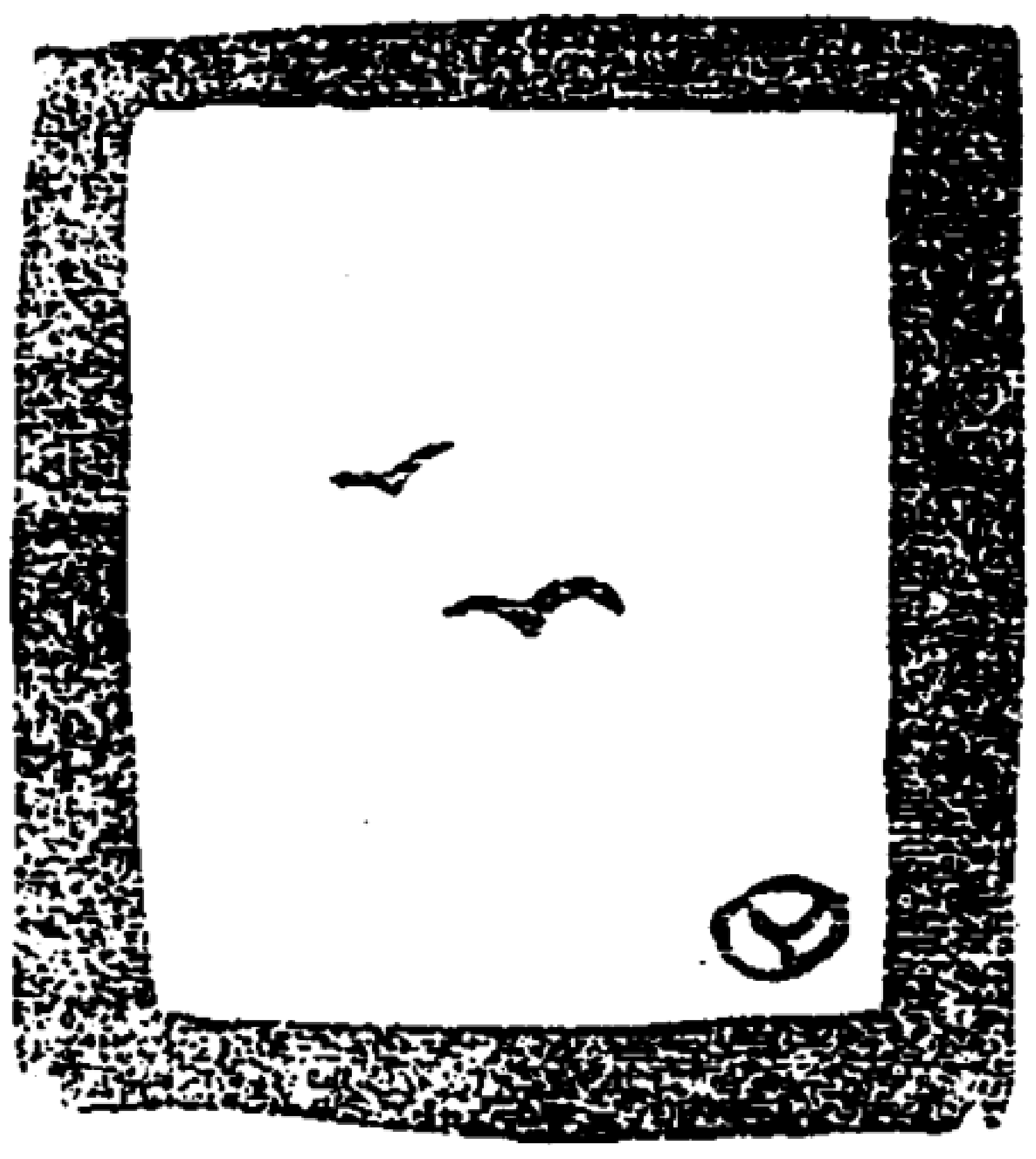
「さうですか」と言つた。無論、私は道の遠い近い位の事はよく知つて居た。で、眞闇な道を歩いて聖堂の方まで來ると、その女は神田明神の方に別れて行つた私ははつとした。

私はこれだけの記憶しか無い。で、道々もその女について考へて歩いたが、その時分の私の知識では何と判斷する事も出來なかつた。今でも何とも分らぬ。

たゞ、或る一種の女、東京には實に何とも一定の型では見て行けぬ女の階級がある。田舍から出て來て、如何言ふ心持、希望、誇り、を持つて居るかしれぬが一種特別の——それ〲の生活をして居る階級がある事を思ふ。

今でも恐らく、種々のそのやうな女がある事だらうその人々のライフの中には、又特別に面白いものがあるに違ひない。全く現今の東京程、平氣で地方言葉を使つてる人の多い土地はあるまいから……

その時、私の見た女と言ふのは勿論美しくは無かつた。



街の夕月

森川葵村

乾ききッた屋根瓦がしッとりと夜露に濡れて來る、暗くなッた二階の障子から赤い灯がおぼめいて來る、喧噪な都會も宵の口ちよッと靜かになる其の一と時であつた。

普請中であつた澤村座の横手を人浚ひが出ると聞いて居たので、急いで歸らうとすると、薄着の好きな鏡屋の菊ちやんが、ネルを着て後向に足場へ憑りかゝッて居た。

菊ちやんは僕の姉樣と學校朋輩であつたが、學校は尋常科で止めて今では踊の御稽古に行ッて居る。僕は後から竊と行ッて、ワッと驚かしてやッたら、さも愕然したやうに、

「嫌な勝ッちやん、愕然したわ」

と輕く僕を睨んだ。その眼つきが、常に無く恐かッた併し睨んだのは菊ちやんばかりでなかッた。そこには横になッた丸太の上に、この間まで僕等の餓鬼大將であッた榮ちやんが踞んで居た。

「榮ちやん、妾、好い事聞いたわ、ねえ勝ちやん」

菊ちやんは横に榮ちやんを睨んで、恁言ふた。

「本統だよ、好い事」

僕も何か知ッてる樣な風して拍手を合せた。榮ちやんは半月許前から、當時オッペケペーで僕等に知られた川上の弟子になッたんださうだ、鐵縁の眼鏡をかけて居る。

「好い事ッて、何をさ」

「榮ちやんは、あのね…………」

としなを造ッて、

「榮ちやんは昨夜、お女郎買に行ッたんですつてね、え、さう？本統だわね、皆に言ッてやるから好いわ」

「噓言ッてやがら、誰がそんな事言ッたえ」

榮ちやんは、にたッと白い齒を出して

「誰でもいゝわ、皆に言ッてあげてよ」

「そんな事言ッて見ろ、承知しないから」

　榮ちやんは立ッて、菊ちやんを片手で抱いて、卷煙草の火を頰邊へおッつけた。菊ちやんは「熱い……」と仰山な聲を出して逃げ出した。

　生乾の壁の上に淡い月光が染んで、何となく柔かな薄暗が二人の體へ蜜のやうに寄ッて來る。新築中の芝居茶屋の棟や、居並んだ瓦屋根や、尖ッた、角ばッた象が皆丸く暈になッて居る。

　煙ッてる晩であッた。

　家へ歸ると、川岸に向ッた奥の八疊で、お母樣は梨山先生と賑かさうに笑ッて居るのが聞えた。梨山先生は毎晩僕に算術と漢學を敎へに來るのである。

　僕は態と玄關へ上らずに、庭へ廻ッて、槇の葉ぱの下に、しよんぼり踞んで、川霧の流れるのを視詰めて居た、さうして、よく正どんに話して貰ッた、店に飾ッてある繪草紙を思ひ浮べて居た、勝頼や、浦里の三枚續きが、懵と川霧に浮んで流れて行くやうに思へた

　僕が振り返ッて明るい障子を見た時、又ほゝ……と笑聲がした。さうして僕はふと思ッた。あの障子の裡に、榮ちやんと菊ちやんとが、前のやうに話して居るのぢやないかしら、否そんな筈は無い、矢張お母樣と梨山先生だ。

　ほんのりとした夕月が如何にも物親かしげに、煙ぽい水蒸氣のなかから、おぼめいて昇ッた。僕は棧橋まで步き出して、繫ッてあッたお隣りの荷足舟へ飛び乘ッた。舳がぐら〳〵と搖れて、立てゝあッた竿の影がゆら〳〵と折れ曲ッて映つる。面白いので舟緣へ立ッ

て足で搖ると、その度に水の輪が出來て、ぴちや〱と舟邊を甜める、何だか舟が流れて行くやうな氣持がする。僕はまたこの水煙の上を只すうッと流れて行きたかッた。

薄着して居た肌に川霧がしッとり泌みて、何にも知らない稚い心に何とも知れない淡い愁が流れた、向ひ岸を見ると二階屋根や火の見臺などが、惘と一とつに連がッて夢のやうに流れて居る。怎かすると風の加減で、人の聲や三味線の音が斷々に水の上を傳ッて來る潮が岸一ッぱいにさして居た。

舟が氣持よく搖れる、水がぴちや〱言ふ。

* * * * * * *

其のお母樣に生き別れて以來十有餘年、僕は嚴めしい專門學校の金釦に身を堅めて居る。

當年の澤村座は幾度か改名して蓬萊座となつて居る慥か三津五郎の總見であッたと思ふが、交際とあれば嫌々ながら姉の家族のものと一所に見に行ッた。狹くるしい棧敷のなかで、僕の眼は大方ジヤパンタイムスに注がれて居た。それも飽きて眤と視詰めて居る女中の、ぽかんと開いた口の中へ卷煙草を入れたり行儀よく並んで居る春ちやんと房ちやんの背へ垂れ下ッて居るおさげを二ッ竊と結び付けたり、そんな惡戲をして居る間に幕もはねた。

芝居を出て見ると、何時の間にか細かい糠雨が降ッて居て、横町の二階屋根の瓦がしッとりと濕ッて居た。芝居茶屋で借りた番傘をさして、漸く砂利が濡れた程の駒形の裏通を、獨りとぼ〱と歸ッた。四月半ばの夜である。

ふいと薄い透き通りさうな櫻の花瓣がたッた一つ暗い糠雨に交ッて何處からかまぎれて來た。兩側の家並は大低寢靜まッて居る。チッ、ンと遙ふの方で三味線の音がしたと思ふと、薄暗い露路からほんのり姉さん冠りの白い手拭だけが浮いて見えた。

新内は默ッて濡れて行ッた。僕の眼には其れが瞼のい、、とろんとしたやうな軒燈の下を行き過ぎた時、棹を持ッた白い手と、色の褪めたメレンスの帶の色が、ちら

ッと照らし出されたばかりで、後は懵乎した影が十間ばかり前を歩いて行く。

僕はふいとあの時の菊ちやんを思ひ浮べた、そして更に榮ちやんを付けて加へて自分勝手な運命を想像した、それから離縁になッた僕のお母樣の運命を。

絢爛な、しかも濕ッぽいさはりの文句が十間許前を流れて行く、それからほんのりした白い姉樣冠りと、色の褪めたメレンスの帶と。其の音も、色も、また自分の思ひも、何も彼も皆しめやかに濡らされて居る。

梨山先生のお陰で、小學校は勿論、中學へ這入ッてからも數學は常に最高點を取ッて居た、併し僕の胸には解き難きKYの二字が深く沈んで居たのを誰も知るまい、自棄の淵に臨んだこともある、偉大な希望の光に照されたこともあるが、要するに左右の袂へ黒と白と殆んど同じ重さの石を入れて此處まで綱渡りして來た――先づ際立ッた善も行はず、惡も犯さず、至極臆病に。

アダム、スミスの經濟學説や、マルクスの共產主義の講義も聞いた、權利義務や意志表示の一般概念をも得た、更にヘッケルの『世界の謎』も讀んだ、ニーチエのツアラトウストラも耽讀した、兎に角僕は相當の智識を得て居る。悟性は感情の命令を何時まで奉じては居ない。KYは當然な而かも痛ましい解答を僕に與へた。

斯くして育ッた僕は戀愛卽罪惡の痛ましい判決を如何しても取り消すことが出來ない、此の若い心でさへ。

僕は、『戀』と言ふ美しい女を、心の獄屋にしかと囚へて居る。僕の乾いた胸に折々親かしく映るものは、只生乾の壁に染んだその夜の月光である。感ずるとも知ることは無かッた幼い心に受けた、罪や戀やらを脫化した一とつの情調である。

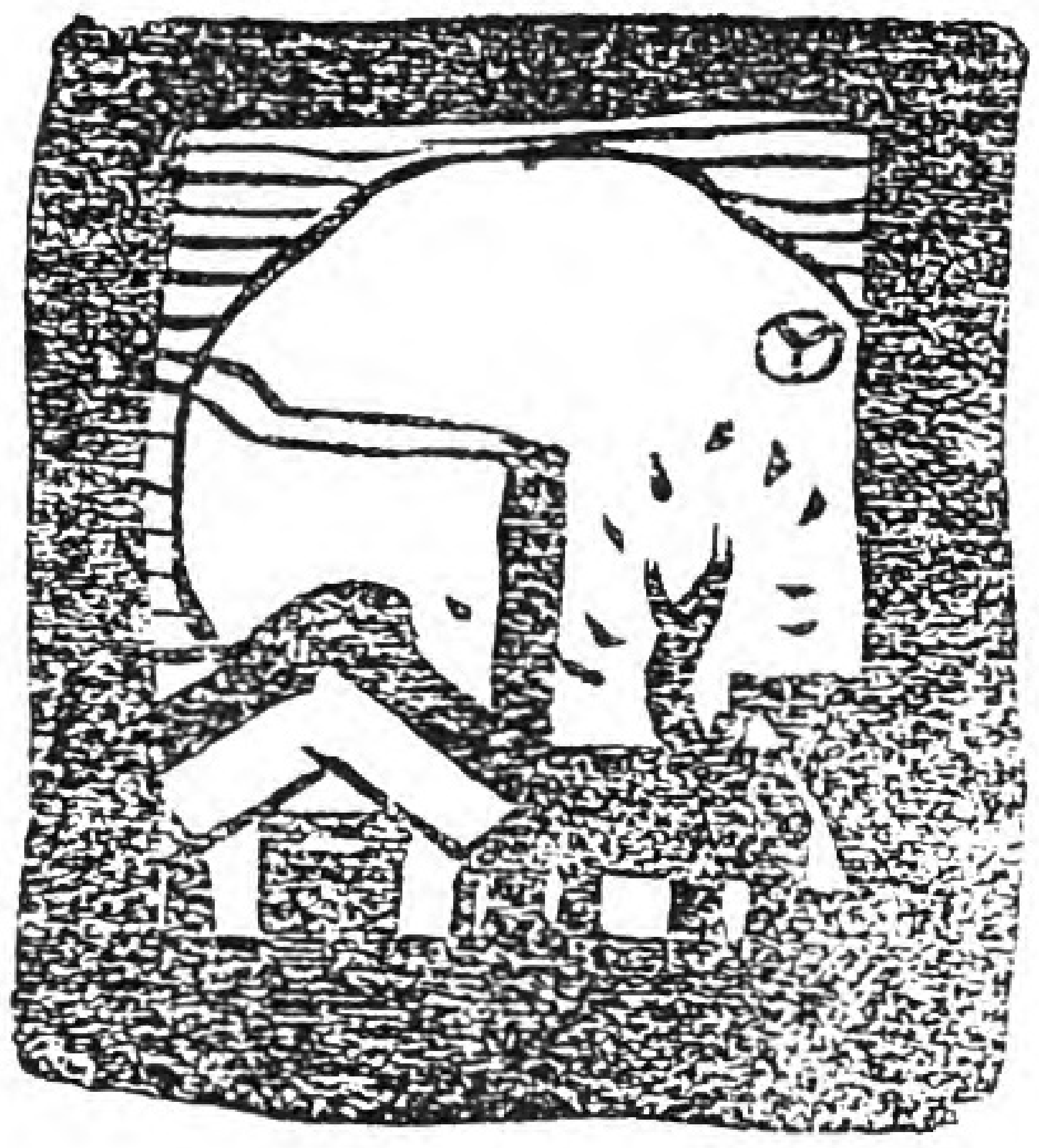
明朝はノートをかゝへて通ふ身である。この懵とした夜の薄明りに、丸くふッくらした市街の情調を、せ

めては今宵、四月の雨に濡れて歸る間だけでも味はうではないか。

觀音裏迄來て傘を持ちかへると、懷手して居た片袖が、濡れるとも無くしッとりとして居た。

舟舷に茫然立ッてる樣に、心地よく身が搖れる………

心の底で水がみしやく〳〵する………。



三人の女

（青年の對話）

吉井勇

青年A。今日僕は三人の女に會つたよ。

青年B。また例の市街散歩をやつたんだね。（問）さうして『第一の女』には何處で會つたんだえ。

A『第一の女』には九段坂の下で會つた。丁度日の出前で、黎明の空氣が何だか濕つぽかつた時分だつたがね、僕はいつになく早く起きて散歩をしたんだよ。まだ往來を歩いてゐる人は、あんまり多くなかつた。ぼんやり飯田橋の方から九段坂の方へ歩いてゆくと、あの坂下で電車に待つてゐる女が居るんだ。何だかその横顏が見たやうだつたから近寄つて見ると『第一の女』だつたんだ。朝早く都會を歩む女の習慣で、何だかしどけない着物の着樣をしてゐたよ。さうして蒼ざめた顏付で、熟と地面を視てゐたよ。夢賣る家に住んでゐる女が夢賣る家から出て來ると、急に影が薄くなるものだね。

B。それから『第二の女』には何處で會つたんだえ。

A。『第二の女』に會つたのは、永代橋の近所だつた。午前九時と云へば、最早日光が河の面に輝き渡つてゐる頃である。僕は深川の方へ往かうと思つて河岸傳ひに永代橋の近くまで歩いて來た。丁度橋の所に來懸ると、向ふの方から橋を渡つて來る女が居る。二十七八の荒れた心を持つてゐるやうな女、新らしい銀杏がへしが何だか不調和に思はれる顔付で、急ぎ足で歩いて來る。『第二の女』だなと思つたから近寄つてゆくと、その女は怪しむやうな眼付で僕の顔を眺めて、知らん顔をして往つて了つた。船に乘つてゐる女——僕の父が持つてゐた捕鯨船に、よく遊びに來た女だつたが、何時か忘れて了つたんだらう。都會を歩む女のなかにこんな海の女が交つてゐるのは、一種云ひ難き悲哀を感ずるぢやないか。

B。さうだね、何だかそんな氣もするねえ。(問)それから『第三の女』には？

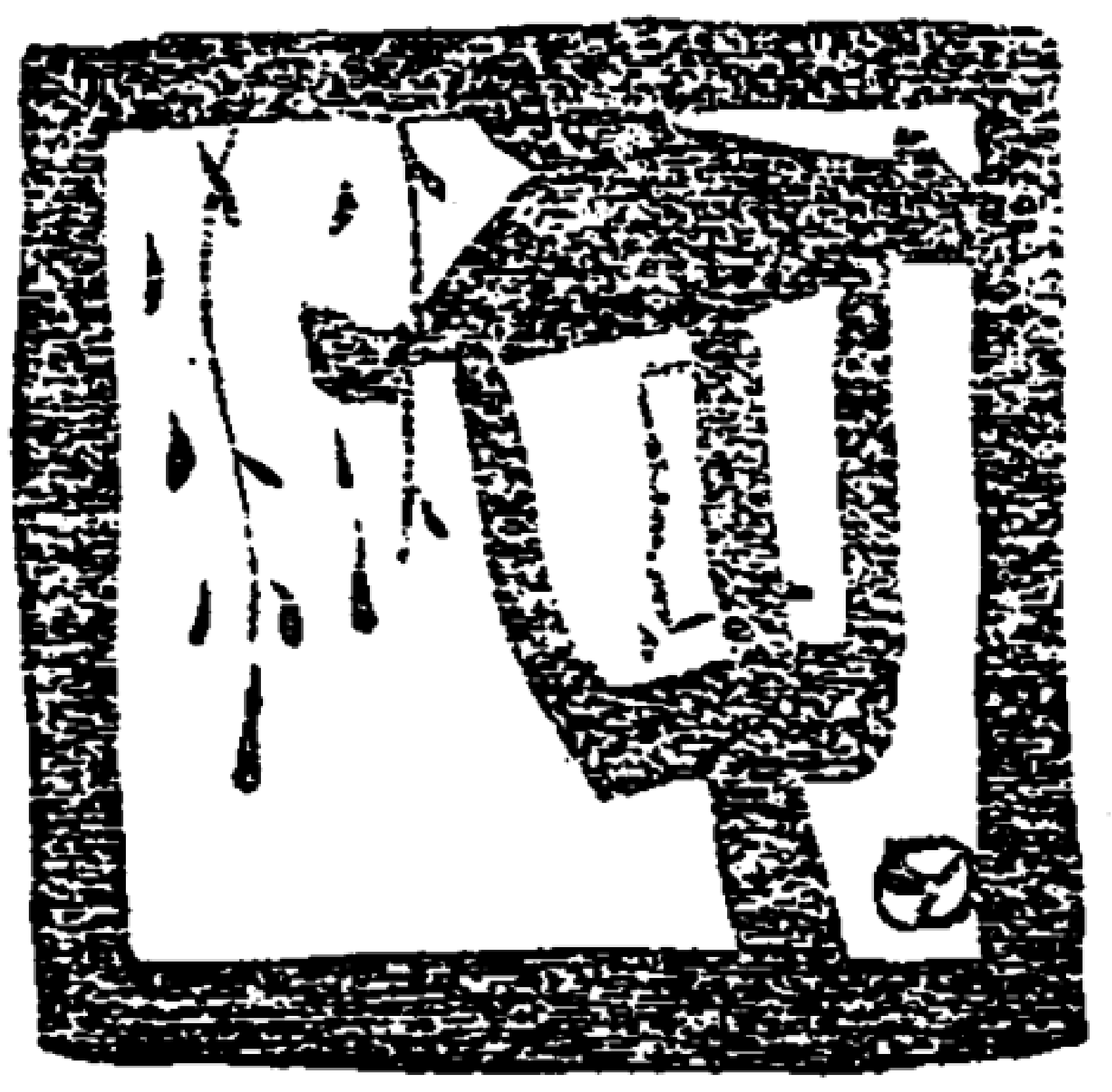
A。うん、『第三の女』に會つたのは、今から一時間ばかり前だつた。銀座の臺灣喫茶店を出ると、丁度出合つたのが『第三の女』だつた。まだ昔のやうに若い氣でゐるのか知らないが、年に似合はない派手な着物を着て、あの時分君が付けた渾名の通りに、孔雀のやうな姿で歩いて居た。さうして僕には眼で挨拶したぎり、物も言はずに或る裝飾品を賣る店のなかへ入つて往つた。何時まで若い氣で居るのだらうと思つたら、何だか可哀想になつたよ。

B。左樣かねえ、相變らず君もお目出度いねえ。

A。だがね、都會を歩む女には、いろ／＼な女が居るねえ。僕が知つて居る女だけでもこれだけ居るんだもの。

B。然し眼に殘る女も少なければ、心に殘る女も少ないねえ。

（明治四十三年四月十七日）



油繪に入る女

木下杢太郎

　拜啓貴翰は昨日病蓐之内に拜誦仕候。都會を歩む女の印象に關して所感を述べよと申す御意に候が、小生も未だ若年者故、折々は街頭に摺れ違候女を偸視致さずとは申さず候へども、あから樣に其印象を語れと申されては聊か忸怩たる感無きを得申さず候。

　日々數多く見候女の容貌は、唯小生が腦中の復合寫眞の一枚に役立つに過ぎず候。未だ月餘もはた年中も幻影として殘るやうなる容貌の女に出遇ひ候事は無之乍他事御放念下さる可く候。

　乃至刹那に生じ、刹那に消ゆる底の行爲の相に就ては唯一つの記憶有之候。それは須田町にて見たる所に候が、外出に慣れぬらしきやゝ年たけたる美しき人の電車の踏切は殊更に不安らしく、と見、かう見こなたよりあなたにわたるとて、小供のやうに驅けぬけ候が線路も第四線に近く、心中少許の安を得候にや、電車や來と左右を顧み候が、何れも其距離あまりに遠く候に、さてはかくあわてゝ驅けるにも及ばざりしと氣付き、一つには自ら可笑しく、一つにはもしや見し人のありもせしやと、その辯護の印らしくあえかに笑ひ申候ひし其時の姿勢、表情は今尚目に殘り居り申候

　尚一つ氣付き候は東京の冬の色と女の服裝との事に候。灰色の道路と羽目板、土塀の黄色、それに空の青位の寂しき調和の間に、花々しき紫、小豆色、活色なんぞの羽織を見候時は痛ましき感じを惹起し申候。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

奈巴里の人は男も女も斑らなる色を好み、帽には花または彩文ある鳥の羽を飾り、絹の切れ、リボンを卷き、椅子、簞笥の類は、ゆたかならぬ人の家にても鍍金したる上に花の模樣を置き、一頭立の馬車は目もさむるやうに赤く塗り、その彫物をば鍍金し、馬の前には造花、眞紅の房、金モールを附け、小さき房、小さき旗などを頭につけ、走る度にゆるるを喜び候は、他國のものの見て、野蠻なる趣味とするところなれど、その土地の空の色、太陽の光、そのまた水につくる反射と調和せん爲めにはやむを得ざる必然のものに候など昔の人の以太利亞紀行の文に見え申候、されど冬の東京の紫の女は、暗き動物園水族館の中の金魚を思ひ出させ候。

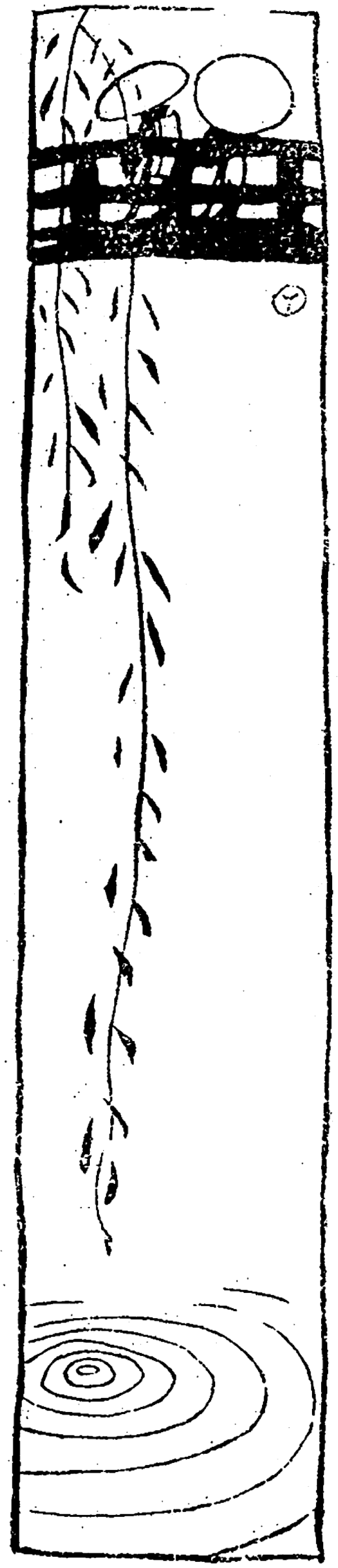
併し小生は石井柏亭君や織田一麿君等方寸社の一派の如く、日本の自然は暗く陰鬱なりなど申すものには無之候、日本にても、冬にても、たとへば雪の旦の、雪つもりたる芝の堤の前などをゆく女の顏、衣服、皮膚などの上の外光の輝きを御覽になる可く候、織田君は日本の昆蟲の色は自然に對應して美しからずと申候へども、まさか、日本の女の唇は紫に、頰は青黑く、牡丹の花は鼠色なりと一概に申すにも候まじ。

昔は菱川師宣の版畫、市に出で候時は、女も男も、畫中の人の姿、貌に惚れたりと申し傳へ候。長春、歌麿等は兎に角時代の活相を繪に入れ候。明治の油繪にては橋本邦助氏一人とは心細く候。都會を歩む女の姿の、日本の油繪かきを動かす日は、遮莫さほど遠くはあるまじと樂しみ居候。然し乍ら上野の花見に、三味線ぬきの由良さんを遊び、絃一つなると黑き制服せる人の『てらてら』を參らするやうなる殺風景の日には女の繪をかくより武者繪でもかき候方が德ならむ乎。恥かしき饒舌を弄し候。不盡。

……

さほ姫より

春につぎ夏くるといふひとまなさくろ髮みだし男とかたる
夏草の中にまじりていちじろきひなげしに似る心となりぬ
にくかりし卷煙草かなゆらゆらと煙は立てつ汝の前に



詩に現れたる都會

河井醉茗

詩に現れたる都會と云ふことは、近頃殊に氣の着いた問題です、詩集などより、雜誌に表れてゐる極く新しい作を見ると、著しく能く分ることですが、此の通り都會と云ふものが詩歌の題材に入つて來たのは、新しいことであつても、少し後へ遡ると、やはり四五年以前から其兆しは大いにあつたのです。

『屋上庭園』と云ふ雜誌があります、此言葉は最も都會の趣味を代表してゐます、三越などへ行くと、三階の上あたりに庭がある、繁華な場所では迚も庭園などをゆつくり取るだけの餘裕が地上にないものですから遂に幾層かの建物の上に庭園が出來ると云ふやうな趣味が、都會の狀態を表はしてゐるのです、此れなどは地方の人に一寸會得しかねる興味であらうと思ひます

都會趣味の變化を研究するのは面白いことだと思ひますが、それは兎に角、目下の處で新しい人の眼に映る都會の趣味は、歡樂とか、デカダンとか、刺戟とか

憂愁とか、耽美とか、凡て印象の鮮明な、動搖的な、いき／＼した方面にあると思ひます。

四五年以前、蒲原有明君などが作つた詩に、都會を題材としたものがあつたのです、恐らく都會を歌ふてとの先鞭であらうと思ひますが、それらは猶ほロマンチックな見方をしてゐました、それが一轉して自然主義の影響を受け、更に官能的なものとなり、一方では永井荷風君の『あめりか物語』や、其創作の感化も力あつたでせうし、北原白秋君の作が又甚だ都會式のもので、スバル一派の所謂都會の情調が詩や、文に浸染んでくるのと同時に、是等の思想が渾然として一つの都會式藝術を造つてゆくやうに思はれます。

『春鳥集』には『朝なり』と云ふ詩があつて、東京の日本橋邊りの堀割の朝の印象が、能く歌はれてありました、此詩は嘗て私も評釋したことがあります、其外に『夏まつり』と云ふ作もありました、それは矢張東京の夏祭で、優美な下町の娘風俗などが歌はれて居ました、今から見れば、技巧の輕い、淡々しい色調のものでした。

祭物見の大店の
壓だにすゑぬしめやかさ
緣じやのさきの美しき
顏もそろひし女客――
見ればとり／＼水草の
祭の浪に誘はれし
それとはかはる身だしなみ
清らやこゝの中むすめ
ことし十五の初夏と
うちそやさるゝ娘まゆ

と云つたやうな調子で、何うしても庇髮以前の都會式でした。

同じ集に『魂の夜』と云ふ詩がある、此は銀行を歌つたもので、當時にしては珍しいものでした。

午後四時まへ――黃なる
冬の日、影うすく
垂れたり、銀行の

戸は今とざしごろ
あふれし人すでに
去り、この近代の
梁の宮は今、
さだめや、戸ざしごろ——
　　いつかは生の戸

此等は後の『有明集』に表はれてくる諸作と同じ系統で、題材は都會に取り、思想は象徵主義に近いものでした、隨つて意味も深くなつてゐる。

昨年出版になつた二個の詩集、卽ち三木露風君の『廢園』と、北原白秋君の『邪宗門』とを比べて、孰れに多く都會の情調が出てゐるかと云ふに、『邪宗門』の方が一見して直ちに都會の情調を多く歌つてゐることが知れます、『廢園』は純乎たる主觀の立脚地から天然其ままを歌はうとした傾向があるに反し、『邪宗門』の方は、官能の刺戟を受ける場合が、天然よりも人爲的に多いから、都會と云ふやうな土地も、始終其背景になつてゐるやうです。

例を擧げ出すと『邪宗門』の前半篇、何處を引用しても可い位ですが、單に都會と云ふと漠として了ふ、都會の中の一部の印象、就中、河岸とか、噴水とか、池沼とか、水の伴ふ場所が『邪宗門』には多いやうに思ひます。

はた大河の饐え濁る、河岸のまぢかを
ぎち〳〵と病ましげにとろろぎめぐる
灰色黃ばむ小蒸汽の溫るく、まぶしく
またゆる〳〵とろぎ噴く湯氣
いま懈ゆく、
また絕えず。　（晩春の一節）

噴水の暮るるしたたり——
くわとぞ蒸す日のおびえ、晩夏のさけび
濡れ黃ばむ憂鬱症のゆめ
噞む、あな
しと〳〵と夢はしたゝる　（噴水の印象の一節）

哀れ、みな惱み入る夏の夜のいと靑き光のなかに
ほの白き鐵の橋、洞圓き穹窿の煉瓦
かげに來て米炊ぐ泥舟の鉢の撫子
そを見るに見下せる人々が飽みし面

はた絶えず惱ましの角光り電車すぎゆく
河岸なみの白き壁あはく〳〵と瓦斯も點れど
うち向ふ暗き葉柳震慄きつ、さは震慄きつ
後よりはた泣くは青白き屋の幽靈（青き光の一節）

夏の日の激しき光
噴きいづる銀の濃雲に照りうかび
雲は熔けてひたおもて大河筋に射かへせば
見よ眩暈く水の面、波も眞白に
聲もなき潮のさしひき

そがうへに懸る吊橋
煤けたる鼠の鐵の桁構
半月形の幾圓み絶えつゝ續くかげに、見よ
薄らに青む水の面、あるは煉瓦の
圓柱映ろひ、あかみ、たゆたひぬ。（吊橋のにほひの一節）

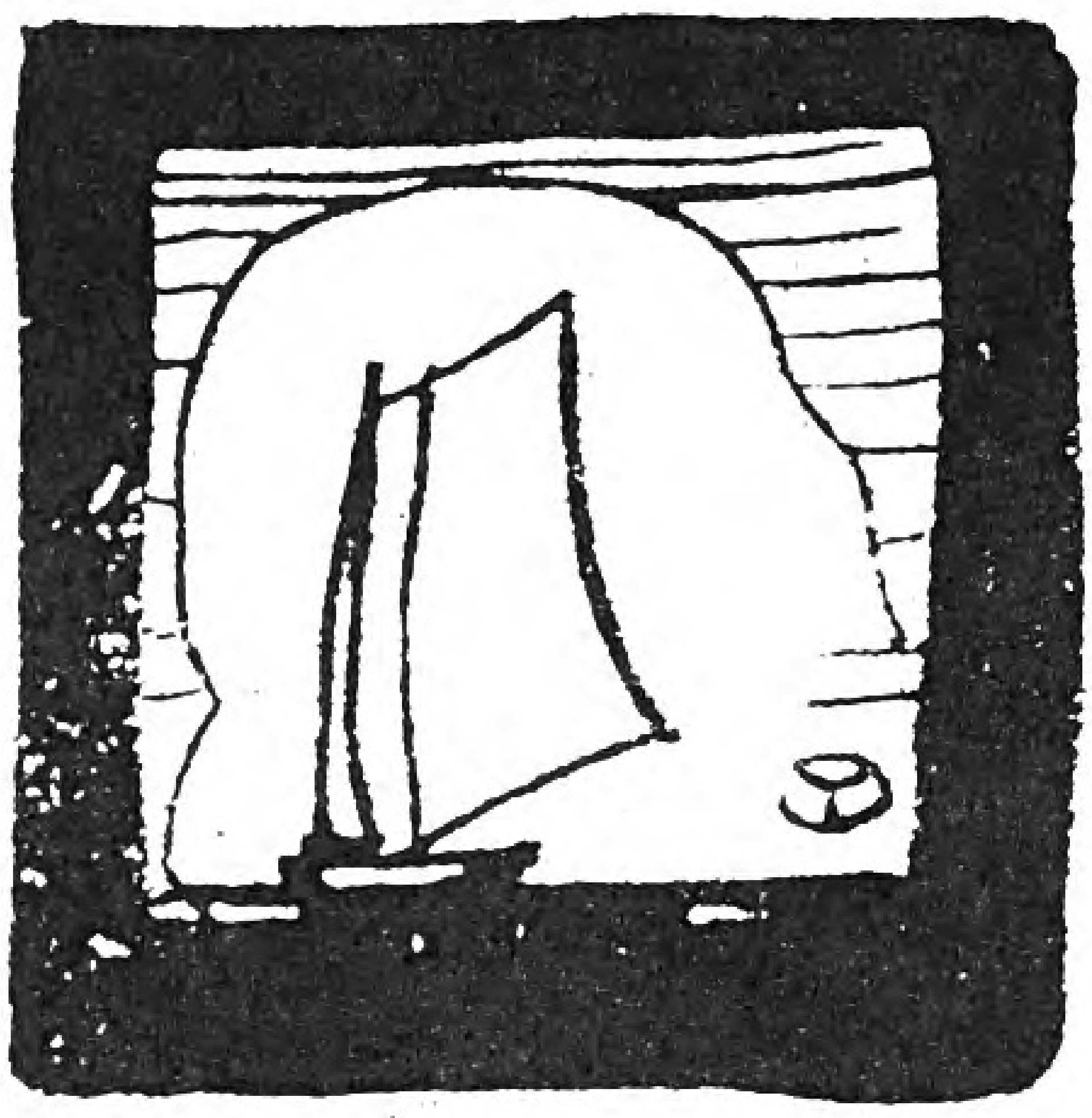
此等の詩の一節、斷片的ながら、略何う云ふ風に都會の自然を見てゐるかと云ふことが分りませう、纖細な觀察と、緻密な、而して新しい技巧とが、都會の自然を能く表はしてゐるやうに思ひます。

露風君の作は前言つた通り、白秋君とは全然異つた方面に身を置いてゐるから、例ひ都會を背景にした作を『廢園』の中より幾多見出しても、白秋君のやうに印象的、官能的でない、其代り感情の濕ひが透徹してゐる、白秋君の方には夏の日のまぶしいやうな光線がある、露風君の方には秋の日の泣きたいやうな空合がある、其人々の特色は最も尊重すべきことで、殊更優劣を論ずるに及ばない。露風君の作には海あり、丘あり、林あつて、都會は少い、一つだけ抜いて參考にして置きませう。

香油のかをりいと甘き空氣をたゞよはし
六月の樹木は圓き大地をめぐりて夢む
ゆるやかにこゝろよく人は動き
物の疲れは柔かく、見よ、肩の上を超えゆく――

うるはしき芝生は花をもて縁とちれ
小徑は薔薇をもておほはれたり
歡ばしき夏の日

柵の外には群を待つ馬車臺あり
空しく投げかけられし花束のみ日をうけてかゞやく
（こゝろよき群の一節）



暗愁に囚はれたる都會の女性

澤村胡夷

現代日本に於ては一般に都會生活その者が暗愁の色に包まれてゐるやうだ。實生活の苦悶や、思想上の動搖などが其原因となつてゐるのであらうが、是等の事情を呼起したのは卽ち急激な文明の輸入であると云はねばならぬ。つまり此輸入が强烈な刺戟となつて先づ古い日本の都會生活を威嚇したのだ。之を他の方面から云ふと、新文明の過食の爲に食傷を惹起し、また新文物を歡迎すべく日は夜に亟いだ結果、神經衰弱を釀した所の日本現代社會の病的徴候が、先づ都會生活に於て現出したとも考へられるのである。然し此等の事柄は深く立入て詮議する必要もなからうし、今之をとや角云つてゐると問題の大切な部分を失ふ恐れがあるから是は他日に讓る事としよう。つまり吾々の都會は今や暗愁の色に包まれてゐるといふ事が實際上認め得られるのである。其處で都會の婦人は同時に多少暗愁の色に捕はれてゐると考へなければならぬ。その結果、女性は如何なる狀態を示して居るかゞ先づ吾々の問題となつて來るわけだ。

現代の都會婦人のある者は恰かも死骸のやうに横たはつては居ないか。生色のない青褪めた女が街路をば時折かすかな嘆息の聲をもらしながら歩んで來るのを吾人は都市に於て甚だ多く見受るのである。而して其

多くは若い女と云ふよりも、三十歳前後の婦人に於て寧ろ甚だ多く之を見るのである。是は啻に下等社會に止まらないやうだ。實に中等社會に於ても甚だ多く認め得るのは抑何が故であらうか。次にまた若い婦人に就て云へば、彼等は驚ろくべき病的徴候を身體の上よりも寧ろ精神の上に現はしてゐるやうである。彼等は鋭敏な神經を過度に使用してゐる。而して自己の慾情の上に之を集中してゐるやうだ。是が爲に非常なる空幻な苦悶を自ら求めて、或は自暴自棄だと自分で免許をして惡習慣に喜んで自ら進んで行くものさへ少くない。例へば此自暴自棄だと自分でよく了解してゐる所に現代的な都會的な面影がある。彼等の中には理解力の乏しくない者が甚だ多い。然しその理解力は自己の哀むべき利益……所謂眼前の區々たる利害問題などのために絶ず動搖してゐる。彼等の精神は餓死に瀕した行人のやうで、また同時に酒精の中毒に陷つた病夫のやうである。彼等は作法を顧る餘地が無い程何物かに餓ゑてゐる、而して毒だとは承知しながら酒を飲む事を禁じ得ないのと一所だ。彼等の精神は掠奪に遭つた後のやうだ、また宛も嵐に亂された野のやうだ。その精神は宛然轢死者の殘骸のやうに横つてゐるとは云へないだらうか。而して此等の間を一種の暗愁が通つてゐるので、之が爲に絶ず暗黒な方面へ引込れて行くやうで、また常に不安な道をたどつて行くやうでは無いか。

然るに一歩進んで、現代の都會生活が女性に對して如何なる影響を與へてゐるかと云ふ事を知るのは一層興味を覺える事柄であらう。さりとて都會生活を抽象的に論ずるのは餘りに感興が淡からうから、東京を中心として一切を東京生活から引張り出さうと思ふのである。加之、吾人の所謂都會生活は東京、大阪などに於て尤も適切な意味を發見するのであるから、此點からしても東京を中心とするのは恰好だらうと信ずるのである。

現代の東京婦人、卽ち實際に於て東京の所謂都會生活を營んでゐる所の女性は如何なる者が其大部分を占

めてゐるかと云ふに、彼等は主として本來田舍者だと云つて差閊へあるまい。之は女性には限らない、男性でも其大部分は純粹な東京人ではないのだ。之は都會と名のつく處の一種の特徴と見てもよいので、殊に東京そのものは其歷史的の生活に於て、先づ此傾向を他の都會よりもより以上に發揮してゐる。昔の江戶なるものは中心の大勢力が動かずに居て局少の部分のみが絕えず新陳交代をやつてゐたものだから、所謂江戶氣質と云つたやうな一種の都市的氣風を作り出すに至つたのだが、明治の初年に於て此氣風を理解せない山出しの無作法者共が、此都市を蹂躙した其結果驚くべき粗野なる狀態……と云ふよりも、一層適切に云へば、舊來の江戶なるものが寧ろ溺死の狀態に陷つたのだ。之と同時に新文明の勢力が此都會の舊狀態を其外部からと其內部からとの二樣の變動を起さしめたのである。かくの如くして舊い江戶は或意味から云へば自殺して了つたのだ。かくの如くして歷史的意味から東京は所謂無作法者たる田舍漢の爲に占領せられたのである。一方に於て、此歷史その者から分離して考へて見ると、東京は一切の中心と云つたやうな異樣な光を以て地方人を誘うてゐる。都會は常に感動し易い血を持てゐる所の地方の靑年男女を誘致してゐる。また地方の野心家を誘つてゐる。此點に於て東京は政治上其他の中心と云ふ更に强烈な勢力を以て、一層深く地方の靑年男女、或は野心深き田舍紳士を誘つてゐるのだ。此事柄に深い關係を有てゐるのは交通上の利便と云ふ事であるのだが、とにかくかくの如く現代の東京人は純粹な東京者が少くて、地方の人間が甚だ多いのである。從つて女性も亦地方の者が多數なる事は論を俟ない。一言を以てすれば、東京は各地方人の寄集りから成つてゐて、各地方女性の集合場を成してゐるのである。此方面から見れば東京女性の全體は驚ろくべき雜駁な分子の集成と云つてよい。

次に都會と云ふものは、各種の社會階級を包含してゐる、卽ち東京は各種の階級を保有して、且つ雜多な種類の人間を網羅してゐるのである。東京婦人は從つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て社會の階級から言つても頗る多樣であるわけだ。要するに東京なる都會の女性は各地方人の集合で、同時に社會上の各階級や、各方面のものを含んでゐると、から考へる事が出來る。

此大なる集團の個物とも云ふべき各種の女性が相互に影響し合つて居る事は勿論だが、都會生活といふ上から論ずる時には是等女性の個々の相關的影響は左程重大なる問題では無くて、寧ろ吾人當面の題目より緣遠くあると思ふ然し、是等の方面から云つても都會に生活する女性が動搖せしめられ易い事情の下にある事を認めねばならぬのである。概して都會は頗ぶる動搖性をもつてゐるものだ。是は以上云つたやうに、利害關係を異にした者の集合だとか、階級其他の異つたもの丶集團であるからだが、畢竟、すべての點に於て烏合の衆と云つたやうな調子を帶びてゐるからである。

さて東京はかゝる事情の爲めに絶えず動搖してゐるのだが、此動搖の間から女性の新生活が初まらうし、女性問題の重用な題材も現れるのである。即ち新時代の女性は此動搖の中に育成せられつゝあるのである。然らばこゝで育成せられつゝある女性は今や果して如何なる狀態を呈してゐるか。

都會の人間は墮落といふが如き事には然程鋭敏な感を有てゐないかのやうである。從來一般に都會婦人は人間の暗黑な方面に對しては、彼等の見聞の豐富なる爲めに墮落などいふ考には其知覺が極めて遲鈍であつたと云得られるのである。然るに新しい婦人は墮落と言ふが如き問題に就ては比較的によく承知をしてゐる。唯注意すべき事は彼等の多くが墮落に對して何等か理由を發見しやうと苦悶してゐる事是である。從來の墮落は不知不識の間になされてゐたが、新時代の婦人はさすがに自己の行

動に對して何等かの好辭柄を發見しやうと努めてゐるのだ。是にまた注意を要する事がある。それは都會と云ふものが、一面から云へば地方に於る失敗者の隱遁所となつてゐる事だ。同時に俄分限者の跋扈を許容する所である事だ。是等が東京の空氣を甚だしく攪亂してゐる。此種の事實が婦人に對して直接間接の刺戟となつて彼等は外部から强烈な煽動を受けてゐるのである。畢竟地方の失敗者や俄分限者が東京の暗黑な半面に對して重き關係を保持してゐる事はやがてまた東京の現代女性を作る上に面白き一個の原動力となつてゐる事を想はしめるのである。

元來現代の東京は地方人が其重要部分を占てゐるのだが、また彼等東京居住者の中には無學な主人公を中心とした家庭の一員たる者が少くない事を知つて置かねばならぬ。而してそれが中流の生活を營んでゐる事を忘れてはならぬ。是に於て新たに作り上られるべき女性が頗ぶる危險な位置に立つてゐる事を想はずには居られないのである。彼等は驚くべき我儘に養成せられてゐた。彼等は極端まで虛飾を喜んで、家長も亦之を得意としてゐる而して之を以て彼等の社會的地位の高まり行く事だとまで考へてゐる。虛榮心は遂に思はぬ方向へ進んで行つて　病的な理想とやらん云ふ六箇敷ものを作り、而も之が極めて卑近で淺薄で眞面目の沙汰とも考へられないやうな、病的といふのが最もよく當てゐるやうなものであるのだ。かくの如くして此種の新なる女性は甚だ同情すべき苦悶をなすに至るのである。

家庭と云ふ事に就て一言したから、敎育といふ事を少しく見なければならぬ。之は廣く女性問題と云ふ事になるのだが、新なる女性の養成所は學校敎育である事は云ふまでもない。此學校敎育と云ふものが女性の美なる部分を破壞してゐはすまいか。否、學校敎育そのものが女性の美なる部分を破壞するのではなくて、現代敎育の不完全と云ふやうなものが破壞してゐるのではないかと考へ得られるのである。而して殊に都會の學校敎育が都會の新なる女性の弊所を作りつゝある

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事は何も否み難い事實のやうである。

次に學校と連關する問題であるが、まづ以上の中で種々の警戒すべき都會的の現象をばこゝに都會的刺戟と云ふ名に依て總括すれば此都會的刺戟に最もよく反應を起すものは卽ち地方から新たに出て來た所の若き女性――彼等の多くは女學生――だと云つてよい。彼等は先づ東京を目して自由な天地だと考へ始める。彼等の故鄕は煩はしい幾百の眼が彼等を日夜監視してゐたが、都會では彼等を顧る事をすらしない。つまり彼等はすべてから見離されてゐる事を知らずに自由だと考へてゐるのだ。自由だと考へた彼等はあくまで大膽な行動を取る。此種の若き女性は多く無學な主人公を有する家庭から現れたる新女性と同樣な進路を取つて進んで行くのが普通のやうである。これは學校に關係した部分の若い女性であるのだが、單に修業に來た女性に就て云へば、彼等は多く俄分限者の跋扈を羨望する事は勿論、更に一歩を進めてあらゆる都會的刺戟は極端に彼等を惡化せしめるのである。而して現代東京の暗黑なる部分に於て其原動力を形成してゐるものは實に此後者に屬する若き女性にある事は識者の最も注意すべき事ではなからうか。然しながら是等の若き女性は必ずしも充分な意味に於て吾人の所謂新なる女性

に相當するものでは無いのだから、こゝには單簡な、以上のやうな說明で滿足しておかうと思ふのである。

以上は都會生活の惹き起すべき及び現に惹き起しつゝある所の女性に對する感化とも云ふべきもので、而も其惡方面のみを擧げて來たのだが、然し是等の事實は直に田舍を賞讃してゐる事とはなり得ぬ事だけは少くとも附加へて置かねばならぬ。是に於て吾々は都會生活と女性に關して一步を進めて述ぶべき必要があると信ずるのである。即ち都會生活が女性に與ふべき好良なる影響ともいふべきもの是である。已に云つた通り、東京は種々の事情の爲めに動搖してゐるのだが、此動搖の間から充實した所の女性の新生活の萌芽が生ずるのである。故に若し他日實際に於て健全にして意義深かき新生活が成立するならば必ず此動搖の間に深き根ざしをなしつゝあつたのだと考へてよい。而してまた之を文學などの點から云つても女流作家の才能が遺憾なく發揮せられる如きは都會そのものゝ絕えざる動搖と之に依て起さるゝ刺戟が大に與かるべき事を忘れてはならぬ。東京は見るべき景色はない然し樂しむべき空氣がある。東京の空氣は動搖してゐる。それと同じやうに女性もまた動搖してゐるのだ。彼等は穎敏な眼付や、頗る調子の高い好媚な言葉や、人の心を引付るやうな身振を有てゐる。要するに彼等の感情の表出はあらゆる部分に於て甚だ自由になされ得るのだ。東京婦人は外部の如何なる動搖、如何なる刺戟に對しても、常に之に適應するだけの素質を養つて來たのである。實際之を養はなかつたならば少くとも彼等は現在の狀態に到達し得なかつたであらう。恐くば自滅の運命に到着したであらう。實に東京現代の女性の適應的素質は到底田舍に於ては認め難い點である。

東京の女性は概して云へば自己が都會婦人たる事を知つてゐるが故に、即ち都會と云ふものを尊重してゐるが故に、彼等は自らその東京婦人たる事を誇負してゐる。此種の誇負の念は東京の女性をして如何なる傾向を保しめてゐるかと云ふに、彼等は一種の張を持つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てゐるかの傾向を示してゐる樣だ。自己の住地を尊重する事は啻に都會婦人に限つた事ではなくて、如何なる人――男女の如何に拘らず――でも自己の居住地を尊重するに至るべきだが、東京婦人は東京そのもの丶價値を過大視してゐる。此事實は頗る大切な事で、彼等は是に依て輕き誇を彼等の胸深く包藏するに至つて自からすべての外部的表出に於ても多少の張とでも云ふべきものを示してゐる。

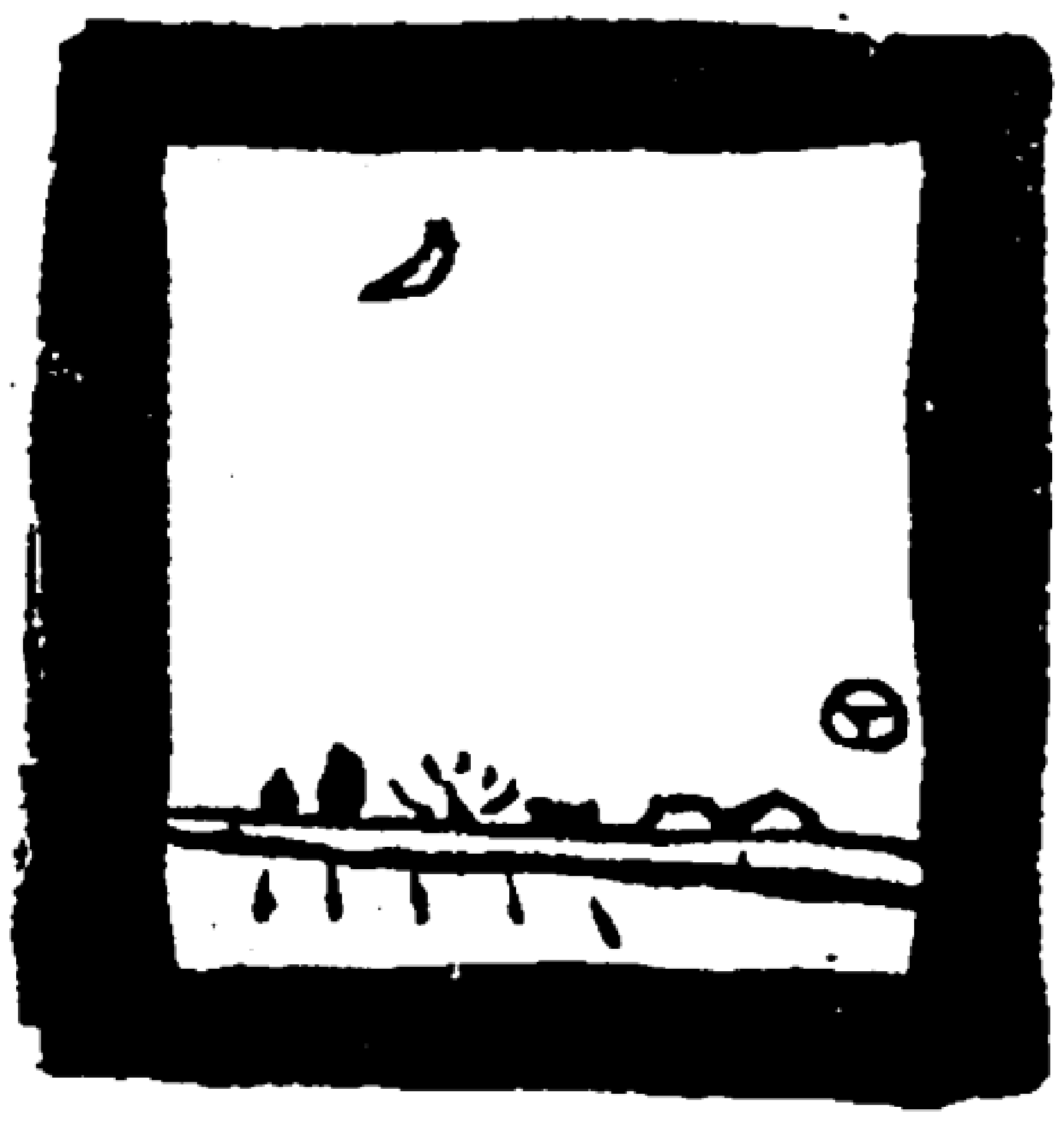
　畢竟彼等の心は此種の誇を以て多少の度に於て緊張してゐると云ひ得るであらう。惡く之を云へば高慢ちきとなるのだが、然し東京婦人はしかく高慢ちきとは認め得られないのである。此輕き誇は彼等が地方へ出た時に於て甚だ多樣なる形式に於て表れるのである。さりながら吾人は此種の誇を以て彼等の爲めに寧ろ取るべしと爲すものである。されどまた吾人は少しく此誇に就て考へて置ねばならぬ事がある。それは此誇が時として甚だ迷惑に思はしめらるゝ場合の存在する事是である。そは云ふまでもなく地方から來集した女性が往々その地方へ歸つた時に東京風といふものを吹かして地方人を少からず苦しめる事であるが、これは吾人の好良なる意味を以てする誇と云ふものではなく、風といふのだから頗る凄じいので、是には隨分地方の人も困らせられるのだ。此『風』といふものが一般に地方人をして東京を甚だしく誤解せしめてゐるのみならず、東京に對して反感を養はしめてゐる事の多大なるは實に注意すべき事だらうと信ずる。

　次に東京婦人は趣味の都會的動搖を見免がさないと云ふ事だ。是は絕ず一種の流行と云ふべきものを作つて行くのに深い關係があるのだが、是は彼等をして概して進取的ならしめてゐる。而して流行そのものを趁うて行く事の可否は別問題として、それが東京の空氣をして絕ず新たならしめてゐる事は認めざるを得ない東京の空氣が此清新な調子を保つてゐる事は東京をして太く特色あるものたらしめてゐるのは爭ふべからざる事實である。然しながら趣味の都會的動搖と云ふ事は必しもよい事と許りは考へ得られないのであつて、

動もすればそれが低劣な方向を取る事を忘れてはならぬ。趣味の墮落を來たす事を忘れてはならないのだ。地方は此種　動搖が少ないから、此方面から云へば趣味の急激な墮落は少いと云つてよい。然し清新な調子を缺如してゐる事もまた如何ともすべからざる事實であらう。

　要するに都會としての東京の女性は種々の點から見てドラマチックの特性を有てゐる。彼等は絶えず感情の表出を巧妙な身振を以てやつてゐるし、而してまた言語的抑揚などに於ても之をなす事を忘れて居らぬ。彼等の外部的の表はれに於てのみ彼等はドラマチックなるに止まらない。實に彼等は其内心に於ても彼等の周圍を能くドラマタイズするの傾向を保つてゐるのである。彼等は戯曲の夢の中に自分達を發見するに相異ない。彼等はドラマの幕の中に笑つたり、泣いたり、怒つたり、嘆げいたり、而して跳ねたり、躍つたりしてゐる役者だ。彼等は芝居氣を持つてゐる。それ故に自ら彼等の周圍を劇化せねば止まぬの慨があるのだ。之を地方の者が眞似やうとすると必ず失敗して茶番となるのである。

　實に強烈な黄塵の波立の中には此頗るチヤーミングな役者がそれ〲其受持を演じてゐる事を忘れてはならぬであらう。



西の郊外より

水野千枝子

二十日

　朝、戸を繰りながら、今日は如何だらうと思つて見ると、空はよく晴れて、もう日が一ぱい射して居たけれど、いつも一ツの樂しみにして見る富士が今日も亦見えない。丁度薄く白い雲が懸かつてる樣で、あゝ今日も見えないのかと、がつかりしてしまつた。いつも垣根の外の高い櫟の左の處から、遙かに青い空にく

つきりと見える富士を見ると、實にいゝ氣持ちで、其日は一日元氣がいゝ樣に感じられる。其れが此の二三日はちつとも見えないのでどんなに殘念だらう。

いろ〳〵と朝の用事やら、子供の騷がしさやらで、まご〳〵して居ると、何時の間にか裏に出て行つて、遊んで居た子供が花が咲いた〳〵とて、しきりに自分を呼び立てる。行つて見ると、さふらんが一本の根に五つも花が咲いて居た。其の黃色に輝くやうな色で、まだ冬枯れの名殘の荒れはてた廣い庭の中に、こんな可愛らしい花が咲いて、なんだか、いぢらしい樣にも思はれた。けれど、どんなに嬉しかつたでせう。同じ花壇にある。チユリツプや、ヒヤシンスは漸く莟が見えるか、見えないばかりなのに、此の花はもう咲た。此の一番に咲いてくれた花を、此の間の椿の莟の樣に取られては大變だと思つて、一生懸命で子供に取つてはいけないと、云ひ聞かせた。ほんとに、此間なぞは私が居間で裁縫をして居ると。庭で何か、がさ〳〵云はしに居る故、障子を開けて見ると、弘が兩手に一つぱい椿の莟を盛つて、豆々と云つてるので、びつくりしたことがあつた。そして其れを如何するかと思つたら裏の花壇の中へ播いてあつたので、あとで大笑ひしたのでした。

裏へ出た序に少し掃除でもしやうと思つて見ると、寒い風が吹き卷くつてる中で、よく枯れ枝や何かを、積みあげて燒火をした、其時の燃えさしが、ごろ〳〵殘つて居た。さう〳〵其時お芋をくべたら、子供が不思議さうな顏をして見て居たが、是れを燒いてあげるのよと云つたら、大喜びで方々から枯れ枝を持つて來ては火の中にくべて、早く燒けろ〳〵と、大騷ぎしたこともあつたが、その時のことなぞ思ふと、僅かの間に、なんて暖かくなつてしまつたことでせう。早く外の花も咲けばいゝと思ひながら、そこらを掃いた。今日はほんとに、嬉しい心持のいゝ日になつた。

二十二日

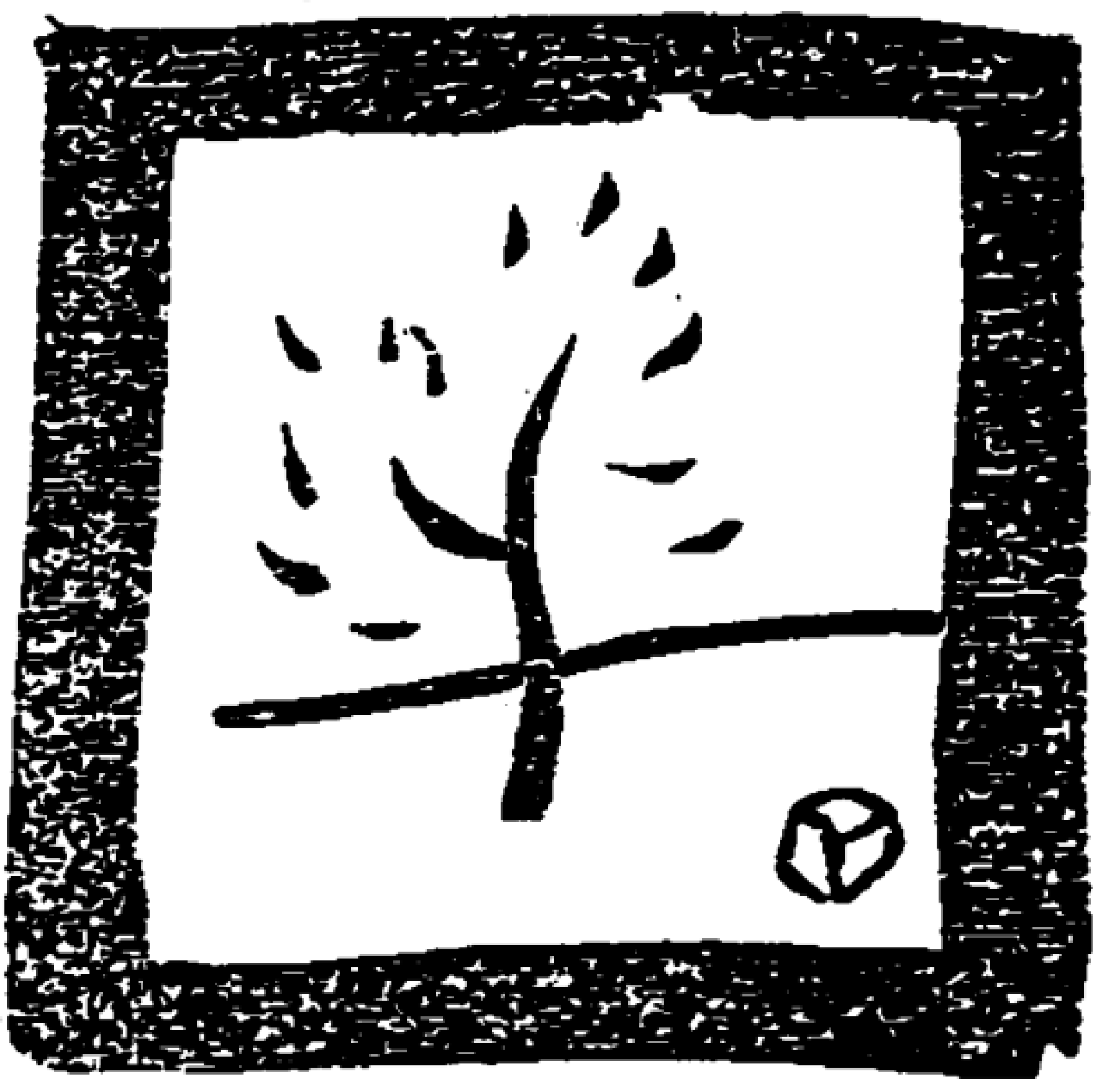
今日はお彼岸故、おはぎをつくつた。下女が居ないから、よさうと思つてると、丁度昨夕、岩野さんから

頼んである下女が來るまでも、お使になつたらとて、岩野さん處の婆やの孫とかを連れて來て下つたので、大變に助かつた。昨夕から御吹聽して置いたので一番先きに岩野さんへあげた。これでおはぎをこしらへるのは丁度三度目、家を持つて始めてのお彼岸の時は、一ッぱし出來るつもりで作つた處、小豆を漉さずに直ぐ袋の中に入れて絞つたので皮もなにも、一處になつてしまつて、又やり直したり、御飯が柔かで圓められなかつたりして、匙ですくつて食べなくつてはとて、大ひやかされして、ずゐ分恥しかつたことがあつた。兩親の側に居たころ、よく手傳つて、なんでもないと思つてたことを、今自分でして見ると、ずゐ分と相應にむづかしいことばかり多いのであつた。そんな困る時には何時も多く母を思はれてならない。ずゐ分身勝手ですまぬことである。

夕方其の下女が、『私にはとても、やりきれませんから歸ります』と、云つて歸つてしまつた。私は何んだか腹も立つし、又心細いやうな、うら悲しい樣な妙な氣持がされた。たつた一晩居たうちに、そんなに自分は下女がいやな程の事をしたかと、思つて考へられてならないのでした。

晩になつてから、岩野樣と淸子さんとがお出でになつた。そして下女が、家が麥の雑つてる御飯なのと、小供が有るからいやだといつて、あれから直ぐ本所の叔父の處へ歸つて行つたとお言ひだつた。まさか下女の爲めに麥飯をよし、子供を居なくする事も出來まいとて大笑ひした。

今夜は岩野樣のお話が面白いので涙が出て、胸が苦しいほど笑つてしまつた、こんなに笑つたのは今年になつて始めてゞあつた。もう一つをかしかつたことは、岩野樣が今日。朝から、まだおはぎは來ないか〱と言はれるので、淸子さんが、お子さんがおありなの故そんなに、お早くはお出來になりませんと、お云ひになつてると、お晝過ぎになつても來ないので『一ッ食ひに行かうかな』と云はれてる處へ持つて行つたとかで、ずゐ分戯言をお云になるとて大笑ひしたのでした。



南の郊外より

荒川澄子

四月五日、晴

甥を連れて國の義兄が出京してから、今日で丁度二週間になる。案じて居た中學の入學試驗も無事に受られたので、今朝はいよ〳〵ひよわな一人息子を手放して歸國された。立つ前の事だ。繩をかけた行李や、膨らがつた信玄袋を手近な處に置いて、汽車の時間に心急いでゐる人達の前に香ばしいお出花が出された。甥は、幾年か思ひ入つて居た東京の中學に這入れた嬉しさに、黒い顏に際立つて白い揃つた可愛ゆい齒並を見せて、よくにこにこと笑つて居る。父親は默つてそれを眺めてゐたが、何時か涙ぐんで『よく勉强しろよ身體を大切にしてな、』染々から云つた。が、甥は無造作ににつくりしたまゝ何か外の事を面白さうに話し出した。『御心配なさらなくつても大丈夫ですよ。私共が確にお預り申しましたから。』私は思はずから義兄に向つて云つた。

立つ人は立つてすつかり落付いた。私は亂雜になつた部屋々々を整理した序でに甥の部屋をきめて机の位置等を見てやつた。ほゞ片付いた處で其處に坐らせて置いて、心得になるやうなことをと、——學校のこと、お友達のこと、身體を大切にしなければならないこと——『お父樣もお母樣も、もしやわづらつてでもゐやしないか、達者でゐればいゝがと明け暮れ心配してゐらつしやるんだから』としんみりと話して來ると、甥はうつむいて幾度か手の平で顏を横なでにした。私は自分の胸も迫るのを覺えて急に話を轉じた。

晝過ぎになつて、雨勝ち曇勝ちな此頃には珍らしくよく晴れた。低い波の音を聞き乍ら久しぶりで琴に柱を張つて、忘れ殘したものを一つ二つさらつて見た。其處へ青山の敏さんが來た。丁度一年ばかり見なかつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た内に見違ひるやうな大人になつて、短かい上着の攻玉舍の制服が如何にもよく似合つた。何時も乍らいゝ血色で、少しも影のない晴れやかな顔をして、無邪氣に快活に話をした。『それは何？』と襟についた三ッ合せた錨の徽章を聞くと、下目をし乍ら『この金モールの方は優等賞、銀の方は精勤賞、── こんなものを附けて歩くんです。僕、みつともないや。』といふ。それから暫く海の方を眺めてゐたが、やがて『いゝ處ですね海邊で。氣がせい〱します。』『あなたは海軍でしたね。』『えゝ、海が家です。』につこりして少し反つて人なつこい目を輝かす。話して居ると自分迄鮮かな血が湧いて、城のやうに浮んだ軍艦の甲板の上に、すらりと立つた若い士官の姿が目に見えるやうな氣がする。

けふはお歸りが遲い。七時頃木村雷音といふ人が來たので、離れへ通してお待せする。一時間ばかりたつとお歸りになつた。『趣味』と『中央公論』を半分程讀んだ。

東京新十二景

數寄屋橋外	銀座の四つ角から日比谷公園まで一直線の道がついた、すきや橋外の廣々したのが快い
有樂座	日本一のオペラ式の劇場
馬場先門外	高い窓、廣い道、明るい瓦斯、煉瓦建の市街は此處だけ西洋らしい
三越	所謂デパートメントストアなり
烏森	屋上の停留場
お茶の水	地下の停車場
ロセッタホテル	海上に漂ふ夢
國技館	壯麗なる鐵骨殿
新東宮御所前	大博覽會の開かれるまでには、此前に大道路が通じて、西洋の宮殿のやうになるであらう
植物園	南洋の花咲く國
荒川堤	櫻草あり、薄墨櫻あり、鬱金櫻あり
妙華園	花と、女と、花は西洋花、女は都會式

日比谷太神宮結婚式の記事

遊蝶花

神前の結婚式

結婚は人生の大事である、從つて其儀式も嚴肅にすることは、古來より定まつてある通り、久しい間の慣習になつてゐる。

元來神前に於て結婚の式を擧げると云ふことは、必ずしも日比谷太神宮を以て嚆矢としない、去る明治三十三年四月に皇室婚嫁令が發表されて、大婚及び結婚の章の第七條と第十六條に

大婚、結婚の禮は別に定めたる式により、賢所大前に於て之を行ふ

とある、其五月に東宮殿下の御婚禮が神前で行はれてから、神前結婚式が盛んに行れるやうになつた、其時に最も早く先鞭を着けたのは日比谷太神宮であつた、太神宮は日比谷に限つたわけではない、麻布の笄町にもある、又何處の神社でも依賴すれば、結婚の式は行うてくれる、氏神で行うのなどは最も普通であらう。

序だから書くが昔から緣結びの神は出雲の大社としてあるが、神の本旨から見ればそんな筈は全然ない、

俗説に相違ないが又その俗説が少し違つてゐる。實は出雲大社の末社に玉姫神社と云ふ微々たる小社がある之が縁結びの神であつたさうだが玉姫神社より出雲大社の方が、勢力があるので、遂に永い間に誤解されて、縁結びの神は出雲大社とされてしまつたと其國の人は語つて居た、處が東京では日比谷太神宮が株をとつた様な形になつて居る。

結婚式の規定

日比谷太神宮の位置は、麴町區有樂町三丁目で、日比谷公園の東南、帝國ホテルの通りと、數寄屋橋の通りの間を占めて鳥居は兩方にある。しかし表入口は帝國ホテルと向ひ合て東京鐵道會社の本社の少し先きに在る、木造の大華表を入つて、半町程進むと、東面した中ぶるの拜殿がある、間口十五六間、奥行十間もあらう。屋根の千木は空に沖して居るから直ぐに知る。

神殿に向つて左に供待所があつて、右には廣大な御殿風造りの建築物がある、之が結婚式に列する人々の待合はす處で、和洋十數室ある。

式の等級を特等の一、二、松、竹、梅、の五等に大別して又その内を種々に細分してある、それは祭官の人數の多少やら、神饌の量やら、式の次第やらで定めたもので、尤も關係のあるのは祭官の人員の多少である、人員は最も質素にしても齋主一人、諸役二人、女子二人は必要である、然しこの五人では儀式の骨ばかりで、何等の餘裕もなく且崇高には行はれまいと思ふ。で一人で一つの役をすることになれば齋主、副齋主、陪膳、手長、後取、樂師、大麻司、典儀、賛者となる、其うちでも後取と樂師は五人位づゝが普通であるから合せて二十餘人になる。然しこの内で式の表面に現はれぬもの（典儀、賛者、など）を除くと十數人になる、之に介添の夫婦。其他を合せてやはり二十人内外の人數になるが、之は特等の人員で、標準とするのには中等の處がいゝと思ふ。で、序に報酬の事も言はう、報酬は梅の十二圓から特等の一の七十圓迄その中を五圓もしくは拾圓の差で區分されてある。樂即ち太皷、横笛、簫、篳篥等は特等に用ゐられる。然し之も五十圓と六十圓と七十圓では譬ひば簫二人を一人とし篳篥の三人を二人とする様に加減する事が出來る。

式の次第

太神宮神前で結婚式を擧行したいと思つたら媒方か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら適當な日を定めて某日何時に何等（例へば松とか特の一とか）で式をしたい參列人は凡そ何人と云ふ事を數日前に申込むと事務所で申込者以前に同日同時の申込が無い時は許諾の返事がある。例へば三日に式をしたいのを一日や二日前ぐらゐに申込んでは仲々思ふ時間には出來ない。太神宮の原簿に記入されたのを見ると每時間續いてある事は珍らしく無いから、少くも四五日以前に申込まねばならない。

　で其當日になると、例へば午後の三時に式が始まるとすれば、聟方は凡そ式の一時間前に乘り込む。嫁方は凡そ三十分前に華々しく車を列ねて正面の華表をくぐる。そして右側の御殿風の大玄關を登ると、羽織袴の三太夫然たる男と狩衣の神官が西洋室へ案內して人數を目算してから、木綿筒袖の紋附に袴を穿いた十四五の給仕が長い廊下を導いて適當な待合室に入れる、聟方が階上の室なら、嫁方は下座敷と云ふ樣に區別する、室は十疊二十疊各々清潔に、高尙に、裝飾して額でも軸でも目出度い物盡し、隣室の金屛風の陰には大きい姿見に櫛、手拭、水等一切を添てあるから、花嫁を初めとして參列者の便利になる、時間の來るのを待つて居ると、松竹梅の菓子は高杯に盛つて出される、湯（迷信でもないが茶は一切出さないで櫻か何かの鹽漬の樣なものを浮かした湯）も運ばれる。言ふ迄も無く花嫁初め參列者一同神前では沈默を守る事に定められてあるから、此室に於ける處女としての最後の話聲が、如何にしめやかに洩るゝであらう。

　時間が來ると式場へ案內される、多くの場合、太神宮の結婚式には慣れぬ仲人が多いから、便宜上依賴すれば祭官の一夫婦が介添になつてくれる、（夫は聟方に附き、妻は嫁方に附く、その介添の女は必ず二重の紋付で帶を太皷に結び、髮は束髮だから宜いけれども、介添の男は金色の略服を着けて、扇子を持つて居るので、能狂言の太郞冠者を聯想して可笑しく感じられる）

　嫁の方では介添次に花嫁、次に兩親、伯叔兄姉弟妹の順になつて列なる、此の一列が、幕を引廻した廻廊を靜に進む時から既に精神が引締つてくる、廻廊を過ぎ渡殿を越え拜殿の入口に來ると又大鏡があつて、その前に若い祭人が黑塗の大盥を前にして手に黑塗長柄の柄杓を持つて居る、花嫁は此處で手を淨めて拜殿の右（神殿に向つて左）の薄暗い別室に入れられる。但し仲人の妻君と介添の妻君と三人だけ。他の一族は拜殿の末に列なつて着座すると、又次に聟方のものが來

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る、聟はやはり仲人と介添の三人で左の別室に入る。暫時にして諸役の一人（祓主）が清め祓の祝詞を讀み上げる一同讀み終る迄俯拜して居なければならない。祓の祝詞は殆んど一定した文句で意味は『此處に集ひあつまれる吾々凡ての人々の過ち犯した種々の罪を祝詞を申して罪と云ふ罪は無い樣に清く悉く祓はれる』と云ふので、之が終ると大麻（神前に供へてある榊に紅白の絹を附けたもの）をとつて齋主を始め諸人もとより器物の前に迄行つて三度許り振る、と之で祓式が終る。すると介添が兩方で同時に別室の大唐紙をサッと開くと美しい正裝した花嫁花聟が兩方の室から出て左右に向ひ合うて坐る。

本式

愈よ祭式が始まる（樂あり）即ち齋主が三拜してから獻饌と云つて、祭官が三四人で順次に取次で御酒を始め、山のもの、海のもの、手づくりのもの、野の物河の物など種々のものを三寶に載せて神前に供へる、凡て供へ終ると（樂あり）齋主が祝詞を申す、是が祭りの大主眼で讀上げて居る間は一同やはり平伏して居る。齋主は純白の綾絹の祭服を着て、悠然たる態度でしかも崇嚴な調子で祭文を讀む、文章の意味は「明治四十三年五月十五日の吉日を選んで何の某（爵位、等級、官等あれば入れる）と何の何子は太神の御前に今日のよき日に結婚の大禮を行ふと云ふ事から、男子は出ては忠君愛國の人たり、入ては溫厚なる主人公たるべく、女子は夫につかへ、姑に對して貞操淑德を守るべく、斯くて萬事によく心懸なば、一家はいや久しく榮えて、延ては國家の爲にもなる」と云ふ訓戒やら奬勵やらの長い祝詞である。次に仲人が中央に出て「この吉日を選み結婚を媒介して神前で式をする、共に仲良くして貰ひたい」と云ふやうな意味の祝詞を述べるのであるが、多くの人には一寸出來ぬから齋主に代つて讀んでもらう（樂あり）此式が濟むと次は夫婦盃の式である。

一座は水を打つた樣に靜である。齋主は元の座に歸ると、今迄次席に控へて居た雌蝶雄蝶の活動になる、二人の女は年の頃十五六歲と十七歲位で髮は束髮を後へ垂らし、奉書で捲いて水引で結ぶ。薄化粧をした美しい少女である、服裝は紅絹裏の白紋羽二重の小袖、緋紋緞子の袴を裾長に穿いて金絲の大綬章の樣なのを右の肩からかけて、三寶を持つてしづ〳〵と出て來る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

始めての人は大内裏雛の官女を聯想するさうだ。この二人が先づ花嫁の方に三寶を置く（式は凡て女の方からする）その一擧一動をゆるがせに爲ないから時間がかゝるけれど、春の野に女蝶夫蝶が舞うて居る樣で甚だ綺麗である。三寶は二つか三つ並べる、上には勝栗、鰒、昆布などを二片位ゐづゝ、紅紙と白紙の重ねた上に載せてある、三寶を花嫁花聟の前へ出してから雌蝶（と稱する女）は銀の長柄をもち、雄蝶は銀の慈姑銚子を持つて、神前に供へた御瓶から齋主に御酒を注いでから花嫁の方へ先きに注ぐ、皆二度注ぐ眞似をして三度目に少しづゝつぐ、花嫁は恥しさうに飲むと（飲めぬ人は二度めから飲むまねをする）次は花聟、又嫁、聟、と相互に三獻を三度で九度、所謂三々九度が濟むと、花嫁は聟方の人になるのであるから、種々の感じが胸に滿るであらうと想ふけれど、之は客觀しての事、花嫁は只式を間違へない樣にと氣を張つて居るから、最後の洗禮も夢中であると云ふが尤千萬な事である。

式の終結

偖て花嫁が聟方の人となつて、聟とならんで坐と、次が親類の盃の式である、之は聟方は左（神に向つて右）に嫁方は右側に差し向つて、一列に長幼の順序に着坐すると、雌雄の雙蝶は順次に勝栗、昆布、鰒や、土器の三寶を運んでから御酒をつぐ、で、悉くつぎ終つた頃一齊に一禮して飲む飲み終ると仲人が中央の末坐で「式は終ましたからお開きに致します」と告げる、之で式は全く終つたので

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

皆一度に立つて、別室に休息するうち湯が出る、車の用意が出來る、來た時の玄關で無い方の玄關から出る車をつらねて向の帝國ホテルなり何處へなり出かける是より先き、知人友人に招待狀を出して置いて、その時間に一定してある料理屋に集り共に酒宴を開く、すると衣服を改めて聟と嫁は挨拶に出る、酒やゝ酣になつた頃、夫婦は客の知らぬ間に席を外す、頓て身輕に裝ふた男女が新橋か上野の停車場に現はれる。行く先は函根か、鹽原か、稱して新婚旅行と云ふ。是より後は結婚式と直接の關係が無いから略く。

終りに當つてなほ一言を要するは凡そ結婚式は何日が吉日であると極れば、たとひ其日が風雨であつても式を延ばす事は出來ない。又人に由て黃道吉日はあるのであるから、三百六十五日殆ど結婚式の無い日はない、殊に春陽に當つては朝の八時頃から夜の八時頃迄に十組位の式が行はれる事も珍らしくない、その一組にも二十人以上の親類緣者が加はるから、何時、太神宮へ行つても車の二三十臺見えぬことは無い、讀者試に太神宮へ參拜した序にで覽なさい、拜殿の正面には御簾が垂れて、外には車が居る時は、御簾をすかして見ると多くの人がほの見える、管絃の響や祝詞の聲が拜殿を洩れてくる、暫くたつと美しい花嫁を先に羽織袴や黑紋附の男女がぞろ〳〵出てくる、大祭日或は日曜日には殊に、その數が多い樣に思はれる。

附記す、日比谷の太神宮には神宮奉齋會と云ふものがあつて、種々の神事を行ふ、結婚式もその奉齋會の事業の一部分である、會長は藤岡好古氏であつたと思ふ、本部は伊勢の山田にあつて、日比谷のは出張所である。

對話

上野より

うす雪

島田、隨分日が延てねえ、

銀杏返、朝大抵何時？

島田、此節隨分早いのよ、

銀杏返、早いたつて八時頃でしやう、お化粧でもしてゝゝ、まで〳〵してゐると直お晝になるんぢやないの、

島田、まさかさうでもないけれど、何だかでた〴〵して一日暮れて了ふの。それでゐて夜になると、何にもしないのに馬鹿にくたびれるの、

銀杏返、私も！。どういふもんでしやう、

庇髮、漸々實社會の人達にかぶれて來るのよ。私なんかそこへいつちやいゝわ、毎日日課を定めて修養もすれば運動もするわ、是から一週間に一遍位づゝ散步會といふ様な事をしましやうか、もつと仲間をこしらへて、

島田、結構ねえ、

銀杏返、私や駄目だ、日なんぞ極めて出る事は出來ない、

庇髮、どうして、

銀杏返、どうしてッて――、家の都合があるから、

庇髮、厄介なのねえ、

銀杏返、失禮ねえ、同情するものよ、

銀杏返、あなたどうしてそんなにお髮が多いの、

庇髮、のんきだからよ、

島田、あら是でも隨分苦勞はあるわ、

庇髮、あなたの様な苦勞なら却て肉體の肥しになるわ、どうか？、盛に菊五郎でも引ぱつて歩いちや、

島田、いゝわ、だつて家があゝいふ商賣だもんで、どうしても藝人なんかゞ親しく出入りする様になるのよ、實に虛榮に滿ちた生活ねえ、

銀杏返、そんな長上の事を批評なんかすると島田が逃げて行く事よ、

庇髮、だけど島田つて實際いゝ頭ねえ、

銀杏返、だけど電車なんかに乘る時は目立ていけないわ、

庇髮、束髮も隨分目立つわ、

銀杏返、あなたのは餘り特色があるからよ、

島田、ちよいと、是から何處へ行くの、

庇髮、散步してるんぢやありませんか、

島田、今日から隨分淋しいのねえ、淺草へ行て活動寫眞でも見ないこと、

銀杏返、あ、pしましやうか三人で、

島田、いやあよ淺草なんかで、

庇髮、まあそんな事云はないで、ちつと此停車場を御覽なさいよ、

島田、あなたは故鄕がお有になるからいゝわ、

銀杏返、えらかないわ、私だつて故鄕はあるわ、

島田、生れた所はどこでも故郷だわね、

銀杏返、噓よ、復活の故郷よ、

庇髪、すてきねえ、あなたの復活の故郷はどんなところ？

銀杏返、海に近い暖い町で、さうねえ今頃なら海の見えるお寺の石段に、燃る樣な椿が咲てるわ、

庇髪、もう澤山、もう澤山、

島田、ちよいと「きどりや八丈　ねえ、お嫁にいつたのよ、

銀杏返、へえ、いつ？

島田、いつ嫁つたんだか知らないけれど、ネヴエーだつて、

銀杏返、へゝえ、不思議ねえ、

庇髪、何よ一體そりや、

銀杏返、三丁目の雜誌屋の娘、

庇髪、娘がお嫁にいつたつて不思議はないぢやありませんか、

島田、だつて、ねえ、ほゝゝゝゝ、

銀杏返「結婚する」とか「家庭を持つ」とかいふと悲哀だけれど「お嫁に行く」つて云ふと何だか大變綺麗で——若々しくつて、一寸羨しい樣な感じがするわ、

庇髪、羨しきや嫁つたらいゝでしやう、

銀杏返、いやあよ、

庇髪、獨身主義？

銀杏返、あなたぢやあるまいし。主義や理想で生きてる樣な幸福な人間ぢやない事よ、

庇髪、そんなに悲觀しなくても復活の故郷があるんぢやありませんか、

銀杏返、だけどそりやもう無意味よ、

庇髪、捨ちやつたの、

銀杏返、何を、

庇髪、ふゝ、

銀杏返　特別好た人か特別好かない人ならいゝけれども、有ふれた親切なhなんか嫌なこつた。

庇髪、あ、藝者が來る、

島田、いやな藝者ねえ、

庇髪、馬鹿に赤い帶を締めたものねえ、

銀杏返、藝者つていゝものねえ、私藝者になりたかつた、

島田、おゝいやだ、あんな賤しいもの、

銀杏返、藝者が賤しくてお孃樣が尊いぐらゐ、今更何はなくても昔から通り相場ぢやありませんか、處女の誇りだとかすべつたとか、そんなだます樣なおだてる樣な、いゝ加減な月並文句をいつ迄眞に受てるの、

庇髪、何をそんなにヤケになつてる、

銀杏返、ヤケでも何でもないけれど私始終さう思ふわ、いゝぢやありませんか藝者なんか唄をうたつたりお酒に醉つたり、あの、よくお稻荷樣なんかへ月詣するわねえ、ラヴの事なんかで、

庇髪、それがそんなにいゝの、

銀杏返、それがいゝつて譯ぢやないけれど美的ぢやありませんか、或點に於ちや我々の生活より確に進歩してゐると思ふわ、

庇髪、だけども彼等は自覺しちやゐないわ、

銀杏返、何て云つたらいゝかなあ——何となくしやれてるぢやありませんか、

庇髪、それぢややつぱり「いゝ着物を着て樂が出來るから」つてのと、いくらも違はないわ、

銀杏返、それならそれにしといてもいゝわ、私が云ふのは、女と生れたら女らしい生方をしたいと云ふのよ迷信でもいゝわ、ちつと位虛僞でもいゝわ。

島田、大變はでなお下駄ねえ、

銀杏返、是でも妹の借物ぢやないのよ、私何處か一ケ處トンチンカンな處がなくちや氣が濟まないのよ、五分も隙がないといつた樣な服裝をするの大きらひ、氣がつまるわ、

島田、私なんか何でも母次第だわ、

銀杏返、あなたのお母樣お綺麗ねえ、

島田、噓よ、もうばゝあですもの、

庇髪、いきな方ねえ、それこそ藝者見たやうねえ、

島田、いゝわ、母の實家旗本よ。

銀杏返、あなた椿姫讀みたかない事?、

庇髪、讀みたいわ、持つてらしつて?、

銀杏返、いゝえ、

庇髪、あらいやだ、

銀杏返、だけどねえ、借りられるのよ、

庇髪、どこで、

銀杏返、いゝとこで、讀だら貸して上ましやうね、

庇髪、有がたう、

婦人席にて

さわらび女

きさらぎ拾二日の空うらゝかに晴れて、そしてゝの梅のたよりに郊外へ杖曳く人も少なからぬ土曜日の午後、私は又塵深い都の中の眞中の衆議院に傍聽に行く事を思ひ立つた。

先年開議定刻の午後一時より前に行つて、中の扉のひらくのを待つ間、押潰される樣な苦しい思ひをしたのに懲りて、婦人席はさのみ早く滿員になるまいと、妹を連れて二時頃に行き着くと、門外まで溢れ出した人の波、押寄せ〳〵よすれど「滿員です、最早到底入れません」と下足の番する鳶の者風の男二三人が、替る代る斷りを云つてゐる、云はれた人は猶歸らうともせず「殘念々々」「今少し早く來るのだつた」「何とかなるいまか」など丶口々に獨語するのもあれば、知らぬ同士話し始めるのもあつて、よい便でも待つかの樣に、同じ處に佇立んで居る。ボーイが二人玻璃窓をあけて「場内は最早ギシ〳〵で聲も何も聞えやしませんよ傍聽人御見物の御つもりなら」と戯談を云ふと外の人々はぬからず「其傍聽人が是非見たい、君見せて呉れ給へ」と熱心に云ひかけられ、ボーイは困つた樣に少ししよげて窓の戸を下して引込む。下足番する男に「婦人席は？」と私が問ふと「婦人席も最早廿分計り前に滿員になりました、今あいてゐるのは外交官の席ばかりです」と答へる。さりとは口惜しや、はる〴〵と來たものをたゞ此儘に歸るのかと早く來なかつたのを悔んでも後のまつり、受附へ行つて夫に面會して何とか相談して見ようかとも思つたが、それも滿員とあるからは、都合すると云ふのもむづかしいかも知れぬ、つまらぬ事に議席を明けさせて其後で萬一何か取返しのつかぬ事でも起つたらと思ひ過せばそれもならず、私も又立往生の仲間入りする、下足番の男が「まあ今少し御待ちなすつて御らんなさい、空席が出來ないとも限りません」と私に云ふ「でも折角入つたものを卅分や一時間で出て來る方はないでせう」と云ふと「否それが中々さうでないんです、何にしろ大勢ですから

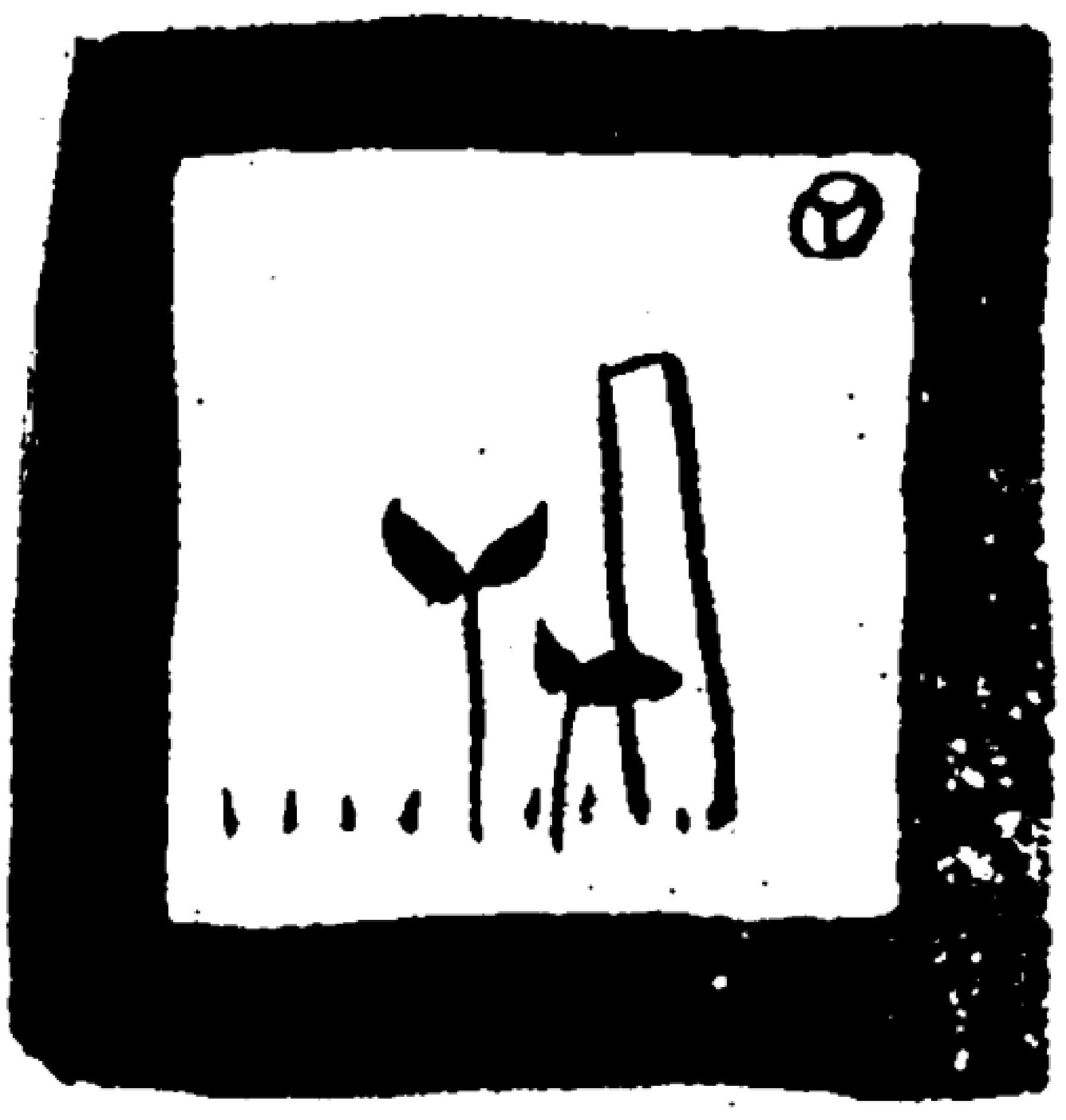
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見えも聞えもしやしません、詰らないから出て來る方も中々あります、それに議場見物など﹅云ふ連中が大分ありますから、何とも申されませんよ、皆立つてお出の方はそれをあてにしてゐるんです」と云ふ其うちに成程「到底聞けない、下駄を出して下さい」「ひどいてとまるで蒸殺されさうだ」「イヤハヤ問題にならない、明日新聞で見る方が餘程悧口だ」など﹅呟きながら歸つて行く人が六七人もあつた。

今少し待つて見ようか、思ひ切つて歸らうかと決しかねて居ると先の下足番の男が「さああなた外套を御脱なさい、御婦人丈は入れる相ですから早く〳〵」と急き立てられて、履きかへる草履も片々は指を通すひまもなく、曳ずりながら細目に内から開かれた扉の内へ入る。階段を昇つて廊を三つ程曲り正面の婦人席へ來て見ると成程ギシ〳〵に詰つて空席などは、とても見出す處ではない、仕方なし暫く横手に佇んで、院内を見渡す（と云つても片側丈しか見えない）と聞いたよりは又一倍恐ろしい程の傍聽人、大臣席には各相ズラリと居並んだ中にも、福助式桂首相と、ビリケン式寺内陸相と、三峰山の御札式小村外相とは、三副對の畫の様に目立つてみえた。如何程耳をすませても暫時はたゞ轟々して居て何事も聞とれぬ、席順表でみると夫の席は此婦人席の眞下あたり、前側に出てのぞいたら辛じて見える位の物であらう、貴婦人達が席をおくつて下されたので、私も妹も端の方へ腰かける事が出來た。少し落着く、今拍手の音と共に登壇したのは武富時敏氏である、次で尾崎行雄氏が登壇した、反對派から種々な混ぜ返しを矢の様に向ける、尾崎氏は夫を優しくはね返して靜に前の卓を打つて、自分の聲を隈隈まで行渡らせ様とする、其態度は何處までも君子らしく角がなくて山高帽子の様だと一寸妙な形容をして妹に笑はれた、妹は曾我で行けば尾崎氏は十郎式だと云ふ、假に夫を演壇に立たせたらそれこそは純粋の五郎式、聞いてゐる身にもさぞなど又しても水は我田に落ちてゆく、高木益太郎氏が誰も思つて居る事を心ゆくまで云つて退けたのは痛快であつた、此人が折々自宅で佛教の説教をして集まつた善男善女に随喜の涙をこぼさせるとは面白いと思つた。

漸く薄暗くなつて氣も滅入つて來た折柄、院内の電燈が一時にパッとついたので眼が開いたやうに思つた鳩山和夫氏の報告が、例の何となく不愉快に耳の底に響く氏の低音聲は四方から起る咳嗽の音に消されてハ

ツキりと聞とれぬ處が多かつた、夫が終ると桂首相が演壇にあらはれた。矢張うまいものだと思つた、大分長くなつたので覺え書に處々かきつけて置く勇氣もなくなつたので、後は唯聞くばかり何もかも省略の事、あとは最早間もあるまい、かよわい女の恐ろしい程の人波にまきこまれて、苦むうちに夫に先へ歸られるのも詰らぬと、妹を促がして門外に出た。表に廻つて夫の歸りを待つ積り、戸外は美くしい星月夜、冷い空氣がのぼせた頰に快くふれて、公園前の大路を馬車の過る音が遠くなるまで響く樣に聞えた。



東海道線

羅漢柏

嘗て關西に住み、今東京に暮らせる旅客が、見聞のまゝを書き留めたる覺え帳なり、今その比較を試む浪花の蘆は伊勢の濱荻とか云ふは事限りたれど、洛陽の壬生菜は東京にて小松菜と云ふとぞ、何れ大した事には非ず。尤も爰に所謂關西とは大阪を中心としたる周圍約二十里、即ち京阪神等の上方を指す。行くも歸るも東海道線を經ざるべからず、本篇題して「東海道線」と云ふ、聊か奇に過ぐるに似たり。

○東京は非常に氣候の惡るき處なるが如く評判されて案外然らず、東北の人冬を送りて自國に在るが如く畏まり、西南の人亦夏を過して炎暑を苦にする無し、而も關西に比較すれば夏の暑きよりも冬の寒き度に於いて強き事勿論なり。

○東京の暑さは唯イラ〳〵と照りつけるを極度とし寒さはドン底まで凍れとやうに迫り來るまでの事なり、イヤに蒸し暑く、變挺に底意地惡るく寒きやうの陰險な處は少なし。

○上方は氣候の好き處と思はれて案外陰險なる天候の

襲來多し、二月中旬より三月まで「奈良の水取り」なる行事あり、此頃最も曇り勝にして險惡なる天候續き、盛んに感冒の流行を見る。

○人は東京のカラッ風を恐いものゝ如くに言ふ、然れ共風出でゝ空氣の動搖ある時は幾分凌ぎ易き時なり、眞の寒さは密雲にして雨らず、太氣沈降してシン〳〵と劍氣を凝らすの日なり。カラッ風は神戸の如き決して東京に劣るなし、但斯かる冷たき空氣は京都を除いて關西にある事なし。

○故に東京の冬は晴天の日と曇天の日とに依て其冷暖非常の相違あり、晴日と雖も日沒後寒俄かに迫るを覺ゆ、關西より來りし者が先づ第一に覺知するは日光の恩惠なり。

○東京にては十二月より翌年正月松の内頃までは不思議に好晴を持すること多し、十一月中旬より十二月にかけて一ヶ月も雨なき事なども珍らしからず、小寒に入て空漸く曇る事多く、雪催ひ勝ちとなる。

○東京は猶ほ雪を愛する程度の地なり、街頭の雪を掃き捨つる事あるも未だ雪を恐るゝにはあらず、上方に至りては雪を珍重がる地なり。東京の雪は一月より降り二月三月にわたる、或は近年冬が長くなりし加減にもやあらん。

○いつまで斯んなに寒いのだらうなどゝ言ふうち、駿足に來るは東京の春なり、櫻ありて春あるが如く思はるゝは東京の春なり、春の櫻か櫻の春か殆んど櫻花に全盛を傾注して一朝飛散し盡くすや春も亦慌しく去る、故に東京には長閑なる春無くして、唯短く慌しき春あるのみ。

○東京の花見頃、芳烈なる醇酒の如き日光が、櫻雲の間を點綴する紫やオリーブの深張りに綺羅びやかに辷り輝やくを見れば早や夏なるかの看を呈するなり、氷店の旗、麥稈帽子なども極めて此間に調和して累とならず。

○東京の地味最も櫻に適す、而して其の櫻花に最も見るべき特徴は生々の勢力なり、一々の蕾の刻一刻と膨らみゆくが如き、力は認むべくして趣は寧ろ沒せらるゝに似たらん、即ち美しく咲いたと云ふよりも、すさまじく發いたと云ふこと最も形容に叶へるを見る、故に花見の底抜き騷ぎは東京の櫻花に最もよく調和したるものと云ふべし。

○東京には上方の如き菜種の美なし、楊柳の美なし、海棠の美、桃花の美、蓮翹の美皆東京人の解せざる所

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

櫻について躑躅あり、關西に於いては東京の如きヤケに紅い躑躅の趣を解するもの少なし。其他東京には貝細工のやうな椿、獰猛に毒々しい椿、なども特色あり。

○東京の春は雨勝ち曇り勝ちなり、或は午前の間晴るるとも午後に至りて空倦める如く、風砂塵を颺げて殺風景云ふべからず、之をおぼろの醉心地に紅燈を薄絹に包める如き夜櫻にあてがれ、都踊りの歌吹海裡に浮かるゝによき京畿の春宵に比しては同日の談に非ず。

○櫻雲梢を辭して葉櫻となるや、同時に双手を天に伸ばせる如き欅や銀杏或は楢の雜木に至るまで一切新緑の衣を着く、郊外新緑の美は武藏野の獨擅にして關西何れの處にも見るを得ず、この新緑は葉と云ふよりもむしろ緑の花と云はまく欲りするばかり新鮮にして强烈なる刺戟としかしながら沈靜なる落着きを與ふるなり。

○斯くて昨日までの枯木一齊に緑の花を着くるや、天地は既に夏の領分となる、招魂祭も近く八十八夜の頃となるや、金魚賣の聲苗賣の聲悉く初夏の胸にまで反響する新緑の叫びたるなり、東京は冬の退く事遲きも夏の來る事早き處なり。

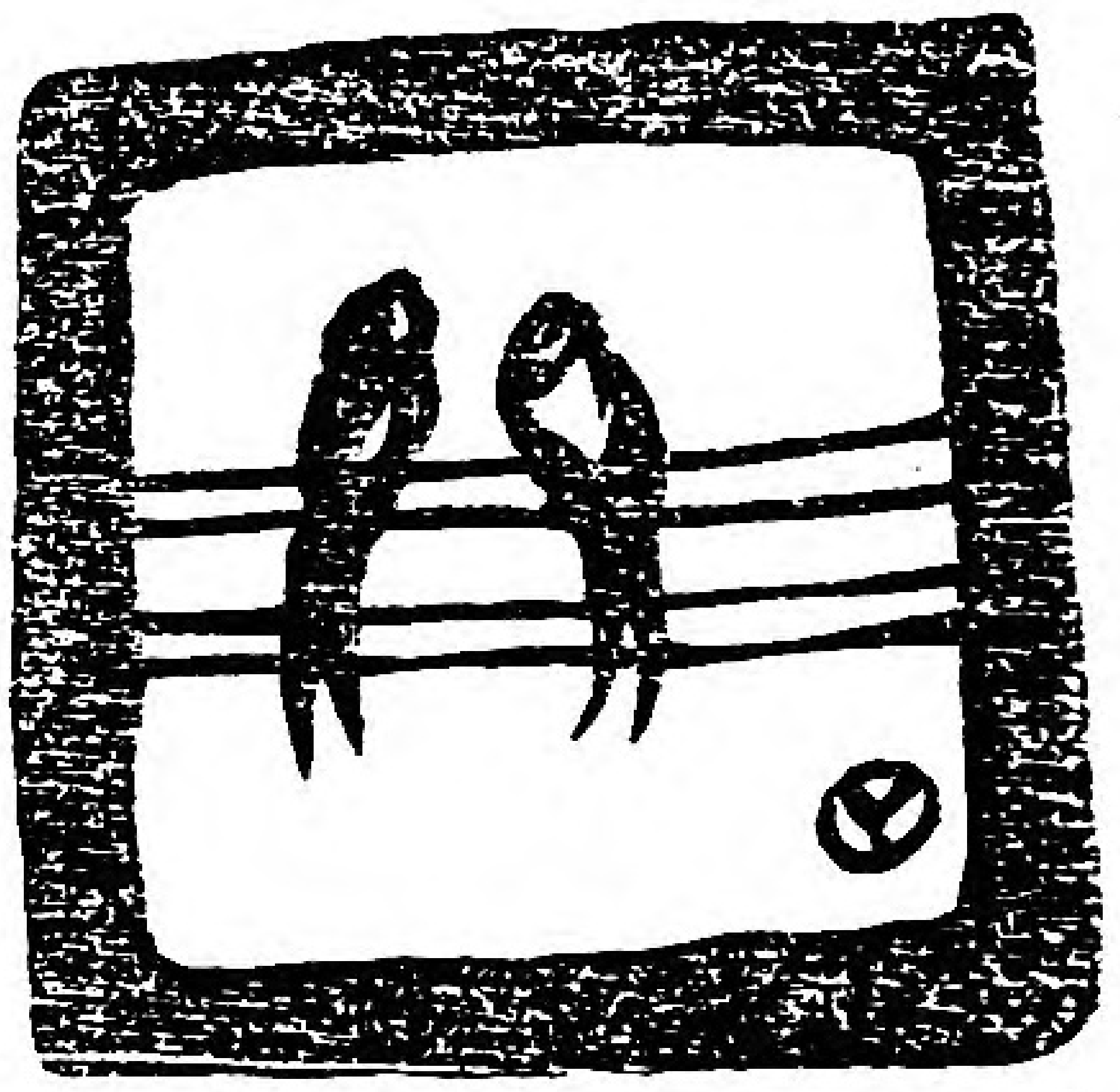
○予は嘗て或る人より東京を去て避暑するは避涼するが如しと聞きたるが洵に然り。冬は差別的なれ共夏は平等的なり、炎暑は北海道も臺灣も同じ、況んや東京と關西とに於てをや、予は神戸の朝極めて暑く夜は涼しき特長の外、炎暑に於いて異りなきを知る、少くとも東京は家屋の故障なき限り朝夕共に堪へ難き暑さにあらず。

○秋は東京の一年中最も美しき季節なり、其の氣や洞朗、其影や靜寂、其の響や透徹、武藏野的秋天寥廓の粗大なる郊外ながら、森などの遠景なか〳〵趣を生じて落葉樹の悉く赤裸々となるまでに至る、落日の美觀亦此頃にあり。秋草の美亦比類なし。

○東京は素より霧こむることなきに非ず、而も京都の日光を銅色化する程の濃霧には非ず、且つ朝の霧は乾燥の氣に晴れ易し夜は街燈をさへ曇らしむるに至る。

○東京の雨は總じて冷かにして暗し、上方のは京都を除き一體に暖かに且つ明るし、東京に春雨の趣なるものありや、予は陰鬱なる雨の、錻力屋根を洗つて單調なる音をくり返すを聞く時、毎に蕭々莢桃の紅を濡らし、白き砂地に音なく泌み入る如き雨を偲ばざる事なし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



東京印象記

銀座

くに子

とある日の午後、私は銀座——と言ふ明るい様な大い様な、高い様な力を感じて何となく尾張町で電車をおりてしまつた。

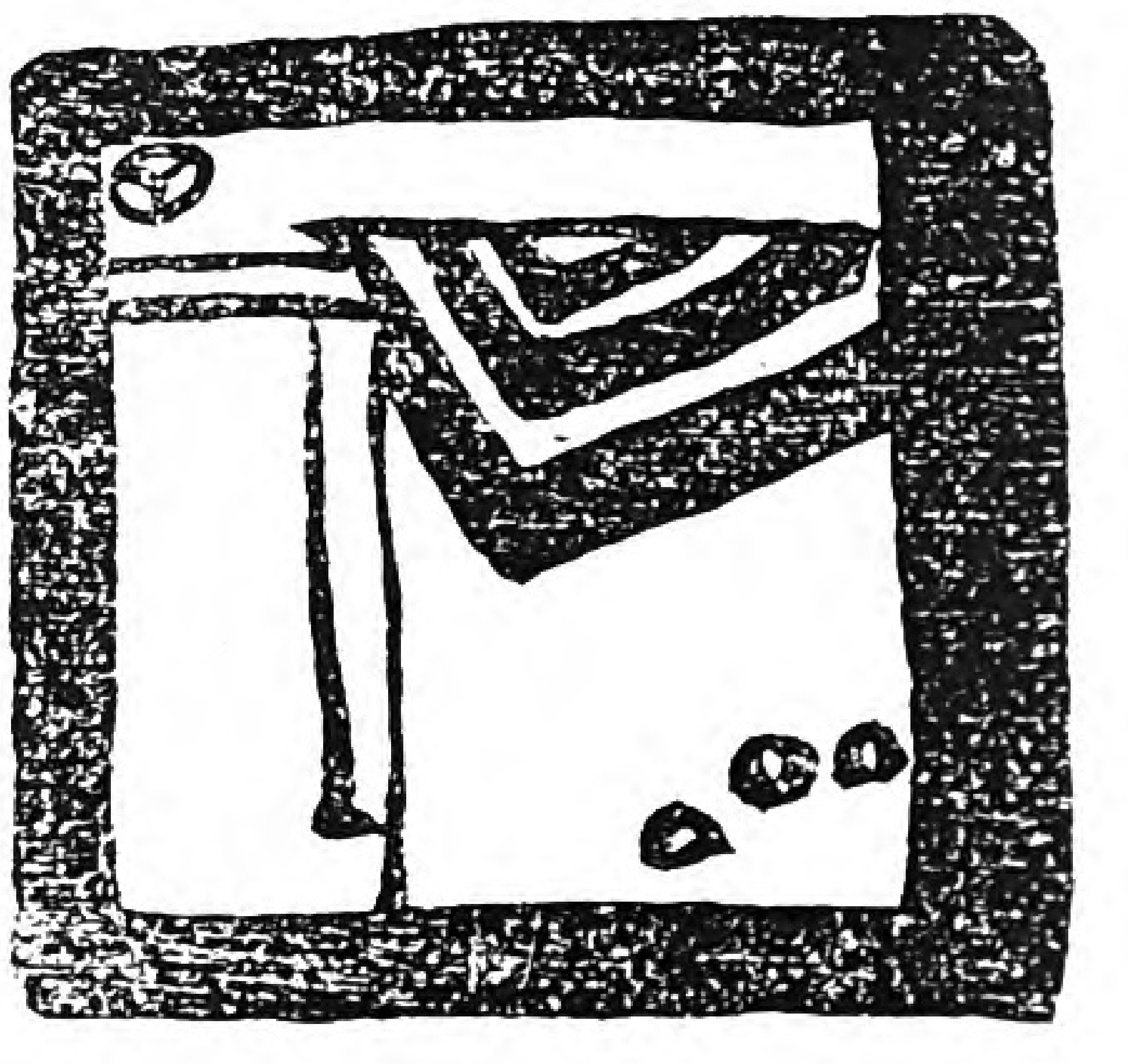
服部時計店の角を左に折れて、たゞもう銀座と言ふ心の響を其まゝあてもなく歩んだ。

しづくも殘さぬばかりつやゝかに磨きぬいた透明な大ガラス戸、仰げば高い建築の、たゞもう自分の丈の低さ、心の小さゝ、姿のみすぼらしさを思はせるばかり。

樂器賣る家、書籍賣る家、歐米大陸の匂ひなつかしきカード賣る家、殊に鏡賣る家の光線は濕みを持つて居た、諸機械販賣としるした家のガラスを透して視線が内へ向つた時、私の腦は苦しい壓迫を感じた。

右手は電車がしきりに往來してゐる、行く人も來る人も忙がしげに、こゝでは歩んでゐる頭の上に天があるのをあふぎみる餘裕もないらしい此いそがしいどよめきの中を私は何とも言はれぬ憧憬の樣な心に曳かれて、丸で行來の人とは別の天地をたゞ一人歩んでゐる樣な氣がして淋しい樣な、しかし冴え冴えした心で、たゞ水の流れる樣になほも歩みを止めなかつた。

毛織物が重々しく左右にさがつて、名も知らぬ洋酒の瓶が靜かに置き並べられてある家、此家の光線は電



の樣に私の心に或る感じをひらめかせた、――此時私は歐米の文明――と言ふ樣な事を美しい光で感じさせられた樣な氣がした、なぜしたかそれはわからなかつた。私は此一方にひらけた心の奧をたどりたい樣な氣がしてあの家の洋酒の瓶を視つめてゐたい樣な、足をどうしても引返したい樣な氣がしたが、やつぱり水の流れる樣にさきに〱と進んでゆくきり、之を引かへすだけの力はどうしても私に出なかつた。

ふと目についた大きい文字、「キリスト我等の罪の爲に其血を流し給へり」と筆太くしるされて廣告見た樣に立てられてある――私は、大きい不調和の天地の中を步んで居るのではあるまいか、キリストがヱルサレムの說敎の姿が浮んで來る樣で、たゞ〱手のつけやうのない大擾亂のいつまでつゞいてゆくかを思つた私の瞳はもう開いてゐるきりであつた、全精力は腦神經に集まつて、調子のない叫びを無二無三にあげてゐる、銀座の空氣は烈しく入り亂れて、光る、動く、匂ふ、染る――寸時も休まぬ變遷の忙しさに、逃げ場を失ふもの、特殊を現はす餘裕のないもの、腐爛と淸新と崩れあひ崩れあひ縱橫に狂ひめぐつて、其中を行く人の目と言はず、耳と言はず、全速力で同時に押寄せさし迫つてくる。

どこが始めで、どこが終りの大渦卷だ！そんな事はわからない。どれが善で、どれが惡で……いや〱それをしらべてゐる時間と餘裕はないのである。たゞ全力をあげて汗を流して大工が家を建てる樣にどん〱かた〱やつてゐる。私はだまされた樣な寂寥に、たえがたい空虛を感じて――然し此まゝくじけてしまつては弱いのだ!!と思ひ〱博品館の煉瓦の橫手をしびれる樣な心もちをして背中合せの裏町へはいつた。

こゝは粹な格子作り、三絃の音がこゝかしこから漏れる、技巧的の女の笑ひ聲が、午後の日ざしに姿を見破られる樣にひゞいてくる。

電話の番號札が家每にかゝつてゐて女の表札が殊に目につく、のぞけば格子の內は心地よく掃き淸められて、鼻緒にきうとした匂ひのある細い下駄が、大ざつぱな內輪にいくつもぬぎ捨てられてある。

……紫地に白の大渦卷の振り袖、つゞれ錦の大たいゝて、それにふさはしい顏だての若い妓が、とある家の格子をくゞつた、私は其家の姉藝妓と言ふ樣なものを想像しながら、此種の女の心の色あひをつかみ出して眺めたい樣な氣にそゝられた。

自分より強い、傷いた獸のそばを通る樣な、近づけないけれど見たい樣な、そう言ふ心もちで私は此町を歩んだ。

表の町と裏の町、それを見つゝ來た私の心のさまざまの刺戟の中から、一すぢ貫いたものを見た時、私はつくぐゝあゝ都會！と言ふ、かつて味つた事のない複雜な、しかも一貫した重い力を感じさせられたのであつた。

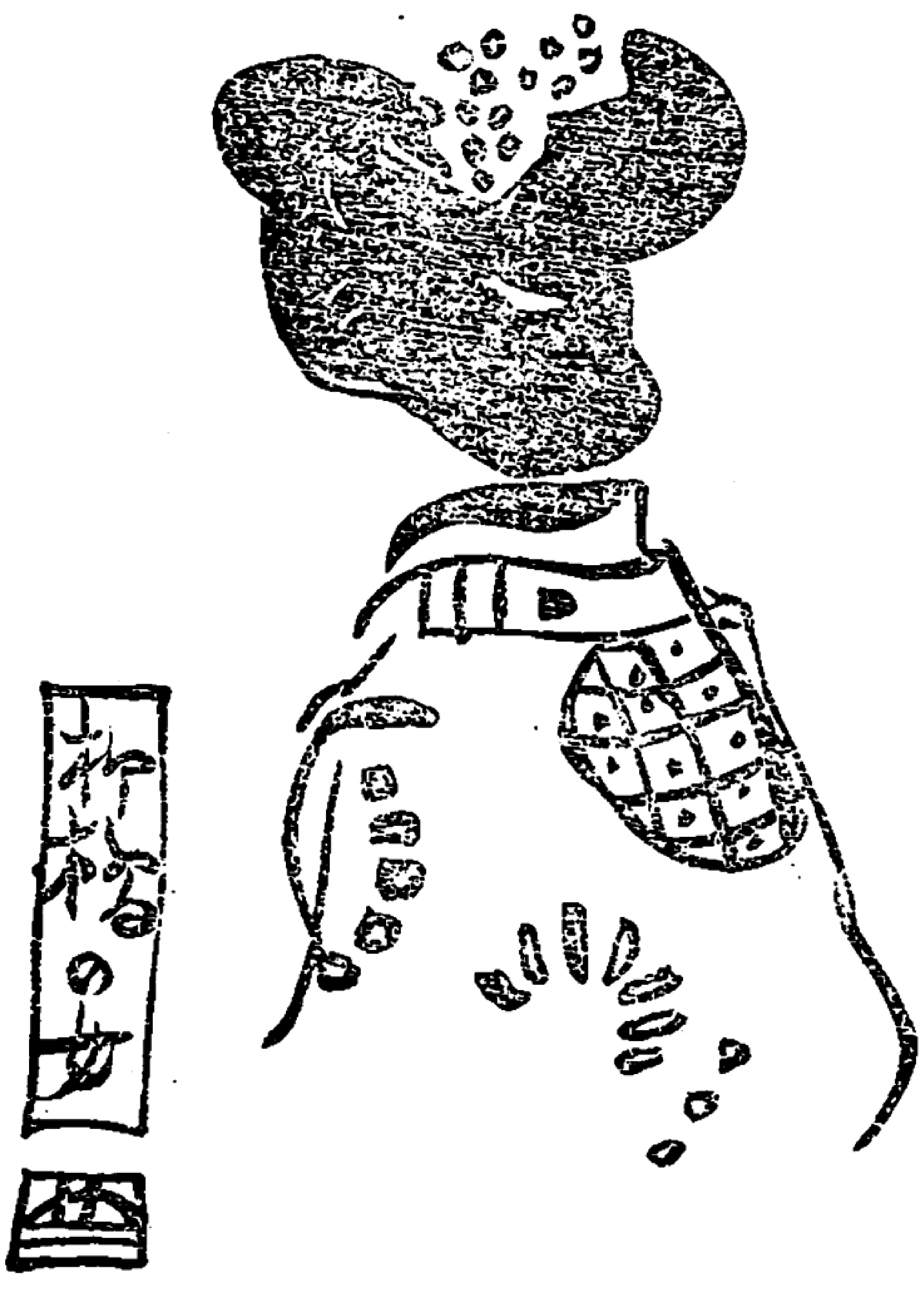
附り青山

濁流の樣にあふれ出す限りも知らぬ煤煙を眺めながら、一日の刺戟に勞れはて、心がたゞ茫然と歸り來る時、青山の通りにはいると、さまで高からぬ家並に、一直線に輝いてゐる赤い火青い灯、……殊に雨の暗い夕には、此灯の色がしめやかにうるほひて、何所でも味はれぬ一種の哀感が、なつかしみ深くしみこんでくる、私は之を青山の匂ひと自分一人の心できめてゐる。

私は都に出て日もまだ淺いので、外の所は無論の事來るから落ち付いた青山からさへも、まだ人に語るべき特殊な匂ひも味も見出さないのでゐる。

けれどたゞ此、夜の青山から受ける、何とも言はれぬ一種の哀感は、私にしては私一人の青山にかぎつて受ける所の忘られぬ深いなつかしみである。

ひるの青山は調うてゐない、甚だ高い家がある、甚だ低い家がある、西洋造りがある、格子造りがある、此外殊に感ずるのは、銀座の樣に、たとひ商賣は違つてゐても、家と家との感じの連鎖が一貫してゐない所がある。青山の家の現はしてゐる感じは、いかにも離ればなれである。藥種賣る家、青物賣る家、菓子賣る家、牛肉賣る家、はなれぐに、よりあつてゐる樣でならない。……それがやがて夜に入つて、暗いながら燈火の漏れ出る時、不思議な力は一直線に一種の調和を靜かに流す。廣い廣い劇場の一部のやうな言ふに言はれぬ技巧の調和――と言つた樣な感じが自然的にてゝろよく流れてくる。



あゝ此流れに添うて歩む時、私の心は無言のまゝ、此靜かな流れを見つめ見送り、小さい、然し親しみの深い、細くしてあざやかなる何物かの響をなつかしく聞かせらるゝのである。此時私の乾き切つた心は涙の樣にしつとりした物あはれなかゞやきを以つて、孤獨の寂寥をこゝろよく味はつてゐる。之は誇張でも何んでもない、夜の青山から受ける私の實感である。

神樂坂

白百合

雨上りの夕べである。カラリはれて希望にみちた少女のあこがれの瞳のやうな星がうつすりとぬれて、初夏のすが〳〵しいよみがへつたやうな心地よい夜だ。

透き通つた空に琥珀色の月が薄い光ぐまを黄にぼかして、風がくると露の乾ききらない庭木が時ならぬ雫の音をたてて、椿や芭蕉の葉面にシルバー色の光が漲る。

露さんほこゝりもたゝないしお毘沙のやうだから散歩に行きませうかねー、母樣の發議で妹と三人して出かけた。

私は一たい緣日の日に來た事がない。何日も想像して油煙の巷と名付けてゐる。

來て見ると實際思つたよりも一層ひどい。軒並の兩側の店からは瓦斯や電氣の光の流れがふるへるやうに人波の中に明るい光線をそゝいで、その中に明と闇と互違ひにおられてゆく。

花やかなリボン、輕さうな夏帽子、光るやうに分けた髮、丸髷、島田、あらゆる頭がぞろ〳〵と動いてゆく。店の前には往來をせばめて兩側に植木屋が夏の草花を澤山並べてゐた。

紅い絲なでし子、燃えるやうなダリヤの花、松葉菊、幾らとなく坂の上迄並んで、カンテラの火かげにあざやかにはえてゐる。盆栽もある。尺足らずの綠したゝるやうなもの、インコの嘴のやうな若葉の紅いもみぢ忘られた春の名殘の白藤まで淋しげに隅に並べられてゐる。空をあふぐとカンテラの油煙が水々しい空氣をどんより濁して別世界に入つた感じがする。

西洋草花の前に立どまつて見てゐると、一ぱい召して下さい。から云ひながら植木賣が黑づんだ小さい桶

から水をふくんだ。力強くプーッと吹き出すと白い霧がキラ〳〵光つて、花といふ花、葉といふ葉、ぞよめき立つて生き〳〵と露をあびた。

私は左側の植木を見ながら、知らず〳〵歩くといふよりも、歩かせられて坂をのぼつてゐた。

ミルクホールとガラス扉にかゝれた白いカーテン越しに、青白い瓦斯のかゞやく下で蘭の大鉢の置かれたテーブルに向つて、意味のありさうな女の瞳と若い男の横姿とがカフエーをもたげながら相對してゐた。

もうそろ〳〵植木店がまばらになつて、右側はなくなつてゐる。それからは瀬戸つぎ玩具エハガキ賣、古道具古本、自動レモン甘露水賣、ゴタ〳〵と入まじつて、太い調子はづれの賣でゑが下駄の音、人のぞよめきの中に注意をよび起させるやうに聞える。

金魚賣の店、苗賣の店、子供が澤山かこんでゐる。外にも此の人波の中に、小島のやうに人立がしてゐるけれどか何だか見えない。

パーと明るい光線の流れてゐる果物店が見えた。間口の廣い店には生々した林檎、水々しい琥珀色のネーブル夏蜜柑、籠にも色どりよくもられて青檜葉の葉色が調和よく見える。これらを射る光線の色彩はこちよく目にすべつて、かすかに酸味を帶びた甘い香が胸をそゝる。

母樣あれ〳〵と妹が指さす方を見ると、人の頭の上に高々と、紫や青や赤にそめたカンナ屑を風船や丸い形にして中に火をともしてある。皆長い葭の先きに下つてゆら〳〵風にゆらいでゐる。

母樣は一つ妹の手にお持たせになつた。低い妹の手から出た提灯は、やつと私の肩迄しかない。私の顏はキット青く〳〵まるで五色の花瓦斯のその一色をあびてゐるやうに見えたゞらう。さう思ふと私になげられる人の瞳が目には入つた。逢ふ人、殊に若い男と女の瞳がきらめく。

かう思ふと私も若い少女の常、誇を味うて遂ほゝゑみを禁じ得なかつた。

人々は油斷のない張り切つたやうな目して兩側の店所々まばらに出た露店の光景、逢ふ人の顏、衣服、絕えずはたらかしてやすむ間もない。さうした人は唯ぞろ〳〵と兩側の店から、華やかに流れてゐる光りの道を無意識に足をはこばせてゆく。

はなやかな活動の巷、こんな光りの町の中にも冷やかな暗い石造りの高い家が空をついて立つてゐる。死

んだやうな窓、〇〇銀行である。それから二三軒ゆくと雜誌店が見えた。

新刊の雜誌は山のやうにつまれて、もみ上げの青々しい學生が輝くやうな瞳して、ページの字をたどつてゐる。私は相變らずぞろ〳〵とねつてゆくやうな人の中の一人だつた。

前の人の肩ごしに髪のフツクラした後姿のよささうな人がゆく。見たい〳〵と思ふ間に一歩一歩と遲れてとう〳〵ズーとはなれてしまつた。

よからうあれは、母樣が石川呉服店の飾棚を指してゐらつしやる。

エー、あれでございませう、動きのとれない人だかりの店を遠くから見てさゝやいた。

見切場も賣場も袖にあてたり電氣にすかしたり迷つてゐるやうな上氣した女が、肩と肩をすり合して押し合つてゐる。

店はズーと奥迄電氣の光が照し出して洋式にかざりたてた古代模樣の帶、友禪の切れ地、處々壁にぬり込んだ鏡にはえて一しほうつくしい。私もやつぱり女だつた。氣の付いた時にはもう飾棚の前に喰ひ付いたやうになつてゐた。

磨きにみがきぬいた玻璃戸を透して紅白のリボンを張り渡した間口に、お召や帶地が取合せよく種々な置き方になつて、しきつめた水色山繭入メリンスが波のやうな襞をきざんでゐる。一方は鏡張りなのでズーと向ふにもあるやうに廣く見える。

其の鏡に表情の生き〳〵した若い人の顔が幾つも映つては變つてゆく。

ふとスリだ〳〵といふ叫びごゑが聞えたので、思はず母樣のお手にしつかりすがつた。波瀾のなかつた人の長い〳〵ラインは縱横に亂れて、その中に一塊の人が坂の方へと動いてゆく。往來に立つてゐた巡査は、提灯を振つて集つてくる人をどなりながら拂つた。

それも直にあともなくなつて、又行く人來る人は靜かにねつてゐる。

毘沙門の横町に燒鳥店や、おでんの屋臺店が見えた。それに並んで行燈のボンヤリともつてゐる占者がもつたいらしく筮竹をもんでゐた。その前にゑり足のぬけるやうなつぶし島田の艶な女がスラリとした肩にしなをして何か見てもらつてゐた。

ホヽヽヽまたゞよこの人は――、つやつぽいこゑの女が直先きの藝妓家だらう――家から八の字を踏んで

目下に現はれた。

ねえさんやけるの………此方の女はこたへた。

つや〳〵しい髪のフックリした櫛目が月光にテラテラする。

私達は毘沙門の門前でぬかづいた計、なだれるやうに入つてゆく人達を見送つて左側を靜かに歩いた。妹は勸業場へと、しきりにせがんだなれどもう勞れたので母樣もこの次にとだましてしまつた。

例の提灯は妹の手にゆれてゐる。時折は人に引掛つて持つて行かれさうになつたり、つぶされさうになる。姉樣が持つて上げませうかときくと、首を横にふつた。

靜岡魚店の戸をバッタリ下した前で、このさわがしい追ひ立てられるやうな中にいう〳〵と尺八の音色が濁つた空氣を澄ませるやうに流れてゐる。追分であつた。こまかにきざむメロデアがなめらかに心の中に喰ひこんで、このザワ〳〵した人と遠くはなれてゐるとしか思へない。いゝ音色だ。

ゆるくのびやかに……。……歌口にヒッタリ吸ひついた盲者の唇は、泣くやうなむせぶやうな音色をほしいまゝにほとばしらせてゐる。

私は一足母樣や妹に先へいつて頂いた。

一音は一音胸をゆすつて、私の魂は音のゆくまゝに自由に漂うてゐる。

一曲すむと心殘りがしたけれど遲れたので人の間をくゞつて追つた。

ハッと思ふと誰れか手をかた〳〵にぎつた者がある。思はず見上げると、私の頭は若樣風の若い人をゑがいた。私は何もかも忘れてかけた。

セイ〳〵云ひながら濱野屋呉服店の前で追ひ付くと小さい胸は破れさうに動悸がする。

何ですねー、ほんとに子供のやうな、とおつしやつたけれど私は何も云へなかつた。

私はもうつく〴〵この人込みが恐ろしくなつた。せきたてるやうに車止の立つてゐる派出所の横町に、兇れるやうにまがつた。

ふりかへつて見ると若い女、若い男は人々の中に織り込まれて長い〳〵ラインは、光りの波から波へと渡つてゆく。

空にはボウーと高い處まで火光が射してゐる、人の息と、塵埃と、烟と、炎とが靄のやうに渦捲いて漂うてゐるのであらう。

魚河岸

萬壽子

上から瞰下すと眞黑なざんぎり頭や、帽子をかぶつたのや、威勢の宜い向ふ鉢卷等が、あれでも歩いて居るのかしらと疑はれる程空間なしにうね〳〵と動いて居る。雨戸——是は家の前に造るので庇を長く出した樣な形、河岸が退けるとはづして了ます——の上には魚籠や箱等が亂雜に投げられて有る、其の箱や籠に付いて居る魚のこけが、朝日に反射して燦然と光つて居る。

小魚を澤山箱へ入れて其れを平氣で頭へ載て居る小僧や、空箱を肩へかついで居る人や、半臺へ生の宜い鯛を山に積んで、よつし〳〵と重さうに汗を流しながらかついで居る輕子や、髮を根下りの銀杏返しに結て紺絣の上着を裾長に着て、箱の兩端へ附けた紐を肩からわきへかけて、のろ〳〵と歩いて居る煙草賣や、古い何色かわからぬ樣な中折を冠つて、ごつ〳〵した手織木綿の着物の端を可笑な形狀に端折つて、洋傘をつきながら片手に大きな蛸を一ッさげて、輕子等におどかされながら、きよろ〳〵眼で茫然として居る田舍の爺さん、云はるゝ儘押れる儘に彼處へうろ〳〵此處へうろ〳〵して居る奧樣風も有れば、見も知らぬ人の背をポンと打いて「一寸」と煙草の火を借りる人もある。

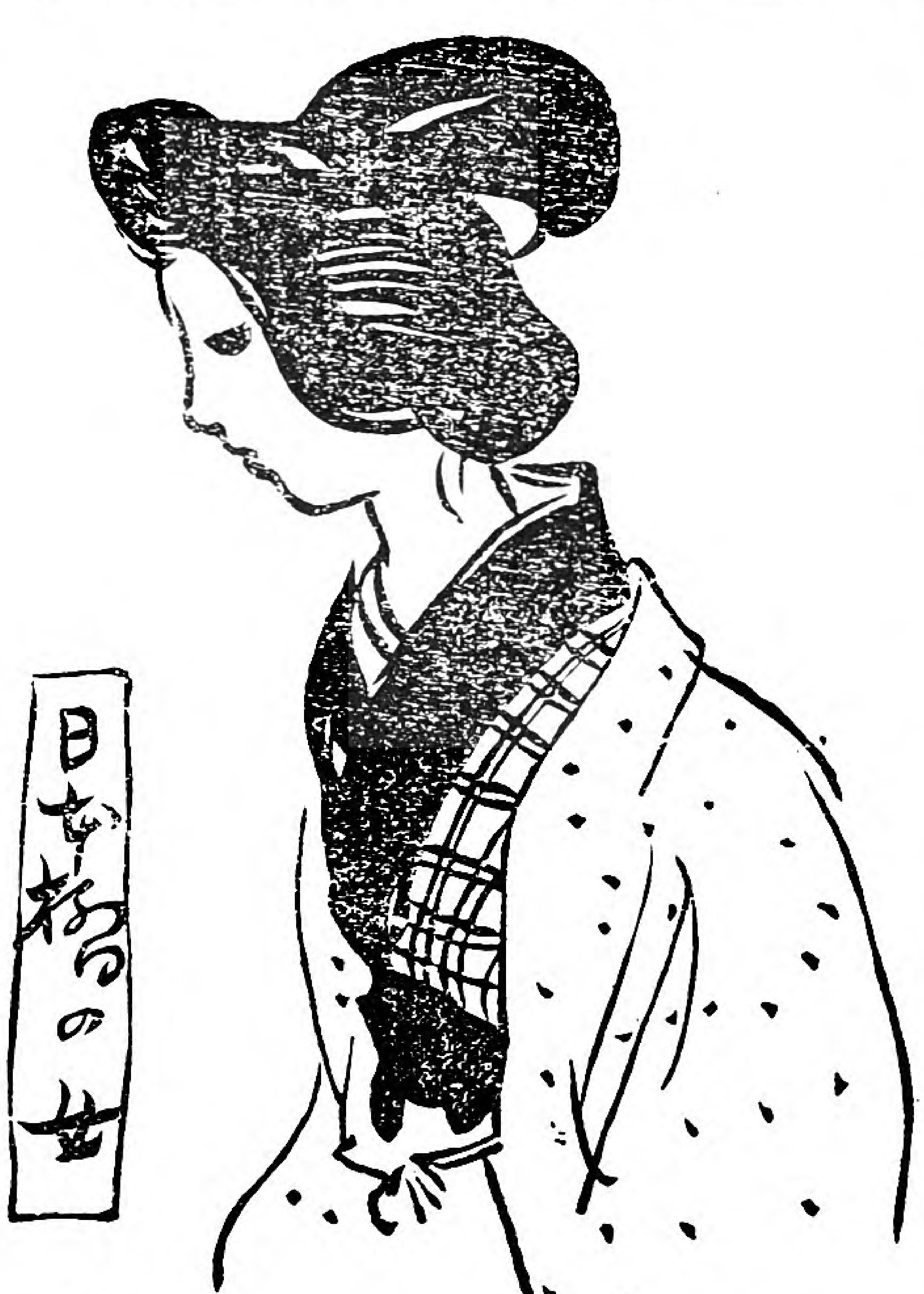
魚の數をよむ聲や「おい大將どうでえ」とにこ〳〵顏に客をよぶ若衆—又何かの時にやあ入合せをすらあな、今日はまあ買ときねえッて事よ」と客をなだめる賣上手もあれば、貫目をどなる小僧もある、其れ等の聲が入交つてさう〴〵しいとも何ともたとへ樣がない上から聞て居ると只ぐわッ〳〵と云ふ如に聞える。

晝

河岸が退けて木戸が取れる頃になると、壽司や、菓子や、水菓子や、駄菓子や等の、食物を始め、古道具や、足袋股引腹掛等を賣る店や、金物や等がまばらに店をだして、まだそこらにぐづ〳〵して居る人々の目を引て居る。

納屋裏では飲食店が軒を並べて皆客が一ぱい這入つて居る「あッと娘さん櫛が落ましたよ」とちびり〳〵と酒を飲ながら、さわらの照燒をつッついてゐた輕子風なのが、通りかゝつた十六七の桃割に結つた可愛ら

しい娘を見て突然に叫んだ「は、有難う」娘は口の内に禮を云つて振返つた、そして足元を見た、ない、又四方を見た、ない、娘は眞赤になつた、又視廻した「やあどうもお氣の毒樣でした、頭の櫛ぢやあなくつて團子の串でしたよウハヽヽヽ」其の輕子は笑つた、娘は泣き出し相な顔をして裾もほら〱かけ出した。其の家に居た七八人の客は、皆手を打つて洪然笑つた、と四五間先の路次口から、又一人女が出た。髪を艶々しい結綿にして、派手な縞お召の着物に友禪の大柄な半纏を思ひ樣ぬきゑもんにした襟元の赤い襦袢の襟に黒繻子の襟が宜く映つて美しい、きりゝとしめた鹽瀬の前掛が、風のまに〱空へ上つて、ちら〱と赤い長襦袢がいかにも艶美しい、其の家の前まで來ると些と覗いた「あ、姉さんかんざしが……」と云をはるをも待たで「ほヽヽヽ落たら貴君に上げませう」と振返りながら嬌態をして嫣然と笑つた、若衆等は只顔見合せて呆然。



一時頃から廣告の樂隊が通る、偶には太鼓に三味線で來るのもある、猿廻しや、古めかしいサノサ節を可笑な調子で唄ふ哀れな子供や、憎らしい程づう〱しい乞食や、縞目のわからなく成つたつぎはぎのひざまで位な着物に、鼠色に成た白の腰巻を出して、片ちんばの下駄をきたない足に突かけて、うなぎざるへ魚の腸や頭を澤山入れたのをさげて、髪をぼう〱とした見るから嘔吐を催しさうな腸拾ひの女が、ぎよろりとした眼でそこらをあさつて居る。

ぽん〱ぽんと彼方からも此方からもうるさかつた下駄はいれのつゞみの音も、遠く消去る黄昏頃に成ると、銀行員や事務員がぞろ〱と通る、立派なハイカラさんが屋臺の壽司やの暖簾をくゞつたと思へば、跡

から小僧を供に連た內儀樣が、すしの立食を遊ばす。

夜

ところ〳〵に立てある常夜燈の光がだん〳〵瞭然して來る時分には、旣う人通も稀に成つて、朝や晝とは違ふ土地の樣だ、其れに大通りの電車のひゞきが、ざい——と長く餘韻を引て、なほ寂しさをそへて居る。

往來にはすしやの灯が二ッ計りと、西洋料理の瓦斯が一ッしか見えない、此の靜寂な天地にトトトテンテチン等と冴た撥の音でも聞えてくると、誰でも耳をすます、淸元でも新內でも流しに來るのに若い女は一人もない、皆四十の坂をこえた中ばあさん許り、上手な人のさびた聲でも聞いて居ると心が澄んで來る。

だん〳〵夜が更て來て、常夜燈のみ燦然と我者顏にあたりを照らす頃、シーンと靜まり返つた天地を劈いてチヨン、〳〵、チヨン、〳〵と火の番の拍子木の音が聞えて來たと思ふと、だん〳〵遠く〳〵なつて行く——淋しい——お——いなり——さあん——あゝ實に淋しい——お——いなり——さあん——。

日比谷

春子

「つゝじの方、いかないこと？」

くるつと白い顏を振向けて、甘へる樣に三津さんが訊いた。

「えゝ……ようでざんすけど……いつても……。」

「オホヽヽヽ、流石趣味のある方は違つたもんですねホヽヽヽヽ。」

ぽんと後から肩をたゝいて、芳子さんが皮肉な笑ひ方をした。

「いやな……でもねえ……あんまり遲くなりますとねえ……。」

「關はないことよ、さア〳〵多數決々々々、氣取ちやんなんかどうでもいゝわ！姉さんなんか！。」

マガレットの白リボンが、ぴら〳〵と羽ばたいたと見ると、すつ〳〵とスケーチングの眞似をして、三津さんは皆を笑はせた。

窄めたパラソルを引ずりながら私等は砂利路を步いてゆく。傍の植込から、石の間から、ぼうつと夕闇は

流れ出し流れ出して、だん〳〵大氣の色を、陰鬱なる薄紺色と化し、淡い瓦斯の瞳の光と、白い顏の數多とを、夢の樣に漂はせてゐる。かうして靜かに衰へ行く園の空氣は、幽かな若葉の匂ひと、しめり氣とを含んで、やはらかく頰を撫で、何となく輕い甘い暗愁を催さしめる。

じやり〳〵と砂利の音に交つて、終日を、人と人との戰ひに疲れた大通の生活のどよめきは、あへぎ〳〵大地を這うて來る……這うて來る……蒼褪めた音波がよろ〳〵と引きりなしに邊りからたちのぼる……かうした、捕へ所のない渺たる黃昏の潮のなかに、身も心もひたしながら漂ふやうに歩いてゆく私の眼に、ふとあるものの姿が映つた。

輪廓の丸い赤い顏、あの眉、口、目、……ピアノ、室內體操場……羽子板……といろ〳〵の印象を繼ぎ合はして、もしやつひ此の三月迄、三津さんのクラスに居たSさんといふ人ではあるまいかと思つた。

二人の銳い瞳は、射るやうに、すばやく注がれて居た。

「交換局ですとさ！」

突嗟に勝誇つたやうな力を籠らせて、三津さんは、囁いた。

だん〳〵、其姿は接近してくる。

と、向ふでも氣が付いたと見えて、特色のある大きな眼を、癖らしく仰向いて笑つて會釋をしながらつと恥しさうに叉落した。

染返しの絣に袴に、黑い太緒の下駄を、三津さんはいつまでも輕蔑するやうに凝視てゐたが、くる〳〵と絕えず回轉するやうな瞳が、ふと芳子さんの頭に走ると、「あら！叉こんなになつちやつてよ！」

と吃驚したやうに叫んで、ぐさと刺すやうに櫛を直して上げながら、きゆつと自分の襟元を締めた。リングがきらりと夕闇に光つた。

ぴゆーつと口笛がなつた。と、轉がるやうに黑い頭が走つて來た、自轉車だ！すうつと瓦斯の光を掠めてぼうつとした靄の內に消えた。

すると、其他にも、いろ〳〵の人影が見えて來た。明るい女の袖や、角帽や、絣や、黑い頭や、白い顏やが、薄靑い光の流れ込だ夕靄の內に、繪のやうに浮んで、引きりなしにうごめいてゐる。

歩く程に、歩く程に、スヰートな沈丁花の香りが、裾の方から匂つてきた。植込の內に私等は入つた。

だん／＼と鋭さを增す瓦斯の下に、蝦夷茶と白の群咲きは、美しい紅色の反射にむせんで、ぼうつと光の擴がつた所丈ねむりかけた木の葉の綠が、きつと目醒たやうに輝いて來た。

ころ／＼……かた／＼……かた……ころ／＼……かた／＼……ころ／＼……

泥のなかで錆びた鈴を弄ぶやうな蛙の音樂が、噴水の池の方から漂うてる……

萬家の陰が暗くなつてきた、植込の濃かに繁茂つた間には、黃昏の色が踞つてゐる、脚下が不安になつて來て、後方から壓せられるやうに思ふ、わが瞳は內面に鋭くなつてきた、ぱアつと擴大て居た心が、引締められるやうで、一つの路をみつめて步いてゐた、其路もおぼろげになつてきた。

前をちら／＼とゆく、濃お納戶と牡丹色の美しい着物の光澤を見ながら、私はSさんのことばかり思ひつづけて居た。

あゝ……あはれなる囚はれの子の黑き姿よ！

たゞ、徒らに枯れ衰へてゆく、若き血と、筋肉と、一片のパンと！

青錆びた我が胸の執着の力と！

根津

筆子

俗にいふ藪下をぬけて、少しの勾配を下りかけた。

根津神社の瑞垣を、後にした空地の若草を踏んで、學生達は野球を爲て居る、ボールが青空へ高く上る。

さくら飯と行燈に書いた小料理店に、魚やが盤臺を下すと、「鳥渡、私の食べる物はないかねえ、何？ひらめ……嫌だわ」と媚めいた語調で、白粉眞白の女が、暖簾から首を出した。家の構と其女とを見比べて、私は偶と嫌な感じが起つた。

根津には此種の家が多い、鮓屋、汁粉屋、西洋料理店いづれも皆黑幕の中に活動して居る、哀むべき女ある事を、悲しんだ。私は急いで新開に出た、團子坂の方へ、何かの廣告が樂隊と馬鹿囃子の連を入交せて、曲も音色も無茶苦茶に、ラッパとシャギリが春の空氣を動かして、赤と綠の旗がひら／＼と翻へつて行く。

此不調和な統一なき音樂を聞きながら、私は大通りを茫然步いて居ると、背中の赤兒が泣くのも構はず、

守つ子が酒屋の御用聞と、大きな聲で喚き合ふのに驚かされた、學校の塀には惡太郎が、白墨でらく書をして居る、世帯にやつれた古女房が、遠くから鹽物やの店を覗いて居た。町内の下品な風俗は、到底花やかなる近代的女性を見る事が出來なかつた、そればかりでなく、此邊の若い女は皆働いて居る、工場に通ふか電話局に出るとか、甚しきは、品性の墮落に甘んじて居る良家の娘、其等によつて飾られたる土地の空氣は濁つて居やう。東京一の公園の奥に、暗黒なこの一廓、何だか現今の成上りの人等の心の様で、面白い對照だと思つた、暗い巷は、向ケ岡の學風も、後世安樂の谷中の風も右と左に吹いては居るが、扨一向に其感化を及ぼさなかつた、反つて、娘を看板に學生や僧侶を墮落させる親達がある、噫、若い女は次第々々に濁つた此渦巻に、巻き込まれて了ふかと思はれて、私はそゞろ寂寥を覺えた。偶と母から聞いて居た、三十年前の根津を思つた。

昔は遊廓があつたそうだ、而して根津神社の周圍は一面に沼地で、生ひ茂つた葭はやがて月をも蔭す程であつた、歌舞の菩薩が一夜の歡樂に、盡す手くだの餘波は、今日までも漂うて居るのであらうか、娼妓のやうな生活してゐる女は少くない故。けれども外見の町は實に著しい變遷である、この寂れた——貧しげな通りがどうして昔、吉原の様な全盛であつたらうかと疑はれる。有名な大八幡といふ家のあとは、病院と變つて、昔ながらの、泉水には猶、春は山吹の影を映し、夏は白蓮の大きな花が咲く、其花の香に、欄干によつて、錦繪でも見るやうな美しい傾城がうつとりした、其姿、けれども今はもう、入院患者の慰藉となつて了つた、絹行燈の朧な光は、輝く様な電燈と變つた。私は何だか昔の根津に憧憬れた、そして此幻を果てしなく追及した。

南風はのぼせる程あたゝかい、理髪店の硝子戸に春の光が反射して、ぎら〱とまぶしい。

車が通る、豆腐やが來る、往來の人は様々あるけれど、我思ふ昔の人は、どうしても見出せなかつた。

生々しい牛や豚の肉が、ぶざまに釣してある牛肉屋も以前は、大見世の遊女屋であるそうな、宮永町の交番の邊に大門があつたとかで、老人等は今でも總門と呼んで居る。藍染川は前に流れて居る、私は其黒い水を見ながら逢染橋の際に立つた、而して都會が日一日と、變化の度を高める事を痛切に知つた、あの唐詩選

の中の「但看古來歌舞地、唯有黃昏鳥雀悲」の句を思ふ。太皷の音、三味線の歌に更けたは昔の事、現は野良犬の遠吠と、浪花節の定席から、息苦しさうな歌が聞えるばかりだ。

未來、否それより過去がなつかしい、私の親は所謂江戸ッ子で、常々舊き追憶談が始まる、其江戸趣味が私は知りたい。

交番の巡査が、妙な顏して見て居るので私は氣恥しくなつて、橋のもとを放れた。善光寺坂は遠く、櫻の色が見えて、陽炎も炎えさうな、坂のあたりは、銀色に土が光る。私はふと、根津遊廓の移轉地なる、洲崎を聯想した。而して其處に近頃移つた、友を訪問する氣になつた。

附り洲崎

洲崎の土手は寂れて居る、赤い暖簾の肉屋、草鞋賣る店、餘りに、大門との對照が不自然ではないか。客待の車夫が取卷いてる大門は、這入惜い思ひがした。廓內の櫻は七分通り咲き揃ふたが、晝の遊廓は極めて靜かであつた。交番の角を曲る出逢ひがしら、角苅の兄いが「いよう」と異聲を放つた、屹度私の束髮姿がめづらしいのだらう、全く永代橋を渡つた深川は、一種獨特の下町趣味を發輝して居る。若い女は皆根下りの銀杏返し潰し島田、半襟掛けの着物といふ人ばかり東京灣の潮風が吹く洲崎と、上野の森に被はれたる根津とは、漸く傾向を異にする筈だと考へた。

辨天町一丁目の路は狹い、仕舞家かと思つたのは、皆妓樓であつた。古びた格子の內には、安芝居の小道具の樣な襖が立つて、眞鍮の手焙り一つ置いたぎり、何の裝飾も風情もない見世先に、白粉を塗つてる色の惡い女、向ふの家では緋のメリンスへあくどく牡丹を染めた、半襟をぐいと出して、黃縞の瓦斯二子をはおつた女が、格子につかまりながら、妓夫らしい眼のぎよろりとした男と、平氣で卑猥な事を、大聲で云つて居る、私は餘りに聞き兼て馳せぬけた。

あゝ私の思つた根津遊廓と洲崎とは、實に遠く相隔つて居た、但し私は、ほんの洲崎の一部分しか知らないけれど、矢張り這麼風かと思つたら、詰らなくなつた。私は失望の歩みをもつて、友の家を尋ねた。そして、何の這麼處に來たかしらと、急に四邊を顧みて吾ながら耻しくなつた。

根津と洲崎、それは同一の系統の暗の中で、憫れむ

べき弱い女性は、只社會の表面と裏面とで淺猿しい生活をして居る。處女の羞耻も道德も品性も、金力の爲めに、蹂躙されたる彼等は饑たる獸の樣に金錢を渴望してゐる、斯う思ふと私は厭な〳〵心地になつた。そして敬愛する吾友が、何故這麽街へ住はれたのだらうと疑ひながら、やう〳〵知れた門に立つた。

　隣りの藝者屋では、まづい調子で夕暮れをさらつて居るのが聞えた。

不忍

はま子

毎日の夕ぐれ——、塗り立つたペンキと煤煙の、ほてり臭い中から、疲れた足を引き摺つて下谷の家まで歸る事は何よりもうれしいのだ、乳母の背中におんぶされて居た頃からの印象が、ぼんやりと霞のやうに殘つて居る。それから凡ての古い記憶が呼び出されるのだもの、上野の山の烏の聲に目覺めて、黄縞の袢天に包まれては、毎朝神田明神の白いお馬見に連られて行かれた事などが、此の上なくなつかしいのだ。

暮れかけてから一しきり、花見歸りの人達のゾロゾロと行く、逐眼と鼻の間でも雜駁な花時の上野までは足が向かず、折角のうらゝかな日を斯うして暮して終つた事が、今になつて惜しまれる、何故だか自分にも解らない夕飯を終つてからも泌々と物足りなさを感じて來る、あゝ何だか一日私は待つて居た何を一體待つてたのか、訪ふ人もない筈だし音づれも別に來るやうな所さへないものを、あゝ此の苦しい待つ心——、決してそんなものではないらしい。

ほんのりとした春の夕べの思ひ出は美しい。詩になつて畫になつて寂しい心を取り圍む、と、シク〳〵と古傷が痛み出して來る。

戀を戀ふ心、幻影を追ふ心、それは凡て過去に對する執着なので、居たり立つたりして見たが其の儚い悲哀の遣り場はなかつた。

格子をあけて、とう〳〵外に出て、陰鬱な額を垂れて、あてどのない心の向くまゝに歩いた。そしてフトおばけ横丁をぬけて見やうと思つた、宵の藝者屋町ほどすが〳〵しいものはない、これからだと云ふ意氣込みが見えて、唆されるやうに私は歩くが足は重い。

二十は越せど色戀は、おきてきびしく白玉の、露にも濡れし事もなく……。

三味線はおぼつかなげに、　疳高い聲を張り上げて清元を歌ふ十三四の娘が居る。

如何にも幅のないいぢらしい聲だ、と思ひながら御神燈の文字を讀んで行くと、新きらくとある、拭き込んだ格子の中の硝子越しに、化粧の出來たての粉の吹いた顏が二つ並んで居る、どつちも類型的だが唯あでやかなものだ。それから十五六の頃卷煙草を呑む事を敎つた家の前も默つて通つて、仲町の明るい通りへ出た。パッとした色彩が一時に眼につく、先づ雜誌やの店頭に立つて見ると今月の雜誌があつた、それから池の端へ出ると、蒼白い電燈は柳の葉でしにもの凄い光りを投げて、上野の森から池の面を渡つて來るやうな冷いシットリとした空氣が身に沁み入る、私は知らず知らず某家の前まで來たが、入らうか入るまいかとためらつた、二階にお客があると見えてゴタついて居るらしい、でまへやと入り違ひにはこやが入つて、その後から顏のしやくれた束髮の藝者が入つて行つた、こつそり窓の外でねずみなきをすると、きいちやんと云ふ貰ひ娘の大きい桃われの影が搖れて、スーと障子が開いた。

きいちやんは簾の中から私を覗いて、『だアれ、お入りな、まアいやだ』と云つた、伯母さんは居ないと云ふから、其の儘池について、白く乾いた道を歩いた。

第二會場の建築物が幽靈のやうに、白くうずぼんやりと立つて居る、氷が張りつめたやうな冷い暗い池の面に、辨天の岡田の座敷が、夏のつり行燈の墨繪のやうに、あかアく浮いて居る、池のぐるりの白熱瓦斯や電燈が、細長く水にうつゝてまるで火の柱だ。

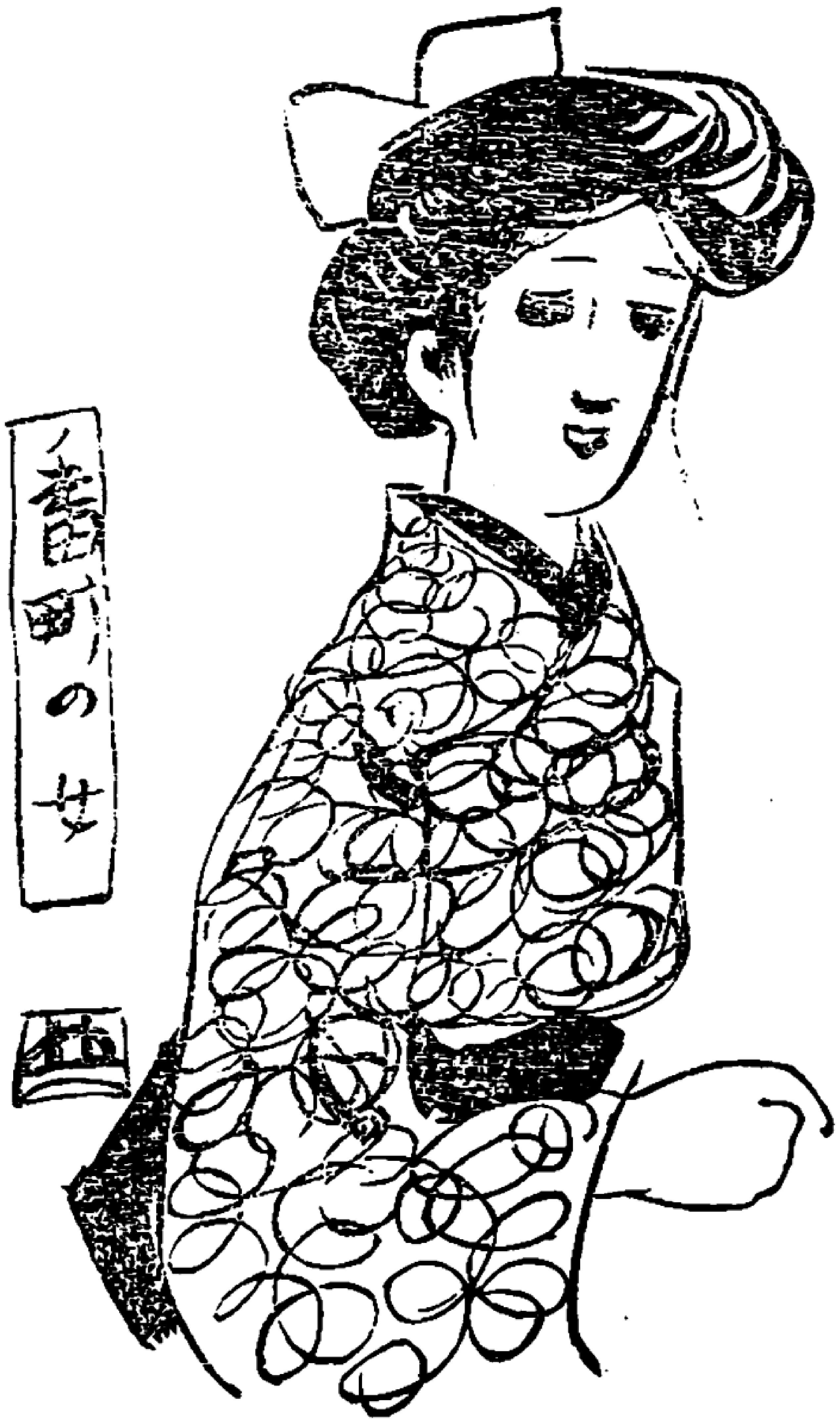
それがグオーンと云ふ鐘の響きに戰慄する、私の心は鐘の音の餘韻を追つて、どこまでも行かうとして居る、また幾つか壓へつけるやうにグオーンと、本鄉根津一體の黑い森に響いたかと思ふと、水面の波紋を破つて、暗い冷い底に沈む、私は飽かず追つて行つたが何時のまにか空漠とした所に戻つて來て終ふのだ、何故もつと〱、深い處まで行けないかしらと思ひながら踵を返すと。

又自分は何かに待たれて居るやうな氣持ちがして來た。

芝公園

やゑ子

嬌羞を含んだ櫻の蕾が、艶を帶びた黑い幹に枝に、包みきれぬ花瓣の紅を薰らして居た。その下を私は通る。總てを忘れた空虛なる胸にます淡い溫情が流れる流れるまゝに歩みを行れば深い木立に紛れ入つた太い木、細い木が重なり合つて何か語りたげにうごめいて居る。黃色を帶びた山土は雨に潤うて無暗に下駄に粘り着く。もう此時は手は冷えて居た、胸も冷えて居た。螺旋狀の緩くない傾斜を持つた坂路を登ると冷い風が下から吹いて、後れ毛をそゝるのを左の手を擧げて矢鱈に耳殼に挾む。山陰にある椿が力の漲つた綠葉の間から眞紅の唇を表はして些細の失態をも見出したら嘲笑しやうと構へて居る。



瓢形の古墳墓の上に立つて居ると足の眞下に偶像の家を見た。脆さうな社、脫殼のやうな神體。人の創りし物故人に勝らぬ事を痛切に識つた。其横から次第に低く展開した地表に熊笹や龍の髯や丈高い喬木の勢力に沮喪げ返つて居る。仰ぎ看れば八角堂や五重の塔の、過去に密着する赤色や自ら銹毀れ乍らも尚兇ひまつはる青色や、毒々しい色彩して複雜な輪廓を、生氣の匂ふ四月の空に曝して居る。何等の權威も無い――榮華の墳墓の如き――其横を循つて、新たなる血潮と活々した感興は暖かに思ひ上る。生を讃嘆する若杉や、甦りを歡喜する新草や、不朽の光線の内に耀いて居る。忽然、若杉の蔭から現はれて新草の上を徐歩む女、慥かに私に向つて近寄る?! 薄絹をまとふた胸、微醉を帶びた瞳を据ゑてぢつと私を見た。ふるひ起きた畏敬の情に、私はおのづとうなだれた。女神は仄紅い手を窃つと私の頭に置い

た。血は熱して一齊に頭に昇る。微笑の中より出づる聲なき甘い響は頭より渾身に流れ下つた。祝福――さう光榮ある祝福をうけたのだ。自づと搖れる歡喜の涙は大きく高まつて行く。その波が強く持ち上つて破けた。破けて散つた。こな〳〵にちつた涙の斷片は眞黑な胸に點々印象る。あゝ涙‼と振り仰いだ時には詩の女神は消えて居た。森は鮮綠に天向いて居るけれども――草は微かにほゝ笑んで居るけれども――其處には女神の跫痕すら無かつた。唯頹廢した土塀が瞑して居るのみであつた。

南側の濡れた幹、北側の染つた樹、其枝葉が雜然と縺れあつたのに鈍白い雨の光線が反射してギラ〳〵光る。私は縮まつて其下を通る。

……

圓山の絕頂に立つた。

圓い丘は高く底く迫つて居る。變化ある傾斜の終る所に在る增上寺、重く叢生する松林を劃つて、ちよこちよこ並んだ家々。それより發散する――歡喜の聲と――憤怒の叫びと――憂愁の忍び音と――。

否、自然の大なる威壓と――人の努力の鬨の聲と――。最高の地にある意識は、最も隔離したる感想を寂しく起す。

未だ定形成らざる先の世の如き色なき色に蓋はれた地、ものの精靈の籠つた空が、視線の末に茫と擴がつて居る。その印象のおびきに「神、光あれと宣ひければ光ありき」その天地創造の第一日を想ひ起した。絕對なる大能力の表顯、光明に生れた地の歡喜、實に美しい生の火が感情の中心に燃える。血潮は熱く湧いてとゝと流れる。

然し……此の光輝ある瞳をやるには、周圍の光景のあまりに冷暗である。沈鬱である、堪らなくなつて私は「光あれ」と小さく叫んだ「光あれ‼」――……、目開けば依然雨に濡れた土塊と樹葉のみ瞼に迫る遙かに遠き海は、空は、些の光澤もない死白色に濁つて居る。

骸。さう精靈の脫けた殘骸だと私は獨りで大きく頷いた。不融和、不一致の唯徒らに互に觸るゝ閃めきのみ、暗葉の戰慄の如くに、飛鳥の形跡の如くに、感じるのであつた。

疎らになつた感想の隙を暗愁は泌みて行く。

ふと、崖下の石疊の上に累々と横たはる燒木が愁を驚かした。見張る眼の視線の隅に在る樹木は焦げ枯れ

て居る。大部分は運び去られた黒本尊の燒跡の、未だ此處に其儘有るとしたならば、色彩の汚ない――形狀の醜い、それは僞らざる眞の姿であらう。

眞の姿に爲す迄の烈火の勢力を强て想ひ浮べるに暗愁の青葉に映ゆる火炎――夜氣に顫ひ響く號泣――此處にと强く構造しても幻影はいつか雨の中に消て行く樹草の影に遁げて行く。唯、圓山の底に居て永劫に眞の姿を顯はし得ぬ土塊は執拗く呻き居るけれども――電車の回轉する地響の如くに呻いて居るけれども――。

さずらうて行く私は、到底眞の心に復生する事は能はなかつた。淡綠の雨と黑綠の幹の間に「暗きは光を知らざりき」の聖句のみ徒らに明滅するけれども――

谷中

霞子

矢張り此邊は閑靜で宜いと思ひながら、昔なじみの芋坂のお團子のお土産を大切に抱へて、ぶらり〳〵いつか踏切のところまで來たが、折惡しくピタリと閉められたので、ぼんやりと行ずみながら、あたりを見まはした。私が谷中に居たのは十幾年かの昔なので、大方の樣子は變つてしまつたが、まだ〳〵元の名殘は留められてゐる。第一踏切番のおぢいさんが相變らず元氣らしい、白旗を振りながら、四五人の男の子を相手に何か笑つて居る。下げ髮に赤いリボンを結んで派手なメリンスの着物に、キヤラコの胸掛けをして、日に幾度となく汽車を見に來るので「孃チヤンの御うちはどこ」と云はれてはにかみ子の私、變てこな顏をして家へ歸つて來たが、終にはおなじみとなつて「おぢいさん」ともよんで見たこともある。其私が今此所に濟して立つて居ようとは夢にも知らないだらうと可笑しくなつた。轟と上野行の汽車は地響をさせて通りすぎた。「おぢいさん御機嫌よう」と心で云ひながら、つと踏切を越すと、すぐ坂路になつて居る、これを何坂とか云つたが忘れて終つた、右側の墓地に細い道があつて、小供を負つたおかみさんが、ずんずん入つて行く一度も通つた事はないが、いづれどこへかの拔道だらうと思ひながら、其後について凡そ半町もあるいた、此所は天主敎の墓地で、墓石には「ヨハネ」だの「マリヤ」だの「ラストマン」だのと刻まれて其下に又日本の名がほりつけられてある、だん〳〵見

て行くうちに「父を信ずるものは死すとも生く」と書いてある、耶蘇は面白い事を云ふものだと思ひながら立止まつて、あちこち見て居るうち、今のおかみさんを見失つたので、何でも一本道だからこれを眞すぐに行けば宜いのだと、どし／＼進んで行つた迄は宜かつたが、溝があつて行止まり。一體彼の人はどこから行つたらうと、方々見まはしたがどこからも行かれさうもないので、仕方なしに元の道へもどつて、以前の坂を上つた。杉並木の下は晝でもなほ薄暗い、花にうかれる萬人の人はあつても此靜寂な谷中のほとりを逍遙する人はないと見えて、パッタリ人足が絶えて居る、淋しいと云へば淋しいが、ほこりが煙りの樣に立つ雜沓の花の下にあそぶよりはむしろ心持ちが宜い。人生に用の無い幾多の人の安らかに眠つて居る奥津城に、ふりかゝる花吹雪の白いこと。とある横町を右に折れて、うねり道を辿るとこゝにも亦花吹雪、落花を踏んで七八ツの女の子が二人、赤い糸をつけた針の先へ、花を一瓣／＼さして居る、「お花チヤン隨分さしたのネ、私是つぱかりよ」「あら貴女の方がたくさんだワ」二人は私の下駄の音に驚いたかの樣に手を休めて、パチッとした目を見張つた「まあ綺麗ね何になさるの」と聞いて見ると「こうするのよ」と一人が袂から五寸許の花輪にしたのを出して見せた。何んて可愛いんだらう、私も今一度あんな時代に返つて見たいと思ひながら五六間あるくと、道はやゝせまく二筋に分かれて居る、一方の角には鐵柵をめぐらした中に面白い形をした自然石に、伊藤道光としるされて傍に「ちり深き浮世に増さるめいどかな」とほりつけてある、めいどに行つた事のある人が作つたものと見える、「へーもう百ケ日になりますかな、つひ此間のやうな氣がしますが」後で人聲がするのでふと振りむくと、五十前後の男が手桶と桃の花とを持つて先へ立つて來る、やゝ遲れて紋羽二重の道行きを着た上品な婦人が、小またにあるきながら、「あれだけにしこんで先立たれたんでネ……」二人はつと私の方へ目を向けたが、其まゝ向側の墓地へ入つて、幾つかの墓石を縫うてやがて消えてしまつた、どこからか沈丁花の香がぷーんとはなをかすめる、ほっと私は思出した樣に歩るき出した。

「それなら行くよと別れたが……永の別れとなつたのか……」歌つて來たのは十二三の小僧で、小さい風呂敷包を背負つて、すた／＼とかけだしていつた「霞たなびく山々の、盛りの花をながめんと……」向ふ側の道

を學生が歌ひながら通り過ぎた、一度寂寞を破られたが、やがて又元の靜けさに歸つた、淋しい道を彼方此方とさまよつて、どこをどう歩るいたか知らないが、はからず五重の塔の後へ出た。山椿の根本へ三脚を据ゑて美術學校の生徒が寫生をして居る、そつと後からのぞいて見ると、はるか向ふの森をうつして居るらしい、天王寺の通りへ出るとさすが本通りだけあつて人通りもなかく多い、さて是からどう行つたものかと暫く考へたが、日暮里から山手線で歸る事と決して足早にあるきだした、さつと風が吹くと櫻の花がばらばらと肩へ散りかゝる。

神田

樂子

「カン……カン……」とのろまな音が不意に頭の上でした。激しい都會の中央で聞くには餘り不調和な鈍い響きである。

神田金澤町の往來に面した一角、うすく曇つた四月の空に、冷めたい白い大時計の表面はカッキリ際立つて見えた。

赤い煉瓦塀――黑い土藏――眞白な時計――

魔物のあげるやうな時音、何時の世から定まつたかしらぬが此の不思議な數字の上を歩む針――夫れは時を刻み、若きを老いさせ、花を咲かして又散らしめる恐ろしいものの一つだ。

魔物の姿は、日の照る日も、風の吹く日も、雨の降る日も、凡てのものの上に冷然として此の都會の一角に立つて、間のびた、然うしておそろしい物の音を發するのだ。

街の中は、電車の往來、人の通行、車の往還、あらゆる雜然とした音をもつて此の時計の時音に對し反響をしてゐる。

然し夫れは何らの力も有してゐない。

この僅かなゆるい音は都會の動搖の全部の響を壓して、寂然とした感じを私の胸に與へた。

私の幼い時も此所を通つて此の時計の音をきいた。

そして今また茲に同じ音響を耳にした。

此の後、十年、二十年、あるひは百年も千年も續いて此の臺上の時計は都會の背に鞭うつごとく鳴るのであらう。

恐らく此の時計の音の已む時は、全世界に於けるあらゆる物の終末の日ではあるまいか――

○

窓を開けて夕方の薄濁つた空を眺めてゐた私の眼は此處から斜めに見える長屋の二階に注がれると、いつか凝乎とあるものを見つめて居た。

薄暗い陰氣な裏長屋だ。一體五軒町といふ所は長屋の多い所だが、此麼に狹い見苦しいのもない。隨分古いと見えて家がいかにも汚なく傷んで居る、雖然古い計りでなく、住まひてが家に構ふ餘裕のない人達とは想像するまでもない。

二階つきの三軒長屋、どんな人が住まつてゐるかよくは知らぬ。毎日うちの前へ遊びに來るまあちやんと云ふ十一二の女子の言葉に聞くと、あんな狹い長屋の中に六つだとか七つだとか竈があるといふ事だ。

まあちやんの母親はこの長屋に人の物の洗ひ張をして稼いでゐる。

私の今居る窓の前には建仁寺垣があつてこゝの大家さんが住んでゐるが、垣根を少し離れて、大家さんとこと私とことから長屋の前に出られる木戸がある。時時それから出る事があると、いつも大きな盥が木戸の際に立てかけてあつて、どうかすると木戸のすぐ前にまあちやんの母親がじやぶ／＼としてゐる事もあつた

多辯らしいまあちやんの母親獨りの聲がいつも長屋の前に高いけれど、あとの人は奈何な人が居るか知らぬ。只血色のすぐれない、神經衰弱のやうな書生が一人、二階の此方から見ると一番手前の部屋にはいつてるのは疾うから氣がついてゐた。別にちやんとした學校に行く風にも見えないけれど、よく友達らしい學生と連立つてゐることがある。

二三日前の朝、室を掃除しながら仍且その二階をふと見上げると、つひぞ見た事もない眉目はつきりした學生風の絣きたのが欄干に倚つて此方を見てゐたのでおやと思つたが長屋にゐる書生の友達とはどうも思へなかつた。

何しろ妙な長屋とは前から思つて居たが、今ぢつと見詰てゐる私の眼に映つてるものは、この長屋に對しての私の心に一層の好奇心を持たしめた。

破れた壁、障子、柱の所に小さい提灯がぶら下つて其下にライオン齒磨の袋が見え、廊下の中程に鼠色の手拭がだらしなく掛かつてるかと思ふと、紙屑籠が其下に見えてる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

　向ふの壁際には雨傘と袋に這入つた洋傘と、箒、目笊までが並んでかゝつてる。其でちやく／＼と醜い二階の廊下に立つて、隅のてすりの外の張出しに二俵並べた炭の片方から摑み出して十能に入れてゐる若い女がある。私の眼は夫れに注がれて居たのだ。

板三枚を危ふげに張出しにした上には炭二俵と並んで蜜柑の空箱とも一つ何かの空箱とがあり、其前の方に楓の木らしいのを植ゑた土鉢が一つ置いてあつた。斜めに見る女の顔は夕方のうす暗い二階に際立つて白粉が濃かつた。隨分と突出した庇髪にお納戸色のリボンをさして粗い藤襷のやうな柄の被布をきた處は全然女學生風ではあるけれど、其華やかさが少しく周圍と不調和に見えて、何だらう？と疑念が抱かれる。

　こゝへ私等がきてからもう小半年になるけれど、今までこの女を見たのは前に一度と今とで二度きりなのだ。この前見たときは朝であつた。帶も締めないで細紐をまきつけた起ぬけの姿で火を焚きつけてゐたが朝餐炊く火の煙は白く廊下からこつちの方へ流れてきた。

　私は其時始めて廊下の中程、こゝから見ると欄干の柱の蔭に七輪か何かあるのを知つた、然して手拭のかかつてる邊に梯子があるとみえて、そこから下へ消えた女の姿を其時見た。

　何だらう？　何だらう？

　十能を持つた女は此方から見られるのも知らず頻りに炭をかき廻してゐる。

「何でせう、あの長屋の二階に居る女は？　餘程妙ですのね。白粉をまつしろに塗つて粗い被布なんか着てまるで女學生のやうですけれど――」

と窓を閉めて次の室へ來て机に對つてゐらつしやる夫に恁う云ふと、

「其所の長屋は餘程變だね、確かに書けるよ――その女はこれなんぢやないか？」

と私の袖を引いて笑はれた。

　都會の裏面！暗い印象！　私は重つくるしい心持を覺えた。

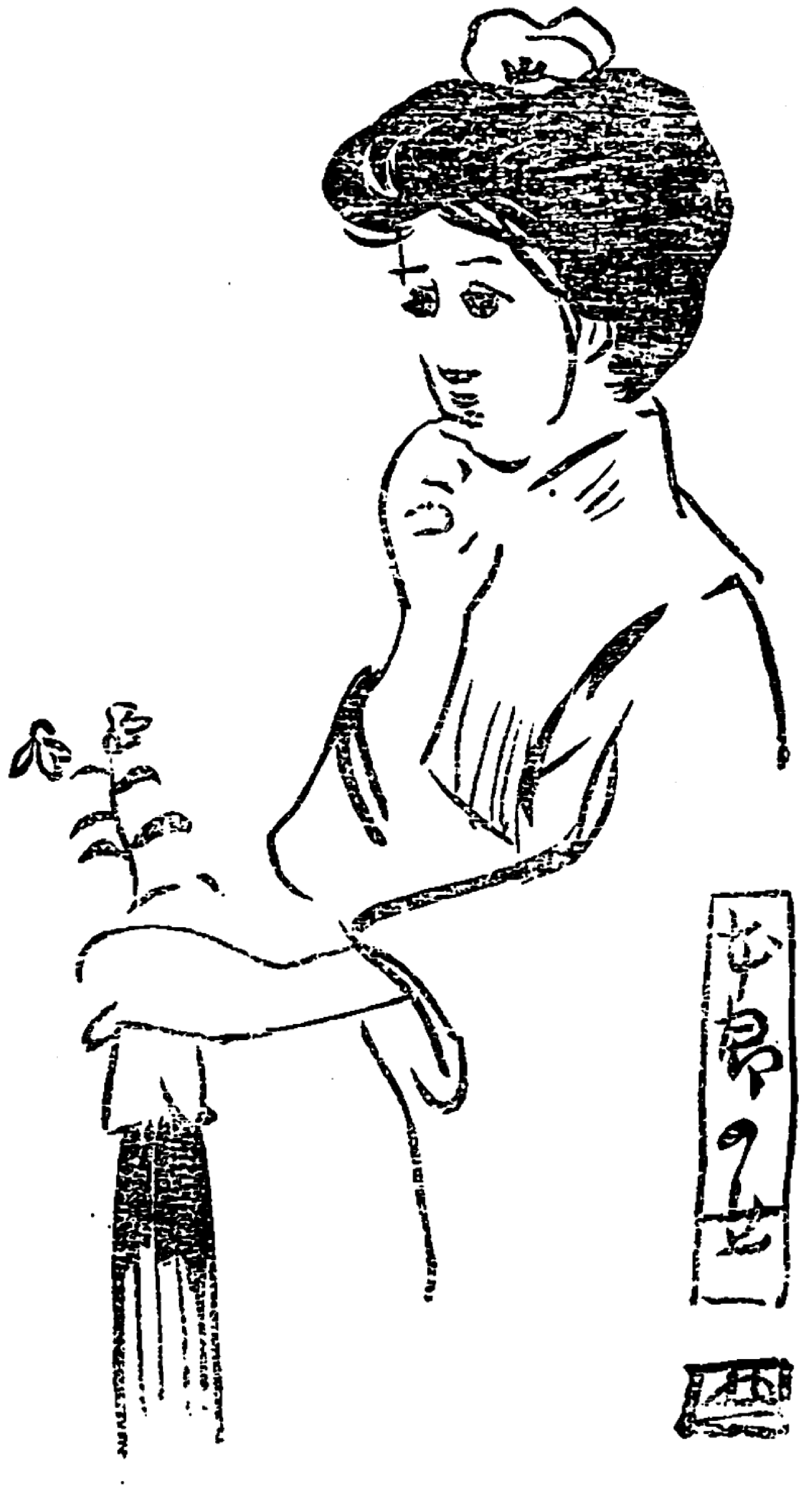
西片町

千とせ

　阿部伯爵邸の門前の大榎を取り圍んで可愛盛りの少女が五六人、赤いリボンの頭を振り立て

て鬼事に餘念のない其の傍に、三十を越えたか未だか位の、根の高い丸髷に紫絞りの手柄をあしらつて、玉の簪をぎゆつと差し込み、細かい絣の銘仙の着物に八丈の書生羽織の格好のいゝ體をぐつとそらして抱いた三ッ計りの小兒に、子供達の戯れる樣を見せて居たが「母さんこれ持つて居て頂戴な」メリンス友禪の被布を抱へて少女が走つて來た、「何ですね、母さんは敏さんを抱つこして居るでは有りませんか、そして被布なんて脱ぐとお風引き升よ……着て被居い」「デモ暑いんですもの」「餘り駈るからですよ……さあもうお怪我でもするといけないからお家へ歸りませう、ね母さんと」（いの部）と書いた立て札に付いて廻ると、杉の生垣を廻らした冠木門の家からチリチリンーと鈴の音と共に、白のボアーを襟元へフックリ捲いて、ぞろつと着流した小紋縮緬の二枚重ねに、藍葡萄地へ孔雀を織り出した糸錦の丸帯を高くきりゝと〆て、千代田草履の歩び緩やかに供の女を顧つゝ「遲く成つたわねー」赤い手柄の初々しいおはつ髷の鬢のほつれ毛が、ショーエンジでほんのりした頰へほろりと落ち掛つたのをリングの光る華奢な指先に搔き上げながら云ふ「イエ然うでもムいません」叮嚀に疊んだ友禪の風呂敷を頤で押へて、亂れた帶の形を直す「丁度三時二十分過ぎ…こんなに長く成つてお姑さん愕りして被居たらう」金七寳の小形のウオッチをパチッと音させて帶の間へ挾む「イーエ御院樣は別に何とも仰有つて被居いませんが……もう大方お歸り時分と存じましてお迎ひに上りましたの」「ソー御苦勞樣で有つたね、伯母樣がお年を召て被在るもんだからお淋しがつて、モ少し〱つてお止め遊ばすのでね、いつでも〱つひ長居をするやうに成るのよ」「そうでムいませうとも、お年寄はどなた樣でもお客樣をお悅び遊ばすもんでムい升から」四十格好の鼠地コートを着た小作りの女が白壁の角を曲る時擦れ違ひ樣に一寸振り返つて行く。今一雨に綻びさうな氣はひをみせてゐる幾本かの櫻の竝んだ奥深い門内から「高き名を雲井に上て富士の根の、雪を回らす舞のかざし、舞のかざしの其の隙に〱……」と小袖曾我が聞える、四五軒先の（古流活花指南、〇〇庵）優しい文字の札の掛けて有る格子から辛夷を手にして未だ肩上げの跡さへ見える被布の襟の立つのを氣にしながら、でつぷり肥えた色の白い、桃割れに白丈長掛けたるさへ賤しからぬ娘が、細い溝に付いて曲る、途端「藤野さん……」と聲かけて、靴先輕く小走りに追

ひ付いたのは、後れ毛多い髪を令嬢巻にして下の方へ巾廣の白茶のリボンを落ちさうにさして、纖い胴を袴紐の上からバンドでぐつと〆たのを見てもお茶の水の生徒だなと頷かれる「アラ、君子さん……暫くでしたわね」「本當に久敷くお目に懸りませんでした事ね、今あそこでちらつとお見懸け申したら、どうもあなたらしいので一生懸命で駈けて來たのよ」「ソー、私ちつとも知らないで失禮しました、お姉さんは御機嫌よくつて?」「ヱヽ有難う……一昨日も一寸參りましたが遲く成りましたのでお寄り申しも致ませんで」「イーヱどう致しまして私もお尋ねしやうと思ひながら、つひ御無沙汰計仕て居りましてね、どうぞお序の時宜敷く被仰つて頂戴」「ハア申傳へます……あなたお花のお稽古遊ばして被在るの」「ヱヽもう此頃は大人敷く成りましたからねホヽヽ、君子さんいつ御卒業?」「來年」「ソー早いもんだわねえ、お姉さんは此頃何を御勉強して被在つて?」「もう何も勉強して居りませんわ」「フレンチに御熱心でしたつけね、今でもでせう」「イーヱちつとも……あの先方のお姑樣が現代的が大お嫌ひだもんですからね、此頃はお歌のお相手をさせられるんで俄稽古で固つて居りますわホホヽ、そして束髪はいけないつて仰有るもんですから髷にして居ますのよ」「マアお姉さんが?」「ですから元の學校の方にお目に掛かれないつて申して居りますの」「そんな事は有りませんけれど」丸に根笹の紋の有るゴム輪の俥が一軒毎に表札を眺めながら來て「少々物を承ります、此の邊に村田さんと仰有る方はムいませんか」ひよこひよこと頭を下る「ソーですね、村田さん……と、君子



さん御存じなくつて」「村田さん……私存じませんけれど、あの何號ですか」「ほの……」と車夫が云ひ澱んで居る内に、車上の婦人が絹ショールの上から胸のあたりへ輕く手を置いてにこやかに會釋して「ほの十二號でムい升が」「ほ？ほは是からあちらの方でムいませう…この邊はに號ですから」「ハアー、どこか差配はムいますまいか」「差配は是れを眞直に二町程いらして一寸右へ曲りますと、交番がムいますから、夫れに付いて左へ折れますと確か二軒目かゞ差配所でムいます」「アヽ左樣でムいますか、どうも有難うムいました」車夫も共々叮嚀に挨拶して引き出す「西片町は番地で解らないんだから面倒だね」「左樣でムいます、何しろ十番地は廣いんでムいますから……矢張りいろは番號よりも一番二番で數へ上げて行く方が解り易いんですけれど、あゝあの人に又聽いて見ませう……少々物を承り升、此の邊に村田さんと仰有る方はムいますまいか」とざつぱりした縞の着物に古びた山吹繻子と、メリンスの晝夜帶を丸く結んだ中働き風の女が、先づ車上の婦人に目を移して「村田さん…あゝ村田さんてお琴のお師匠さんでは無いんですか」「イーエ、あの宮内省へお務めなさる方で……つひ此頃お越しに成つたんですが」「ソーですねえ、それぢやあ知りませんが此の先の交番か、さもなければ……あゝあそこの、そらそこへがすが見えるでせう、あの車屋でお聞きに成つたら大底お解りに成りますよ」「どうも有難うムい」行き過ぎる車をそろ〳〵歩きながら見送つて居ると「お春さんお使ひ」「エッ、エヽ一寸そこ迄、坊ちやん婆やにおんぶでようムいますね……オヤ大層お六かしいお顏遊ばして、どうなさいましたの」「今お目が醒めた計り」「あゝさうですか道理でこそ……今日はお孃樣限りどなたもお留守ですからお遊ばせにお出なさいな」「エヽ有難う……又後程に」「ソー、ぢやあ坊ちやんハイチヤイ……左樣なら」

もう盛り切て散りさうな白桃の咲いた新築の二階から「華清の春の朝がすみ、柳さくらの色深く錦のたもとかをり來て、みゆき待つぞうるはしき……」と床しき爪音がもれて來て淡い落日の光は黒板塀に斜にさして居る。

斯くて熱鬧なる都會の一部を占領して、靜に暮れて行く邸町の夜は、更に更に寂しくなる、月ある宵の間のそゞろ歩きには、美しの人もあらうけれど――。

美しい動物園

しげを

幾軒並んで居るかそれは數へもしなかつた。右にも並んで居る。左にも續いて居る。新宿の終點さして進む電車の隅に腰を下して居た私は、最初同じやうな造りの家々が、板塀に圍まれて兩側に並んで居るのを見て、なんの不審もまたなんの注意も起こさないで過ぎた。豐多摩郡内に住んで居る私は、その後幾度か市中への行き歸りにこゝを通つた。晝は打水の跡がひつそりと敷石の上に見えて、大低は下つて居る淺黄の暖簾の奥に、人が住んで居るのかと思ふ程靜まりかへつて居る。夏の夜四谷の夜店をひやかしてその足でずつとこゝを過ぎたこともある。その時は晝とは反對に軒々の瓦斯燈に灯が點つて、赤い硝子や青い光りの中に、何樓とか何屋とかいふその家の名を知ることが出來たその下をくゞる人、また潜つて出て來た職人風の男なぞが、わざとよろ〳〵となつて私につき當らうとするのにも遇つた。

その後郷里から出て來た友達とこゝを通る時に、これは何だと聞かれて私は猶豫もなく新宿のお女郎屋だと答へた。いつの間にか私にもわかつてたものと見える。さうしてまた直ぐに話の續きにうつつた。

其後また一人の友達とこゝを通つた。その友達は電車の窓越しに前を眺め後を振り向いて、さうして微笑み乍らこんなことを言つた。

「私今までこれをお料理屋だとばつかり思つてたのよお女郎屋なんですつてねえ、だつてもね、いつか良人と一緒に此處を通つた時に、私がこれはなんですかつて聞いたら良人つたらお料理屋だつてさういふんですもの、ホヽヽヽ、澤山お料理やが並んでるんだことと思ひましたわ、全く本氣にしてしまつたのよ」と。

不思議にそれから私はこれらの家々に對する好奇心が沸いて來た。通るたびに〳〵暗い圍ひの中の光景が想像される。以前私が世話になつて居た麴町の家の其處の主人が、近頃ふとしたことからこんな場所に通ひ出して、しかも足繁くといふ話を其家のお祖母さんから聞かせられて、泣かれてからは、一層好奇心やら何やらが增して、通るたびに私はこの家々に就てのことを、あらゆる方面から考へるやうになつた。

ある夜私はまたぶら〳〵と其前を歩いて居た。すると、つとある一軒から出て來た脊の高い男が、電燈の影に私を透かすやうにしてみて、そのまゝすた〳〵と歩き出した。私はむら〳〵と好奇心が起つて後れずに其男の外套の影に隨いて行つた。

二三軒越した。男は振り向きもせずにずつとはいつて行く。私は敷石に下駄の音を忍ばせるやうにして、男の蔭に從いた。衝立やうの建物が入口を遮ぎつて居る。男の袖の下からつと光線がさしたと思ふと、なんとまア！左手の格子の中に目を射る色彩が！揃への赤い襦袢に金繍の襟を廣げて、黑地の仕襠をはふつて居た。たゞ白い顔の艶のなさ、目の卑しさ、口の大きさと思ふ間に一人は長い煙管をとつて煙を吐いた。鏡に向つて顔を直して居た女が此方を向く。額のせまいいやしい顔だ！ふと影が動いて私の半身が現はれかゝつたので、私は慌忙てて身をひらいた。急いで暖簾を分けて表に出て、するともなしに四邊を見廻して私はほつと息を吐いた。

不思議？それとも違ふ。驚愕？それとも違ふ。たゞ穩かでない胸を押へて私は首を垂れて歩いて居たが、つと思ひ切つてとある一軒の檐を潛つた。如何にしても女の身を現はにする勇氣はなく、前に立つて居る男と男の肩の間に首だけのばした。此家には檻のやうな格子に白い幕が引いてあつた。

「いよう！お揃へだねつ」

印半纏を頭からすつぽりかぶつた男が、白い幕を捲つてぴたりと格子に顔を押しつけた。

「おあがんなさいよ、おあがんなさいよ」

濁つた鼻にかゝつた聲が格子から洩れる。

「有難う！」

と男は早口に言つて、茶化したやうに首をぽく〳〵下げた。後に居た男が引き取つて聲高に笑つた。

「まア色の褪めた着物！」

私は我を忘れてふと呟いた。

「全くですねつ」

と直ぐ前の男が頓狂な聲で應ずる。私ははつとして一歩後に退いた。さうして男が振りかへつて怪訝さうな顔をした時、格子の脇に腰をかけて居た男が、づかづかと起つて來さうな氣がしたので、私は急いで逃げるやうに表に出た。

なんとも言ひやうのない不快な氣持ち、それはしかし彼等賤しい女に對するのそれではなくて、寧ろ男と

いふものに對するの不快であつた。

色の褪めた青い着物が眼に殘る！白粉の中に動く彼等の眉、目、鼻、口、どこに一つ人間らしい靈が認められよう！形姿を飾つて店に曝す肉の賣物、それに集る餓ゑたる瘦犬それは男ではないか！私は男といふものがつく〴〵不可解になつた。

恐らく男といふものを何處までも尊敬して行きたいと思ふのは私ばかりであるまいのに！

賣物の女、それはなんのことはない、誰れかゞ言つたやうに美しい動物園！

檢查日

はからずも或る日私は不思議なものを見た。

新宿病院の門を折れて、二人三人づゝ並んだ女が、あとから〳〵といくらも續いた。細い顏、丸い顏、背の高いの低いの、三十近く見られるのゝ島田もあれば赦熊を入れて大きく桃山に結つた青い顏の女もある。年甲斐もなく派手な好みの造りもあれば、しだらなく前を長めにして恥しげもなくずる〳〵歩いて來るのもある。

人が立ちどまりて見て居る。ひつきりなしに續く電車の中から、車掌も運轉手も、客は勿論皆好奇心の目をその方にうつした。

藥壜を下げた女も後から續いた。猶青い顏をして人力車に乘つたのもある。暫く其人波が搖れる。あゝ幾つとも知れぬ其顏のどれにも〳〵、もの恥ぢの色を見出すことは出來なかつた。

再びあの檻の中にかへつて行くのだ。

金蓮華

電車が走る間のたゞ數分間。

其家並のとある一軒の前に、一挺の駕籠が置かれてあつた。其駕籠の四隅には金蓮華がさゝれてある。外に一對の造花が印袢纏を着た男によつて捧げられてあつた。淺黃の帶をした男が、一人は跼んで草鞋の紐を結び直して居る。羽織を着た男がつと塀の中から現はれた。——金蓮華が日に映えてぴか〳〵して居る。

私は吊皮の手を外して空いた席に腰を下して、殆ど毎日のやうに新聞の三面を賑はして居る記事を思つた洲崎の無理心中だとか、吉原の情死未遂だとか——さうしてあの駕籠の中にも、血に塗れた女が、齒を喰ひしばりてうつぶして居るのではないかなどと思つた。

深川

ふぢ

都會の情緒。

――この言葉を思浮べる度に、自分は抑へ難い胸のとどろきを覺え、限なき心の欲望と空想は、常にフレッシユな感覺であらゆる事象に向つて何等の差支もなく自由に、自分の情緒が夢幻に織出す音樂の響に醉つて居たい。

――先づ、自分は濕つた常盤津の三味線の響の樣な、水の深川の懷かしい情趣を語らうか、或は、初夏の夕一頻叢雨が過ぎた後の、雨に濡れた銀座街頭の音樂的な情緒を描出さうか、然なくば、淺草公園の池端の濺み濁つた喧囂雜沓の空氣、又は薄暗い小家で演ずる、女藝人の印象を書かうか。

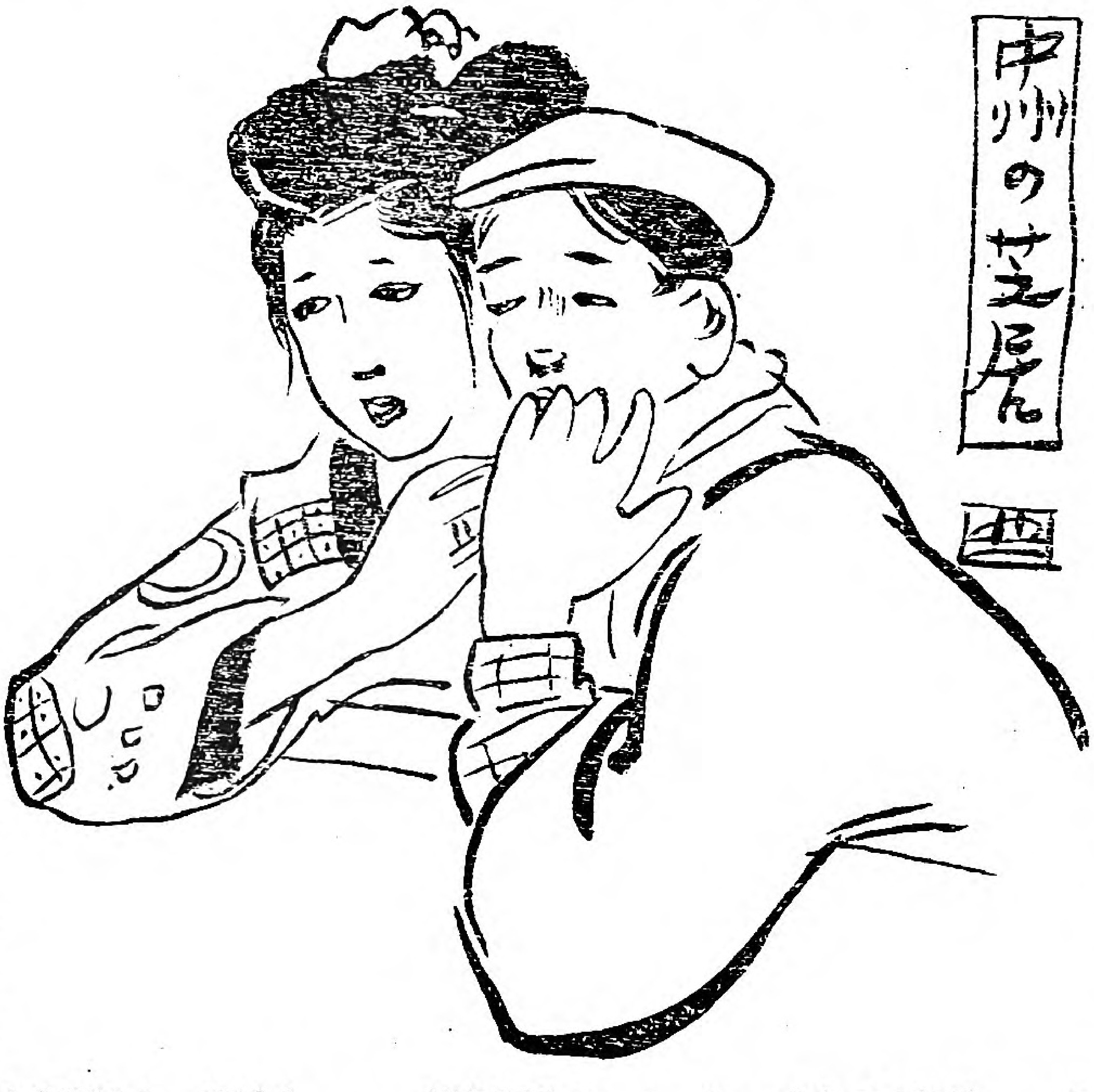
何日も、自分は水の深川のわびしい生活を思ふ度に歌麿や國芳の描いた色彩の褪せた古い錦繪を連想する。そして、彼の豐麗とした纎細な薄墨の曲線が、日に日に頽れ行くこの里の懷かしい江戸趣味の哀れさを偲ばしめる。

――人々は斯麼昔の趣味は、今更吾々若い者の口から聞きたくない、江戸趣味の話が聞きたくば、實際その時代に生活した人も澤山あると云ふかも知れないが少くとも近來の未成品や模倣の小說ばかりに飽々した吾等は、昔でも今でも關はない、只管完成した藝術品の方を趣味深く慊ぶ。

自分は泉鏡花氏の『辰巳巷談』や『葛飾砂子』を讀んで江戸時代の浮世繪を見る感がしたばかりであるが、永井氏の『深川の唄』を見て、現今の深川の廢頹して行く情趣を豐麗な才筆で描かれたのを慊ぶ、一度、かの昔ながらの俳優の名を染拔いた幟が思懸ない街の角に悄垂れて居る富岡門前町を、深川座の淨瑠璃劇の繪看板を眺め、公園側の溝渠端に出て見給へ。それが滿潮の午後でもあると、河岸に添ふた道路と平行する程まで滿々と浸した淸水は靑く澄んで、徐かに流れて居る。而して、土地より一際高く石垣を積んで、その下を舟の通行する樣に高く架した、幾個かの昔風の木造の橋を渡つて、大和町なり木場の邊に行くと、陸地の內に渠溝があると云ふよりは、大な溝渠を埋立てゝ土地を造つたとしか思へない、昔ながらの㊀とか丹德と

か云つた通名の大な木材問屋が連る。

初夏の午後あたり此邊を通つて見給へ。橋の日陰を選つて纜いだ荷足船、河岸に繫いだ大な山から切出したばかりの材木が水に浸つて居て、河岸の納屋には板に挽いた樅、檜、杉などの心地よく木理の通つたのが一樣に立懸けてある。自分はこれ等の木材の發散するテレピン質の鋭い脂の匂、或は溝渠に浸した生木の樹皮と幹との間に甘膚から分泌する密分の、甘鈍い官能的の香が、唯ならぬ感覺を縱にするのを好む。又は、雨霽の後の石材問屋の側を過ぎて、雨に濕ふた例へば碧色、代赭の大理石或は種々の形狀をした庭石の濡れた潤色は、吾々の感覺を新鮮に神經的に清々しい印象を與へる。



自分の不器用な敍述は、到底この土地の印象深い情趣を傳へる事は出來ない。で唯諸君に斯麼情緒的なロマンチックな都會趣味の處があると云ふ紹介に留つて了ふかも知れないが、今少しく此忘られない水の深川の印象を描いてみよう。

干潮の時の、兩岸の青緑が纏つた石崖に波狀の水平線を殘して底つた河床も、濁つた感覺ながらも何處となく調つた藝術的である。而して、澱んだその水面より放つメタンの緑い毒泡にも、又は立迷ふ泥濘の香にも、嗅感の快味を覺える。

斜に溝渠を架した欄干の朽ちた危い板橋を渡つて、恰度浮殿の樣に水中から柱を建てた木材納屋には挽立の板を立懸け、その下の水面は之又生木の蓄材を水に浸して繫いである。斯麼處を松や樫などの常盤木の茂つた蓄材池の堤防を、細い板を並べた假橋や、大な水門の堰の上を

跳越えると、急に製材處の庭に出たりする。而して、此の靜かな朗かな初夏の空氣の中に、のんびりした機械挽や大鋸の響が緩かに音波を漲らし、大鋸屑の懷かしい香氣が遠く鋭く香る。その小家の根太まで浸りさうな靜穩な水面を、鷗が徐かに翅して舞ふ。

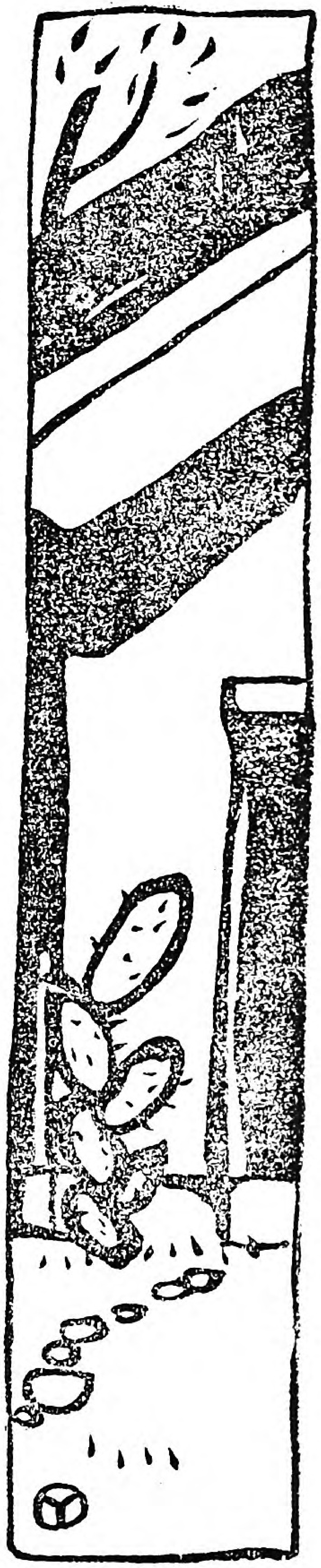
深川の女。——自分の趣味性は、如何に此言葉を懷かしみ好奇の瞳で迎へるであらう。

かの鏡花氏が描いた富岡門前町の三味線屋の娘、自分は自分で可笑しい程その邊を幾度も辿つて、殆ど戶毎に理想的に描いた深川の女を探したことがある。而して、夫が如何にても此里には其樣美人が有る氣がしてならない。

木下氏も些つと書いたが、この邊の女は未だに幅の廣い黑繻子の襟の懸つた衣服を着て居る。富岡八幡の歳越の祭禮には、魔除けの白羽の矢を授かる町家の着飾つた娘達で雜沓を極め、節分の豆撒の緣起事が非常に賑ひ、茶屋、役者、相撲などの藝人や水商賣、魚市場、鳶の者と云つた連中の名前が、有在奉納物、寄進物の玉垣や金燈籠などに刻込まれてある。又この地の緣日には、山手や下町とは異つて、昔風の怪氣な寫繪が役者の假言を眞似るし、かるめろ屋の屋臺や、子供相手のしんこ細工、よか〱飴屋の踊を見ることが出來る。

或日、八幡社の緣日の午後、深川公園を吉原內陣講と書いた門を潜つて、富岡門前町の唯ある薄暗い油屋の油に黑く光つた大黑柱の前、『けつかい』の傍に半面と結立の高髷を見せて坐つた深川の女を見て自分の胸を轟かした。

> 其の頃、繁華な市中から此の土地へ通つて來るには、電車の便はなし、人力車は高いばかりか、何年間とも知れず、永代橋の橋普請で、近所の往來は竹矢來で狹められ、石や小砂利で歩けぬ程に荒らされてゐた處から、誰れも彼れも、人は皆、汐留から出て築地の堀割を通つて來る小さな石油の蒸汽船、もしくは南八丁堀の河岸緣に「出ますよ〱」と呼びながら一向出發せずに豆腐屋のやうな鈴ばかり鳴らし立てゝゐる櫓舟に乘り、石川島を向ふに望んで越前堀に添ひ、やがて引汐上汐の波にゆられながら、印度洋でも横斷するやうに、やつと事で、永代橋の河下を横ぎり、越中島から蛤町の堀割に這入るのである、不動樣のお三日といふ晝過ぎなぞ參詣歸りの人々が「つくばね」や、繭玉や、成田山の提灯や、藁細工の住吉踊の人形なぞ、さま〲な玩具を携へて其中には根下りの銀杏返しや、印袢纏の頭なども交つてゐて、幾艘の小舟は櫓の音を揃へ碇泊した荷舟の間をば聲を掛け合ひ、靜な潮に從つて流れて行く、水にうつる人々の衣服や、玩具や、提灯の色、それをば諸車止と高札打つたる朽ちた木の橋から欄干に凭れて眺める心地の、如何に美しかつたであらう。（永井荷風氏「深川の唄」より）



都會の渦巻に漂はされつゝある
若き女の眞情

濁つた室に輝く電燈

やゑ子

種々の意味を含んだ東京に住んでゐると云ふ觀念を持つた時、それに伴ふ誇の大きく、愁の深い事を意識した。

汚れた搔き濁つた空氣の充滿した部屋に電燈の燦と光るのを見て、あの光線を美しいと云ふ、私は恁麼ものだと想ひました。

若い女は操を賣つた、女中は勞力と時を賣つた、人は金を得ん爲めに出入して居る。相場師の家は金の力に總てが動く、此の現實は私とは沒交渉のものでない。父樣はそれに依つて淡い慰藉を得て居なさる。私と妹は生活の爲めに囚はれずに居る。

雖然父樣に敢て云ふ、反省して下さい。凡てを棄ててとは言ひません。只一つ肉の慾を棄てゝ下さい。卑しい慾に、破れた心を償はうとなさる。然しそれでは不可能です。最つと高尙な趣味の高い者で無くちや眞の滿足は得られません。御覽なさい貴方の意氣は急激に消耗して被居るではありませんか。父樣熟慮して下さい。亡き實母樣と二つの心で祈ります。そして又父樣は、父樣母樣お二人の努力で成つた家を財産を、何故に彼麼者の自由に爲せるのですか。私は不服です。

母様は働いて死んだ代りに彼者が樂をする。其麽理屈が何處に有ります。眞個に口惜しい、殘念の感情が涌くと堪らなくなる。でも彼人は其麽氣で甚麽年寄つた父様に妻仕へして居るのであろう。底深い慾望の閃めきを感じる時、巧術を推知する時、微かな恐怖の深さを解せず大きな謎を課せられたやうな、憂慮がある。父様は彼者は賢いからと被仰つた。賢い女、それを母と呼ぶには私は餘り單純な性格だ。僞の情や欺く言葉の迸る二つ三つの心を一時に持つ事は出來ない。

雖然私は父の子である以上、此の人を母と崇める義務を持つのだ。吁義理。眞の聲の痛ましい叫びよ。私も又社會の道德に繋れて居る。

運命か人の業か知らぬが、此の現實の在るからには現實の上に處して行くだけの方法と力を得ねばならない。力を得ねば、鋭い要求が頭腦をそゝる。自分の爲めに狂熱した心靈は黄昏の壓迫にふと自然に返つた。大きい白い光りは遠のいて、暗色の小さい者が左から右からむくむく起きて冷い息を家と人とに吐きかけた。人はそれに攻められて狂ふ樣に、狼狽だした。忙しい下駄の運びと、恟りした鎚の音と、物賣りの叫び聲と亂雜に響いて來る。お父様は遲い。妹も今日は。

私も如何か爲なくちやならない。茶の間には所謂母様お一人だ。友達の手紙の空知の氷柱の話でもと、立ち上つたが、滑らかな舌の働きとなまめかしい襟の白粉の跡を浮べて躊躇した時、玄關に車の響が聽えた。

「父様ッ」大きな味方を得たやうに力を得て、玄關に馳出すと母様もそわそわ出て被入つた。帽子を受け取り乍らお顔を窺うと難しい意味のお口つきだ。闇の中

に燐寸が消えた樣に強い心は凡て去つた。

「今日も亦」と思つた。微かな疵の悲痛。

暖かい手と暖かい着物が父樣を溫めて、父樣は全く家の人と化られた。母樣の慰藉の言葉を聽き乍ら、郵便の字を追駈ける樣にお讀みなさる。母樣は「何ですの」と鳥渡覗いて、脂肪の浮いたお顏を詰らなさうに見つめて被入つた。終るのを待つて「今日は如何でした」

「高かつたから親は手放した」怒氣の潜んだ音律だ。

「宜う御座んしたねえ」聲は素氣なく走つて去つた。

父樣は卷煙草を忙しさうに吸つて、凝と默想して被居つたが御膳が置かれて、銚子が置かれると、急に火鉢に突き込んで、膝を崩しなさつた。

「如何して今日は御機嫌が惡い」繰り返し乍ら私は矢張り眺めて居た、母樣は器用に注ぎ乍ら「お好きの物を揃へて置きました」御機嫌の惡いのも意に介しない彼の調子であの手腕で。私は憎嫉の念に苦んだ。

父樣は一口飲むで、左の御手で髭を撫で乍ら刺身を召し上る。「む、是れは新らしい。鯛に限る」

其のお一言で私は心が緩くなつた。そして空知の氷柱を御紹介した。

此の事件が落着すると、今迄此事に隱れて居た千代の歸宅の遲い憂慮が突いて起る「早く歸らねば——遊んで居るのか——お琴は濟んだらうに——何をして？——」錯雜に訊ねた。

「ね澄。お前も行くだらう」突然突き込まれたので、

「え。」とまでつき乍ら「何處へ——ですか」

「松島さ。千代が休暇になつたらよ」

「あら父樣。松島なら是非連れて行つて頂戴」

「それ澄ちやんだつてお望みですわ」

あ此の人と一緒、そんなら——と思つたが「否見なきや損だ。我れ勝ちにしなくちや此の劇しい生存競爭に處して行かれやしない」と心で鋭く呟いた。

「それから歸りにずうと伊香保へでもねえお父樣」

私の聲に媚の含んだのを知つて輕い暗愁がした。

「何んだお前等は。狡猾い事許り考へる」心より微笑が聲に閃めいた。母樣の同類と見られちや厭だが、私も眞實行きたい。千代も見たいだらう。

薄すら人の氣合がして千代が悄然と這入つて來た。

「只今」聲は悔悟に顫へて居る。私は庇護ふやうに父樣を見た。そして輕く叱つた。そして松島行きで歡ばせてやつた。

お膳が並んだ。終日閉ぢ籠つた空氣は室に充ちて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

惡溢を流す。虚僞や不倫や嫉妬や貪慾やが隠れて居た此の室に明るい純い光が射したら、と一人痛快がつて居た。

翌朝は早く父様に呼ばれた。起きて急いでお居間に上ると新聞だらけの眞中に丹前召して被居る。例の如く石のお手は煙草吸ひに忙しい。煙の尾を引いてせはしく上下する火を見て居た。

「や手紙を書くんだ――拜啓陳者……」

「あ。待つて下さい。今硯を出しますから」

急かれて急かれて、どぎまぎし乍ら代筆を終へた。

大阪の〇〇仲買店へだ。

父様は秋、秋と母様をお呼びになる。私は最つと寢て被居い。もつと。〳〵聲なく嗚咽つた。三人。父様と私等のみ在るとを希ふので、他を混ぜない眞の父子の愛と情に一時も長く生き度いと思つて。今千代は居ないが、母様成可お遲く………。

雖然父様は容赦なくせか〳〵お呼びになる。未だ――まだ――やつと起きて被入つた。苛立つた跫音がして。此頃の苦慮にお瘦せなさつた。頬にお髮が亂れて二十七より四つほど老けてお見えになる。賢い人は老けて見えると世人は云ふ。私は足りなくて老けて見える。詰らないと思つてつと立つて遁れた。

身仕舞ひして茶の間へ來ると、父様は濱へ行くのだと被仰つて蒼皇と出て被入つた。ビーア腹の上は紙入れや何かゞ膨らんで居た。

千代も「數學が――」と心配さうに登校した。此の子は摺れつ枯らしにし度く無いと想ひ乍ら茫然と立つて居ると云ひ知らぬ哀愁が亂迫する。―吁自分の身―

「自ら弱くするんぢやない」強ひて勵まして、新聞を矢鱈に讀んだ。

お活花から歸るとお祖母さんが居られた。母様がお淋しいから――孫の守旁々――近いから――の名目の下に三日にあげず被入る。お祖母さんとは稱呼ぶが母の母様で、父様より二つ上だ。孫の俊ちやんが側で這ひ廻つて居た。

「おやお歸り。又御邪魔に來ましたよ」きら〳〵と瞳が射た。「否え」私は俯向いて裾を見た。

「ね澄ちやん。昨日は父様遲かつたわねえ」母様は乾燥いだお聲「えゝ。それが如何しまして」

「何あに牛込で強請れてらしたーらしいの」

「男つて者はね、遊んで歸ると氣振り見せまいとしてわざとむづかしい顏するものよ。又奥様にちやほやす

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る人も有るけれど」此人は男の研究が積んでるやうだ。

「眞個に――さ。困つた方。今度は嫁ける嫁けると云つて乍ら、矢張り放さないのよ」

「そりや駄目よ。氣休めに被仰る許りさ」

「ね母樣。此間も牛込のが塀の外で樣子窺つてるんですつて。凄い目付きで可恐なかつたつて時が云ひましたわ。二日行かないと直ぐ妬くんですつて」

嘲笑の口吻、私は何人がと心で睨んだ。

俊ちやんはえ――え――云ひ乍ら疊をばた〱叩く母樣は情の迫つた瞳で俊ちやんを見瞶めた「子供が一人有りさへすれば――」の意味を感じた。

見れば忌はしき顏が在る。聽けばさもしい聲がある打ち消して。打ち消して。

「俊ちやんの活動しますこと。今に天晴の實業家にお成りですよ」

「え丶。何に成りますやら。確りした人間に育てたいものですが――」

當擦りをツと激しい憤りがふつ〱涌いて手足に迄漲つた。續いて父樣だつて。と強い信念が其感情を抑へた。「鳥渡失禮します。私お花活けて參りますから」衿るやうにすうと立つた「お構ひなく」と云つたのが低く遠く聽えた。

遁げると邪推されるのも殘念だが。慾望を滿足させる手段に男を操使する人等は厭だ。自分を潔く引き付けて坐つてる二人を見下した。針の樣な心を柔い肉と溫かい血で包括んで居る人等を。

お花などは活けもせずに、居間に馳け込んで胸を抱た。父樣は其麽卑劣な性格ぢやない。決して無いと強く心で叫んだ。劇しき活動の慰藉の爲めなんだ。汝が又父樣の自由意志を攻擊する價値が有るか。權利を持つか。身分知らずの女！父樣も一個の人だ。相當の智能や識見を持つて居られる。

其人は私等の父である。父ある爲めに私等も存在する。父樣の假の妻も、牛込の妾も金の光りに凡て隱れるぢや無いか。（苦々しい金の色ねえ）

父樣に在る潔き處女と、金に生きる魂、身と、時勢を觀察る頭腦の働きと、遭遇した所に暗激な矛盾が渦卷く。敵地に在る想ひし乍ら、理と情を持ち、自家を沒却せぬには觸る丶所苦惱なきはない。一言一句皆苦痛の叫び。壓迫の呻き。

吁、父樣は私の惱みのひとときに、五百圓儲けなさつたか。千圓の損を遊ばしたか。

入京記

――白蓮の強き自然の薫り――。

長曾我部菊子

私の身にとつて永久の紀念日は三月十七日であつたその日私は、生涯の一轉機に立つて、徒に悶々たる心の羈絆をふつりと切つて、水の低きにつくやうに東京の地にはいつたのである。

回顧すれば、十五日の夜、故國徳島、富田港の埠頭に立つてうら淋しくも孤り行く身を送るとて、多田らん子の君、さわ子の君が、滿腔の親愛と無限の囑望とをもつて私の後姿を見送つてくれた。

其時の月の光の柔らかく青く輝りおろした事。その時の沖合はるか……………浪の踴躍して、私の眼の前に悲哀をふくめるよろこびの音樂を奏して…………あゝ。いかに、私の胸の鼓動したる事よ。不思議な綠色に輝く力。その力のために私は默々とみちびかれて動いたらしい。

十八日の午後には府下△△區△△町。中央新聞社の前の濠端に立つて、大動搖をひき起した後のとーんとした靜寂の底に一種のざわ〳〵したくづれたやうな茫乎とした心持をして、去來する電車の音に、疲勞れた耳をまかしてゐた。

それは、先刻、美しい友が、中央新聞社の某氏に、用があつて、私に紫のふろしき包と、葡萄色のショールとをわたしておいて、行つたのを、待つてゐるのである。

初めの間は人や、俥や、濁つた都の空に浮いてゐる雲や、我が視野をすぐる見なれぬ景物になぐさめられて、心が少し輕かつた。が、いつしか我ながら不思議の心持が、狂はしく、薄暗くなつたり仄明るくなつたりして、とりとめなくなつてゆく。

他人にはまことにさゝいな上京といふ行動も、去年までは、他國に足を入れたこともなかつた、世なれぬ女の身にとつては、さう〳〵容易な事件ではなかつた豫想外强いはげしい刺戟にあつて、ほとんど、心は思考のたちばを失ふて、何から何をどう處置していゝかたゞもう歩いても、佇つても、見ても、聞いても、心は空を泳ぐやうである。

さうして、どうかすると其放心の底からは、わりなき涙が、悲しいといふのぢやないが、こん〳〵と湧き

出てくる。然しながら、僅に、夢のやうな刹那々々…一綫の明るい光は、ほのぼのと、私の靈をさし貫して、その光りの一線にさへまつはつて辿つてゆけば、やがては、黃金宮裏に達し得るといふ思ひ――强い確信は、しつかりと私の氣分を捉へてゐる。

　ちん〱ちん〱と電車の鈴が聞えた時、やう〱我にかへつて、ぶら〱と電車の線路を通りこして、新聞社の側によつて行つた。この日の新聞は、薄曇りしたガラスを透して、微に私の心をひくのだつたけれども、何だか見る氣もしないでゐると、そゝくさと街のはしばかり通る男たちがあわたゞしげに、のぞいてゆく。私の眺めてゐるのは濠をへだてゝ、帝國ホテルや、高架鐵道の建築中なのや名もしらぬ眼前の壯大なる建物である。

　それから△△橋をうよ〱と人の往來する姿である西洋人の夫婦が、女の方が背が高くて、語りつゝ急ぎ足にゆくかたちである。電車のすれちがふ樣。白日ながら、幽に電線のまさつする火花の見えるやうな――轟と耳にこたへる都の雜沓のとゞろき………、都の活動ける調子を見てゐる。

　其間に、車はいくたびか中央新聞社の門内に、がらがらとはいつた。鉛筆をポケットにそろへた若い訪問記者？が下りて急いではいつて行つた、また、機械のやうに、冷靜な態度をして、車にとびのつて去つた記者もあつた、あゝ！今日の事件の記錄者よ！

　私はひきしまる心のまゝで見送つた。

　ただもう、かう動いてゐる。かう働いてゐる。その眼はくる〱と光つてゐる。その足は走るやうである都は活動のるつぼとなつて、人は一刻を爭つてゐる。

　ふと、私は、故鄕にゐて、日々見なれてゐた粘液質の人たちの、黃ばんだ頰、うるめる鈍い眼と、しまりのない濁つた聲と、古びた洋服の後姿をおもひだして變な心持になつて、同時に、二十三年の春と秋と、今まで、その鈍いおどまつた田園の空氣をすつてすごしてゐた私の過去の詫しさと、草あひに今までとろ〱と寢てゐた眼をもうろうと開いた――見張つた、ただそれなりにかうして來て驚愕いてゐる身のゆくすゑの不安とが、しみじみと胸にしみ入る。

　それよりもそれよりも、私の前を通る人はあとからあとから絕間もない。それのに、多いその群の中には一瞥の親をだにゆるさぬ險しいきびしい眼の外に何にも何にもないのだと思つた。滾〱と夕暮の潮のや

うに、寂寥の思出は、私の渾身をおそふて、頰をふりあげて、かみしめる唇のわななく……わななく。折柄とほりすがりの盛裝の少女の姿を見定めやうとして白いひたひの、ぼーつとして見えただけで私の眼はうるんでいつた。

社内からは、十二三の洋服の子供が二人、ちよこちよこと走り出て、右へ一人は行つた。一人は左へ行つた。

手には手紙をもつて。

私はその子供の後姿を見おくつて――つまり、一つの職業の塊を見送つて、現在の私はあの子供よりもさらにさらに、いかに、後姿の憫然なる女であらう？と思つた。

私は何のために東京にかうして來てゐる？

不意の申出でにおどろいておろ／＼なされた、祖母樣、母樣、それに謙太郎に、――「私はたゝかつてきます」たゞさう言つた事の大膽さ。

たゝかはんがため？　戰はんがため！

さらば今いかにすべきか、――心をこゝに集注して、前途によこたはる難關……都會生活のあらましを想ひうかべて見て、あゝ、胸よ！、あゝ、淚よ！。

私の心は狂騰し、私の血は、だく／＼と脈に張る。わな／＼と顫へはからだ中に傳はつてまつげはしめやかにぬれてゆく。

十分……二十分……待つても待つても美しい友の姿は、社から出て來ない。右側の二階の欄から、ぢろりと一眼――たちすくめる私の頭上を見おろした男があつた。ふたゝび見下ろした。其時の不愉快……

あゝ其時私の心は言ひやうもなかつた。

その日は靜に暮れていつた。

青山の宿にかへつて、疊の赤ちやけた二階の三疊の間に、がつかりしてすわつた。らんぷに對して、袖をかきあはして、眼を壁にあてもなくそそいで、そして十日前後を通じて、ひどく、手痛く、大きいからくりにひきまはされた自分の運命を思ふと、ふしぎに嬉しくもあつたり、ふしぎにばか／＼しくもなる。

思ひあまつて、私は、ノートブックを取り出した。

それを靜に讀んで、十日間の行動をふたゝび、まざまざと目のまへにうかべてみた。

二月二十五日。神經衰弱と見えて、頭痛く、目薄膜

をはりたる如く……面白からず。「明治四十年史」中の文藝のページを讀みてよほど興奮の氣味もある。あゝ、いつ私は上京されるのか。あゝ、私はどうすればいいのだ。

二月二十六日、胸に微痛を感ずる。のどがかはく、ともすると瞳が熱ある時の如く重たい。あゝ。この悶悶たる心！。あゝ切ないこの胸、苦しい此胸のこのあたり、いかにすれば癒せられる痛みの胸ぞ………。せめて、東京へ、今年中にゆかれるならば、がまんもするけれど。

二月二十八日、私はこの三月の二十五日に上京しやうかしらんと思ふ、先生のお手紙と、友からの手紙とをよめば、私はうか〳〵してをられない。七月の休暇に上京かうか。どちら？。あゝ。七月ならば。七月ならば。

しかし出るのには今が出よいのである。今出るとする。毎月十五圓の金を會計にいれるのがはいらなくなる、いかにして祖母樣、母樣、弟妹は生活するか。いくら親類でも、その世話をして下さるかどうか。あゝあゝ—あゝ、……どうしても、私は今のがれられぬ。

しかしながら畢竟、私は上京すべき約束をもつてゐる。許してくれてゐるのは祖母樣はじめたれもたれもである。四月に整理に歸つて下さる叔父樣を待てば……辛抱して待てば。女二十三いつまでかうして空しかるべき。今しばらくの忍耐である。今は機會が熟して居らぬ。今少し今、すこし。あそこから招く手がある。しかし其人と、私との間に大きく、猛く、とかとかと火が燃えてゐる。その火の燃えやむまで、私はゆかれないのである。

三月二日　私は上京する。きつとする。今出てわるいのは、祖母樣の御老衰を見奉らぬ不孝と、一家の生活問題と、親類のおもわくとである。あゝ、三つの此故障？。故障の三つ。しかし、いざ出やうとする場合には故障の二つや三つない場合は皆無である。無上の決斷にて、それを、たちきらなければ、何事が出來る？。私のめあてはたゞ、最後の勘定である。わたくし、目下の勇氣とはこの際の決斷ではなからうか。父さんが三度までかきおきを書きなすつたのが、恩愛のほだしによつて出られなかつたといふ事、あゝ私は出る。

いつまで待つたとて際限のない話である。

三月三日　再び上京にたいする危惧心が私の胸に

いつぱいになつた。老いたまへる祖母様。上京すると思へば、一層たまらなくお顔がちらつく。淋しい祖母様、悲しい祖母様。花世がをらなくなれば祖母様は、ふとんに伏し沈んで落涙なさるのだ。あゝ。どうしやう。私は、どうしやう。あゝ。……あゝ。

三月四日　あゝ吾が思ひなやみし心も、昨日（三日）上京を決心し、けさ×××とK様とに手紙出せしよりおそろしく沈靜となりぬ。あゝ、我は行かん。今は時機である。まさに、私の生涯の一轉機。今私は行かずに、いつまた行けやう。おゆるし下さい。ああ。祖母様？。

三月八日、この夜臺所をなさる母様のお眼を見入つて、私は涙ぐんでゐた。『母さんもし花世が、家をすてていつたらどう？。どうしても出るとして。母さんはふりかへつて、決心しだいである。惡い事、家名にかかはる事さへしなかつたら、どこで死んでも母は泣きません。おまへがいつても、餓ゑ死にはせぬ？かうおつしやつて、力ある強い光をふくめるお眼をすゑなさつた。母さん。どうぞ、強く強く。さう思つてしんばうしてゐる母様をおもへば、夢にも怠りは！と私は、たまらずに泣き出した。そして、母の手を、ひしとにぎつた。私は離家へかへつて、手をあはして拜んだ。

三月十四日。この日小學校にて、校長に名をよばれた。いつて聞くと、あなたは東京へゆくのではありませんか、もう、さうだと、あとの缺員のしまつに困りますから、とかう言はれた。私は憤然した。たれか告口をしたのである。私は何もかもよくわかる。一體、私は決心した事は電光石火のごとく實行して、あツと人を驚かすのが愉快でたまらない性質である。機先を制せられぬひまにと退職願、卽座に書いて呈出。歸宅。夜、S先生、色を變へて來玉ふ、母に會ひて、退職願を校長の手許より一時も早くとりもどすやうにと敎へ、なほ、母が、私のした事を知るか知らざるかをとひたゞした。母は知らなかつたのである。それならば、校長も私をよんで相談せられた事でもあるし、今出られては、學校もこまるし、殊にお宅ではお父さんが亡いのだからお困りであらうと思ふ。また、東京へ出るのは非常に危險である。若い時は、血氣にはやるものゆゑもう一二年はどうしてもこちにゐられるのが得策ではないか、私も明日の朝早く、まゐりまして花世さんにお話があると一生懸命でいつてかへつた。それを聞いた私の心一層凝結した。私は叫んだ「母さん

私はあすゆきますよ」

一時までかゝりて荷物を整へ、手紙は燒いて、書物はくゝつた。灯をけす時に、祖母樣の御枕元にすりよつて、そつちへ向いて寢たまへる白髮の横顏を、手早くノートに寫生して、

よく寢入つてゐられる。少しもお動きなさらない。お頰は少し蒼白く見える、すや〳〵と不思議なほど安らかに寢入つてゐられる。

と書いた。火をふきけした闇中でしばらく私は、指も折れよとくみあはして眼にあてて、とめどなき涙にぬらした。

三月十五日。三時に目があくと祖母樣もう起きてじん〳〵と湯のたぎる火鉢の前にすわつてゐられる。生別？、死別？、あゝ蟲がしらすと見えて、私の顏を、まじ〳〵と御覽なさるので、私も涙をこぼすまいとつとめて多辯であつた。机にもたれて、手紙を書いてゐた時「花世はどうして、そんなに早く起きるぞ。どこか苦しいのか」湯をのんでお見！氣分がさつぱりする。」そしてお手づから、湯をもつて机のそばへいらして、私が、一尺ばかり黑髮をたち落して白紙にのせてあるのを一寸見つめて。「さあ、おのみ」あゝ。祖母樣はしらず〳〵私に水盃をさせるのだらう。

母家へきて「東京へ今から行きます！　謙太郎さんぐつすり寢入つてゐる弟の耳に口をおしあてゝ、生命をふきこむやうにいつた。弟はぱつちり目をあいて、じれ〳〵と私を見て無言つてゐる「わがまゝものと惡まれることを自覺てゐる。一時はいかにいはれやうが忍ぶ！、しのぶ。いきますよ。行きますよ」言ひさして私の涙は、ぱら〳〵と弟の顏におちかゝつた時、弟はうーむと苦しく重く、うなつた。

それは姉さんの心がけしだいですよ。姉さんに行かれりや、母さんと私とが苦しいのですよ。お父さんの死にぎはのことを忘れてはいけませんよ。覺悟がきまつたならば泣くものですか」

例の優しくたしなめてむつくりと起きた。それから祖母樣は弟に聞いて、どきつと胸をうつた悲痛の、御樣子のいちじるしく「花世さん、今日東京へお出でるといひますか」と私を見つめる眼がぎら〳〵光つた。

これが……これが……明日からは花世のかほは見えないのだなア」

と伏しじづみなされた。私は、私は…………。

母樣に、水盃をさしつけられて、水に涙をおとし

四人の妹弟をあつめて、一言いつた。鋭次郎は「姉さん、わづらはぬやうに」といつた。謙太郎は「泣くものですか」といつた。よろ〱と門を出た時、母様は「しつかりせよ？。」とたゞ一聲仰つて、母家の方へ何氣なくひきかへしなさる後姿。その時、雨ふりまへの朝……紅い光の潮が地平より天半にいたるまで燒くがごとく、ひろがつてゐた。

Ｓ先生にゆきあはぬ間にと、東へ東へ、しめれる草の細い道をやう〱家に遠ざかつた。雨がぽつりぽつりとおちはじめた。人一人とほらぬ村の路。

三月十六日、神戸に上陸、七時三十分の新橋行、急行列車にのりこむ。

鬪ひ疲れて

荒廢せし一年間を筑波の山麓に

白山吹

筑波は雪も解けましたが、まだお痛みは失せませぬか、都にも春は來て墨田堤の花も咲きませうけれど、渡良瀬の春、利根川波凡て過去は可懷しう御座います過ぎ去つた悲しみや悦びが、今宵は一度に寄せて來て彼の紫の山裾に、足なやむ人の言葉を思ひ出て、限りなく淋しさを覺えます、友の幾人は人妻となつて後、老人等が云ふやうな、同情のない御意見を聞かしては貴女も迷はないで結婚しろと、そのやうな簡單な事を云つて來るに過ぎない、然し私は獨りぼつちに馴れ馴れて、誰やらの人中行きて淚忘れよと云ふ歌を思ひ出しては、淺草公園を徘徊いて、トルストイの復活を活動寫眞で見て來た時は、却つて人生の飽つ氣ない事を思ひました。斯く感傷的になるのは、生理的何か原因であるのだらうと思つて、努めて快活にして見ますが、矢つ張り懷中の淋しい事や、思ふ如にならない事が附き纏ふからなのでせう。

玉の樣な白い足して、北山の雪を越えても、常陸野の人を戀ふたロマンチックな詩の友も、今は少尉某の夫人と成りすまして、家庭の雜務が忙しいからとか云つて、音づれさへもしなくなりました、女は安全なものです、そんなら自分も女だから、さう結婚した先先の事まで、心配するには當りませんねえ。

然し不眞面目な假の情に、人の感情を弄んだのは其の人許りではありますまい、少くとも其の時丈は眞面目でも、若い中の戀なんて、吹けば飛ぶ如なもので

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すねえ、「若い者の過ち」と云ふ老人の語は此處に來て泌々と味ふ事がありました、表面の人情に許り浮かれ廻り、半年は夢の如に過ぎたのです、それから後、獨立とか奮闘生活とか云ふ如な文字に、又更らに烈しく煽て上げられて、大變な意氣込みで○○新聞社の編輯室に、入つて行つたものです、何處迄稚氣が拔けないのか、今思ふと恥かしい如です、覺めたやうでも空中樓閣許り、それらの崩れ落ちた時の、間の拔けた悲しみが滑稽なやうでもあります。

落寞とした編輯室の一廓に椅子を占めると、多くの人の視線は集つて來るのでした。憐みの色、嘲りの色、好奇心に満ち〴〵た色、私は其の中にポツンとして居りました。

仕事に熟練すると云ふよりも此の社會の空氣に馴れないうちは、奮闘生活などゝツケ元氣に過ぎませぬ、六面の主任殿は、評論家としても位置ある、先年獨逸から歸朝した宗教家で、實に高潔な人でありました。

然し世渡りの上手な人と云ふではなく、周圍との不調和に堪えられぬと云ふやうな、苦痛の色を時々表して居られました、此の女と云ふ性の名に對して、手加減を仕て呉れるので、私は割合に泥土を除けて歩きました、然しその性の名に隱るゝと云ふ事は、決して潔しと致しませぬ。

花や
淺草のせ
YUMEZI

顎で權威を示したがる人や詐僞も仕兼ない相好の三面記者もある、それ等の人の惡跡な事や卑近な事は、彼等が得意とし手腕とする所なので、致し方もありませぬ、工場の窓から眞つ黒い首を出して、植字工迄が、侮辱するのには弱り果てた事もありました、訪問と云ふ仕事は妙に神經が鋭敏になつて來て、あらゆる場所で冷遇されるや

うな氣がしまます、引ッ越しの後を追つたり、體の宜い玄關拂ひを食はせられ、歩くにさへ物憂い日が多いので御座いました、偶々『まアお若のに』と云ふ表つ面の同情を、貴婦人連の口から聞いても、僻んだ心は却つて弱年を嘆ずるのでした。

毎日〳〵徒勞に終つては、疲れ果てゝ歸る外濠電車の中から、彼の宮城の杜に落つる夕陽を見て、慰藉とする心はまだありました。

あゝ夕陽〳〵、懐かしい過去の凡てを呼び返す名の如な氣がする。

彼のデカダンの青年等と飛び廻る頃にも、醉ひ痴れて唄ふ夕陽の詩を聞いてさへ、渡良瀨の河畔の町、筑波の氣高い姿、又は忘られし過去の人々を思つては、忍び音に泣きました、荒み果てた心とは云ふものゝ、此の無言の詩の前に立てば、偉大なる自然の聲を聞くやうな、氣高い悲哀を覺えます。

其の頃知己の青年の多くは、頻りに刺戟、耽溺と云ふ如な事に許り、凡ての苦悶を紛らはして居りました私も心の放浪者で、少しの固りはなく據り所もなく、自然主義利己主義、破壞主義と浮かれ廻つて、痛快を叫ぶ中に、心の矛盾は胡麻化しやうも、整理のつけやうもなくなつたのです、すると友の幾人は家庭を拋り出してまで、放浪の旅に出ました、然し流石に放浪生活の空想美である事は知つて居たので、私のみは行き場もなく、冷い日影のあたらない暗い室に、終日閉ぢ籠つては、何か眞理を求めたいと云ふやうな心で居ました。

心の整理！ それは漸く二月三月の中について來て近頃では地盤だけが固つた如な氣がして、落ちついて人から離れて居ります。

人間は動物の一種であると云ふ、今に初つた事でないが、飾り氣を取り去つた、或人の結論と、其の覺悟を世に處すると云ふ物の解つた諦め方とが、どんなに私を落ちつかせて呉れましたでせう、我々動物の生存上作られた團體の爲に、有用の材と成り得るなら此の上もない事、せめて社會に害さへしない人間なら、餘り邪魔にもなりますまいから、純良な女になるより他には、どうしやうもないやうで御座います、法律の保護は受けるが、此方は勝手だと云ふ如な事を、一時は平氣で云つたものです、だから矛盾が出來て來たのは當然の事なのです。私達に誘惑と云ふものは、ないと思つて居りました、成程外部の誘惑などにオイソレと

伴れ出される如な人間ではありませぬが、ウッカリと始終誘はれて居たのは、此の好奇心でした、そして眞面目な心を失つた事は、考へて見るのに決して少くはなかつた如で御座います。

夜雨先生、君のお手紙を頂いては、泣いた時分の感情は　あゝ遂に摺り減らされて終ひました、感情の美しい貴君は、屹度此の冷く荒んだ女を見て、顔を背けて唾をお吐きなさろう、昔知つて居た女はお汝ではないと仰有ろう、それも仕方がありませぬ。

結婚——と云ふ事も、近頃は大分天窓の中で問題になつて居ります。云ひ疲れて口を噤んだ母親は、また頻りに手紙を寄越しては。

否應云ふのならお汝の自由に任せるから、老人を安心させて呉れと云つて來る、それも無理のない事ですが、お汝の自由にせよと在つては尙々困る事なのです此の一年や二年の中に私は結婚しやうとも思はぬ、兎に角、世間の皆樣の如に、良人と名のついた人には、誰だろうとも優しく仕へると云ふ事が出來ない、蔭で赤い舌を吐いたりして、皆を欺く事は自分も苦痛ですから、まア悲劇を生み出さない事に定めて、本能に促がされ悲哀を感ずると云ふ老孃になる迄は、春の命を成たけ永くして置きませう、そして又、私は左迄に結婚と云ふ事を、重大な事とも考へませぬ、實際生活の爲と思ふに過ぎません。

結婚と云ふ事は他人の嘴を入れるべき領分でないのに、偶々愚劣な奴にくど〳〵と說き立てられて、困る事が御座います。

自尊心が高じて自惚れる時は、一時の樂天主義にもなりますが、つく〲反省した自分と云ふものに悲觀して終ふのです。

全く特殊の立場とてはなく、どうにか人の妻君なり某氏の所有品位に心得て人も取り扱ふだろう、其の方がまだ強い、安心な立脚地だとも時々は思つて見ますたゞくだ〳〵しく、近頃の自分と云ふものをお訴へしたに過ぎませぬ、ゆつくりお話申上げて見たら御座います、此の一本調子な、詩を忘れた敎へ子の手紙を不愉快い感を抱いて御覽になるのではありますまいか

それでは筆を止めますする。

鳥より

紅の衣地にほひる三越の前をいそけり淋しき少女
懶するに物足りぬ人欺くにやすき人なり哀なりけり
此心すさみ果たるものとして自ら人を戀はざりし哉

熱い涙冷い涙

湖畔の女

友はつと「らんぷ」をつけた樣子、部屋の內が明るく成つて、自分の寢て居る床の影がぼんやりかたへの壁に浮ぶ。暗い線でそつと引いた樣な床のかげ、みつめて居ると目もとがぽつと成つていつしらず又とぢてしまつた。

考へて居るんでは無かつたが頭はぼんやりはして居なかつた、友が讀みさし讀みさし繰るページの音はあまり冴かに私の耳にきこえる――私もかうして居るんではない、と云ふ事がたえず心をつかむやうにする。何か書かう、書かねばならぬ事が何か胸にあるんだもの――と思ふと瞳がうるんできた。

ほろ〳〵流れた涙は熱かつた、ほつと吐く息は熱くさい。

今弱りこむ時ではない、今弱りこんでどうしやうぞ死んだとて泣いてくれる人のないのは悲しくはない、人が死んだとて誰が泣かうぞ、私自身も泣きはしないもの、私は泣いて死にたくない！

あゝ然し今死ぬなら泣かねばならぬ、此ふがひない眞闇な、意義も能力もない此私が、此まゝ死ぬのはどうしても悲しい、今死ぬならば私のかばねは涙の川に浮してもまだあきたらぬ悲しさに泣かねばならぬ。

朦々として唯闇い、闇い私の心の中に、生きやう、として張り切つてる、あみいばにもある樣な其努力。

生きなければならない、どうかして、どうかして……あゝどうかして………………。と思ふ心の中にきらりと白い光が閃めく、ハッと見たものは蒼々たる天、茫々たる地、そこに力なくつかれ臥して居る自分の姿であつた。　光は忽ちかげもなく消えてしまふ、―友は靜かに又ページをくる、私はそつとねがへりをうつた。

つひさつき、ふと私は安らかさを味はれた樣な心もちになつて、鉛の樣にねむりに入つた。あゝ私は今起きるにも寢るにも自由である、洗濯をせよ裁縫をせよと朝は早く起きねばならぬ、小說をよんではならぬ、と重い力がいや應なしにおさへつけて、身動きとれずに動かされてゐた頃、其せまくるしい籠を透して天を仰ぎ、動いて見たい！とひそかに悶えて悶えたあげく心が綿の樣に勞れた時でも、夜が來なければ寢られなかつた、深夜心の聲を聞いた時でも朝のしまひがすまないうちは、文字にする事は出來なかつた。小說はかく

れてよむもの、針しごとは一日すべきものと云ふ樣な重い家庭の壓迫を逃れて、興湧けば筆をとり心勞れし日靜かに臥して自ら覺める時起き出で、用ある時のみ針をとり机に向つて小説もよまれる、かねてあこがれ望んで居つた此生活に居る身の心安さを感じたのは束の間であつた。友の繰るページの音を聞いてる私は決してさつきの私ではない。

天は限りなく私の上にかゝつてゐる、地は海と陸と遠く遠く……はてしない世につらなつて、力一パイはりつめてゐる。

求めよさらば與へられん

來れと誰れも招きはしない、きづやんで倒れてゐても救ひに來てくれるものは初からなかつた、血を洗つて繃帶して、はては脊にまでおんぶして行く所まで連れて行つてくれたキリストに逢つたと云ふ旅人は、天にも地にも恐らく其人唯一人、むしろ不思議な果報者である、私たちは行くのだ、此手傷を曳き摺つてかたく閉された重い扉をたゝき〳〵て、迷宮殿のいづこにかすむらしいはかないたよりの醫者をさがして………。いや、しかし癒されるのが望みであろうか、癒やされてそれからどうなる――さあわからない！私はがばとはね起きた。

「菊さん外を歩るいて見ませんか」

「だつて雨が降つてますわ」

「いゝでせう降つてたつて」「エヽ」

二人は並んで家を出た、電車の音が強く響く。淋しい雨の音を聞き乍らなつかしい青山の通りへ出る赤い灯青い灯紫の灯、星より美しくしつとりと霧の雨にうちけむつて、技巧から自然へぼんやりと何かさゝやいてゐる。

ぼつとして夢の樣な、然し私のすべての感覺は恐ろしい程あざやかに此光の中に親しんで、絶えて久しき生命の水を吸つた樣に優しいなつかしいうるほひに思ひ思ひに醒めてゐる。

とりとめもなくぼやけて明るい瓦斯の灯かげに、軒並の大ガラス扉の蒼いうるほひ、樂器賣る家にきらめくニッケルの大聲蓄音器、其技巧の肉聲の快味、それと並んだ隣りの書店のいかめしい金文字、新らしきより新らしきに用捨なく代りゆく立廣告の文字の匂ひや玉突場から洩れてくる太い男性の聲に和した纖美にして華やかな夜の女の紅の笑ひ、白よりもあざやかに闇に現れるのを見た時に、あゝ之等人間の智惠と力の

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

技巧によつて本能に咲かせる歡樂の花の深き甘さに醉はされては、しきりに走つてゆく電車も、双側をゆく人々も、今夜の私にはたゞ歡樂の舞臺にをどる俳優としか思はれない、そして我自らも亦俳優の一人として今宵こゝを通るのが最も自然の調和の樣な氣がして都會の夜の強い空氣を我官能に味へるだけ味はつて見た。

「先生の所にゆきませう」

「ゆきませう」

蒼い灯かげがフラスコの液にまで泌みこんで居る藥種屋の角をつと折れた時、強い匂ひは骨まで透つた。

細い道にはいつてから、雨にぬれてしつとりと重く黒ずんでゐる双側の屋敷の木立の露が、所々の街燈の灯にきらり〱と光つてゐるのを見た時、私は烈しい寂冷を感じた、後ろには猶ほ街のどよめきがあるのに、行く道は一歩一歩と暗く成つてゆく、細いけれど遠くまで眞直につゞいてゐる通り、街燈の灯のわづかに示してゐる黒い木立の輪廓をのぞむと、尊い神秘の國へでも來た樣で、しかも私は罪人の樣に震へた……私は神秘の國に住みうるであろうか、尊き國に住みうるであろうか……かく思ふた時ふと私は嘲られて居る樣な心地がして心は肅然と強い自信に幸福を眺めた。

傷いた心を癒やされる……それはたゞちに幸福であつた。幸福——幸福——私はそれを求めてゐるのだ、刹那を追つて生てるのだ、かく思つてハラ〱と冷い涙が闇にこぼれた。此刹那此態度で私は己れに己れの乞を許したのであつた。

造物主は何故私の鼻の土を儉約したでせうか

常世草

鬼も十八番茶も出花、なんていやに古めかしい事を持出しましたけど全くそれに違ひないんですもの、御覽遊ばせな庭の隅のペン〱草だつて春が來れば花が咲くでは御座いませんか。十一月面つて從兄樣に罵倒された私にだつて矢張人並に春が來ましたわ、十一月面？ホヽ、野暮な方ねえ、おかめの賣殘りですとさ。朝寝坊した時なんか自分の部屋の掃除する時間を潰

しても鏡臺の前へ座りたいのが人情ですからねえ、女ですもの、ましては人生ひと時の盛ですもの、少し位ハイカルのは寛大に見て下さらなくつちやあ、誰だつて美しい女を見て顔を背向ける人は御座いませんわ、もしも〳〵萬人に一人位あつたとすれば、それは人間ぢやあないんですよ、だつて情を解する事が出來ない樣な人ぢや人間の仲間入は出來ません、學校でだつて開けた先生の方がどんなに評判が好いかわかりませんわ、なまじ生徒に尊敬され樣と思つて七むづかしい事を並べたてたり、不可訓なんかの率先實行者だつたりすると、どうせ人並には見られませんからね、其癖さういふ先生に限つて、蔭では眞情を發揮させて、人知れぬオデイなんかゞあるもんですのよ。

まア遂口が滑つちやつて……………だから女學生は目の敵にされるんですわね、お怜悧な先生達に憎がられると學期末に通信簿上の宣告が恐う御座いますからね。それはさうと、今日學校でね、をかしな事があつたのよ、だつて體操の先生が御病氣で缺席なすつたから皆繰上げだく〳〵つて騷いでゐたら、ヒヨックリ倫理の先生がいらしつたんでせう、臨時教授なんて皆は不平の色ありありだつたけど、倫理の先生にはうつかりな事も云へないので、情けなさうな顔したり、ふくれた顔し乍らも泣寢入に禮をしたのよ。そしたらまア大變な事を云ひ出したんですの、それはね目下滿都に惡青年が横行して種々な惡事をやつてゐるので、新聞社や警察、學校等が一所になつて、それを調べてゐるんですつて、でそんな青年に害を受けた者は加害者の年齡、風采、事柄、時日場所なんか、成べく悉しく書いて出せつて云ふんでせう、みんな顔を見合せちやつたんですのよ、暫くだまアつてゐましたの、たら先生つてばね「貴女方は大きいからかも知りませんが、一年なんかどん〳〵口で云ひました」なんて先生も解らない、そんな事が云へる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もんですか、書く人だつてありやあしなかつたわ、其癖火鉢會議でなぞ、追掛けられたの、手を握られたのつてよく聞きますけど。でも上田さんたらね後向いて「私ね日比谷であつたのよ、書かうかしら」だつて、呆れちやつたわ、絶世の美人氣取で道を歩く度に尾行られる樣な事を云つてる。私「書き切れないでせうねえ、少しお手傳ひしませうか」つて云つてやつたわ。

だけどねえ全く此頃は恐いのよ、こんなお多福にでさへからかふ人があるんですもの、でも私なんか少い方なんですよ、そこはお多福の德でせうか、然し眞情は（何故造物者は鼻の土を儉約したんだらう）と叫んでゐます、だけど人には「私なんかそんな者にからかはれる樣な態度ではゐない」と瘠我慢の空威張をしてゐますのよ。何と云つても女は美しく生れ度う御座いますわね、どんな人だつて結婚の資格つてつたら第一に顏ですもの、まア普通の人ならさうですわね、若い人の癖に「なアに心掛けが肝心だ」なんて云ふ人は嘘よ、自分を欺いてゐるのか、えらぶつてる人の云ふ事ですもの。

私つたらね、つく〴〵悲觀してゐるのよ、何故つて結婚資格の第一に缺けてゐるぢやありませんか、だけど其癖ほんとにをかしいの、姿を構ひ出すとね限がありませんのよ、電車殊に外濠なんかね虎の門や學習院とでつくわすでせう、ほんとにいやなもんですのよ、成丈下を向いてゐて盜んでは相手の樣子を細く見るのですわね、そして自分より劣る姿だとホッとして晴やかな氣になりますのよホヽヽ……とう〳〵自白して了ひましたわ、で米琉の羽織が氣に入つたり、頭高で橫の詰つた束髮が氣に入つたりして、眞似がしたくなりますのよ。髮の格好？さうね私は學習院が好きよ、分の厚い前髮で長い髱ですの、お茶の水のローマもハイカラよ、スタイルはね府立がすきよ、殊に一二年なんかつたら前髮の毛を極前の方へ引き詰めて、幅廣のリボンをかけたハイカラなおさげですの、そして袴は下目に裾高にして靴は踵と爪先の細い編上げでスガ〳〵する樣なスタイルよ、學習院は穩順しやかですが、粉屋さんへのまいないが少し多い樣ね。

男子の事なんか云ふと又不可先生が机を叩いてすぐ墮落呼ばはりをするでせうが、そりやあ電車なんかへ乘合せると自然品定めも致しますわ。

矢張慶應が一番綺麗ねえ、金モールの徽章で靴は鞆繪屋、オーバを着た色白のきりつとした眉、鼻筋の通

つた――本鄕座式の主人公しきうつしぢやないけど――ネーモなポエトに前へ立たれ樣もんなら、そんじよそこいらのお姬樣達、お顏のほてりは陽氣のせいでもありますまい。

でも氣障だつて云ふ人もありますわ、で却つて是と大反對の白二本筋が誰にでももてるのよ一高と云へばね、この三月一日の紀念會に參りましたの、まア其混雜つたらね到底云ひ表はす事が出來ませんわ、寮の飾付けなんか大したもんでしたけど、全然押されて步いてゐるんですもの、見樣つたつて見る處の騷ぎではなく、もうギユ〱押潰されて苦しいのなんのつて死物狂ひなんですよ、前が進まなくなると後で進めえ〱つてどなる、寮生は押すな〱つて叫ぶ、もうどうなる事かと思ひましてよ。それでもね女學生の來ました事〱隨分知つてる人に逢つたのですもの。其中で約婚の君や、意中人が隨分あるだらうと詰らない事を思つてゐましたわ。又どう云ふお心か今日を晴れと滿艦飾させた氣取屋さんも見えました。

前の日なんか學校では夢中になつてゐる人がありましたもの、いくら不可先生達が騷いでも到底手におへないだらうと御同情もしてゐますの。

女學生つていふと屹度海老茶が聯想されますのね、そして此語は一種厭な感じがしますわ、これは或一部の非女學生の爲めに不名譽を被つて了つたんですわ。

女學生つたつて純粹の都會の女學生なんてものは見つともない風なんかしてゐませんわ、それに墮落するのも都會で育つた者には少いんですよ、得て地方から出て來た人が何にも知らない處を附込んで誘惑されたり、輕薄な色の袴をダラ〱とはいて、鼻緖の色がさめた日和なんかコロ〱突掛けて行く女學生は、大槪地方出ですもの、見た計りでも墮落してるぢやありませんか、ほんとに其樣なのを見ると厭んなります事よ。言葉に妙なアクセントがあつたり、ガギグゲゴの音が汚く濁つたり、髮といへば三枚櫛が二〇三高地の壘壁をなしてゐたり、縮れた前髮をペチヤンコに潰したの何ぞ睡を引掛けてやり度樣ですは、山の手邊はどうもこんなのが多い樣ですわね。

又日本橋邊は娘さん達が好い風をしてゐますわね、私あれ大好きですのよ、ふつくりした銀杏返しにくづしきを掛けて格子の銘仙なんか羽織つたのへ、お召の前掛かけてお針に通ふのなんか可愛いもんですわ、遊藝は槪して下町は三味線ですのね。山の手となると腰

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

辨殿の娘まで引搔き廻したがりますのよ。

矢張日本の樂器の中では三味線が一番趣味が深いでせうねえ、私、三味線を卑む樣な人は片つ端から罵倒してやりますの、ちつとも話せない人がありますからねえ情なくなりますよ。何にしても都會で生れて都會で育つた方が（夫も下町邊で）割に融通の利く人間になれる樣です事よ。

まア私つたら隨分云ひ度い事を云つてましたわね、だけど御安心遊ばせ、常世草とてもカーライルの云つた弱い名の人間に生れて來たのですもの、鼻つぱしの強い事を申しますもの丶、矢張從順を理想として居ますのよ、いつか我級でそんな話が出た時も、三從の敎を貴ぶ方が多ございましたもの、女は從ふべく生れて來たのでムいますのね。

心の活動寫眞

夕ほし

永井荷風さんが、北米ニューヨーク市の何十丁目の角とかで自働車に轢かれた、日本の文壇は君主を失つたやうな大騷ぎ………のところで目が覺めた。

勾配になつてゐる四辻の大通りを、牛乳配達の車が勢込んで馳り下りたかと思ふと、バタリといつもの葉茶屋のわきへ梶を下した樣子、「ゼム」といふ廣告のある電信柱によりかゝつて、居眠りしてゐた交番の巡査が吃驚、鹿爪らしく美髯を捻つたであらう？。暫く兩腕を枕へやつて、突伏してゐた、馬鹿々々しい、夢にも程があると、つい苦笑する、でも夢つてものは興味のあるものですわね、何時でしたか、田山樣がお十九だつて、それだのに自然主義とかの驍將として、盛名を馳せてゐらつしやる、自分も來年は十九だ、あれ程に書けるかしらつて、大變嘆いた夢を見ました。あら通を申し上げるわけぢやございません、いよ〳〵恐れ入るなんど丶仰せられては痛み入りますけれど、も、一度はね、夕ほしが、空前の傑作といふ詩を作つたんです、それを今日は文士諸星の居並ぶ晴の舞臺で、夕ほしが、自ら朗讀するといふのでせう、すると慥かに持つて來たと思つた原稿がございませんのよ、交せ返すものぢやなくつてよ、お氣の毒樣だなんて…………でとう〳〵マゴついてゐるうちに目が覺めて了ひましたの、ホヽ自尊も夢にまでみる位なら間違ひはありませんわね。

三日目の銀杏返しを撫で付けて、黒の毛繻子の包み抱へて例のやうにお裁縫へ行く。

「一中の生徒がよくこんな風呂敷をね。」

つて、内田さんに云はれてから、褪紅色や、三筋の、三越のしるしの、ブックを、キチンと細い洋服の腕にかゝへたペンの徽章の學生に逢ふと、身體がすくんで終ふやうにハツと思ふことが毎々でざいます。

それでも今日は、行き丈でも逢はないで濟んでよかつたと、愚にもつかない安心をおぼえながら、師匠の格子に手をかける、赤い厚板の鼻緒の空氣草履に、駒下駄が……………内田さんも、お曽代ちやんも、最早ゐらしつてるわ、ほんとうにお曽代ちやんの島田の恰好のようでざんすこと、毎朝おひとりでお癖直しをなさるのださうだけれど、ふつくりした前髪と、鬢の境のところなぞ、まつたく震ひつきたいほど好い。

「一生に一度、お曽代ちやんのやうな頭髪の毛になつて見たいわね。」

と、折々。内田さんと羨やんでも、お曽代ちやんは一向平氣なもの、黒繻子の半襟のかゝつた矢絣銘仙の着物に、今日は陽氣が暖かいので、對のお羽織は召してゐらつしやらなかつた、お花見着らしい口綿の、お召縮緬の脊のあたりを縫ふ針を休めて、自然と目に入る土手の若草を、じつとみながら、焦ら〱しく折角の髭やなんかを銀の平打でかいてゐらしつた時は、種種の連想にかられて、夕ほしは恍惚として了ひましたお島田には相應しいあの御容色、お氣立も無邪氣で、夕ほしのやうな、ヒネクレた性質は微塵もないのだもの、お曽代ちやんを奥樣におもち遊ばした御良人樣はほんにお幸福……………と感服はしたいけれど、矢張り夕ほしの皮肉な色眼鏡か、二十才のお聲も目の前なるお年なのに、美しいお召を召して、替り目には、判を押したやうな歌舞伎の棧敷に、お母樣とお座りになるのが、三度の召し上りものよりお好きだと、仰有る芝居のお話しはお裁縫を遊ばすより遙かにお上手で、知らず〱釣りこまれてしまふ。

木挽町へゐらしつた當座は、ちらつく狂言のまぼろしを、思ひ出しては獨り言のやうに、

「ほんとうに梅幸の誰はよかつてたわ、ホヽさう若手連のチヤキ〱なのよ、吉右衞門でせう、二十五、戌の年だつて新聞の初刷に出てたぢやないの、それからほら、終に俳優が手拭を投げるのね、先日私が參りました時は菊五郎だつたのよ。」

「お曾代ちやんお拾ひになりましたか。」

と、〇〇〇侯爵の若奥様のお召物だといふ絲織を、頭動かして縫つてらしつたオールドミスの師匠が、揶揄半分にお聞きになる。

「あら、師匠、たつた一つでございますもの、女なんかには……………それは大騷ぎなんですの。」

「恨めしさうなお曾代ちやんの面は直ぐ喜びに輝く。四十才の今日まで、一度も夫を持つたことのない、貞淑？な師匠ですから、何も思はないお曾代ちやんの芝居のお話し丈は、默つて傾聽あそばします。

夕ほしには蟲が好かないと云ふのか、如何しても進んで見に行く氣になれない。

「年を老ると活動寫眞が嫌ひになつて、芝居の方が好きになります。」

と、いつも壯さんに皮肉られますけれど……………え？芝居へ行かないで、「お講」へ行くのは珍妙だつて？そんな毎月、「お講」はありませんことよ年の暮に一度なんです、さう毎々お寺樣がやり切れませんわホヽ。ご免遊ばせ、また活動寫眞の事を申して、でも内田さんだつて大變おすきなのよ、春季のお祭日にも、弟さんと妹さんと、お父樣とお四人で淺草へいらしつたんですつて！

「お草ちやん三友館のキネオラマ御存じでせう、エジプトの名所と云ふんでしてね、ピラミットの所なの、夕暮になると唇氣樓が出來るつて、その時に電氣がどうかなるんでせう、月の出たところ、星のまたゝく樣なんか、實際ようございますよ、いらしつて御覽あそばせ。」

と、お話しされたときは、今からでも行つてみたいと思ひました。が夕ほしは弟も無い妹も姉も、獨りぼつちの況して養女ですもの、内田さんのやうな樂しい思がどうして得られやうかと、心づいたとき、もう〳〵悲しくつて…………同じ一人娘でもお曾代ちやんなぞ、有りあまる財産に包まれて、憂し、辛し、苦痛、涙は、褄の形がよく出來なくつて、困る位に思つてゐらつしやる。

「私、姉妹なんか無い方がいゝわ。」

と、お顏に似合はない突飛なことを御有るから。

「何故？」

と問ひ返せば、

「だつて…………ホヽヽ。」

と口を噤んで下を向いておしまひになつたかと思ふと

低聲になつて、師匠のお顏を偸み見乍ら、

「…………我儘が出來るから…………。」

だつて。

あゝ、もう十二時、正午を合圖の慶應の鐘が、風のまに〳〵此室まで聞える。

「オヤもう十二時ですか、早いものですね、これお晝前に綿を入れて了ふと思つてましたのに、なか〳〵物事は思ふ通りに參らないんですね。」

と、師匠はお裁縫の手を休めた。また實業の日本的の奮鬪生活談かと内田さんを見れば、眉へ八の字をよせてらつした、紬のお召故、針がきしんでお困りになつてか、それとも夕ほしと同じおもひか。

五尺の男子を、しりへに瞠若たらしむとは師匠の御事、生存競爭の烈しい都會のまん中に、獨身で相當に生活なすつてらつしやるのだもの、何事も冷笑する夕ほしも、實は感に堪へませんのです、と申しても、渴仰の極度、我もかくなりなむ、などゝはつゆ更おもひませぬ、そんな事を……そんな事、あの父のお耳へ入つてご覽あそばせ、耶蘇敎よりもきらひます。

父は、所謂近代人は大嫌ひでしてね、親の權威は最大にして且つ犯すべからざる…………親の惡口？これは相すみませんでした。生みの父母でないものだからと、蔭口されては、夕ほしの姑券にも障ります故、從順しく、お裁縫でも一生懸命になりませう。

丁度、縫物の切目で、まだいつもの三時半にならなかつたけれど、師匠に、

「今日は、これでお了ひに致します。」

と申せば。

「私も」と、内田さんはもうお召を疊みかける。

お曾代ちやんも無論贊成で、遂う〳〵三人共早引してしまつた。師匠のお宅を出ると、お曾代ちやんとはすぐ西と東に別れた。

「何だか今頃、からお辨當箱ばかり持つて歩くと、〇〇工廠の女工のやうでいやですわね。」

と、云ふと内田さんは笑つて、

「まさか…………さういへば私と一所に女學校を出た方で、組は違つて居りましたけれど、今ね、〇〇工廠へ勤めておらつしやるんですと、いくらお困りになつたからつて何とか他に職業がありさうなものね、エヽ會社へ勤てらしつたお父樣が急にお亡くなりになりましてね……お母樣とお妹さんお二人でお四人ですもの、始めは誰も知らなかつたのよ、他の友達が、廠工

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

へお入りになるところを御覽になつてから、すつかり知れ渡りましたの、だつてやつぱし袴はいてお通ひになるんですつて………。」

内田さんのお宅の方へ行く、酒屋とお湯屋の曲り角へ來た。途が近いので長い話しはする間もない、あとは急いで自家へ歸つた。

時候の變り目の故かして足のだるい事おびたゞしい、お夜食を戴いて、讀まうと持つて來た、一葉全集もそこへ投り出して火鉢へよりかゝつた。また德川榮華物語がお休みだと、母樣は愚痴しながら報知の夕刊を見てゐられる。

「御免下さい、今晩は。」

月末だといふのに靜かな店の障子が烈しく開いた、あの垢ぬけのした聲は慥かに坂下の提灯屋の妻君だ、藝術家崇拜の夕ほし、爲めに飛んだ失敗いたしました

「だつてあなた三人が學校へ行つてるんでせう、一番小さい子はまだ家にゐるんですけれど、やれ試驗だと云つては半紙が入るから、筆を買ふからつてお錢をねだるし、先達なんかね、ヤッコが近所の子供と家の中で相撲とつて、他所樣の借りた瀬戸物をかいちやつたのでせう、粗品いんだつて何だつてあなたソンな物は返せやしませんわ、眞實に要らざる散財しちまいましてね、惣領娘だつて女で、ペンともシヤシとも出來ないのは可愛さうだから、やりたいとは思ふんだけれども……月謝許りぢやすまないし、盆、暮の附け屆だの、そのまた間にはね………お浚ひだと云つては着物が………第一着物が、親として見すぼらしい風姿もさせられませんわね、子供を十分教育するのは骨折ですよ、何しろ、良人だつて僅か筆の先の仕事でせう…。」

筆の先！畫家か、文士か、夕ほしの胸は波うちました、後で聞けば、オヽ、提灯屋だつて。

いくら何だつてさういふ方が、こんな店へゐらつしやるまいけれど………妻君は、例の生活難の訴へもなく歸へつた、續けて二三人のお客樣がゐらつしやる

「五圓の口の利子を、三日まで待つて下さい。」

絣の羽織の書生が、斯う云つて出て行く。出物を待つてゐる職人の妻君らしいのと、流れの調べをして貰つてる、何所かの女中らしい二人が、密々話し合つてゐます、夕ほしは、一葉全集を取り上げて、「われから」を讀み始めました。

自働車が、物凄い響を殘して坂の方へ上りました。

湯屋の三助に不快を感ず

垣間見たる東京

萩花

　茂樣、度々の御手紙逐一拜見は致しましたが、私に其是非を定ろと仰有のは少し御無理かと存じます。實際私にも此度の御上京を是か非か判斷はつきませんものですから御返事がてら、ほんの御參考の爲、私の頭に殘つてる都會(東京)の印象、及び都會を垣間見た時の日記抔を一まとめに致しましてお送り致しますから雜然たる物ですけど御覽遊して頂戴。勿論御存じの通り、生れたのは京の舊都、物情を育まれたのは東北の小さい港。東京といふ大都會の土をふんだのは僅に三度、其も悉く一週間位で、いはゞ私はごく都會に緣遠く生れついた者で、都會に關する感想や何かを申しましては(其間に誤解もありませうし、謬見も有ませう)…で都會といふ物に對して何だかすまぬ樣な氣もしますが只私といふ小さい、一個の女が大なる都會の一部に對しての狹い感想を御覽下さいませ。

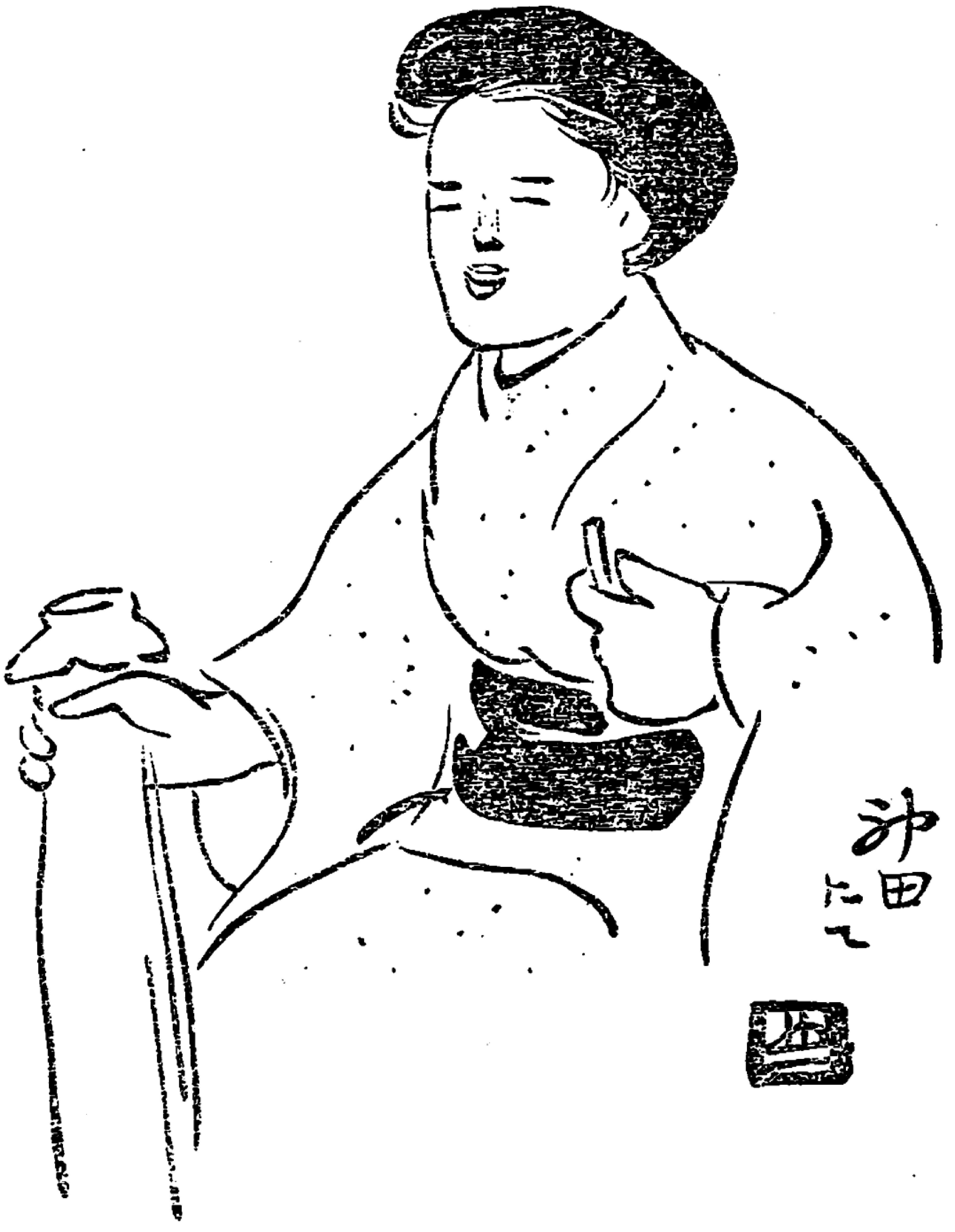
　私が東京の土をふみました第一回目は、故鄕の京都から東北に移住する時でした。其時は僅か五歲の秋でしたから何も申あげる樣な事はございません、上野の或旅館の二階から市街を見下して走馬燈の樣に移り變る模樣を、お馬車が澤山……と喜んだ位のもの。

　第二回目は茂樣御存じの十七歲の暮、悲しい或事情の爲、仙臺の姉の許に行てました時に、矢張其事件にかゝはつての上京でした。其時の日記が殘つてますから御覽下さい、私の最も動搖の烈しかつた時代です。

　某月一日、今日からやつと起きた、お粥を少し頂く義兄樣お歸りになつて此夜十二時にあの事件の爲御上京遊すと。「露さん病氣は如何？いゝなら僕と一所に行てみないの、又出るつても容易ぢやないから」再三のおすゝめ。實は此土地に來る以來、私の望京熱は底に底に火の樣に燃えてた。けれど見物に來たと違ふから其積りで、といはれた母の言葉を思つておとなしくあきらめてたのが、薪に油をそゝぐ樣な義兄樣のお詞私の心は戰ひ初めた。抑へ樣としても上京熱は抑へる事が出來ぬ。神經質の烈しい母の反對にも涙を流し乍らも默した程私の心も亦烈しかつた。十時過ぎ沐浴し

た時迄も定らなかつたが、遂に無理やりに行く事に定めた。ピリ〳〵と震ふ母樣の御手に髮を結んで頂きホロホロと淚を流し乍ら着物をきかへて、氷る月夜停車場にかけて、上野ゆきに漸々の事で乘つたのも夢心地病み衰へた心身にも、一時病氣を起す迄に戀ふた都に逢ふのかと思ふと云ひ得ぬ胸に波打つて一睡もせず。其懷しい物に接するをのみまち焦れた私は北千住南千住――。やがて上野について、汽車から出た時の心はとても〳〵まはらぬ筆の認め樣もない。只々ぞろ〳〵出る人と共に義兄の影を失はぬ樣に歩いた。やがて電車といふ物に初めてのつた。私の心は只浮いてた。觀察も何もあつた物ではない、電車の窓から變りゆく市街を見まはして只東京の女は美しい、東京の店は美しい、噫東京！と思つた。それから黑門町の父の旅館に行て晝飯をすませ、義兄と父との對話の間も私は懷しき東都の市街から目を離す事は出來なかつた。始終二階から見下してた。住み慣れた北の町は雪に閉されて灰色の此頃の都は塵がとぶ。華やかな女の裾が袂がひら〳〵する。町の水まきが始終往來してる、こんな事迄私には驚かれて、すつかり感心しつちまつた。午後から見物に兄と出た。何の刺戟もない平和な田舍で茫と育てきた私には見る物あふ物に悉く强烈な刺戟を與へられた。電車の響、自働車、馬車、樂隊、衆人の歩の音――。夕暮歸る時は眼が痛かつた。夜床に入つてから女中が電氣を消しにきた後も電車の音はシユーシユーチリン〳〵とまだ〳〵活動をつゞけてる。私の心は床に入つても少しも落ちつかなかつた。今日歩いてきた町々……勿論はつきり何町何町の印象はない、只賑やかに華やかに忙しい光景が目前をゆき過る……私は今日の暫時、二年が間一時も忘れ得なかつた彼事、及此度の大なる悲哀をも忘れて居た。ふと其に氣がついて、こんな所で日送りしたならば毎日〳〵周圍の烈しい刺戟で、苦しむ暇も悶へる暇もなかろう、そして華やかに日暮が出來樣、噫東京に住み度！と思つた。又こんな事も感じた。田舍の然も廣い靜な家に育た私は、こんな所に住ではとても思想も湧かぬ、かの北の家鄕の大きい公孫樹にもたれて灰色の雲を仰いで瞑想に耽る彼心地はとても都では味はれぬ、都の人が文を作り詩を歌ふのを不思議な位に思つた。其夜は初めて戀人にあつた樣な複雜な――其くせとりとめのない――混亂した思をくりかへし〳〵いつかうと〳〵して了つた。

二日、電車の響に目を覺まして見ますと、まだ義兄樣はおやすみ。隣室の父樣もおやすみ。私はそと起て洗面し、窓の傍に鏡臺をすゑてさつとお化粧をしたけふは父樣も一緒、三越、泉岳寺、其他まはれる丈見物する豫定。十時頃宿を出た。昨日終日刺戟を受た私は慣れたせいかけふは左程に驚かぬ。神田三崎町の邊を想像を逞ましうした夢二式の女學生がくひづきたい樣なスタイルで通る、若い角帽がインキ壺をさげてゾロ〳〵通る、故郷邊では角帽の一人も通れば皆見かへる位である、其も夏休に限つた事。赤い手柄にお召のコートの若奥樣、凡て女は美しく生々してる、男も胸をはつて揚々として歩く樣はとても故郷の陰氣な眠つてる樣な町には想像もつかぬ所である。電車の中に銘仙の綿入にホワイトジヨール、ハイカラな庇の女學生が胸をはつて一種獨特のスタイルで釣革につかまつた又水仙を持てメレンスの被布をきた女學生、美しい女が澤山入つてきた。一般に地方の女に見る事の出來ぬすばしこい表情を持てる。目ー口ー皆活きてる、けれども其は一寸目をひく物でよくみると國の○○樣位な顔の女は一人も居ない。白粉も只白い許りで、何故此樣な都の女がも少し顔の色彩に注意せぬかと思つたそして男學生と向ひあひに腰をかけて臆面もなく見つめるのは些少恐れ入つた。三越の食堂でおすしを頂く前のテーブルを圍んだ二人の令孃、愼しやかにハンケチで口元を抑へ乍ら話しあつてる。一人はフーワリした庇に



白ばら…紋羽二重か何かのお羽織、一人は少し年下のマガレに緋のリボン…何れも美しく温なしやかに樂し相だ。私はみとれた。何だか美しい強い印象を與へられた。萬龍の大きい寫眞が飾つてある、私の好に適した顔だと眺めた、緋友禪の帶胸高にしめて緋ばらの花さした店員は美しく可愛いと思つた三越に對する私の感じは只其丈。女の心を誘惑する百萬の美しい虛榮の品は燦然として輝いてるけれど、あえて何の慾望も起らぬ、私は文學を味つた利益がこんな所に存してるのかと思つた。そして又、美しい感情を抱いた世の何物にもふれぬ茂樣の樣な方には生涯この三越の光景にふれさし度ないと思つた。三越を出る時に或高貴の婦人の一群が馬車をとめてブライトにとんだスタイルで周圍をみまはし乍ら出られた。其から少しゆくと此度は木綿の海老茶袴の白くなつたのに双子か何かの衣服、髪はと見れば赤い細い毛をいてふ髷に、疲れた目―衰へた筋肉―其がまだ十六七である―。自活の人―故鄕なんかではとても見られぬ姿―先のブライトにとんだレデーも見られはしないが。私は此二つのコントラストに都會――階級といふ念がひし〱と迫つた。宿に歸つたは午後十一時すぎ。

三日、けふも朝から神田、京橋、日本橋、下谷、どことなくまはつた。女のスタイルは如何してもいゝ。言葉は無論。私は自分の土臭いのを嫌に思つた。自分よりも美しからぬ女―其でも美しき言葉に氣のきいた姿で歩く。私は都に住みたいと痛切に思つた。電車の中に若い女が入つてきた、目と目とあふ。田舎者と嘲笑しやすまいか―私は目をふせた。そして歩く時もなるべくさつさつと衆人の歩く樣にして、上野公園の植込の中を私は兄にそふて大膽に胸をはつて歩いた。其日は日曜なので幾組も〱學生が通る。つとすれあつた外國語學校らしいのと早稻田と。ビユーチフルレデーといつてふりかへつた。元より冷かしではあらうが私は幽に胸が開けた。そして都にすみたいといふ念が更に強く萌した。パノラマに入つた淸國の留學生が五六人居て「きれいな孃さん」と悉く瞳を自分の周圍に集めた。其から隅の方に田舎者らしい若い女が二三人自分をみて居た。昨日から一昨日から壓せられた都會の女の瞳を脫した別世界。私はホッと息ついて口元に笑んだ。夕食を常盤華壇でした。簡單な夕食に十數圓を費した。父上は都は故鄕等と違つて殊に黃金の空氣が吹きすさんでる、露など都はいゝと思ふだらうが懐が淋しけら

や都は田舍よりもまだ〳〵淋しい所だぞ、華やかな市中に火車の往來してるのを見えないかと仰つたが、私は何の三度の食事が二度でも花やかな都で——と思つた。宿の湯に入る、白く濛々と湯氣のたつ許りの中に裸體の三助流しに來る、私は如何し樣と思つてると一人の若い女が背腕、胸と平氣で洗て貰つてる「貴女の白粉は大學？」抔と三助がいふ。私など人と共に湯に入るのも厭つてた、乳をみられぬのを處女の誇を犯される——と思つて。ましてや異性に肉體を、不快に感じたそして私が男子であつたなら地方の純潔なる處女——を妻とする——抔と思ひ乍らそこ〳〵に出た。

七日、此夜は此大都會と離別すべき日である、私は堪へ難い悲哀を抱き乍ら停車場を出て五色の硝子の中に火を點じた樣な夜の都會を飽ず憧憬の目でみいつたそして「さらばさらば潮の如き大都會よ、我は汝に執着しつゝも去らん戀しき都よ！」。私の軀はやがて二等室の中に横だはつてた。云ひ得ぬ寂寥を感じつゝ、今頃は都はどや〳〵と……始終魂は神田銀座あたりにさまよひつゝ北の首都についた、初めはいゝと思つた北の首都に入つた私はちつぽけな停車場、古ぼけた町——噫大都會東京!!と叫ばずには居られなかつた。北の小さい港に入つてからの動搖は御存じの筈、いはゞ五六日の淺い都會の幻惑にあんな影響を被つたのでございませう。第三回目は昨年の秋、卽ち結婚の爲め上京でした。彼程迄に憧憬た都會の人となるのもいざとなれば全く嫌氣がさしたが、仕方なく十一月上京しました都は依然として忙がしい。美しい女、若い男——。けれど何故か女は虛榮の塊。男女——皆薄つぺらな時代思潮にかられてる樣で故鄕の嚴肅な重みのある灰色の暝想を抱いてる男女の方がどれ位懷しいかと思ひました。憧憬してた友ともあひましたがかつてのレターよりは其談話が薄ッぺらで、空虛の樣にも思はれ、都の女はなづき安い親しみ安い、誰とでも一寸お話の出來る代り深みがない。北の田舍少女は一寸なれ安くないがいざとなれば深い〳〵所があると感じました。然し江戶兒のきり〳〵した氣象、戀人の前にぶつつり唇をかみきる程の熱烈な戀でも其事情によつてはさらりと私情をなげうつ樣な氣慨にはほれ〴〵しました。けど現代思潮に染つた女よりもこんなのは却てすしやの女か酌婦にあると思ひます。只今ですか？只今はこんな小都會で若い私が家庭を持て實生活にふれてみると——（私の生活と申しましても其はごく簡單なもの、渡され

るお金をいつぱいに使へばいゝのです）それでも都會の生活難を思はれて、物價の高い華奢な東京にすまぬ事を喜びます、そして二回目の上京の時の父の言葉も今はしみ〴〵と味はれます。

茂子様以上の事はでく〳〵蕪雑な物ですけど大都會を慕ふ若い女の淺い心底が少しは見えませう、私も以前は神田邊を濶歩する若い學生――希望に輝く瞳――そんな事を想像して戀ふた〳〵都――もしや茂様も――茂様は私よりも尙々純の純たる小女。潮の中に葬り出すのは不安でなりませんけど――。又一度出てみなさるもいゝかもしれません。では茂様、もう歸る頃ですから今日は是で失禮を――。左樣なら。

解放されたのか落伍したのか

葉がくれの花

現代のこゑ、現代の響は聞たくはない、青春い私の心を千々に亂さるゝのが苦しい、苦痛だからと、友は幾度も私に囁きました、囁いた友はもう華な生活は望まないと――度々云つてはじつと日光を避けて兩眼を瞑て其儘、世の人の示すが儘に生きませう從ひませう――と諦めた樣に悟つたやうに言ては潸然と泣きました。

夜の森の囁きに呼吸を殺して神秘の聲を聞きたい、詩の湧く聲を聞きたいと跡を尋ねた時は――、詩に泣く人の胸は過去でした、――と語ては泣き泣ては語た、友は、語る言葉の果きたのでせうか、行衞も言はずに身を隱した、隱した友の行衞は尋ねたけれども――生活の爲めに――希望も理想も捨てました――と初めて一年目の昨日、隱れた友、懷しい友から消息を得た――私に取ては胸に沁み渡る。

やがては私も生活の爲めに、と云ふのは嫌だ、けれども生活の爲めに、この現在の境遇を捨なければならない――捨たと消息する時がくるでせう、が悲しい悲しい、夫れが現實の聲なんだ――現代のこゑ、現實の聲に倦きて、囚はれた人の子を倦きて、解放！と叫んで、奔た友は奔て馳つて走りついた時はもう落伍者なんだ、倦きては囚はれて、奔たのぢあ無い。敗れたのだ、敗殘なんだ走り得て、覺醒めた、悲しみ、悲しいでせう、けれども解放と叫で走り出た時は、彼友も確

に希望の光りを、目的に泣て哭て走らうとする心には包み切れぬ希望の玉を抱て、泣きながらゝ美しい玉の光りに悲しみも光りがあつて美しかつたのに――今は反抗に抵抗、反抗して戰ひつくして疲れて倒れ樣とするのを、僅にさゝえてゐる慘めな姿、落伍者の果てをゑがくと哀れな姿が浮ぶ。私と同じ都の中の華な社會に起きふしをしてゐても、傾むく月を見かへつて昔を思ひ、華な町を眺めては別れた町を想像してゐるかも知れない――共に語た私を殘して誘はずに、殘された無限の怨みを思て泣きもした今私は君と別れた町で歎かれたと思ふ言葉を思ひ浮べて、泣た町を思ひ出ても泣くも笑ふもし得ないで、悄然とたゞ眺てゐる、變る心と姿を夢みて、考へてゐる、人生の果てと、貴女の常態を忍んでゐる、比較てゐる――私も踏むべき一人では無いでせうか？。

呪はれた人の子は只、只、泣けばよいのだ、終生泣て哭てゐれば救ふ人もあらうから――只世の人は足を早めて遲れ焦せるものを待たずに、あへぎ、あへぎ――焦てゐる私共に、かまはずに、足を早めて行きませう、殘された人の子は誠に哀れだ。

夜の森を慕うても見出し得ぬ歎きに夜の町を步む、肩と肩とすれ合ふ程にした、手と手、を握ては泣き泣いては握た、別れた友、思ひを告げて未來を語た友は早くも敗殘の一人となつた、昔に語た私は處女と云ふ自覺をして囚はれながらも、放ち得ぬ、玉を抱いて、僅に世の人に誇てゐる、父も母も安んじてゐる、僞りの子となつた、優しい子に、僞りの子は――君よ君よ、君は兩親に背た大な罪を犯しても一時でも心の滿足を得たのを遙かに此處から羨望でゐる、大きく僞ることをも得ずに弱い子となつて、一生大きな罪は犯ないでも小さき罪を重ねて善き子と呼ばれて冷笑てゐる、悲しい辛い冷たいものだ、廂の間から見る月は小さいけれども都會なれば、是非も無い、小さき狹き家と家との間には庭も持ち得ぬ生活難――。丁度人の肩と肩との間から小さき小供が苦しみながら見てゐる樣だ。

華な淺草公園が何であらう、僅に生きてる意義も無き人々が、色態々の姿に變て空虛な胸に頭に、無意味に人を見たり、見世物を覗ひたり、悄然としたり茫然としたりして思ひある子は通りはせぬ、でも、せめてせめて、知己として語る人を見出したいと思つて、一日二日も華な賑な上野淺草の往來に立た、けれども私の知己は無い、見出しませんでした、數へきれぬ人

人の間を拔けて、搜探たが、馳た友の姿も無い、知己とする人も無かつた、空虛な人が見る上野淺草は面白からうに、詩の湧く胸を慕ふた身はそんなぢあない、行き逢ふ人を批評する程、俗化はしないと、思ても心は姿はいつか泣きながら、悶えながら明した、夜一夜明ければ普通の人の子ですもの——。

敗殘の人の子でも島田にも丸髷にも結ふ、廢された人の頭にも矢張ん重たき冠りをのせなければ無らない責任がおきてがあると隱れた友も書てよこした。

今は最後希望を抱て、思へば最期の別れの町に、思ひ出に泣く消息を握たまゝ、生活に疲れた彼友の態をゐがいて、落ち行く月に思ひを語た——。あゝ今は聲ある友は見えない、けれども、昔に變らぬ筆の跡、思ひを込めて書き——たゞ忘れずによこした、消息を、堅く、堅く、握たまゝ、熱い涙が手にも頰にもつたはつた。あゝ我が立つ町は語るべき友はなくつても、昔のまゝの、一年前も今も少しも變化らぬ町である、友のみ變化たけれども、私は依然として、昔のまゝの處女で昔のまゝの町に立てゐる——。

欺かれたる工女の懺悔

沼倉馥子

是迄の間には甚麼につらい事が厶いましたでせう、つらければつらい程古郷の事が偲ばれましてね、何時の世になつたなら親や兄弟に會ふ事が出來るかと思ふともう〱胸が張り裂る樣になつて泣いて明した夜も幾度だか知れません。兩眼に涙を一杯にためて初枝さんが寂し相に微笑むだ、靨ホロリと落ちる一滴二滴を唐草模樣ある鴇色絹の手巾で靜に拭ふ。

東京は深川、〇〇紡績、絹糸紡績なれば、肺病を患ふ氣遣はなく甚麼初手の者でも日給五拾錢は請合、就業は晝間で、夜は三時間深川女學校の教師を囑託んで婦女子必須の事を講義する、土曜日曜には遠近の見物も自由、三年も勤めたならば澤山の金や衣服を得られ樣、仕事もつらくなく食物は無論よい、マア試に一つ行つて御覽なさい、此の婆は嘘などは云へません。と棚から牡丹餅が落ちて來て口を開いて這入つた樣な話を瘧痕だらけの胡魔鹽頭のさりとても人の惡くなさ相

な五十許りの婆さんに勸められて、此處の村、彼方の町の娘達が八九人其の結構な所に行つた。

初枝さんも其の一人で村を立つたは今より六年前、卽ち十六才の春三月末で、寒地の此の里なれば漸やく梅花が咲き初めた頃であつた。其の後五月許り過ぎてから、誰れかに、行つた人達は非常の難義で歸るにも金は無く泣て暮して居る相だと確に聞いた。

此如て、雪を送り花を迎へる度每に忘れ〳〵て、六年後の今日この頃、初枝さんのはの字も腦中にない時、僅かの恩を忘れないで、二三日前に歸宅したとて訪ねて來たのである。

生來肥えた人故、長い間女中をしたとかで、もう小氣味惡いほどふとり、紫矢絣銘仙の羽織の肩も無論、なよやかでない、北上河畔のこの里を南とも北ともの天地として、この年月を延ばした身には東京の下流社會の生活狀態面白く根掘り葉掘り聞いて見た、大部人間にすれた樣で何もかも臆面無く語る、辯はいくら長く都に居ても流石は東北人、鄕土の訛はぬけない

聞けば聞く程、哀れで淺ましいのは紡績の工女である、講義も何も聞くではなく、節操等はもう何んとも思はない、情夫を拵へるを唯一の樂しみとして居る、取つた金の大方は身のまはりにして了ふ、飯食ふ箸を忘れても、臙脂や白粉は忘れられないと云うて居る相である。其の僻文字の見える者は少なく、大阪から來た或る者等は、初枝さんを依賴んで艶書を書いて貰ふた相である。

寄宿舍の有樣等は實に落花狼藉を極めて居る樣だ。食物は非常に惡く、或る時等は小松菜びたしに。蚯蚓が二本這入つて居たので、氣分を惡くした事もあると云ふ。

二月許りで居たまらなくなり、古鄕から持參した繻子の帶や瓦斯の羽織を置いた儘、夜逃げして本鄕の叔父さんの家に暫時食客となつた。

初枝さんの叔父なる人は古鄕に歸られない履歷付きの人で、噂には聞いたが私は知らない、今は挽子を四人抱へて居る、兎に角車引の親分をして居る相だ、年は五十二とかで、細君は五十、連子と云へば幼い樣だがもう三十幾才とかの阿呆の連女がある、家內は是れ丈でどうやら生活て居る相だ。初枝さんが此處に行つて一番困つたのはお使に行つた時の言葉だと云ふ。

例へば物を買ひに行つても彼我各々意味がわからない、店頭に立つて、お國風に「モース」と云ふ、サア向

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふでは何を語られたかわからぬ、變な貌をして見つめるばかりである、すると外から「おくんなさい」と來ると「何を上げますか」と聞く、成程物を買ふにはかう云ふべきもの乎と沁々思ふたとの事だ。

獨り初枝さんのみでない、娘に呼ばれて東京に行つた本吉の叔母なる人が一日本鄕の兄の處で、行き過ぎた肴屋を呼び戻すのに矢張お國風に、「カイアスペイく」と云ふたので、皆して大笑したと云ふ。

失敗する每に辯を覺え一ヶ月許りであらまし小ひさい用は出來る樣になつた、其れから間もなく世話する人があつて、岩地と云ふ下宿屋に女中に傭はれた、實に四年餘と云ふものは岩地の女中で暮したとの事だ、聞けば又隨分面白くないでもないらしい、一つこれから下宿屋の女中になつて見樣か等と醉狂な事も物に飽いたぼんやりした此の頃は頭に浮ばない事もない。

岩地の家族は主人夫婦のみで、頗ぶる好人物との事生れは越前で、下宿屋も樂しみ半分なのだから居心地は好いとの評判だ、二人共四十にならない若手で、主人は或る小ひさい會社に出勤して居る、副業でもあるまいが能く相場に手を出す。儲かつた時は貴族の樣な眞似をする、失敗した時は細君の氣のきいた腰卷の果迄も一六銀行に預けて了ふ隨分變化ある生活をして居た相だ。

客は、官員、書生、等でたまには女の下宿人もある然し初枝さんが居た内には女が唯一人あつたきりで三月許りで去つたと云ふ。

なにしろ長い間の事だから種々の人があつた、でローマンチックな話も少なくない、今でも忘れられないのは、失戀の工學士ですと、初枝さんは肺腑から同情の樣である。

工學士病中に、戀人から手紙が來た時などは、まるで死人の樣になつて、身うごきもしない、物を聞いても口を開かなかつたと云ふ。

其の時分一高の生徒も居た、非常に磊落な人で煩悶等は藥に仕度もない、工學士に符牒を付けて男爵と呼ぶ之は無論不如歸から取つたのである。

何時も客は五人位しか居ないが、其中の一人は永住の客と云うてもよい、今年で恰度、滿七年居ると云ふ山陰屈指の資產家の放蕩兒で無論ゴロツキである、金が無くなれば鄕里にせびり、かくて夜は必ず惡所通ひ晝は、落窪物語の面白の駒の樣にしてゴロリと許りなつて居る。

大金を果てもなく使ふに、小言も云はで送つてよこすは其の姉さんで、弟の代りに身代を取つたのだ相だけれども幾多の血涙を灑ぎ乍ら送るのだか知れない、思へば罪な男だ。

毛色の違つた客と云へば朝鮮人位ゐなもので此等の人は眼光の無いのと、膳を運べは座して居たのもかゞむ等より外に特色がない。

聞いた話はまだ〳〵あるが、餘りに恐ろしく、忌はしいから此處に省く、今後はどうすると聞いたら、もう塵芥の都は聞くもいや、たとひ土方や車引の妻君となつても構はぬから清い田舍で一生を送る決心だと云ふた。

吁々田舍を其れ迄清いと思うてくれるだらうか、いや大方の人はさう思はれませう、然し田舍は決してさう云ふ綺麗な處ではありません。山奥に行けば行く程風俗が惡い、都にも田舍にも塵芥の有るは同じです希ば都に住むにもせよ、田舍に住むにもせよ、一筋に正道を辿つて一生を送る樣にすべき者だと思ひます。

田舍は東京のやうに恐くはありません、何處にだつて表と裏はありますけれど、東京の裏面には恐い處があるやうに思ひます。

東京、大阪、京都

三人の姉妹が見たる三大都會

菊子

そりや菊さんそんな事は有ませんわ大阪の婦人だつて京女よりはよい衣裝しますわ、何しろ實業の盛な處だけにお金持が多いですもの、美食はしますけれど食倒れなんてそりや河が多いから杙倒れと言つたものでせう、ともかくも大阪の人は粹なのね、それから見ると京都の方は不粹ですわ。あらさう大姉さんにはさう見えて、私に三都觀の評をさせられたら大阪の婦人はそわ〳〵と蓮葉で、京都の女はしとやかで、東京は生意氣だわ。オヤ姉さん東京は生意氣だつて。

姉妹三人が三都に處變つて物學んだ爲めに集れば喧すう、お互に我田引水的になるそのをかしさ、今も今東京を惡く云つたので妹は早本調子になつてのり出した、ぐにや〳〵と蠶樣のやうな體にませくれた風俗させて、どや〳〵と十三參りしてる處を見ると東京よりは一世紀も時世に後れてるよ、それに男だつて、お踏やしてお引やしておくれやす、なんて喧嘩だか何だか

わかりやしない、私あんなのは大嫌ひ――

さうでせう東京の樣に、くそべらぼうめ、は活潑とでも云ふのかしらんけれど、私は矢つ張り京都で人となつたからあんな下すつぽい言葉は嫌ひよ。

又姉さんがあんな事を被仰るよ、いくら東京だつて今時そんな言葉を使ふものはあるもんですか、そりや昔の江戸時代の事だわ。

でもねー大姉さん、東京と云つたら誰でもすぐ江戸べらぼうめ、と云ひますわねー大阪さかいに京どすえなんて言つてありますもの、べらぼうめは廢してしまつてもあの、よくつてよ、あらいやだわ、と東京辯を振廻されるともういやで〱泣きたくなるよ。

ホヽヽまあ菊さんそんなに迄東京がお嫌ひなの、私東京は嫌ひつて申ましたつてそんな事は有ませんわともかくも三都の內で何處が一番よいのか公平な處はあの米國觀光團でわかるぢや有ませんか、三都中で何處が一番よいかと投票させた結果、大阪八票東京十四票京都が二十八票あつたさうです、つまり京都が一番よいからだわ、僞なら八日の新聞を御覽て

大姉さん〱今日はねえ一つ姉さんの京都自慢を拜聽しようでは有ませんか、サア姉さんお白湯でも飲で京都のお話をして下さい。

と云つて妹はコップにお白湯を汲んで來て私の前に置たので大姉さん大笑ひ、妹も吹出す、私もつひ釣込れて思はず抱腹。

ナーニお姉さん私冬さんのバナヽの食ず嫌ひの樣な理でないのですよ、ホヽヽ又バナヽのお話が出た、私が好だと云つてお笑ひなさるけれども――まあ飛んだ方へ話がそれた、こうなんですよお姉さん、私だつて極の始めからの東京や大阪が嫌ひでは無のです、冬さんだつて今ではあんなにえらさうに云つてるけれど、お父樣が出さないと被仰るのを無理に行きたがるので、私が色々と考へた結果、とう〱京都へ呼び寄て、それから東京へやつたのですよ、その時冬さんは未十五の少女でしたからお蒲團はおろか、着替さへろくに持つて居ないのですもの、私の氣使ひは大底で無かつたですよ、お互に母樣ない身の旅の空と思つてね私が不自由な中から二三枚の着替も持せてやるし、お蒲團だつて其夜自分が寢にも困るけれど、ついでだからと荷造してやりますしね、夜汽車の中、寒かつてはとショール、知ぬ旅の空で雨に逢つてはと傘も持せてやる、そして七條停車場で新橋行上り列車に冬さんを

乘せてプラットホームに立つた時の私の心の辛さ、何しろお父樣に相談もしないで、小供みたやうな冬さんを只一人東京に出すのですもの、どうぞ無事に行つてくれゝばよいが、萬一の事が有たらお父樣に何と申譯しようかと、それは〳〵お姉さん案じましたよ、其夜私は友の寢床に入れて貰つたけども今頃冬さんどの邊迄行つてようか、まだ名古屋迄も行つてやしなからう、こんな事を思つてる内にカチンと時計が一時を打つ、ショボ〳〵と春雨が降つて來て窓の硝子扉と假廊下のとたん屋根とに當る雨つゞみの音にぎやかなので、愈々眠られなくなる、私が始めて寄宿舍には入つた時、雨が降れば泣き風が吹けば泣いたから、もしや冬さんが汽車の中で泣いて居やしないかしら、よくまあ傘を持せて有た事、と思ひ續けくねえとう〳〵眠らずに夜を明しました、幸ひ從兄の弘さんに電報打つて有ましたので、萬事世話を燒いて吳ますし、明治大學の學生だけに、辯がうまいので上手に父へ辯解して、其後の責任を帶て吳ました。私がこんなにして冬さんを東京へやつてから、日に〳〵東京へ行きたくて堪らぬ處へ、弘さんと冬さんが熱心に東上を進めてならないので、何だか東の空を戀しく思つて居りました。

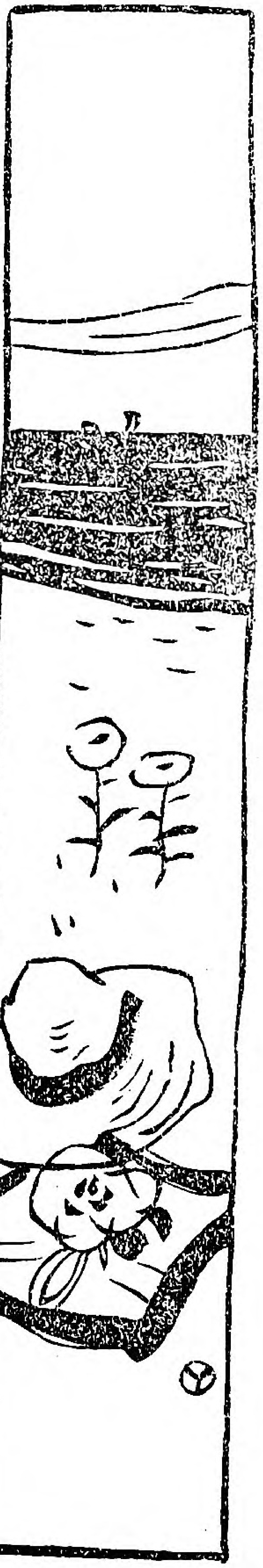
それに姉樣人の心はをかしいもので其程迄に戀しかつた東京が、僅かの事から嫌になつたのですよ、私の同窓の者に只一人東京の方が有ましたの、あんなよい處に被居つてなぜ遙々此方へ勉强に被入つたのでせうと皆が不思議に思つてましたら、何やら、早稻田の學生さんとどうとかで、連れ立つて京都へ來たものの浮浪ついてる内追手の者に捕まつて、色々の都合で此處へは入られたのですつて、其頃噂が高かつたけども、御本人は一向平氣で、東京のお自慢たら〳〵、あらいやだわ、と例の東京辯を振廻すのが胸に沁て沁々嫌になりました、此人に惡感を與へられたのが抑々で、とう〳〵帝都たる東京が大嫌ひと迄になりましたのです。だから一昨年橫濱迄行つて、東京の冬さんの處へ寄らなかつたのも其影響よホヽヽヽ、私は多情多恨な性質だからでせうか、エヽ大阪ですかそれもそんな事が有のですよ、私が去年の春醫者に肺尖加答兒と診斷を下されたのでお父樣、田舍の醫者に弄られぬ内に早く上方地方のよい醫者に診て貰つてひどく惡い樣だつたら、入院してしつかり養生せいつて被仰つたので、すぐ其日の夜船で大阪迄行きましたが船中、二等乘客が私一人きりだつたので心細う思つてるのに、時々入口の

扉がカチ〳〵と音がするので、幾度も驚いて振返ると若い男が覗いてるぢや有ませんか。

もう何だか恐怖くて春の夜とは申升ものの船中に一夜を眠らずに明したのですから、此まゝ病院へ驅付て新患者だと云つて、午後迄待されたら堪らないと思つて、お父樣お得意の旅館へ俥を急がせましたら、車夫が豫定外の賃金を請求したけどもやら無つたです、旅館へ入るとお主婦さんが出て來たので、お父樣からの紹介狀を出ますと、あんさん加藤はんだつかそうだつかとやられたので大阪言葉と知らず、人馬鹿にしてるとひどく不快に感じました、宿の主人が病院は早く行かなけりやと云つてくれたので、お腹が空いてたけども病院へ行きました、すると受付に居る女から看護婦迄が馬鹿に權式振て、勝手知らぬ患者にゴッ〳〵と當るのですもの、始め車夫の横着に驚いて、二度目に宿の女の侮蔑だ樣な言語に驚いて、三度病院の白衣さんの不深切に驚いた私、もう〳〵こんな處にはと思つて其時こそほんとうに泣きたくて泣きましたよ、ホヽヽホ又お姉さんがお笑ひなさるけども實際くやしかつたですわ。

それでもう宿へは歸らずに病院からすぐ京都へ行ましたら、七條で降るとすぐ、行ませうと附まとつて來る車夫大學病院前迄と云つて乘りましたら、勝手知つた私と知らないからでせう、是が東本願寺あれが清水で向ふのは都ホテル、四條三〻二條の橋と鴨川の岸の柳下を走り乍ら案内して呉るぢや有ませんか、やがて病院前の淡路屋と云ふ宿に着ましたら、車を降ない内に早女中連が出て來て、まあ〳〵ようお出やしてお呉やしたと手を取つて迎へて呉ました、其翌日だつて未私が旅の勞れで白川夜船と寢込でる間にもうちやんと受診の手續が出來て居て、十一時頃に行つて十二時には濟で歸りましたわ、それに看護婦だつて深切にして呉るどんな我まゝ申ましてもうまく慰めて患者を滿足させる處なんか中々の技倆ですよ、そして大阪の病院の樣に生意氣でなしに、見るからにやさしいのです、私はあの時思ひました、もう〳〵大阪みたやうな處へ二度と行くまいと。

序に名所を話をせいつてですか、名所や名物は澤山ありすぎて、誰でも知つてゐるぢやありませんか、智恩院の傘でも、聖護院の八ッ橋でも、お話したつて詰りません、また御馳走が出た時に澤山お話することにしませう。



生活の階級

霞子

代議士の令夫人

月岡代議士の令夫人と云へば世に聞えた才媛、五箇年間フランスで磨き上げた語學はなか〳〵にあなどりがたい、外人から來る手紙は片端から良人に代つて返事を出す「むしろ月岡よりは達筆だ」とか或る友人は言つたさうだ、何處の席へ出ても一といつて二と下らぬ交際振りに社交界の花として、他からも許され自からも滿足して居る。

南窓から光線を受けた明るい室の一隅、机に向つて一心にペンを走らして居る夫人の手には、キラ〳〵と幾つかの指輪がきらめいて居る、敷居越に兩手をついて十五六の小間使が「奧樣電話で御座います」と愼ましやかに取りついだ、無言のまゝうなづいた夫人は、つと立つて電話室へと行つたが程なくほゝ笑みながら元の座へもどつて、再びペンを握つた、やがてベルを押して以前の小間使に四五通の書面をポストへ投れる樣うにと命じた。いれかはつて無骨な書生が廊下に腰をかゞめながら「あの吉村樣がお見えになりました」と取つぐ「おやさう」夫人は一寸首をかしげたが「あの旦那樣の御來客はお歸りになつて」と氣づかはしげに尋ねた。

「はァ只今お歸りになりました」書生はもじ〳〵しながら夫人の顏を見守つて居る、「では應接間へ御案内して只今外出前で一寸仕度を致して居りますから、暫らく失禮致しますと申上といて下さい」と云ひつけて散らばつて居る洋紙や封筒をせはしさうに片づけだした

小じんまりとした應接間に敷つめた絨氈はパッとした花模樣、つきあたりには名ある畫伯の描かれたビルミットの夜景畫が掛けられて、並べられた椅子や窓掛からすべての裝飾品に贅をつくして居る。

客の去つた後に夫人は木兎然と椅子にもたれて何を見るともなく、うつとりとして居る。ぶだう鼠に染めだされた模樣は浮き出した樣な白芙蓉、胸高に〆た絲錦の帶にさらりと首から掛けた時計の鎖が一きははなやかに見える、上流社會のはでな風に染まつた夫人はたしかに十も若い粧飾をして少しも嫌氣を感じさせない、ガタンと扉があいて「奧樣旦那樣がおめしで御座います」と小間使が小腰をかゞめた、夫人はうなづきながらつと姿見の前に立つて、ぢつと鏡を見つめたが帶のあたりへ手をふれながら、靜かにスリッパをすつて良人の書齋へと急いだ。すつきりとした後姿にローマ卷の飾リボンがキユッと衿衣をひきしめて見せる。

母衣をはづした二頭立の馬車にヒラリとのつたフロツクコートの良人に、稍おくれて夫人がのると馬車はガラ／＼と門を出た、流行を追うてフワリと被つた薄色のベールが、ひら／＼と風になびいて金の横挿がキラリと夕日に輝いた。

茶見世の女

兎角花曇でどんよりして居た空が晴れたので、是見よがしに流行を裝ふた奧樣や令孃は云はずもがな、花見をかこつけに浮れ步るく男學生や職工連、さては何何旅館と赤旗を立てた案內者につれられて行く地方人の群は朝から引もきらない。

「被居いましどうぞこちらへ」向ふの茶屋でもこつちの茶屋見世でも女中の金切り聲が一きは景氣を添へて居る、花にうかれる樂天家が多いだけ、女中どもは動きづめでおまけに時たま、仕末におへぬ醉漢につかまつて弱りきつて居るらしい。

「お花さん今日はまあ馬鹿氣て出るネエ、私ア足が摺木になつちやつてよ」と二十歲前後の愛嬌のある女ががつかりしたと云つた樣に、どかりと緣臺へ腰を下しながら、橫合の女にいつた、相手の女は返事もしないで、櫻餅を積んだ皿を持つて行つたが、やがて空ぼんを下げて來ながら「ほんとだワネ、是から當分こんな目にあうんだらうよ……それにうちの緣臺は馬鹿／＼しくとびはなれて居るんでネ」「嫌なお花さん、氣の拔けた時分に返事してサ」「だつて御らんな、忙がしいが

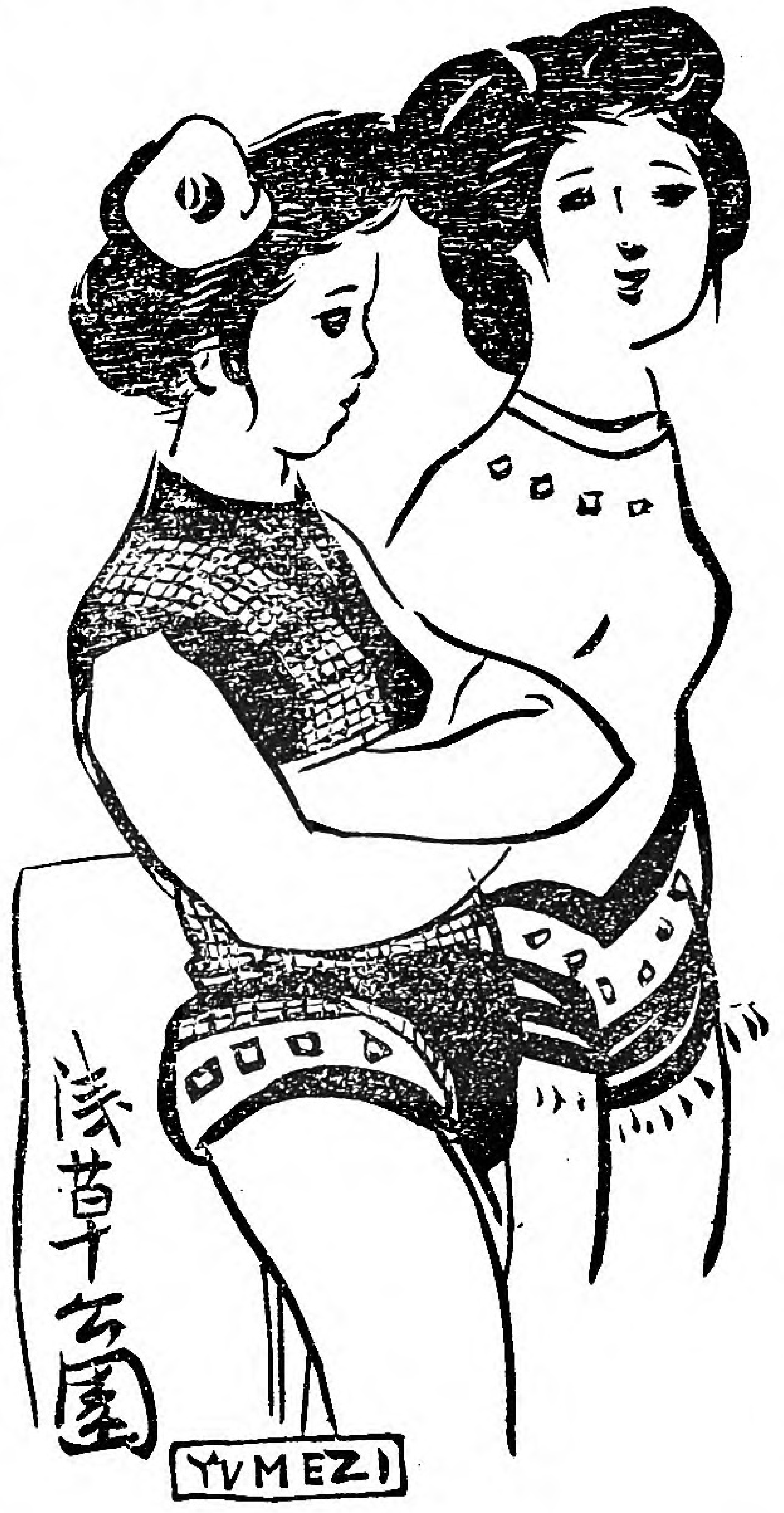
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

やあないか、もう私アつく〳〵願下げだワ」とゆで玉子を皿にのせながらつぶやいた「一寸レコに聞こえるとお目玉だよ」と小指を出して見せながら「ハーイほら是だからネ」腰掛けて居た女はぶつ〳〵云ひながら立つて行つた。

そよ〳〵と吹いて來る暮方の風はまだどことなく肌寒い、一人へり二人へり花見客はもう影もない、六時の鐘をボーンと打出した、「鐘は上野か淺草かだよく咲いたなア」二人連の職人が語り合つて來る「やあお忙がしう今日は隨分出たらう」「おや竹さんお歸んなさい」

雜沓をきはめた上野公園も寂りとして終つたので、山下を通る電車の音が手に取る樣にきこえる。

「梅チヤン何ぼんやりして居るの？……又思出したんだらう、ほんとに文さんも罪な人だよ」「あら宜いかげんにおし、くだらない文さんがどうしたのサ」「おやおこつたの御免よ」ぼんやり立つて居た女はぷり〳〵しながら思出した樣に片づけだした、「一寸梅チヤン今夜鈴本へ行かないか？……」「ホヽヽ、おかまひなく私しやアお邪魔になるから御免かうむるワ」「おや見事に御返禮で」お內儀さんが見廻に來たので二人だまつて終つた。



「何をしやべつて居るんだネもう晩方だよ」お內儀さんは小言を云ひながら四方を見まはして居たが別段云ふ事もなかつたと見えて、其まゝ家へ入つて終つた。日はとつぷりと暮れて所々に電燈は青白い光りを強めた、咲き切つた櫻はぼうと夢の樣に浮出されて、どこの茶店でもまだ後片つけがしきれないのか忙しげに女どもは働いて居る。

工女

どんよりした空につき立つて居る煙突からは、黒煙

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

がゆら〳〵と波の様に西へ流れて居る、ボーとしめつた様な汽笛がなると、〇〇會社の裏門から黒い工場着をきたまゝの幾群かの工女が、わめきながら吹出される様に出て來て。まるで蜘蛛の子を散した様に別れて行く。

「お光ちやんこつちから御出でよ」若い一群は左の横町へ曲りかけた十五六の女を無理やりに引張つて根岸道へつれてくる、いづれも百舌の巣の様な髪やギリギりいぼぢり巻の束髪、すゝけた様な顔をした者ばかり「ネお常さん、私驚いちやつたワ、彼の取り締りネ」「それがどうしたのサ」「どうしたつて馬鹿にしてるワお盆さんの肩ばかり持つてるんだもの……」「なんだ今初まつた事ぢやあるまいし」と相手が濟し込んで居るので、前の女は張合ぬけた様にだまつて終つた。

　チリン〳〵と後からゴム輪が通り過ぎると、いくつかの工女の瞳はキラリときらめいて、車上を見たが、やにはに「ステキー」と誰か叫んだ、「あらお松さんおよしよ悪るいぢやあないか」やゝ年かさの女がじつと車を見送りながらこういつた、「いゝネ彼んなきれいな人ア……………」兎角おくれがちに歩るいて居る一人はしみじみと云つた「だつて彼な人が朝から晩までおしやれしてるんだもの……何程だつてきれいになるワ、私ら朝の六時からさ晩の五時迄も彼の油くさい所で働いてるんだもの髪結ふ間だつてあれあーしないワ、それで大枚七圓五十錢かッ」といま〳〵しさうに舌うちして居る、「私なんかちつともうらやましかアないワ、彼んな女！親の脛かじりだもの、働いてる私等の方がどんなにえらいか知れやしないワ」「初まつたよお松さんの敗け惜みが……」二三人が口をそろへて云つた、「さよなら」突然三人は横町へ曲つた、「おやもう來たのアバヨ」と異句同音。

　二三日前から曇つて居た空はとう〳〵堪へ切れなくなつたか、ぽつり〳〵降り出して來た「花チヤン傘もつてるの」「うーん持つてないよ」「ぢあア早く行かう」殘つた二人は足早に歩るき出した。

卒業式の前

つゆ草

　遲刻したかとひや〳〵して校門をくゞつて運動場に飛んで行く。わな〳〵云ふざわめきが聞えたも道理、ラッケット握つてテニスに夢中の方も被居るし、日溜

に集つて何やら御話に耽つて打興じて被居る方々も有る。――お早う御在升、面白相ねえ。と花壇のわきの例の一群の中心點に成つて饒舌つて被居るH樣の肩を輕く搖ぶると、驚いて振り向き樣、アラS樣！お早う……夫より今日は大儲なのよ、九時始業でおまけに…………と力を入れて、諳誦が無いんですつて、無上に嬉しげに……マア眞實？と思はず聲を高める、えゝ眞實です共……だからこんなに平氣で遊んでるのよ――全くよ諳誦があるとびく／＼心配で堪りや仕無いワ。口々に皆樣が仰しやるので、慥に今日は無いと解つて大安心したと同時に張詰めた氣が緩んでがつかりした。「一體佛蘭西の教育法は詰込主義なのね、何でもいゝから詰め込みさへすればいゝかと思つて、頭腦を働かせる事が無いでせう、だから算術が出來なく成るのね當り前よ……」とN樣が氣焔をはく。不意に後背で、實に御上手ね御上手ですつてね……マア頓きやうな聲。フヽフとK樣が失笑したので譯は知らないけど連れて笑つて仕舞つた。さあ大變、今の聲の主、英語專科のB樣がすつかり怒つて被居る眞赤に成つて「失敬な、お上手だから御上手と賞めるんです。御笑ひなさる法が有りません……B樣が怒り出したら手が付けられ無いと皆な承知仕て居るから、さはらぬ神に祟なしと相手せずに俯伏いて、石や泥を弄つて居るのでぶつ／＼口小言云ひ乍向ふへ、後で一同顏見合せて苦笑……。

何あに今の御話は……T樣だつたの、斯うB樣と話して被居つた方に尋ねて被居る。――構はずにお置きなさいよ。ヒステリドなんだワ。A樣の字が上手だと賞めてたのよ。最早二十……餘程上に屹度……「何時迄寄宿に居る積なんでせう」「何か目的なのかしら？」「今頃から英語始めたつて……夫りや可笑しいアクセントなの……」「さう、聞き度いこと。オホヽヽ」「唯色んな物かぢり懸ける許りよ變な人……」わやくやB樣の噂して騷いで居ると始業の御鐘――。

卒業式に歌ふ唱歌がボールトに書いて有つた。Soirée on Mer（海上の夜）、通りすがりに題だけは讀むで來たけれど細かく書いてあるせいか、御座からは解らない、目を細めると字のけぢめが付くけれど、普通にすると、ボールドに只白い輪がかさなり合つてごちやごちやして居る計り……夕方薄暗い所でそんなごみ見たいな字を見ちやいけませんよ。と母樣が心配しては止めて下さるが、私は、又黄昏時、お庭をそゞろ歩きし乍ら、諳誦するのが一番よく頭に滲込んで一つ／＼彫

り付ける樣に覺られるのが嬉しくて止められず、はいはいとは口計、毎夕續けて來るので……近眼く成つたのかしら。　眼鏡懸ける樣にでも成らばどう仕樣、もうもう今日から止め樣と泌々後悔した。今迄、同じ二つの目持ち乍……なんて能くからかつて上げたC樣やK樣に夫御覽なさい等云はれるのも口惜しいし……と云つた所で仕方が無いから後から帳面貸して頂戴と願つて遊んで居る。新築の講堂に、朝から鉋や手斧の響がかしましい。舞臺を造るのだ相な。コメディの役割がいよ〳〵定る。私は侍女の役、御主人樣は侯爵夫人――是はJ樣が御務め遊ばす筈、奧樣何卒宜しく……なんてふざける。どんな服着るのかしら……。先生から大體の說明を伺つてる中に最早十二時。御荷物抱へて教室を出ると、一寸と〳〵と本科のPさんが呼ぶ。何か御用―マア、是數へて御覽なさい――見ると帳面の端に棒が一ぱい引いてある。何之？――いゝのよ〳〵、マア數へたら教へて上げる……又いたづら遊ばしたのね……と笑ひ乍數へる――三十六本、――アハヽ、夫△△先生の一時間の「要するに」……つて仰しやる數よ。一度々〱に棒引いといたの、オホヽヽ獨で笑ひこけて、面白い方。本科五年の教室を覗くと、陳列する圖畫や習字を夢中に成つて書いて被居る。去年の自分達の此教室時代を偶然思つて見た。

　第二日。今日は土曜日。先生が今週は幾度日本語を使ひました？と一人々々に御聞きに成る。三度と云ふ人、十度と云ふ人、六度と云ふ人、次へ〳〵と先生は名指される……吁お倉に火が付き相だ……隣席のT樣と相談して、五度と答へた……怪しいねえと先生は笑つて被居つた―三十幾人、獨も佛語計り話して居ましたと答へ得る人が無い――あれだけ云ふのに……と先生の御顏は曇つた。氣をつけても、生れた國の言葉ですものつるり先に滑出るのは仕方が無いと思つた。

　諳誦して來た昨日のせりふを聞かれる。節廻しがむづかしい手眞似、身體のこなしが先生の樣に出來ないで叱られる。役者ぢやあるまいしと內心大不平。K樣の氣取る事〳〵。大笑ひ。私達のは夢と云ふので三幕つゞく。ジヤヌダークの方は四幕に成るとか。最後の火刑にはマグネシユームをもすのだ相だ。未ジヤンヌが故鄕の牧場で、夢見る如きまなざしに空を仰いで神のみ聲を聞く姿は、どんなに良からう。ジヤンヌに成るのはC樣。十一時、本科の人〻一緒に音樂室に行くバースとソプラと調和仕無いので先生が氣をもむ。

客室の方から、ウエーバーマーチの華やかな音が流れて來る。L樣だ。當日の聞き物の一つでせう。幼稚部の四つ五つのかぶきりのいたいけなのが三人位で奏くのは實に可愛くて好き。よし途中で調子が合はなくとも。今日は古代史の御講議をきいた限り。希臘時代のお話は神秘めいてて面白い。でもあれを日本語で下手に譯したらつまらなく成るだらうと思ひ乍ら伺つて居た。英語科でもコメディの御練習らしかつた。

第三日。今日は舞臺の背景かく御手傳する。おゑの先生が時折、巡回つていらつしやると、澄まして、ゑの具とくやら、位置はかる眞似やらしてゐるから可笑しい。先生の御姿が消えると、手より口が餘計に動く「式の日のおみ帶は？——私、卒業式だから袴の樣子いゝと思つて琥珀を誂へましたの。——マア、いゝわね母樣がね今から袴は、むだゞからつて許て下さらないのよ。——私帶だからいゝぢやありませんか——御袖は何寸？二尺五寸？八寸？——五寸よ。大振ぢやあんまり仰山ですもの——私ねえ止袖よ。夫に江戸褄ですもの、つまらないわ——アラ私なんな紋羽二重よ猶厭だわ。」模樣は菊が多い。ませ垣をあしらつたもの、蝶をあしらつたもの、優しう野川に影うつしてゐるもの、人々の好みによつて少しの差はあつても、色はお納戸が一番、藤色、小豆色もある。不意に皮肉やのL樣が、私びりでせう、だから木綿で來るのよ。當つけに仰しやる。一寸お話が夫でとぎれると、誰か、此中で一番先に嫁らつしやるのは誰でせう、と云ひ出したのが元で又御話に花が咲く。皆樣の畫がいて被居る、華やかれ樓閣が其儘々現現實されゝばいゝが……と美しい若い夢に醉つてゐらつしやる皆樣の御顔を見ながら、私は默つてきいて居た。斯うした時、口をきくのが嫌に成つてじいつと考へ込むのがくせ。十二時迄半分も終らない。西洋人の常。パッとした色彩が好きでみなん等も持つてる物を着ないつて事が有り升かつて風だから、如何してゞ專科になるゝ華美に傾き安い。綺麗にして居れば持てるんですもの。誰だつて——虚榮心でせう——けれど私共計りが惡いのでせうか？……

……………

毎日、此頃では餘興の仕度であちこちして居るものだから本科の人が、氣樂ねえと羨しがる。だつて最早苦しい坂は越して來たのよ。卒業試驗もとつくにすましたし……と威張つて上げた——が私は日本科時代が戀しく成つた——殊に五年の最後の一年間が……

第四日。ガス會社から人夫が來て、花ガスを設置けて行く。餘興する時には、鎧戸をすつかり閉ぢて仕舞ふのだ相だ。舞臺の人の顏が美しく見える事でせう。おさらひの時氣まりが惡くて聲が立たない。あゝ其日に是ぢやどうしませう心配です。先生も困つた御樣子ですもの。――卒業後も一週に一時間づゝ、會話を見て頂く樣に願ふ。家で遊んで居れば忘れる計だから。月謝は四圓。斯う仕て居る中にも、嬉しい又嫌な卒業式の日が刻々に近よるのかと思ふと、何と云つていゝか分らなく成る我とわが心持が――。

バザーの當日

靜江

名殘なく晴れた秋の空には絹絲程の雲も浮ばず、蜘蛛手に張り渡した萬國旗をひるがへして心地よい風が吹く。會場は美しい紅葉や蔦で飾られ、ひはの青葉を臺に小菊をさした綠門には日英兩國旗が交叉された。運動場の種々の模疑店も凡て用意調うて人待がほ、只もうお客樣を待つ許り。

私の店もすつかり幷べ終へた。純白な机掛をかけた上に眞中の目につく處の淡黃、深紅と橄欖色の布團を置いて、間に淡紅や白の新形の赤樣の帽子を置く。夜足袋や何かの小物は前の方に可愛い空色のジヤケットは竿に掛けた。ショールや襯衣や品物が多いからくの字形に支店迄ある。其間の圓机の上に賣上高のかく許りになつた帳面を置いて澄まして腰かける。

高梨樣、澄江樣、澪樣の三人が賣子、私も是非賣子にとお願したのだが先生が許して下さらない。

「貴方の數學の手で今日の會計は是非して下さい」と仰有つておだてて終ひなさつた。仕方がない野暮なソロバンをパチ〳〵する心算。

定刻にはまだ十五分ある、其間にと他のお店拜見に出かける。先刻先生から頂いたおつり錢の箱を後生大事と抱へて。

お向ひの晴枝樣の處がどうしたつて一番振つてゐるコスモスを白と云はず淡紅と云はず投ざしにガラスの花瓶にさして、深紅の薔薇やら何やら千紫萬綠眼もあやに咲き亂れてゐる。外に肉筆の花の繪端書と、皆一樣に根を銀紙で卷いた簪が配置よく幷らんで、晴樣のローマにも何とやら云ふ白い小花がさしてある、お店は澁谷樣と二人、高襟揃ひだから適當なお役だ。

細工物の店で白ビロード地に撫子を書いた袋が目についた。澪樣へ上げ樣と思うて、ソツト「時間が來次第赤い賣約濟の札つけて頂戴」と山口樣にお賴みする

生徒はお客樣の後になさいと吳々仰せた先生にはすまないけれど、丁度よいクリスマスの贈物にと思ふたので罪をおかして仕舞つた。

ソロ〳〵時間が迫つたのであわてゝお店に歸る。お隣の人形店が綺麗にならんだ。一番遠いお菓子店は小さいが繁昌するだらう。銀紙に包んだチヨコレートやコフヒーが美しい。籠に入れた可愛いスウイートの方を見て澄江樣が、

「一寸あの籠倒にすると人形の帽子によいでせう。私も買はうかしら」

「厭だ澄樣帽子にするのより中のスウイートが目的でせう」口惡の高梨樣が仰有るとヤツキになつて、

「僞よ〳〵格好が似てるんですもの」

「其なら中だけ私頂いて外を上げませうか」

「ホラ御覽なさい。御自分だつて欲しい癖に」

「だつてなんて其ぢや二人ともでせう」私が混返して果は大笑ひ。

追々お客樣もお在でるのに澪樣がまだ見えない。今朝延子樣から受取つたお手紙には、「お艦の兄樣をお迎へに新橋迄行きますが遲くも一時迄に上ります」とあつたのにもう一時は過ぎてしまつた。

お艦の兄樣と云へば今日の慈善市に被入ると澪樣が仰有つたがどうかしら。兄樣と仰有つたつて許嫁の兄樣だから似て被居る筈はないけれど、どんな方かしら

不斗耳元で、

「幸枝さん夜足袋が二足九十錢よ」

まあ吃驚した、もうお客樣だ、茫然して居たのでマゴマゴして帳面に品名と數と金高をつける。

もう〳〵目が廻る樣に忙しい。其中に一人背の高い西洋の男の方が、靴下の片方に許り價のついたのを見て笑ひながら、

「片方一圓ぢや高いですね、兩方にして置いて下さい」

「其ぢや特別にお負け申しまして――」と澄樣が眞面目に云ふたのでお客樣迄吹き出しなさつた。

外に橄欖色の布團と黑シヤツと買うて下さつた。十圓ので二圓四十錢お返ししたら四十錢置いて、

「片方の靴下代ハヽヽ」と笑ひながら行つて仕舞はれる。スターやスパイダー編のショールがよく出る。其れでもとても虹には及ばない、七色の極細の毛絲で中

をあんで房も七色の美しさ。色の白い紫矢飛白召した方に着せて見たい。

赤さんの帽子は今品のよい束髪の若奥樣の買はれたのでもうお終ひ、よく賣れるのは嬉しいが私の方が忙しくて堪らない。

夢中で帳面つけてゐたら、

「遲くなつて御免なさい」と漸々澪樣がいらしつた。

「隨分な方ね、貴方の時計今遲くも一時と云ふ頃？」

「だつて、急に外にもお客樣が一人來たのですもの御免なさいね幸さま」

餘りおとなしい澪樣をいぢめるのも可哀相だから實はどうか爲さつたかと心配してと眞實の事云うてしまつた。小でゑで、

「兄樣まだ？」ときいたら、

「いえ外の人も連れて來ますから少し後れて——」と耳の根迄染めて仰有る、可哀相だつた。

「誰方？お母樣？　お連れつて？」

「否、もつと〳〵若い女の人、ホヽヽ妹よ」

笑ひ出しなさつたら澄樣が、

「一寸澪樣手傳つて頂戴な、御親友とはまた後でゆつくり——」つて引張つて被居る。

「大丈夫よ。御安心遊ぜ。まだスウイートの御話は御披露致しませんから」

私も憎まれ口きく。澄樣一寸横眼でにらんで御自分迄笑つてお仕舞ひなさつた。

もうお客樣でギツシリ、端書店が大分賑かだ。私も一組學校のを家に送りたいと思ふけれど殘るかしら、赤さんのジヤケツトが續いて三つでた。

空色のをお買ひになつた奧樣のお袖引いて、其れが着たいと坊樣がむづがつて被居る。可愛い坊樣で澪樣が大騷ぎ。

すつかり忘れた樣にしてゐたのに、急にけたゝましく餘興の合圖のベルが鳴つた。

まあ急に私の胸もドキ〳〵し始めた。今日の餘興にするとて諳誦したジユリヤスシーザー、殺された後のブルタスとマーク・アントニーの演說の處だけれど、間違はずに出來ればいゝが——。

始めは川中島の琵琶、次が二級の由美子樣の詩の諳誦、バイロンの「大洋」だとか。其れから大好きな千鳥の合奏、お琴は三面だと云ふから屹度よいだらう。

あゝ其次——胸がワク〳〵してジツトして居られない。

餘興になつてずつとお客樣が引いて殆ど皆餘興室

にいらしつた。其れに一人お婆さんの西洋の方が私の店の方にいらしつて品物を見て被居る。

澄樣がすかさず、

「あのエンターメントが御座いますよ」と仰有る。

「何處で？」

「お茶の間の次で御座います、御案内致しませう」

中々御上手だ、御自身もせつせと一所にいつてお仕舞なさる。

私は其れ處か一生懸命口の中で演說してゐる。

續いて高梨樣もいらして澪樣と二人限りになつた。

「澪樣、まだ被行らないの」

「もう參りましたの」

「何時でろ」「一寸も知らない中に？」

「先刻、私の店へも」「そして虹二つ頂きましたわ」

澪樣は笑うて被居る。

然う仰有ればチヤント帳面に二つとあるけれど、到頭拜見しそこねた。

「もうお歸へりになつて」「否今お茶に――」

「其れぢや遙かに拜顏に出かけてよ」と云ふと澪樣眞赤になつて「御免なさい〳〵」と止める。

「虹二つ迄誰方のかしら」「妹のでせう」

「僞、分りましたわ貴方と一つづゝ。ね、いゝでせう」

「うそ、大僞ですよ、其麽にいぢめると私兄樣の處つれて行くから」

今度は私が御免なさいの番。

御琴が濟んだ。お金を澪樣にあづけて餘興室に行くもう何が何やら一切夢中、ほんとにブルタスになつた氣である「世界の中で一番シーザーを愛する人が居ると云うても、私は其人程、其人より深くシーザーを愛する」と云うて自分の愛を告白する邊情が迫つて聲がふるへて仕舞つて。

「私がシーザーを愛せないから殺したので無く、私は羅馬をより深く愛したから、私の最も敬愛する友をも刺したのだ」と叫んだ時、盛な拍手を聞いたが人の顏が茫としてメチヤ〳〵だつた。

自分の處だけ濟して人に見られるのが厭だから直ぐ歸つてしまつて、文樣のアントニーも聞かなかつた。

御客樣が無いから澪樣と二人で、お金箱持つて一番終りのミスルースの獨唱をきゝに行く。

始まつてゐた。暗赤色のカーペットを敷いた壇に立つて被居る。大きな椰子蘭の鉢植に純白な服が半隱れて云はう樣なく美しい。ピアノの伴奏はミセス、メン

ヴルソンだつた。

うつとり聞きとれて居ると澪樣が、

「兄樣が――」と袖引きなさる。

「初めて、江田原です。何卒よろしく。是が妹の百合枝で――」と短劍姿の方がお聲かけられる。

もう〱愧づかしくて口の內でお答して澪樣のかげに隱れ樣とすると、

「ブルタスは貴方でしたね、大變お上手でしたよ」と仰有る。

ほんに海軍の方はお話しがお上手と思つたが、其麼事云はれはしない。

「否、駄目で御座います」とだけで困り切つて居るのに、止めて下さればよいに澪樣が側から、

「えーもう其れは校中一のペラ〱ですもの」と先刻の敵打ちなさる。

餘りだからそつと小聲で、

「どうせ、ピアニスト、ヴアイオリスト、オーガニズト、尺八ストのお妹さまには敵ひませんから」と云ふたらお耳の早いには驚いた。

「天晴れの音樂家がゐるから被入い、六段位なら合せられますよ。是でも○○艦一ですから」

笑ひ乍ら仰有つたので逃げ出したくなつた。

お妹樣は長いお髮をお下げにして空色のリボンかけたお十七位の方、女だけにもうお親しくなつて種々おはなしする。

拍手の響に氣が附くと今丁度終つた處、破れる樣な騷ぎで中々止まない。遂々四度迄出てお禮仰有つた。

不斗私は卽興詩人のアヌンチヤタを思出した。

餘興室をお出になる處をまち設けた晴江樣が、長いお袖の下から美しい花束を出してお上げなさつた。ほんとにもうすつかり御熱中、拜見して愧づかしいやうお二人でお茶の方へいらした。

もうお歸りと仰有るので澪樣と二人玄關までお送する、百合枝樣が「牛込の矢來ですからどうぞお遊びに」と繰りかへして仰有つて下さる。

餘興が終つたのでお店は又一しきり大混雜、大低うれ盡して海老茶の襯衣と、クリームの布團が殘つた。其中塚原の叔母樣が見えたので、遂々客間用にと無理にクシユンをおすゝめした。

五時半頃には大方お客樣もおかへりなさつたから、ソロ〱計算に取かゝる。

三人のお店の方に代る〱讀んで頂いて、すつかり

決算すると、總賣上高百五十三圓七十五錢。先生に帳面添へてお渡してホッとした、晴江樣の處ぢや五十一圓と幾錢とか仰有つた、切花だけでそんなと不思議な顔してゐると、意地の惡るい晴さま、實は單位をくり上げまして――だつて大笑ひ。

お菓子の店はもう會の半頃に賣切れの盛況だつた。後で皆でお茶を頂く。

「御苦勞樣お蔭樣でよくいきましたよ」と先生が喜んで下さつた。

遲いから澪樣の車頼んで上げて寄宿の門迄お送りする「さよーなら。」「失禮致しましたよろしく。」と云ふと何か仰有つたが、よう聞こえなかつた。

一人靜かに歩をかへすと、もうすつかり色づいた公孫樹の葉がハラ〳〵落ちて來る、肩や髮の落葉をはらひもせずザク〳〵砂利をふんで行く。

ひるに引替へて餘りの靜けさに今日の會の事が遠い古い昔の夢でもあつた樣思うて、不斗仰いだ空に美しい半輪の月が輝いてゐた。

時雨平安城をすぢかひに　蕪村

某子爵邸に遊ぶ

白菊

派手な銘仙絣に笹模樣華やかな、友禪の帶小さく締め、襷がけで、居間化粧室の掃除すませ、庭に面した居間の窓を開けば、空には一朶の雲もない好天氣。新鮮な朝風がそよ〳〵と吹くと、新しい若芽の匂ひが微かに香る「お蝶さん上田さんからお電話で御座います」と初やが來た。電話口に立つと上田の叔母樣のお聲で今日午から某子爵家へ伺ふから蝶さんも是非一緒にとの事、〇〇樣へは二三度叔母樣と伺ふた事のあるお邸、どうしようかと、思案しながら母樣に伺ふと折角誘つて下さつたのだからと仰るので、引返して承諾のむね告げる。朝飯がすむと初を相手に髮を結ふ。ローマに結つて見たがうまくいかない、仕方なしに前髮を思ひ切り出してマガレットに結ふ。

風呂から出て化粧室の姿見の前に立つて洋風化粧をすると頰の邊がポーッと淡紅色を帶て我から見恍る計りの艶のよさ。唐草模樣の櫛を挿し三吋巾の純白のリボン一の字にギユッと結び、母樣のお指圖で上品な柄の紋御召に褪紅・色絲錦の帶を胸高く矢の字に締める

キット合せた襟をブローチで止めながら姿見の前に立つと。

つく〴〵眺めてらしつた母樣てば、ほんとに馬子にも衣裳だねえ、さうしたとこはお多福な蝶さんでも鳥渡見られるよだつて、あら隨分な母樣ねえたんと惡口仰いよとつひ吹き出して了つた。

ルビーとエメラルドの小さい石を三つ入れた細環のリングをはめ、水紅色の絹手帕へヘリオトロープ振りかけて居ると上田の叔母樣が被入た。地味なお召の襲に更紗形のコブラン織の御帶を少し下目に締め、お髮は前髮を少し出したマダムに遊した當世風な奧樣振り「まあお美しくおなり遊したこと」と見上げ見下しながら仰る「あらいやな叔母樣ね」と白眼めると「さあ大變だ蝶さんに嫌はれて了つたよ」と大笑ひ遊す。

そこへ初がお土產物整へて歸つて來 。受取つて調べながら「車の仕度は？」と聞くと「よろしう御座います」と云ふ。それでは出かけませうと早や叔母樣は立ち上る。頸にかけた金鎖りを瓜繰りながら私も續いて立つ。絹足袋に淺く履いた、ゴム草履に輕う裾を捌いてひらり護謨輪の車に乘ると、母樣はわざ〳〵車の側まで被入つて、それではどうぞ宜敷願ひますと、最後の會釋を遊すを名殘に二臺の俥は輓き出された。

見るから嚴しい煉瓦塀の石門を入ると。淸らかな敷砂の上を左へ迂曲して內玄關に立つ。右手の釦を押すと間もなく、靜かに十五六の小綺麗な女中さんが取次に出た。お馴染と見えて何か二言三言小聲に語り合つた。「さあ蝶さん此方ですよ」と、導かれる儘にお廊下傳ひに御座敷に入りました。愛嬌のよい女中さんが茶菓を進めて退る。

室は疊の香新しい十疊敷、床には文晁の山水の大幅をかけ、靑磁の香爐と玉の香盒を中央に左に椿の一輪活の花瓶違棚には古銅の獅子の置物に、蒔繪の料紙箱と硯箱、他に懸額、柱掛など何となく奧床しい裝飾と眺めてゐると、叔母樣は「お蝶さん少々お待ち遊ばせよ」とお土產物片手に氣輕く立つて、消えるやうに何處へか行つて了つた。

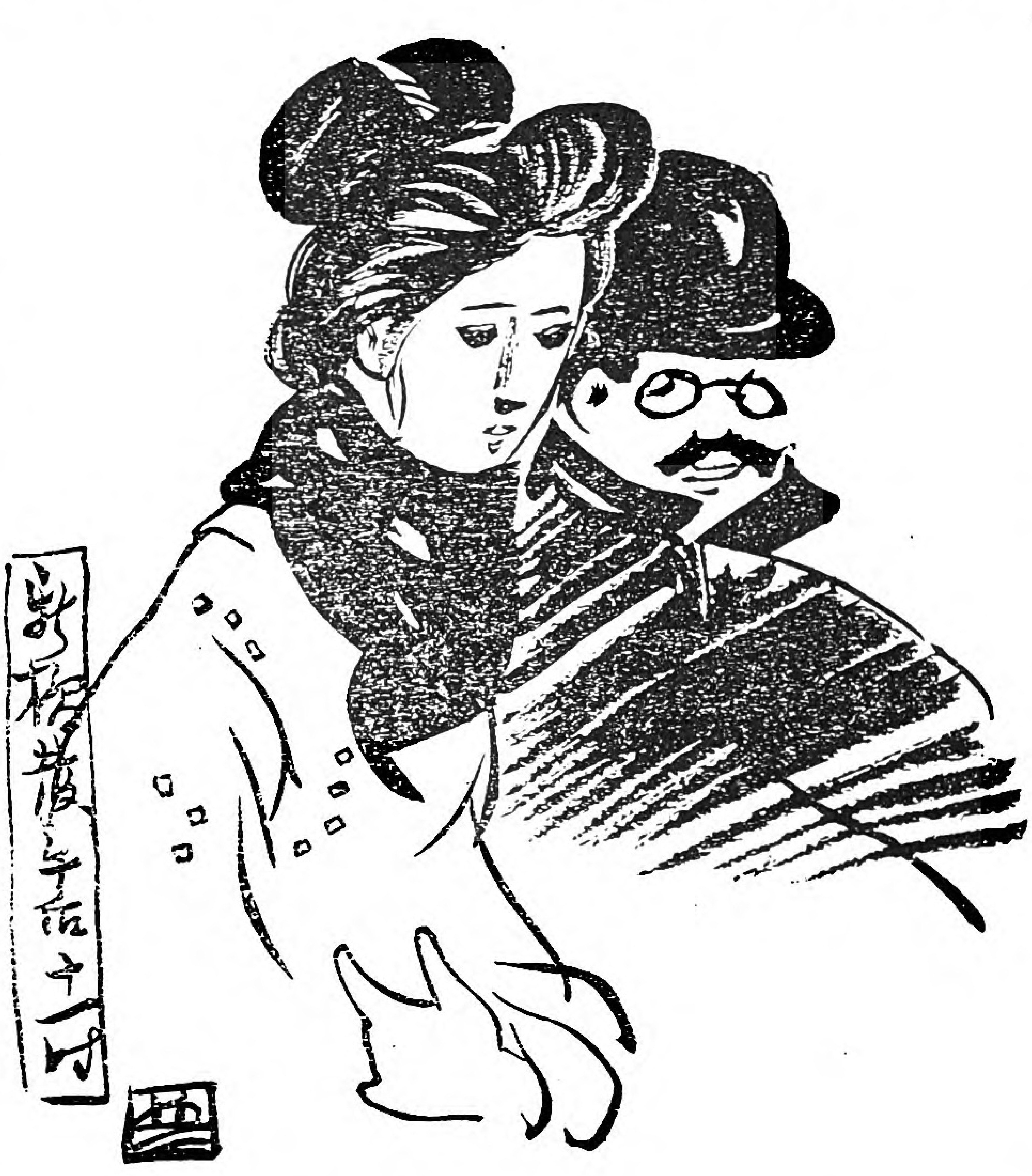
廣い室に殘された私は、妙に心細くなつて逃ても歸りたいやうな思ひをぢつとこらへて、銀の茶托に載せた京燒の茶碗から緩う上る湯氣を見つめてゐると、サヤ〳〵と衣摺れの音がして叔母樣はお蝶さん生憎と御前樣はお留守ですが、奧樣が大層お嬉び遊して、すぐ來るやうにとの御意ですの、さ早くお目に懸つて參り

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ませう」

と手を取る。同じ様なお座敷を幾室も幾室も通り越して、奥様のお居間の敷居際に手をつく。御挨拶に叔母さんがなすつて下さつたから、私は無言で頭を下げた。奥様はお机に向つて被在つたが、お美しいお顔を私の方へお向けになり鳥渡御會釋遊して「さあそこは端近よ、此方へお出で」と無理に請じ入られた。恐る恐るお見上げ申すと、藍鼠御召の御小袖に、葡萄鼠の紋羽二重のお羽織、漆のやうな澤山なお髮を一筋亂れぬ丸髷に遊した。

お色白のお品のよいお歳は四十六と承はれど四十一二にしか見えぬお美しい奥様。三十分計り經つてから退つて今度は御後室様のお居間へ伺ふと大そうなお喜び「おゝよく來たよう來たさあお入りさあ………おまきさん（叔母様）貴女もこちらへさあ遠慮なしによ………」餘り御遠慮申しても失禮と御免蒙つて進み御挨拶申上る。



丸髷に結つた、二十七八のお女中が布團、火鉢茶菓を運ぶ。「たしか、蝶さんとかいつたつけねえ」と仰る。「左様で御座います」と云ふと「ほんとにハイカラな可愛い〻娘だこと、ゆる〱遊んでお出でよ」と、にこ〱遊しながらお手づからお茶を注ぎお菓子を御す〻め下さる御如才のない御接待振り、種々お話してゐるところへ姫様がお見えになつた。愛様と仰つてお十七、房々したお髪を束髪に遊した、丸顔のお色の白い睫毛の長い涼やかなお眼、紫矢絣のお羽織召した、お品のよい嫖婷とし

た御姿。「さ愛樣蝶さんとお庭へ出て御覽」と御後室樣は御意遊す、はあとお頷きなすつた愛樣は、貴女お庭へ出て見ませうと莞爾片笑靨を見せる…何んてお優しいお方でせうと思ひながらお供する。

前庭は矮松の常磐の緑濃かに、中央の御池には黑鯉緋鯉が春の光をさも樂しさうに悠々と尾ふり鰭ふり泳いでゐる。少時池中の休息所に休んで、又も庭園の其處此處とさゞめき歩いた。春の空は深碧色に澄んで、ふつくりとした青天鵞絨のやうな軟らかな若草の上からは盛に陽炎が燃えたつ。暖かい日光に蒸されて、ぽうつと上氣に染めた頰を、何の花に觸れてか好い香りのする生溫い風が、そよ〳〵と撫でて行く。實に身も骨も溶けんばかりの心地よさ。その上愛樣は何でも伺ふまゝにお話し下さるので忽ち十年のお馴染のやうになつた。「愛樣唯今は何をお稽古遊して」と伺ふと、「佛語と洋琴と油繪を習つてゐますの」と仰る。其他に和歌、活花、茶の湯、盆石までお稽古遊す御樣子なかでも音樂には淺からぬ趣味をお持ちのやうに承つた。築山の下の梅林の前に立ち止つて透き通つた日光を澄み渡つた青空を仰ぎ見て「蝶さん疲勞たでせう？」「はあ疲勞ましてよ愛樣は？」「實は私もよ」つて莞爾笑ひながら「もうお座敷へ行つて休みませうねえ」と仰つて右手の方へ曲る。松椎楓などの樹の枝の低く垂れた苔の徑を長い間小走りに過ぎると、やつと廣々した芝生へ出た。花壇幾個を通り拔け御影の敷石傳ひに行くと椽側に近い芝生の上には木蓮の花が春の榮華を誇つてゐる、椽側に上ると愛樣は私の居間へ被入いなと、其處の襖を明けて一室を過ぎ、其次の八疊のお室に御案内受けた。

墨繪の山水の懸つたお床の片隅には袋に藏められた琴一面、彼岸櫻を投挿にした朧銀の花瓶、紫檀の書棚には蒔繪の御手文庫やら、金文字美しい御本など鹽梅よく、窓の下の埋木の机の前には友禪模樣の厚い座蒲團が据ゑてあつた。呼鈴を鳴らすと、お次の室からお蒲團と桐胴の火鉢持つて來たお女中に、あのお茶を持つてお出でと仰ると畏まつて出て行つた。愛樣は「蝶さん貴女今日は是非何か一曲聞かして頂戴なね」となか〳〵御熱心。

「私まだ下手なんですもの……此次に遊して頂戴よ」と御辭退申すと、「あら、那麽に謙遜しなくつても好いの……ねえ聞かしてくれるわねえ……何に……下手？下手でも可の是非ねえ」と、折から紅茶と果物を持つ

て來た小間使に、何やら私語と、やがてお琴を運で來た。愛樣は袋を拂ひながら「仲よく二人で彈きませうね雲井の曲を」

「あら私雲井の曲は駄目ですよ」と眉をひそめると、

「噓だわ、蝶さんのお手並はおまきさんに伺つたわホホヽヽヽ」と愛樣は艶やかに笑つた。「では違ひましたら御免遊せよ」、人め忍ぶの中なればおもひは胸に陸奥の千賀の鹽竈名のみにてと彈き始る。次に若葉を一曲彈いて、仕舞つて琴爪を外してるところへ叔母樣が被入つた。

「あの愛樣と蝶さん御後室樣がお召しで御座いますよ」と云ふ。おやさうと愛樣は立ち上る。二人して御後室樣のお部屋へ伺ふと、是非何か彈けと仰る。ほんとにもう困つて了つた。下手ですからを一點張りに御辭退する間に、早くも二面のお琴は持出された。無理に強られて仕方なしに坐るお琴の前、最初は七福神次ぎは七段と五段と四季の曲を愛樣と二人で彈いて仕舞ふと、いつの間にか奥樣がお見えになつて、もう一曲と切に御所望遊すそれではと、新雲井の弄齋と飛燕曲を一人で彈く、終ると皆樣は聲をそろへてお賞め下さつた。奥樣は美しいお手を正しう膝に重ねたまゝ瞬きもせず見守つて、ほんとに上手だねえと、仰りながら呼鈴鳴らしてお女中をお召し遊し「何ぞお甘い御菓子を持つてお出で」とお云付け遊す。再び襖が開いて丸髷のお女中が靜にお茶を持つて出た。さ、蝶さん召食れ、おまきさん貴女もどうぞとミウクリーム美しう盛つた菓子鉢を進め下さる。香り高い玉露を啜りながら二つ三つ頂いてゐると、「上田の奥さんとお孃さん一寸お座敷へお出で下さいまし」と次の間からお女中が聲を掛けた、鳥渡御挨拶申上げて前の御座敷へ戻ると、皆樣御心盡しの善美を極めた御馳走の御饗應を受けた食後青森土產の林檎を食べながら奥女中のお咲さんお千賀さんお濱さん達と四方山の話しをしてゐると、「愛樣の御召しで御座います」と姫樣附のお花さんの口上、早速叔母樣と二人で愛樣のお居間へ行くと待ち兼ねたやうに「蝶さんピアノ彈くから被入いな」と顏を見るなり仰つた「えどうぞ」と首肯くと「おまきん貴女もね……」と叔母樣の顏を見ながら、やがて愛樣は私の手を取つて前に立つ、お廊下の突當りの廣い洋風の西洋室、中央に小形の卓、安樂椅子が一脚に水色緞子の色麗しい椅子が五六脚、他には寫生の水彩畫、油繪の人物畫などが配置よく洋琴の上には美しい盛花

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が置いてあつた。

日が暮れかゝつたので、花電燈を點ずると室内はぱッと明るくなつて、春の日は琥珀の光りのやう。愛樣は洋琴に向ふとショパン作のノクチユルンとかむづかしい名の物を獨奏遊した、鳴り響く妙なる音に醉されて、恍惚となつて了つた私は、ふいに肩の邊りを輕くたゝかれて吃驚して振向くと、五位樣が被入つてよと耳元で叔母樣のお聲、二度吃驚して立ち上ると、すぐ背後に大島紬の綿入に對のお羽織召した、清瘦の眉秀でた鼻高き若き人、はつと思ふと胸が轟いた。叔母樣に次いで御挨拶申上ると、晴れやかな笑顏を遊して靜に御會釋遊す御品のよさ、思はずもハッと頭が下つた五位樣は葉卷の煙緩かに靡かせつゝ、椅子に腰を下して、お愛樣も一曲お遣りと仰ると、忌ですよ……お兄樣こそお久し振りに何か遊せよ、とお兄樣のお手を引張つて無理に洋琴の前へ……ほんとに駄々兒だなあと苦笑ひ遊しながらワグネルのむづかしい曲をお彈きになつた、五位樣のお上手なこと、三人は息をもつかずに聞恍れた、曲が進むにつれて鍵盤打つ手の冴は眼にも留らぬ程の速さ、美しい音色は益々冴て、心の奧をかきむしられる樣な何とも云はれぬほどである。やがて長い一曲が終ると云ひ合せたやうにお上手ですねえと叫んだ。

廊下がざわ〳〵と騷がしい大方お女中達が立聞して居たのだらう。それから愛樣と私と交る〴〵彈いてると「お宅からお車が參りました」と取次ぐ女中さんの聲に叔母樣は「一寸伺ふ意で大變に御邪魔を致しましたのね、さ、蝶さんもう御暇乞致しませう」と仰る。何となく殘り惜しかつたが仕方がない。奧樣は折角來たのに何の御愛想も無くつて失禮でしたねえ、近い中に又遊びにお出よと優しう仰つてお土産物を下さつたお手厚き御接待を心から有難く御禮申上て退ると、玄關まで女中に送られた。御機嫌ようを賑やかに繰り返して車は勇しく門を出た、空には圓い大きな月がかゝつて、夕暮の風が心地よく吹いた、我家へ着いた時は日長の春の日もすつかり暮れて了つてゐた。

お孃樣のお供

森　英　子

上野の山の一重はもうどれも葉櫻となつて了つたが濃艶なる八重櫻はまた一段の美はしさ、ちつた花に袴

の裾を引き〳〵お召の袷の袖吹く風にこぼれ出づる緋の襦袢のたもと、雪白のリボンひら〳〵、盛の花を眺めながら、花を恥らはせて我世の春に誇る家のお孃樣も八重櫻、七重八重なる厚化粧もしつくり合つて美しい、お家では末子の隨分駄々子だがまあ此とりすまして蓮歩をお運び遊ばすお姿の程のよさ、すれ違つて一二間追ひ越した角帽の人、ちらと此方を眺める、何氣なく二三歩、餘程氣になるかしてまた振り返つた、オホヽヽ、お孃樣露御存じなささうな御樣子しながら此方からも横目でちらりちらり、花の都の女學校中ではハイカラ學校とうたはるゝ女學館へ通ひ給ふ多くの姫君達の中にても、一際目だつ一鶴は此君いづれ劣らぬ花あやめ引きぞわづらふお姫樣方も此君の前には全く鷄の群れ、とは餘り酷いけれど奥樣の御自慢はさうなんですもの、お美しいにや違ひない、とにかく道行く人を振り返へさせます、あれあの通り最後の一瞥を與へて角帽は石段の蔭に沈んで行く、花がちる、花が散る、梢のが散るのか散つたのが舞ひ上るのか、ひらり〳〵心地快い春の風！。

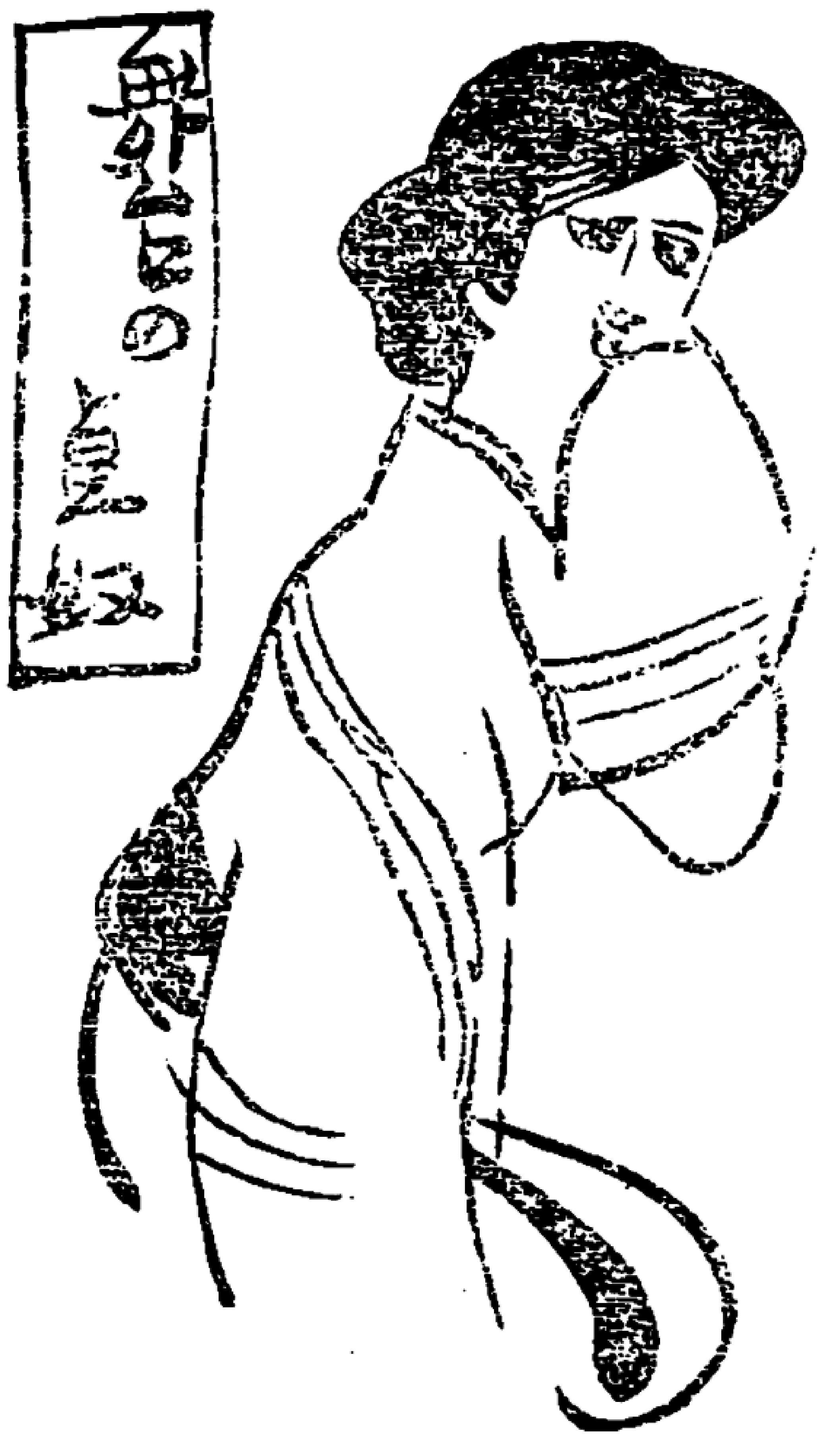
「まあ暫し」、お孃樣も立ち止まる、其前にはサック入のヴワイオリン持つた優しい女學生が莞爾と佇んだ、

「ほんとにしばらくでしたわね、どちらへ？」「明日新築の離舍の座敷開きをするので姉やお友達の許へ遊び乍明日の御招待に行く處なのよ」、十分程の立話が終ると別れた「左樣なら！」、右と左に、山を下つてすぐ電車に乘つて兩國さして進み行く、隅田川のさゞれ浪が日にきら〳〵と見え渡る處で電車を乘り捨てゝ長い橋を渡つて花の名所の向島へと、花は影もなく若葉の緑が風にそよぐ計り、聞しに劣る墨堤の春色、故郷の小川の兩岸に匂ふ櫻、其あたりの眺めが我目には遙かによいと思ひつゝたどる、長堤の半ばより左に折れて行く事二町足らずにして、小やなる或家の門の前に立つた。

「花住さんのお宅は此處だから、一寸待つて‼、被居か知ら、押せば開く輕い御門鈴が快くなる、青々とした垣根から透て見えるはゝきめ清いお庭、卯の花が十歩に足らぬお庭のそこゝに咲きくづれて殘雪の趣きを見せてゐる、家から晴々しい笑ひ聲が洩れた、花住益美樣といへば草深き我故郷の山の中までも響いて居る閨秀作家の白眉其方にはからず今逢ひ見る事が出來るかと思へば他人の家につまらぬ小間使奉公も馬鹿らしいと悔むにも當らぬとも思ふ、長々と枝を垂れた柳

が頭上に靡く何鳥か朗らかな音を鳴き立てる、獨身住の女世帯、川風すさむ夜半など淋しい事であらう「お入り下さいな、貴女！」中から響く美聲にはつとしてちりん〳〵鈴の音、御門を押すと庭下駄へ片足おろしかけて居た美人が「どうか上つて、下さい、さあてゝべ」御縁へ指さして仰せらるゝ方、私は靜かに一禮して見上げた、癖の無いよい毛を丸髷の束髪にして何やら淡色の花一輪かざして大島の袷に落花に柳の縮緬の帶ひたりと背に形よくすべて瀟洒なるお容姿、まだ見ぬ前の我想像と一致していよ〳〵慕はしき方、うつとりと御縁に腰かけたまゝ我多年の望み空しく折角上京してもと思ふ學校へ入ることかなはぬ樣なれば、朝夕美しい衣服を出し入れやらお化粧の手傳ひ許りして居るより、こういふ方の傍で夜な〳〵麗しい御思藻を分けて頂いたならばとよしなきことと思ふ、目の前の障子がさらりと開かれて、「此方へお這入なさいな」と益美子樣、表情に富むだ目元に笑を持せて人懐しい御樣子「ハッ」と頭を下げたばかり、ちつともたかぶらぬ何と云ふよいお方だらうとまたお座敷の中を覗く、お孃樣はしきりにアルバム開いて見とれて被居る、お寫眞も散つて居るやうだ、あの方のなら一葉頂き度ものと思ふ、益美子樣一寸立たれたかと思ふと我前にお茶とお菓子とを運ばれて、「這入つて下さればいゝにね」と被仰る「有難う存じます」も口の內、失禮など思ひ乍また後姿を見る、お言葉といひ着物の着方といひ言葉遣ひといひ人を見る目附といひ寸分隙なき方、こうして居る間に自分も下女のモデルにされはしまいかと不安に成つてきた、「では明日是非ね姉が待つて居ますから」、お孃樣のお聲、思はず下駄を深くはきしめて立つ、伺へたらお邪魔に出ますからどうぞよろしく、御遠方有難うぞんじました」、私の方へお向になつたから叮嚀に頭を下げると御苦勞樣でした、また被入い」と愛敬ある御挨拶、頭は決して下げ給はねど、御門を出て左へ先に來た道を行く、もとより令孃の後に從ひて、「こんどは英樣よ」と被仰る、「ハア左樣でございますか、やはり此邊で」、「矢張向島だけれどずつと奧だよ」、靴の事とてお御足の早いこと、左へ曲ると八重山吹が覺める樣な新築の家が並んで居る、其處を通り越すと家も次第にまばらになつて、やがて見え初むる土色黑々と鮮やかな畑、菜の花か黃金の色が打續く、赤いリボンが花を分けて行くのが見えたがいつか消えて白い蝶蝶が二つ飛び違つて右と左に舞ひ放れる。

うつかりしてると立派な御門へお孃樣が這入つて行かれる、思はず表札を仰ぐと英榮一と鮮やかに、こゝのお孃樣があの有名な女流畫家の水仙女史であるのかと何とはなく高鳴る胸を押へて後に從ひ入る、可愛い女中が再び現はれたときはお孃樣は其女中の後から奥へと進んで行かれた、もじ〳〵と玄關の片隅に身をよせてまつ、先の女中がまた現れて、どうぞお上り下さいませ」と私の頭から足の先まで見上げ見下しつゝ何だか冷笑を含んで居る樣な態度である、可愛いと思つた顏が憎くなつてきた、都の女は下女まで恐しいと思ふ、こういふ人は都育ちのハイカラな人にはそれこそ頭ばかり下げてお世辭も定めてよいことだらうと馬鹿にし給ふなと白眼めつけて遣つた、「とにかく上つて下さい、そこでは出入の邪魔にもなりますから」「ハッ」と恐れ入つて「ご免下さいまして！」と恐る〳〵案内されて行く、美しく光るお廊下を折り曲つてなほ進み行くとお庭先の御緣である、丁字の花の香がたゞよつてくる、眠氣のさすよい匂ひ、



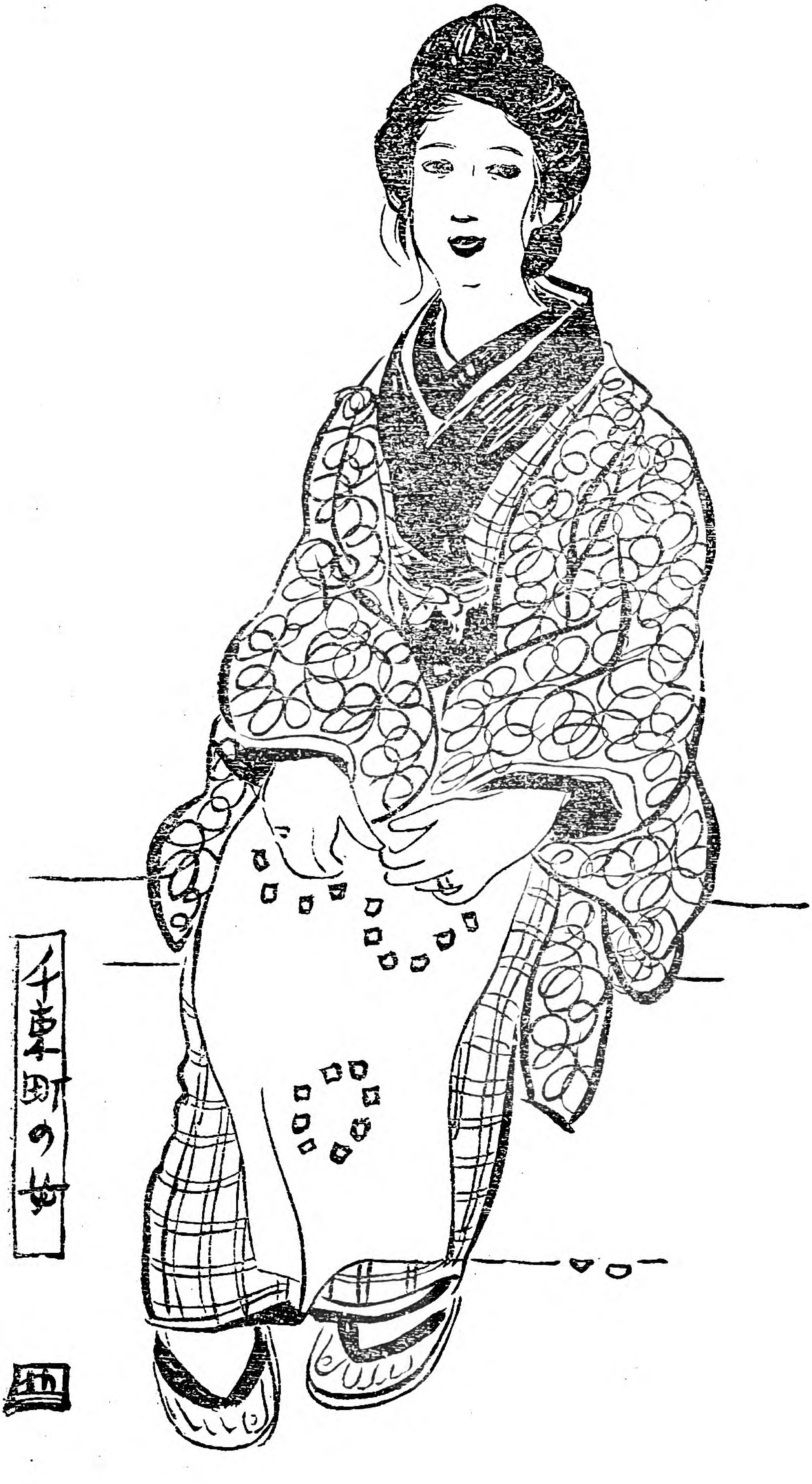
廣いお庭には何やら名も知らぬ紅白紫黄の花が半ば以上も占領して鳥が歌へば蝶が舞つて居る、お手入が行屆いて實にどこもかしこも美しい、こんなよいお住ひからこのお庭園を眺められつゝ繪の具とき給ふ令孃はほんとにどんなお方かしら天女の樣なお姿だらう、よく女學雜誌の口繪に君が物せられし高髷の優にやさしき柳腰あの樣な、「一寸こゝへ這入つて、お待ちなさつてね」「有難うぞんじます、もうおかまひ下さいますな」と立派に都辯で答へてやつた、入れられた室は四疊半應接間でもお客間でもとより無い、然し塵一つ見えぬ心地よさ運ばれたお茶を頂戴してると「久保田さんその下駄おはき遊ばせよ不潔いけれど」、優しい聲がお庭に響いたので「おや」と花影を透すと、まあ美しいお方が白い山椿の花にお手をかけてお出遊ばすところそこへ歩みよられたのは家のお孃樣、どちらもお美しいがほんとによい御標緻、あのお方が文子樣こと水仙女史で被在るかしら、お氣立までも忍ばるゝお優しいお姿、藤色絣の銘仙のお召に縮緬らしいお被布の褐色

矢絣が色白のお顔によくうつつて一段の美を添へて高髷ではない洗ひ髪の黒髪を無雜作に長く後ろへ垂れて被居る、ふと私の方をごらんなさつてお孃樣に何か言つて被居たが頻りに手招ぎなさる、思はず顔が赤らむ如何してよいものかたゞどぎまぎして了ふ、お二人が靜かに御緣へ歩み寄られて「今日は御苦勞樣ですね」—と私に言葉を掛けられて微笑まれた、「ハッお邪魔致しまして」、やう〳〵これだけ言つた、「庭へ被入い、其處に下駄がありますから」、何といふお優しい方だらう、「文子さんや」—お呼びになる聲がすると思ふとしとやかな足音がして其處の御緣に出て被入た方は此家の奥樣らしいお品のよいお方、「お母樣何でございますか」—、果して文子孃のお母樣であつた切角久保田さんが被入たんだから何か面白いお話でもおしでないか、まあお室へ入つて—、と笑ひ乍奥へ行かれる、此お母樣にして此お孃樣流石お仕込が違ふと思つた、此家には二時間程もお邪魔してお晝頃にはお孃樣のお姉樣（お緣付になつた方、私は未だお目にかゝらないの）お宅で御飯を頂く筈であつたのが、とう〳〵此英樣のお宅で御馳走に成つて了つた、十二時半頃お暇した。

お孃樣は「明日必ずよお待ち申してますよ」と被仰り〳〵出る、私はいつ迄も此家に居たい樣な氣がする、やはり女は女らしいがよいとお孃樣と水仙女史とを見比べ乍御門を後にそこまで見送られた女史に幾度か頭を下げて別れる、とつと〳〵と又元きた道へと引返す、いつか墨堤が見ゆる、隅田川瀬を辷る短艇の水をかくオールの音がして勇ましい軍歌の聲琵琶歌の聲清濁入り交つて響きくる、堤へ出た、葉櫻もる日光の美しいこと、二組三組の女學生が語り合つて行く、袴が一樣に風を孕んで色傘かたむけて歩く後姿はほんとによい、其後から若夫婦の一組が行く、背の君は背廣に中折れ赤いネクタイが目につく、夫人は水色の縞セルの裾も輕げに帶は厚板とか何とか先達て大きいお孃樣が三越でお誂へなされたのと同じ物らしい、程よくきちんと結んで三枚とか四枚とかの厚い草履に柔らかな草葉を踏み乍ら春色を探りつゝ長閑な散歩急がぬ道の樂しさう、向ふからくるのは男が一人に女が三人、近づくに從ひ一目で知らるゝお客と藝者、島田が二人に銀杏返しが一人、凝つた衣服とは知れどたゞ見た許りでは私にはわからぬ、時々赤い蹴出しが目につく、又長い橋を渡つて電車に乘ると被仰つたが、俥屋がすすめるまゝ俥を二臺雇はれて麴町三番町迄と、風を切

づて飛ぶやうにもう車上の人だ、色々な人の群れ行く種々な町を通りぬけ通りすぎ、はやてゝは三番町、とある御門前に俥を止められたお孃樣は、「ぢきだから少し待つてゝおくれ」と俥を待たせて下りる、自分も下りた、中川樣、これ一番上のお孃樣のお緣付遊ばしたお家かと仰ぎ見る相當のお暮しの樣なれどお生家より見れば餘りにお家が小さい樣だ、でも中のお暮し向は反つて御有福なのかも知れぬ、と餘計な心配しながらお玄關に立つてお孃樣と二人で「ご免遊ばせ」、一度二度三度いくら聲張り上げても通じない、「お孃樣お姉樣のお家ですからかまはずお上り遊ばしては」と申すと「否だわ上れば姉樣が引止めるんだもの、こんな家に長く居るのはいやだから」私は何となく妙な感じがした、この家へ被入たお孃樣お一人は先夫人の出だとか伺つて居た、いくらなさぬ御姉妹とはいへ餘り酷いと思つて居ると、「まあ、どなたかと思つたら雪子さんよく被入た、さあお上りなさい皆樣お變りもなくて、」ふと現れ出た方は正しくこゝの夫人と思へど餘りにお粗末なおつくりに驚いた、「姉樣私今日は急ぎますからすぐお暇してよ、これお母樣から」とお手紙一通出すと其まゝ「左樣なら」と又俥に召される、お姉樣は急いで外まで出てこられて「では宜敷ね、今一寸買物に行つて居たものですから大變失禮して了てね」とにこやかに私にまで御會釋「左樣なら」の聲と共に俥は走り出す、お姉樣はいつ迄も立つて居られたやうであつた、まだ二十三か四であらう質素なお作りなれどほんとに氣高いお方、お二人のお孃樣とはお品が違ふ、俥がどんと浮いたのに驚くと大きな石の御門に今入るところ、もうお宅へ着いた、八重咲の山吹持つて植込の中から「お歸り」と笑ひ乍出てこられたる大きいお孃樣、お湯上りのお顏色ことによく高髷にも澤を添へて美しと拜し乍お色の勝れぬ三番町の奥樣のお顏を思つた、柁は下りた、お玄關にも女下駄のしやれたのが二足、お客樣らしい夫人の疳高い聲が響く、乙女椿の花影に春の夕日が美しく殘つて居る。

△都會の女は天才を生まず
△都會の道路は田舍より來れり
△都會の家は三日の間に建つ
△都會の樹は塵を吸ふ
△都會の人は聲低し
△都會の流行は三時間毎にかはる
△都會の夜は美くし
△都會の海は灰色なり



千束町の女

卵

涙花子

光太郎は例日の通り午後四時過ぎに田端の家へ歸つて來た。

去年の夏母親が亡くなつてからは、伯父の家に厄介になつてゐる。伯父は麴町邊の小さな華族の家扶を勤めてゐて滅多に家へ歸つて來ないので、家の中の用を光太郎が何くれと足してやる。若いに似合はずよく伯父の家の世話をするので氣受けがいゝ。

今日も裏の深い井戸から手桶に二杯水を汲み込んで置いて、すぐ洋燈掃除にかゝり、物置の戸は要心が惡いから早くから錠を下ろして來た。手が透くと自分の三疊に入つて机の前に坐つてみたが、これから燈火が點く迄の間を日課の英語を勉強する氣にもなれず、民法を調べるのは猶更厭で、つひ同僚から借りて來た文學雜誌を讀み出した。然しこれも平日のやうに氣乘がしない、一體自分は如何なるのだらう。何時までこんな無意味な生活を續けなければならないのだらう――區役所の小吏といふ身分が若い光太郎のプライドを酷く傷けるので、どうかして今の境遇を脫け出やうと悶えてゐるのだが、骨を折つて一歩進み出て見たところが果して滿足を得られるかどうか甚だ疑はしくなつ

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。光太郎は小說類を讀むのが好きだ。そしてその中に出る主人公の運命を自分の身の上に引き較べて、平凡な色も香もない砂道を通つて來た自分を詫しく思つた。今現在踏む道も礫ばかり、未來に續くのも矢張石炭殼を敷いたやうな細道に相違ないと、如何も思はれてならなかつた。

戀といふやうなことも折々考へてみたが、そんなことをするには餘り自分が見すぼらしいやうで、戀はもつと華やかな、血色の良い人々がするもののやうに思つた。それでも隣りの家の妻君が美しいといふことは人が評判する前から知つて居た、休日などは窓から生垣を透かして、その美しい妻君が白い手に籠を下げて鷄に餌をやりに來る姿を飽かず見まもつた。そして若し妻君の代りに遠縁の者だとかいふ色の黑い頑丈な男が水夫服のやうなものをきて來るか、でなくば色の小白い、一寸愛嬌のある、ツンとした下女が來る時にはひどく失望した。然しこの下女は何となく癪には障るもの丶萬更嫌ひといふ譯では無かつた。どつちかと云へば、心の底では好ましいのだが、互に强ねて喧嘩面をして見せ合つてるのだといふ風に考へたかつた。之と反對にあの色の黑い男は心から憎かつた。戰爭に行つて來たとかで厭に胸を反らして大手を振て歩く。伯父などは「勇さんは感心だ、よく一人で百に近い鷄の世話が出來る。鳥の出し入れ、鷄舍の掃除、糞の始末、餌を煮ることまで腕一つで切て廻はすのだからえらい」と褒めるが光太郎はその度に厭な顔をして「つまり人間がさういふ勞働に適するやうに出來てるのだ」と下卑むやうに云つた。

光太郎はある土曜日の夕、何氣なく庭を步いてゐたとき大變な事を見た。隣りの庭のこちら側の大きい鷄舍の前で、下女と勇さんとが梅の樹の根元に蹲踞んで密々話をしてゐた。下女の眼には一杯淚が溜つてゐた。男の顔は蔭になつて見えなかつた。この事があつてから勇さんが一層憎くなつた。

隣の家に就ては近處で種々の取沙汰をする。鬚を生して金緣眼鏡をかけた中年の主人は會社員とか相場師とかで、美しい妻君はもと柳橋とかの藝者で、この主人が何千とかの金を注ぎ込んだ寵妓だとか、いや他人の妾だつたのを何うしたのだとか、寄ると觸るとその評判だ。家内は夫婦の外に伯母とかいふ人の好ささうな老人と、先妻の生んだ可愛い十一二の男の兒がゐるだけだ。

光太郎は日の暮るのも知らずに自分のことや隣家のことを考へた。淋しい夕飯の後も茫然して机に頰杖をついてゐた。その時隣家から珍らしく使が來た。境界の生垣に非常用の木戸が附てゐて行き通ひが出來るので、今迄も二三回遊びに行つて主人から手前味噌の養鷄談を聞かされたことはあつたが、態々使が來るのは妙だと思ひながら立つて行くと、今丁度雛が孵卵器で孵つたところだから見に來て呉れと云ふのだ。一度見たいと思つてゐたので、光太郎は下女の後について行つてみた。

六疊の間の片隅に据ゑた一臺の孵卵器の蓋を開て、妻君はその纖細な幾つも指輪を光らせた指で何かしてゐた。銀臺の高洋燈が左右に二つ溫かい光を漲らしてゐる。妻君は平時鷄を扱ふときのやうに薄蠟の柔軟な羅紗で出來たコートともつかない物を羽織つて、惰げなやうに片膝を立てゝゐた。

俯向いた細い雪のやうな襟足に英吉利巻の縺毛が懸かる幽かにピヨ〳〵といふ聲がきこえる。

『丁度好いところ、ずつと御寄んなすつて見て頂戴』

かう云つて光太郎を振り向いて微笑んだ顏は燈火に背向けて抜けるほど白かつた。

恐々寄つて覗いて見て光太郎は驚いた。百二十個入の孵卵器の中に一杯並べた卵は皆生きてむく〳〵してゐた。其處でも此處でもピヨ〳〵啼いてゐる。殼を破つて小さな可愛い頭を半分出してゐるのが無數にある。中には最早抜け出して尻で殼を引摺つてゐるのもある。未だ破れないのも、中に生物が潜んでゐるのが明らかに感じられる。妻君は細い指で一つ宛摘み上げては、殼を破つて中から溫かい、柔毛に薄く包まれた小さい動物を傍の育雛器に入れる。それが如何にも無造作に見えた。

『一々破つてやらなくても自分で突ついて出て來ますんですよ。親鷄が居れば嘴で破つてやるんですが—』

『殼から出たのは最早卵の倍以上になつてゐますね』

『えゝ〳〵もう小さくなつて入つてゐるんですから、出るとすぐ……おや!!これは跛足だよ。厭だねえ』

かう云つて妻君は一疋の雛を育雛器に入れて、その殼に鉛筆で書いてある番號を書き止めた、これは屹度育つまいと思ふ。そして今迄破つてみた分の中で孵らないのや、不具のものの數を考へて、すぐその割を出して見た。この分なら全體で一割位しか屑は出ない筈だと見込が立つと安心の色が浮ぶ。

『これなんぞは知己からの預り物なんですが唯一つ入れたのが又よく孵つて一番丈夫さうなんですよ』

一つの殼を綺麗な爪で彈いてみせ又一つ取つて、

『それだのに主人が樂みにしてをりました是れなぞは意地が惡いもので駄目でしたの、それであの……』

と云ひかけて奧の方を見て急に聲を下し。

『ふて寢て仕舞つたんですよ、ホヽヽヽ』

と子供らしく忍び笑をした、光太郎はこの美しい妻君の表情に富んだ眼の大きい條理の細かい顏を思はず昵と見た。幼々しい笑顏はいつか驕つた。とり澄ました顏に返へつて冷かに、

『白色單冠レグホンの變種でしたの』

かう云つて又他の卵から雛を摘み出した。ピヨ〳〵といふ聲が漸々賑やかになる。そこへ奧から子供が出て來て坐ると突然卵を摑まうとした。

『靜夫さん不可ません』

妻君の涼しい大きい眼が俄かに險を帶びた。

『だつて……』子供はもう鼻聲になる。臺所から下女が白い前掛で手を拭き〳〵出て來て子供を賺して、箱を覗き込み仰山らしく、

『まあ可愛いこと』と云つて光太郎の顏を冷嘲すやうに横目で見た。

その夜光太郎は三疊の間で遲くまで起きて居た。孵卵器の中の卵がムク〳〵生きてゐたのを見たときに轟いた胸は中々靜まらなかつた。殼を破つた小さい頭が黑い小さい眼を光らして四邊を見廻はしたとき、そこに初めて世界を見る怪訝の色があつた。破れた殼は尻につけて早くも餌を拾ふ眞似をするのを見たときには何とも知れず淺猿いやうな氣がした。

然しそれも尙ほ不思議な印象を留めたのは美しい妻君の白い手から生きた雛が一つ〳〵現はれる有樣であつた。その細い指輪の光る指が幾十といふ生命をあんなに無造作に取扱ふ光景であつた。あの細い指で番號をふつて、あの箱の中に並べ寒暖計で溫度を計つて一定の時日まで投つて置き、蓋を開けてあの綺麗な爪で一寸突くと中からピヨ〳〵云つて生れ出る。それを育雛器で育て上げ、運動場へ出して遊ばせて、漸々生長すれば、直きに今度は自分で卵を生むやうになる。その卵が復卵を生む。生んだ卵が復卵を生む。

孵卵器と寒暖計と、卵と、番號と、細い指と、育雛器と、運動場と、……………その循環の餘りに單純な

のに呆れた。

ふと光太郎の頭に先日見た下女と勇さんとが梅の樹の根元で密談してゐる有樣が映つた。

下女が勇さんの樣な色の黑い卵を生んだ夢でも今夜見るかも知れない……………かう思つて自分でその考への餘りに突飛なのを笑はうとしたが、どうしても笑ふ氣にはなれなかつた。（入賞）

關先生

梅子

西洋史の關先生は銹びのある透つた聲だ。それで悠たり教壇へ立て、落付いた然し熱した語調で佛國革命等を説く時は、私は恍惚とみいられた樣な。氣持で先生の顏を遠慮なく見つめて耳を傾けるのである。さう云ふ時にも先生は、私の方許りをあの眼鏡の下から熟とみてゐる樣に思ふ。一體關先生は私達の見た外の先生等とは、全で世界の違た、加何にも新らしい時代の空氣を腹一杯吸た、自由の血の流れた人の樣に思へて始めから私は好きだつた。だが好きだを好きだと、憚らず云ふべく私達の先生として關先生の餘りに若かつた。併し先生の方では至て無頓着で、頭から小供視してゐる樣にも見た。或友が先生を評して、『先生は人に散々チヤームさしておいて、知らん顏してゐると云つた風で痛快だ。』と實際それはさうかもしれぬ、だが何うした譯か先生は、一番初めに私の名前を知て、而して廊下等で逢ふと、靜と肩を叩いたり、優しい言葉をかけたりした。那麼事から私は先生を思ふ樣になつたのだ。する中先生は私の家から一町程手前の或小さな家へ入た。其越して來た日の夕方何となく私は、學校以外の先生が見たかつた。何んな樣子で、何樣な生活をしてゐるのだらうと思た。而して何と云ふ當もなく先生の家の前を一寸覗く樣にして通つて見た。きれいな格子がはまつて、暗い樣な玄關だつた。小さな下駄箱の上に先生の靴も置てあつた。だが先生の影も見えない私は非常に慊らない氣持で歸たが、何うしてもぢつとして机に向てゐられなかつた。譯もなく心がそわそわして幾度も門へ立て見た、矢張り見えなかつた。私は此上もなく先生が冷淡の樣でうらめしくあつた。

翌日學校で先生が是非遊びに來いと云つた。

『上てもわるかないんですか？』ときくと、『かまひま

せん共、婆やと二人きりで淋しくて堪らないから、來て下さいな、今夜でも』と、私は其夜幾度もためらつた後思切て先生の住居の格子を開けた。すると卒然先生の聲で、『岸さんでーせう！』と飛び出す樣にして出て來た而して私が隅の方におぢた樣に立てゐるのを見て、

『何だつて那麽所に立てるの？』と私の袖を引く樣にした。私は默ておづ／＼し乍ら先生の後へついて入た。先生の室は六疊で、大きい本箱と一閑張が置れてあつた。而して先生の蒲團が、美しいいうせんでふわりしてゐるのが眼についた。私は先生と丸い火鉢をへだてて坐た。先生は學校で見るよりも若く見えた。而して隔てのない碎けた口をきいた。だが私の方では、何となくこうやつて先生と二人きりで居るのだと思ふと餘りに周圍が明る過ぎて、まぶしい樣な、まともに先生を見て、はッきり口をきく事が出來なかつた。で、とぎれ／＼の短い對話を交して三十分許りで私は歸ると云出した。『おや送つてあげ樣か』と云たが私は大丈夫ですと云て外へ出た。すると玄關に立てた先生が、『だけどね？』と下駄を突かけて格子を開け乍ら『餘り眞暗だから其處迄見てあげ樣、』と低い聲で云て、靜と格子をしめて默て私と並んで歩き出した、『すみません。』と云ふと、『かまはないさ』。暫く行くと、『みほさん寒いの？』

『否、さうでもないわ！何故』『だつて戰へてるぢあないか、而して冷い手してるんだね。』先生は無造作に併し固く私の手を握てこう云た。私は何となく云ひ樣のない壓迫を感じ乍らも、心は恍惚と醉はされた樣になつた。而して何處迄もこうやつて歩いて見たいと思た。表通へ出る處で私は先生と別れた。そして家へ歸て床に就く迄留度なく、先生の事が浮んでゐた。

　それから學校で先生に逢ふ毎に遊びに來いと云つた。而して私は一月程の間に、驚く程先生と親しくなつた、もう平氣で先生の前ではしやいだり、拗ねたりする樣になつた。併し只打解けて語たり、一緒に歩たりすると云ふ丈けで、二人の間は別に變た事はなかつた――とは云へ私は先生を戀し先生も私を思てくれた。

　要するに二人共それを發表し合はなかつたと云ふ迄だ。で私は時々學校で先生と騷いでゐる人を見ると、私と先生との間のことを咄して誇て見たかつたが、毎も不安で云ひ出し得ずに過ぎた。或日夕食の時に妹が不圖こんな事を云つた。『此間坂から姉さんが學校の

歸りに一緒に下つて來た、あの若いハイカラな人があれが先生なの？眼鏡をかけた？』と私はぎよつとして赤くなつた。而して妹の面を睨めつけた。すると姉が『何んな人！』と私を見た。『一寸も若かないわ、嫌な文子だよ！』と怒た聲で私は云ふと『をかしな人ね。』と姉は笑ふ。それから私は家の者母や姉下女迄が、人のする事なす事、熟と見すゑて居る樣でしたがうるさいなと思ひ出した。だが別に其事に就て何と云はれた譯でもなかつたが、何となく私は、大びらに先生を訪れる事が出來なくなつた。でも私は先生に逢はずには居られなかつた、一々口實を設けて逢ひに行た。其毎に罪が深くなつて行く樣で怖ろしい樣な氣もした、で先生がいつも廻り道して送つてくれて…而して夢の樣な氣持である時、自分の家の格子をまたいで、不圖母の苦い顏を思ひ浮べると、私は何故仕たい事が自由に出來ないのかと、さう云ふ事の出來る生活をしみ〲慕て空想して見るのが癖だつた。

　先生は此學期がすむと、一旦歸國して若しかしたらそれなり辭職するかもしれないと云ふ事を、『生徒にはまだ秘密だが。』と云て談した。私は何となく失望して而してもう構うものか何だつて云てやれと云ふ氣になつた。或日學校の歸りに私が何故ともなくこんな事をきいた。『先生は何時結婚なさるの！』と、すると『何時て僕は一體妻なんか何時迄もない方がいゝんだが、母がうるさく勸めるので、早晩貰うさ、しかも百姓の娘を！』

　案外何でもなく云つたので、私は何となく厭やな氣持がして。『百姓の娘だつて何だつて、先生の好きな方ならいゝわ！』『それがさ、嫌やで堪らんのだものみじめだらう』と苦笑した『それなら、何故お止めになさらいの？』先生にも似合はないと云ふ風に、冷笑したつもりで先生を見ると、先生は聞えないのか、それ共頭痛でもするのか默て眼を瞑て頭をグラ〱動かしてゐた。暫くしてから『……男は比較的自由だからね、結婚したつて何でもないさ、妻は妻、戀人……おみほさんはみほさんさ……だがもう直きおみほさんだつて嫁に行て了んだ而して何處かの何人かの妻になつて平氣ですまして……現の僕の事等一昔前の夢の樣だ等と云ふ時があるんだからね……變なものだな。』と半は獨言の樣に先生は云つた。私は何となくイラ〱してきた。

『先生だつて同じ事でせう。』と突かゝる樣に云ふと

『那麽ものさ、だから若い中に出來る丈け甘い追憶を作ておいた方がいゝんだね、さうだらう？』先生は沁みりした調子でこう云たのが私の胸に淋しく響いた。

『全くね……』全く其事を思ふと、又新らしい血の湧く樣な……するとさしづめ私は先生だ……

『だからね、僕は思ふんだ、自分の戀した女と別れる時には、互に感情をわるくしない樣に談し合ひで結婚なり何なりしたいと思ふんだ……而して其女と幾年もの後相逢ても心持ちよく昔を語れる樣にね……だが那麽事は空想に過ぎないかもしれないさ、戀してゐる最中だから那麽事を思へるのだが……其戀の醒めた時程淋しい嫌やな感じのするものはないからね。』

『でも醒めなければいゝでせう？醒めつこないと思ふわ……』私は何となく聲がふるえた。

『僕との戀が？』先生はこう云て私の手を握た。『おみほさんに感謝する、それ丈け思てくれゝば澤山だ……だが併しね、誰れだつて戀してる中から醒める時を想像する事は出來ないからね、それは戀する心と同じだもの…』と先生の聲は沈んでゐる、私は何となく悲しくもないのに泪ぐめた。そして『でも嫌やにならない中……倦きない中に何うかすればいゝわね。』

『何うかつて何う？結婚するのかい！』『さう云ふ譯でもないけど！』私は自分でもわからなかつた。

『心中でもするのか…』と笑た、眞逆ね……と私も笑た。其夜位私は眞面目に先生と此先何うするのだらうと考へた事はなかつた。而して先生が、もう外の女と結婚するに極てゐると思ふと、そして其女を嫌てゐるのだと思ふと猶安心して先生との間を平氣で進めて行ける處迄深くなつてみたい……而して私と云ふ女の印象を先生の胸に深く鮮やかに刻みつけて別れたいとこんな事を思つて見た。

焚火

むらさき女

チラ〳〵、チラ〳〵と絶えまなく、綿を千切つて投げたやうに大きな雪が降る。

「土手ゆけあ寒かろきてゆかしやんせ……わしが着がへの茶の小袖……」

こうだしぬけに、寒さにふるえてゐるらしい聲で歌つて其拍子に、前へ可成大きい石を二つ三つ投げて、

銀はハ――と白い息を吹いた。すると土を運んでゐたと見ゆる一人が、空の畚をかついで、水鼻を啜りながら、

「おい銀公、素敵に元氣がいゝぢやねエか。ね、どうしたと云ふんだえ。」と立どまつた。彼等は〇〇堀の切下げ工事の爲、傭はれた稼人なのである。そして今もとある赤土の崖をくづしてゐるので、彼等の大方は、古ぼけた帽子に、所々破れた外套か、さもなくば、さいしの上張に、切れ〴〵の蓑で、手拭を頰冠りしてゐるるのもある。

「途方もねエ降り方ぢやねエーか。アッ俺の窩頸から雪が流れてみやがつた。アッ冷ていぞ〳〵。」と別にこれも空の畚を肩にかけてゐるのが、立どまつて其顔をしかめながら、首筋を拂ふ。毛髪が長くのびて、一文字に眉が引張られた、唇のあついのが、紫色になつてゐる顔で肩巾の廣い中脊の男である。

水鼻を啜つてゐるのが「虎……」と云つて伸上つて、あたりを見廻して、

「親指がおらんぢやねエーか。少しあたらなくちや、やり切れねエ。な。」と目くばせして、

「おーい。皆一服しねエ。」と呶鳴ると、鍬を持つてゐたのも、石を運んでゐたものも、得物を抛り出して、虎と水鼻の後にぞろ〴〵ついてゆく。銀も仕方のなさゝうに、一番あとからついていつたが、繩ぐくりした小屋へはいると、皆をわけて火のそばへよつた。

焚火は細い煙をあげて、火はきえかかつてゐた。

「薪がないぢやねエか。」と呟くと、

「こゝだ〳〵」と。太い薪をば二三本、つくばつてゐる皆の頭の上から誰かが出した。

「オット來た〳〵。どこからちよろまかしてきたんだエ。」と薪を程よくつくろふ。

パチ〳〵、パチ〳〵といつて火は新らしい薪に移りはじめた。紫の煙がひくい小屋に、一ぱいになつて又外へ流れ出た。彼等は手拭を取つて雪を拂除けたり、腰から煙草入を出して、太い煙管で盛んに吹かしはじめた。

安煙草の頭がぐら〳〵する、香がむら〳〵と漂ふた。

「何ね、俺さつき溜へいつたと思ひねエ。見ると彼奴等あ、雨ももらねエ所に、ゐやがる癖に、どし〳〵薪をもやして、おまけに惚氣に夢中になつてやがるので、癪に障つたから、二三本、ちよろまかしてやつた

んでエ。」と薪を出した、小盜人でもしかねまじき面魂のが云つた。彼等は、それを別に惡い事とは思はぬのみか、むしろ我黨の爲にしたのだと、快よく思つてゐた。

「ヘン馬鹿にしてゐやがるぢやねェか。奴等ばつかり火にぬくまつたつて、こつとらが、たまつたもんでねエ。お役人樣つてのせあげてら、いゝ氣になつてけつかる。昨日もさ、俺が少しぼんやりして、じつと立つとつたら、おい何をしてゐるんだ、お拂箱になつてもいゝのか。と、さアこう仰しやるんだ。へエ少しあんまり寒かつたもんですから……とマアピヨコ〱米つきばつたの眞似をして、逃げたけれど、なア、嬶や、餓鬼さへ居らなけりや、あんな奴の世話にあならねエ、チヨツ。」といまいましさうに、虎がスーッと煙草を音さして吸ひこんだ。「おいなア……それから見りや、銀さんなんか、若い身空で嬶や餓鬼はなし、いくらも出世の出來る體だから、羨やましいなあ。」と、後から嗄れた聲で、たれかがいつた、銀は煙草ものまず、思ひ切り火に近づいて、此時までじつとえもえてゐる火を見つめてゐたが、フヽンと淋しく笑つて、答へなかつた。虎が。

「フヽンぢやねエ。ほんまだ、俺なんか親がわるいんだ、慈善院の前に捨てるなんて………。」とさすが少し濕つたが、氣味わるい笑をして、

「俺ア、どこの隅にかくれてゐやがつても探し出して恨をかへさなくちやおかねエ。不孝者でも、仕方がねエ、そんなにしたんだから……。」と口惜し相に叫んだ。

「そして虎さん、そのようおしまひは、どうするんだエ。」と唐突に銀さんが尋ねた。その面には、何かを喜ぶらしい色が出た。

「そのおしまひつて……。」と少しへどもどして、

「おしまひつて……。」

外には雪がいよ〱、ひどくなつた。さきに彼等が活動してゐたその足跡が、だん〱埋められて、眞白い布を一面にしきつめたやうだ。

銀さんは詰めよつた。

「そのおしまひはどうなるもんだらうか。お前ばかりぢやねエ。俺も。」

「……お前は知らねエけれど、俺あ……俺、大方行たふれか、のたれ死が關の山だらうよ。何だ、つまらねエアハ。」ヽヽと笑つた。

銀はおびへた樣に、不安な顔つきをして、

「さうかなア。嬶や餓鬼があつても。」と云ふと、

「何だ、嬶や餓鬼は何でもねエ。まかりまちがへば、俺あ、どこへでもゆかあハヽヽヽ。」と嘲つたやうに笑つた。

「さう云つたもんでもなからうぜ、虎さんのは、あれでも大阪の常盤で、隨分ならした女だつたぜ。それをうまく引張り出してさ。今になつて、そんな事云つたら、恨まれやうぜ。ハヽヽ。」と、水鼻を啜つてゐたのがいふ。

　虎はフヽンと苦笑ひした。銀さんはチラと虎の顔をぬすみ視して、

「虎さんはそんな事があつたんかい。今年いくつだ。」と好奇にみちた目でみつめた。

「今年取つて三十九歳。四人のお子さん持だ。人間もこうなつちやおしまひだ。」と投げやつたやうに云ふ。

「私もいつか虎さんのやうに、子供をもつたりするやうになるのかなア。それまで生きられやうかね。わしやのたれ死だけはしたくねエナ。どうしても厭だ。」と蒼青の顔をして云つた。

先刻からしきりと、入口に顔を出してゐた一人が、

「おい。皆なたちねエ。ヽ、ヽ、でか目がやつて來たぜ。」と振かへつて云ふと、彼等の一人は、手早く盛にもえてゐる、薪をとつて雪の中におし込んでかくした。

　一齊に小屋の外へ飛び出して、めい〱、仕事に取りかゝつた。實にはやい。再び清い敷布は忽ち彼等の草鞋のあとで汚された。

　外套に長靴の監督は突立つて、彼等をじつと睨めた。銀も虎も顔を見合して一言も云はなかつた。

　雪は小降りになつた。誰かゞ呑氣に鼻唄をうたひ出した。

女の命

芝のつゆ

風なく月の美くしい宵であつた、雁が啼いて行た。嗚呼もう秋になつたのかと今更の樣に、冷たい縁の柱にもたれて、うつとり空を仰いで居ると、

　友枝さん。と私の名を忍びやかに呼ぶ人が有る。氣味惡く思ひ乍ら、聲のした植込の方を透し見て、「どなた」といふと、

私よ其處へ參つてもようでざんすか。

　庭傳ひに來られたものと見えて、お隣の弘子さんが、松の木のかげに佇んでゐらつしやる。

　あら誰方かと思つてびつくりしましたよ、私今一人で淋しいのですから、どうぞ御遠慮なくいらつして頂戴。

　さう、では御免下さい。

　靜に私の右側に腰をおろして、ほんとに好い月ですこと先刻雁が啼きましたね、お聞き遊ばして、

　えゝ、聞きましたよ、何だか心細くなつて泣きたい樣ですね、恰度貴婦のお好きな栗饅頭が參つて居りますからお茶でも入れませう。

　つと立ちかけると、弘子さんは慌てゝ私の袖を引捉へ、

　否、御構ひ遊ばすな、私今夜はそんなにゆつくり出來ませんから。

　好いぢやありませんか、偶にゆつくり遊ばしても。

　有難う存じますけれ共、恰度母が出かけましたから其内に一寸お伺ひ致し度い事が有つて、内の者にもこつそりと裏からぬけて出ましたの。

　さう、では御ゆつくりも出來ませんね。

　私も再び腰をおろして、でも私に聞きたいと仰つしやるのは一體どんな事ですの、大抵は自分の胸に思ひあたる事がないでは無いが、故意とお顏をまじ〳〵見つめるものだから、弘子さんは氣まり惡るさうにうつむいて餘儀では御座いませんけれど、と細い中指の指環をいじり乍ら、

　昨夜もね、一寸とした事からひどく母が機嫌を損じて私等へあたり散らすものですから父が聞き兼ねて、さうお前の樣に口八ケ間敷くては、云はれるものもつらいし聞くものも嫌だから先達も一寸話した事だが、若い者達だけ別居させちやどうだ。と申しますと、いくら信賴する夫が出來たからといつて、さう親を見捨てたものぢやありますまい、それとも豐雄さんが御希望なさるなら詮方ありません。豐雄さんは一體どうお思ひですか、つて申ましたら、あんな氣早な人なものですから、いきなり顏色かへて、どうともお母さんのよい樣に致します、と手荒く襖を引開けて、其まゝ書齋へ歸つて仕舞ひました。

　弘、お前もあちらへお行き、と父が申して呉れたを幸ひに、書齋へ參つて見ますと、深い〳〵吐息をついて、何かしきりに考へ込んで居りますから、嘸腹立て

て居るので有らう、矢張私が不行屆だからと、悲しくて〳〵其まゝ泣き倒れて仕舞ふと、良人は向き直り樣いきなり私の手を握つて、

弘、辛からう。僕が來たばかりで、一層苦勞が增して氣の毒だ、暫く辛抱おし、其内又笑ふ時節がないと限ぎらぬぞ。

私はもう此まゝ死むで仕舞ひたいと良人の膝に泣きました、其あとでお宅へ伺ふと申して出ましたから、何かお父さんへ御相談にでも參つたのではあるまいかと存じますが、何卒短氣起さずに、辛抱して呉れる樣に、貴婦から慰めて遣つて下さいませ、杖にも柱にもと思つて此樣な事お願ひ致ます、只貴婦ばかりで御座います。

眞白い頸をうなだれて、兩手を組んだ膝の上には熱ひ淚が音もなく碎けて居る。

きびしい繼母の手許に、養子を迎へて一年に近い年月を寢ねるにも起きるにも苦勞の絕え間なく、お母樣御逝去より引つゞき七年以來、泣いて〳〵泣き通しても、底尋知れぬ淚の泉のいつになつたら枯れる事やら美くしい人には得て免ぬかれぬ薄命の、弘子さんも矢張其一人である。

一體豐雄さんは母の從弟で、養子にお世話するに就ても、お母樣があんなではと、母が大反對で有つたけれど、弘子さんの此從順なのがひどく父の氣に入つて何、あんなで有つても孫の顏でも見たら又氣が折れるさあと、終に成立したのだが、今から考へて見ればお氣の毒でならない。

實に昨夜其爭論の後で有りませう、豐兄さんが沈んだお顏して「お父さんは」とて入らしつたから、お書齋にでしやう、どうか遊ばして、と聞くと、

否や、それよりか友さんも矢張養子するのだね、だけれどお前は兩親が有るから好い、つて淋しう笑ひながらさつ〳〵と書齋へ行つて仕舞ひました。お茶を運んで行つてどんな話か聞きたいと思ひましたけれど、兩名とも口をつくんで只退つて襖を〆める時、お前一人苦勞するのぢやない、お舅父さんも弘さんも、より以上の苦しみを嘗めて居られるのぢやから……。

と只それ丈を耳にはさみました。今の弘子さんのお言葉と思ひ合すれば、矢張弘子さんの御推察通り、豐兄さんは離緣の御相談に參られたので御座いませう、然し氣の弱い弘子さんに恁那事打開けられぬ、又豐兄さんは、永久に辛抱して頂かなくちやならぬ、私此度お

目にかゝつて、よく〳〵さう申しますよ、あなたもお辛いでしやうが御辛抱遊ばせね。

有難う御座います、御恩はいつ迄も忘れません、と弘子さんは涙にぬれた寂しい顔に、ニッコリ微笑んでそれでは母が歸宅せぬ間にと、立上がられた其影の淋しい事、私は何故か泣きたい樣でした。

* * * * * *

自分は目的が有つて今から滿洲へ行く、四五年は音信をたつが、何卒此後はたよりない弘を憐んで力を貸してやつて呉れ、色々相談の上にと思つたけれど、氣の弱い女だから、つきつめた心でも起しはせぬかと、何事も知らせずに出た、別封の書狀はいつでもよいから來た折に手渡して呉れ。

それと父へ宛てた遺書と二通殘して、逢ふ間もない其夜の引明けに、豐兄さんは家出した。

父は弘子さんを呼んで厚く訓誨する處が有つたが、私は次の部屋に控へて居た爲只時折歔欷の聲を洩れ聞くばかりで有つた、歸りがけ私の部屋にも立寄られたから依賴を受けた品をそつとお渡しすると、

種々御心配相かけまして有難う存じます。

顔を掩うてつッ俯した。

其細い肩に手をかけて、四年も五年もと云へば長い樣ですけれど、お身體が御丈夫であれば夢の樣に過ぎて仕舞ひます、豐兄さんも貴婦を幸福な人になしたいばかりに、あんな滿洲三界まで參かれたのですから、どうぞわづらひなんか、なさらぬ樣に待つて居て下さいね。

弘子さんは一層はげしく歔り上げて、

あり……がたう……御座います……お言葉を大事に守つて……四五年はおろか一生でも……待たして頂きます……。

其夜はおそく歸られたが、それからといふものは六疊のお部屋に立籠つた限り、人に顔見られるをひどく厭うて、朝夕涙にばかりかき呉れて居られたが、せつない思ひの胸に餘つてか弘子さんは到頭心の緒のゆるみもつれて、再ときほどかれぬ、淺ましい躬に替られた、或夜更けてから、私が雨戸を繰りに緣端へ出ると植込みの中ば、微かに女の泣き聲がする、もしやと思つて、黒い影の方へ進んで行くと、案の定、弘子さんが、長い手紙を、地に引ずりながら、薄暗い月影に見えもせぬ字を透し見て、

此程思つて居て下さるなら何故一所につれて行つて

下さぬでしやう、四年も五年もつて私、待ち遠しくつて死で仕舞ひます、生き長らへて居る甲斐がどこにありませう、嗚呼死にたい〳〵、お母様早く迎へに來て下さい。

又さめ〴〵と泣かれる聲が痛い樣に胸をつく、長い神身のわづらひに、昔の美くしい俤は跡もなくやせ衰へて、目元のなどく逆立つて居るのが恐ろしい。

弘子さん歸りませう。

そうつと手を握ると、相想なく振りほどいて、

否歸りません、私今から滿洲へ行くのです。

と云つてどうしても聞き入れられぬを無理矢理に、すかしなだめて居る處へ。

やあどうも有難う御座いました。

お父さんの聲を聞くと同時にづか〳〵馳けよつて、

お父さん早く滿洲へ連れていつて下さいよ！。

お胸に顏を押しつけて、子供の樣に泣き入る弘子さんの背を、おもむろに撫でゝ、

あゝ身體を早く癒して呉れ、滿洲へでもどこへでもつれて行くよ。

悄然とうつむかれる頭には俄に霜の置き增さつて、おいとしい、私は那邊か遠い處へ逼れて、此お二人の苦しみを見たくない、聞きたくない。

其後程もなく、お母さんの看守がゆるやかな爲、弘子さんは又家をぬけて出た、お父さんが歸られて始めて氣がついた時はもう遲かつた、裏の井戸端にキチント行儀よくぬぎ揃へられた草履の主は、靈魂すでに空しく消えて殘る明星のまたゝき、いたづらにせはしい師走の夜であつた。

あれ程慕うて居たのに、も一度逢はしてやりたかつた。

ぬれしほたれた冷たい骸に取すがつて、人目も恥ぢずお父さんが、男泣きに歎げかれたのには、居並ぶ人の一人として顏を上げ得たものはなかつた。

着物を着換させる時、懷中からポトリ、音がして落ちたものがある、一葉の寫眞、一通の書狀、斯くなる迄も手ばなす事を忘れず死ぬ迄こがれ慕つた豐兄さんは、憂寢の旅の草枕、幾百里なる海の外に四五年後の歡樂を夢見つゝ、何事も知らず無精出して働いて居らつしやる事であらう。

世に薄命の人も多いが弘子さんのやうなのは少い、しみ〴〵女の身の賴りないことを私は感じた。

寂しき家

優梨子

何となく忙しさうに見える夕暮の街に、ぱつと明るく電燈がついた。信子はそれを避ける樣にして、暗い町の方へと急いだ。

もう二月も前から貸家の札が斜に張つてある家の前を通つて、薄暗いランプのついた荒物屋の下の小路を這入つた。兩側に列んだ同じ樣な長家を通りぬけて、一番北の端の、入口に小さく「森田」と書た木札の掛けてある、暗い格子戸を默つて明けた。

「お信かえ」と中から力の無い、年寄の聲がしてから

「はア只今」と低い聲で云つた。お信が未だ下駄を脫がない內に、茶の間の襖を明ける音がして、

「大へん今日は遲かつたネ」と、今奥で聲のした年寄が、お信を迎へた。

「え、少し簿記の方を整理して來たものですから」とお信は別に莞爾もしないで云つた。默つて年寄の後から茶の間へ這入ると、小さい包みを隅の方に置いて、袴もぬがず長火鉢の前へ坐つた。

老婆は勝手の方でランプをつけて持つて來た。

「お祖母さん、今夜は三七日ですネ」とお信は暗い淋しい顏をして云つた。

「あゝ先刻庵主さんが來て呉れたよ」と祖母は洋燈の鉤を釘へ掛け樣としては掛らないで、釘のあたりをずう〳〵やつて居たが、やう〳〵掛つたらしく一寸引張つて見て、安心した樣な顏をして、そして斯う云つた

少し洋燈のネヂを上げて、火鉢の向ふへ坐つた祖母は

「早いものだネ、もう三七日になるんだもの」と續けて云つた。

「眞實にネ、私まだ毎日歸つて來る時、家へ這入るまでお父樣が寢て被在る樣な氣がしますの」とお信は始めて、祖母の顏を眤と見た。

「晝間はお前も居ないし、私は寂しくつてネ」

「夕方になると格別ネ」とお信も同じ事を云つた。

二人は熟と默つて終つた。お信の白い顏も、祖母の艶の無い顏も沈んで居た。鐵瓶の湯がチーンと湧き出した。

お信は氣の無い樣な立ち方をして、色の褪めた紫紺の袴を脫いだ。そしてそれを疊むでもなく、隅の衣桁へ掛けて、座敷との間の襖をそつと明けた。香の薫りがすうつと胸に迫つた。

「あらお祖母樣、未だお燈明が上つて居てネ」とお信は床の間の小さい佛壇に細く燈つて居る蠟燭を、昵と見詰めて云つた。

「あゝ今夜は皆燈るまで上げて置かうと思つてネ」と祖母の聲が勝手でした。

「はアさう」とお信は輕く答へた。

戒名の明瞭とわかる白木の位牌を見ると、もうお信は胸が一杯になつた。強ひてそれを避ける樣に、一寸合掌してすぐ座敷を出た。勝手の方を向いて火鉢の傍へ坐つた信子の眼は、熱い涙でぼつとなつて居た。

「あゝ私には父も母も無いんだ」と又思ひ出したのである。一杯に溜つた涙は、はら〱と留度なく頰を流れた。

*　*　*　*

生の母を知らない信子は物心つくまで、祖母を母と思つて、只祖母に許り懷いた。そして嚴格な父を酷く怖がつた。が「私の親は此父獨りだ」と思ふ樣になつてからはガラリと變つて、氣六ヶ敷い父にそれはよく盡した。父が脊髓病でどつと床に就いてから五年の間、一日でも嫌な顏をした事がなかつた。

父は身體の自由がきかないので、氣短かに隨分がみがみ云ふ事もあつたが、信子は何時も晴やかな顏をして居た。無口な父は、涙の出る程信子のよく盡して呉れるのを嬉しいと思つても、決して口には出さなかつた。別に財産が有るでも無いので、生活上にも信子の家には、暗い雲がかかつた。

信子は、去年女學校を卒業るとすぐ、虛榮も誇りも捨てて、或る會社の事務員となつた。——例ひ少しでも其暗い雲を拂ひのけ樣と思つて——。そして僅かながらも月給のすべてを、美しい眞心と共に、父の病ひを治すべく捧げた。

けれど父は遂々死んだ。

信子は、氣が狂ひはしないかと思ふ程悲しんだ。泣いて〱一晩泣き明した。

顏へ白い覆ひのかゝつた、父の亡軀の傍に、正體もなく泣きくづれて居た信子が、ふいつと上げた其顏は、血の氣など少しもなくて、びつしより濡れた頰は、凄い程青ざめて居た。

「お祖母樣、私はもうお父樣も母樣も無い孤兒なんですわネ」と云つた信子の口唇は、びり〱と慄へて居た。傍に居たものは皆、それを聞いて貰ひ泣きした。

毎日〳〵沈んで居る信子は、あゝ私には未だ年老いた祖母が一人あるのだ、と思ひ返して、一週間許り前から又會社へ行き始めたのである。

* * * * *

「お信」、「お信！」と祖母は一寸間を置いて二度小さい聲で呼んだ。

「ハ、ハイ」凝と俯向いて考へて居た信子は、勝手で祖母の呼ぶ聲に喫驚して、どぎまぎした樣に返事をした。

「お前また考へて居るのかえ、もう何と思つたつて仕方ないんだから、是までの運命とあきらめてネ……」と祖母は、そつと戸棚を締て、なだめる樣に斯う云つた。

「え、もう思ひませんわ」と信子は祖母に心配させまいと思つて、わざと聲の調子を上げて云つた。そして頰に流れた熱い涙をそつと拭いた。

「さあ何にも忘れて、機嫌よく御飯を食べてお呉れ」と祖母は二つの膳を運んで來た。

「あらもう御飯？まアお手傳ひしないで濟みませんでした」と晴れやかに云つた。慰めて呉れるお祖母さんの顏だつて、何時も寂しく曇つて居るのだもの。ああ私は此老先き短かいお祖母さんを、心から慰めなければならないのだ、と思つて――。

三分心のランプをねぢ上げて、二人は膳に向つた。座敷の方から、幽かに線香の煙りが漂よつて來る、默つて食べて居る二人の顏は、矢張り寂しかつた。

山みち野みち

章子

日光のふりそゝいでゐる午後、畑道をぬけて山麓の小道を辿つて居る。

町を脱出してきた魂と、形骸は愉快に、活動をはじめ樣とする。

自由な日光と、空氣は矢のやうに私の頭上に、ふりそゝぐ。

パッパッと姉さまは、輕いほこりをたてて先へゆくほこりに、つられて自分は歩いてゐる樣な氣がする、

それも愉快だつた。

　かう思つてゐる中に、いつの間にやら、姉さまの手には、蓮華草と、菫があり、母さまの髪には、黄な、たんぽゝが一輪さゝれた。

　ふと今來た路を振かへつてみる、畑一面は青い夢をしいてゐる、白い風がをり〳〵、悲しい夢をゆるがせる。一つの薄黑い雲が絶えず、空にさまようて、影をおとしてゐる、眼をやはらかに閉ると、スーと吾魂の輕く立昇らうと、するのがさとられる、そしてともすれば、吾魂を、雲がすひ込まうとする。

　眼を開けた。再び振返つてみた。

　涯しなき綠の海、青い空、白雲が流れて、海と空の間に横はつてゐる濃翠の峰、あゝ彼處にも自然の神は在はすのであらう！

　小さな町は雜沓に、蒸れて白堊の家はあざわらひ立つてゐる。土藏の白壁は、白い悲しみを流してゐる水車は古い顏をして、めぐつてゐる、悲しさうな老ぼれたうたをうたひ乍ら。

　嘆や、悲しみや、ほこらひや、又あてない喜、それらより成立つてゐる小さな町！碇泊してゐる蒸汽船は眞黑な腹から、毒ある煙を吐たてゝゐる。

　町をゆく人、皆小さく、みすぼらしく、いづれも、愁、不安、かすかな喜を、あらはに表情して、だれもだれも、大きな深い空を、仰がうとするものもなく、黑い地ばかりをみつめて、さてもいぢらしい姿、あゝのろはれつゝある人よ――町よ。

　私は今これらの人を町を、見捨てて、美はしい國へ旅立つ樣な氣がした。そして又、夕になれば自分も憐な人々の中に、交はらねばならぬかと思ふと、何ともいへぬ壓迫を感ずるのである。

　取とめもない、こんな事を思つてゐると、突然あたりが暗くなつた。ハッと氣づくと、杉林の細道に、私たちは、呼吸してゐたのだつた。かすかに微かに、自分の呼吸音が聞える「いきをしてゐる」私はこう思つて、胸をおさへて、にッと笑つた、何となく嬉しかつたから。

　木立をぬけて、又明るい、日光を空に仰いだ。一尺ばかりの杉が、赤くスク〳〵と植られてある。幾年かへた後には、又暗い闇をこゝにも、つくられるのであらう。

　夏になると、よく桐の花が咲いて、此あたりは、甘い香につゝまれて仕舞ふ。そして、かゞやかな日光に

羽をきら〳〵さし乍ら、ひぐらしがよくなく、其川沿へでた。秋には、一面血を流した様に、彼岸花がさく毒もつ草である、が田舎乙女はむせうに好く。

齒朶の茂みを左の懸崖にみて、水かれがれの川には眞白な、大石小石が自然の橋を作つてゐる。ぐるりつと、みわたすと、もう自分は、高い山と山との間に、立つてゐるのだ。都會でそだつた、自分が、人もこぬ山中に足を入たといふ事が、うれしくもあり、不思議でもあり、又わびしくも、はかなくも思ひて、あゝ自分の一生のすべてが（謎である！）と叫びたかつた。

柴たく煙であらう、うす青いくすぶつて、上へ下へと、白雲に連なつてゐる、靜かに靜かに何物にも、おはれないと、いつた樣に昇る。卒直に。さみしい程、しづかである。葉一ッない灌木の間に、松の常磐木は青ぐもの群の樣に、處々にういて居る。

夕べ燒けた山、痛々しい片あざを殘して、乾燥した何ともいへぬなつかしい香が、嗅覺を刺戟する。心地がいゝ、私はすべてを忘れてかいでゐた。

ガタッ、ガタ――ガタ、車がきた、石ころの多い道を學校がへりの腕白が、天眞の儘の笑を湛へて、二人つくねんとのつてゐる。馬は淋しさうに頭を垂れて、無意識に曳いてゐる。主はあとからゆく、虚飾の一點も交らない、平和な山里だと、泌々うれしい。

こゝはもう平地である。あるかなきかの風に、棕櫚の葉が音なく搖れて、おかし難いかゞやきをみせる、日光は白銀色にふりそゝいで。（あゝサハラの大沙漠を心ゆく限りあるいて見たい！）私はこゝに立つたび、此思がかけめぐる、そしてカラバンの列を思ひ、駱駝のあゆみを偲ぶのである、あゝ我になつかしき此ほとりよ、私は一生忘れる事ぢやあない。

かうして田舍道によく、見る事で、ブッキラ棒でなすつた樣な清書、それでも、子供心には異樣に嬉しい赤い大きな○もついてゐる。それらの清書と、半ちぎれた古い葉書、あぢもない文句をつらねた、葉書が、こゝにも、しみだらけになつて落てある。

山を仰ぐと、燒山の跡を開墾につとめてゐる、四五人の、鍬が、カッと日光にかゞやいておそろしく光る山をくりぬいた道、赤い土、貧血性な根が到る處、はみだして、すがつてゐる。道は泥濘である。折々上からほろ〳〵と乾土が、微かなつぶやきを殘して落る私は道をうなだれて、其答をもう一度きかうとしたがだめだつた。さみしい、皆無言である。寂寞を破つた

土のひゞきが、一層のさみしさをもたらした。

（静かですね）私はかう云つてみた。橙の木に四つ五つ實が殘つてゐる（不景氣な色ですね）つて云ふと（橙かね、あれはあゝやつとく程、色は惡いけれども、甘しくなる性質のものですよ）母さまはかういはれた。

馬がくる、旅人がゆく、白いもゝひき、黒い脚はん紺の香のする着ものの裏、田舎くさいかばん、かうした印象をあたへて人はゆく。街道の驛の入口に近いなと思つた。

空虚な夕日が弱く弱く、馬の脊の一部にてつて、灰色のつゝみと古ぼけた提灯がねむさうにくらの上に、落日の夢をみてゐる。

新らしい文明の香のする、電柱は畑中に進入して、村の入口には、道しるべの石の倒れたのと、郵便箱の黒い色がさみしさうに見える。そして次亞燐の廣告は不調和な色彩を、帯びて、わらじ吊つた家に張られてある。私の頭は又するどく、いやあな氣もちを感ずる。

人のざわめき、わだちの音、さま〴〵な音が、もつれあつてせまつてくる——。（入賞）

まぼろし

ゆみ子

私はなぜでせう、ジツト目をつむつてゐますと、いろいろのものがみえますの、さつきもね子供の事ばかり思つてた故ですか可愛い子供が這つてきておつぱいといふのでせう、おちゝをやるとニコ〳〵しながらすつて暫くするとスヤ〳〵とねてしまひますの、それかとおもふと今度はちく〳〵お腹がやめて横腹が破れて丁度水鐵砲の様に勢よく水が出て、中からきれいな小さいまりが幾個も〳〵出てきたり、お寫眞の外一生みる事のできぬお母様がゐらしつて、痛む御腹をなでて下すつたり、お寫眞を拜見したきりまだお目にかゝつた事のない義姉様が皆様と一緒にお出になつて、いろいろ親切に慰めて下つたりするかとおもへば、目つきのおそろしいおばあさんが出てきて、まあ一體お前の年を數へてごらん、自分の苦勞するのは自業自得だからいゝけど年とつた私にまで心配させていゝとおもふのかい、などゝ毒づいたかとみるとそのまゝふつと消えてしまふ。

今度は去年上京したばかりの弟が立派な醫者になり

すまして、僕が一つ診察してあげませうなんて脈を取つたりする、と電報がきて夫が出張先で頓死！ハッと目をあくとやはり私はジッと床の上にねてるのでした目をあいて考へてみれば、夫は丈夫でけさいつもの通り役所へゆかれたのですもの、臺處でさつきから何か庖丁してる音もよく耳に入つてゐます、決してねてゐたのでもありません、それでゐてどういふものでせうあれ又火鉢の鐵瓶がひつくり返つてキヨがびつくりして聲を立た、私も驚いて目をあくとそこには清も居らず、鐵瓶は相かはらずチン／＼と可愛い音をたててゐるではありませんか。

　あれ／＼家がぐる／＼まはる、何だかだん／＼かたむいてきた、きよ！／＼アッたふれた、目をあくと體中汗びつしより、固くむねで手を組んでゐました、やはり臺處の音も鐵瓶のたぎる音もきこえてゐます、ああどうしたといふのでせう。

暮れゆく心

せゝらぎ

　狹霧のやうな細い小雨が音もなく降つてゐる、いつまで降ればやむのか、落日の光りさへ見ずにけふも亦暮れてゆく。私の心まで濡れてしまひさうな――暗然として二階の窓に靠れてながめた。門の燈はひとつづつ灯されてゆく。

　私の世も侘うなんだ、高い蒼穹も月も星も、私には仰げない、闇の底、洞の穴はてしもない無明は私の心です、油氣のない髮の毛がばら／＼と頰にかゝる。ああ獨りこの窓によつて泣いた秋はさびしかつた、春、柳の枝も萌えてきた、花のつぼみもふくらんできたけれど、私の春は返らない、蹂躪られた心と一緒にとほくの過去の國に入つてしまつた。

　依然として哀愁はつきません。いえ深くなつてゆくばかりです。形づくるまどに築きあげた空想の、ゆめも幻も皆現實の聲に打ち消されて行きます、むかし幼い胸に抱いた小さな謎、その第一のなぞは解けましたしかしその次の大きな謎、それを解くのはいつでせう死ぬまでは、いえ死ねばとかれるものかも知れない。時の流れ、其大きな偉力に導かれるまゝに幼心も延びてゆきます。もうむかしの小兒ぢやない私はをとめとなつたのですもの、美しい高い理想も希望も多かつた然し凡てに破れてしまひました。

　醒まされた人の世の中はすべて空虛です。空虛な世

の中、うつくしい夢を破つてみれば何も殘らないさびしかつた傷心のはてに病みしは去年でした。さま〴〵の刺戟に馴れて、いまは冷靜な心になりましたけれどなほ胸をいたませて泣くことは多いのに、噫かなしみは長い。

あれ程の熱情があつたら、彼時私はなぜ死なゝかつたでせう、徒に死を恐れるよわい者、いくぢ無しと思つてゐらつしやいませう。けれど寂寥に勝つて生きるのは強いとあなたは被仰いました。あゝさらばA樣、Sは生きます。さま〴〵のくるしみも試みとおもつて………

さまよへる心も元の棲家に歸らうとしてゐます。暗かつた生涯も光明の一と條のみちはつひにひらかれて、そこを歩むこともできませう。昔日の戀は失つても、私は新しい友をえました。

三月中旬、或人にあげた手紙の一節です。新しいみちの開かれたと思つたのも束のま。たゞ絶望です、絶望の現實になにの爲に、生きて居なければならないのか私にはわかりません。何をおもひ何を生命に生くると問はれたなら私は何と答へませう。たゞ何ごとも母の袖のかげに隱れてすぎて來た時代がなつかしい。荒みゆく魂、傷いた心。冷たい死をおもひます。暗い罪人の生涯を思ひます。身も魂も消えてしまつたらいゝでせうに、眞の心はどこにあるのか、此頃の私を、母は人は、晴れやかになつたとか云つて喜んでくれますけれど、あゝこの涙は知りません、あゝ誰も。

北のみづうみに寄るなみ歸る浪、盤梯嵐しの風さむく袖を吹くところ、いためる胸を抱いて歸つた人もありました。雪を踏んで湖畔を彷徨ひながらも、遂に死の手を握りえなかつた友もなほ幸福です。歸るべき家はあつた。母の家をはなれてしまへば私にゆく家がどこにありませう。父はゝののぞめるその夜のさかづきは私に要はありません。毒藥といづれをと示されゝば私は毒を選びます、父母をはなれた不孝の子に毒の盃は當然受くべき罪の報酬とおもひます。

されど迷へる子の心を、神もキリストも母もない拗ねた私の心をみちびくものはないでせうか。一日一日と人にはなれて朽ちてゆく魂は見ながら、あゝいつまでも迷つてゐなければなりません。暖かなりし昔しの床、母のふところ、すべては破壞されてしまひました。あゝあゝ暮れゆく日、かくてたゞ闇………。

始めて師の君を訪問せし記

美耶

先生に弱蟲と思はれるのがいやで、一しよに行つてあげやう、始めてといふ物は獨だとこまるものだからそれに遲くでもなつた時迎ひを出すにしても、お家が知れてないと困るから、お門までゞもと、幾度か仰る父樣や母樣のお言葉を退けて「私だつてもう十七です何時までベービーあつかひされちや困るわ、そんなに遠くはなし、電車なら十分とかゝりやしないんですもの、大丈夫よ」さつさと支度を始める其れでも御心配がのかないとみえ、とう〳〵遊びに來て居た十三になる從弟と同伴する事になる。從弟の達ちやんは競爭の選手だ、私もかけつこならたいがいな方に敗けないつもり、二人は砂ほこりの立つから風を物ともせず、善光寺までは忽ちの内に來て終つた。さあ此所から何うぬけるのだらう、と迷つてるところへ、大きな老眼鏡を不恰好に掛けたお婆樣が來た「あの原宿へはどう行くのでせう?」、「あゝ原宿ですかね。私もどうせ行く所だから、一所に入らつしやい」、「どうぞ」お婆樣は好い話對手とでも思つたのか、色々話しかけるけれど、私は何んとなく、始めてあがるのだと思ふと心配になつて、ろく〳〵其話にも耳を傾けなかつた、「此所が原宿ですが何と云ふお家ですかね」「××さん」「然う聞いた樣なお苗字だけれど、あすこの角に八百屋がありますから聞いてごらんなさい、たいがいは知れるでせうから」「どうも有りがたう」私は心からお禮を言つた。風が吹くので葭簀がぐるりに立てまはして有る闇い店おぢいさんがねんねこを着て火鉢にあたつてる、「あの此の邊に××さんてお家ありませんかしら」「ありますよ、其所をずつと左へ行つて右へまがつた右角のお家です」「ありがたう」又かけ足で行つて見ればがつかり苗字は一字のまちがひで他の家であつた、あんまりなおぢいさんだと、言ひながら何に物かに、引きつけられる樣に、其の途をだん〳〵奥へ歩いてつたら、又お婆さんが來た、早速「あのこの邊に××さんてお家ありませんかしら」「ありますよ」其時コートにくるまつた女の人が向ふから來て左りへまがつたのを指して、「あの女の方のまがつたとこの、ぢきつきあたりですよ」。親切に敎へてくれた、其のお婆さん後で聞けばMさんの婆や。其の女の人はYさんらしかつた。軒燈に××とあざやかな文字を見ると、或る心配のかたまり

は、ごつくり下つて、氣まりのわるいと云ふかたまりが、どん〳〵あがつて來る。お門の前へまで行つては這入かねて幾度も通りまで馳け出した、しまひに達ちやんが笑ひ出しちあつたところへ、向ふのお門から赤いはなをの輕さうな下駄を穿いた品のいゝおぢいさんが出て來て、じろ〳〵見るので、猶更氣まりが惡い。こんな事して居ちあ遲刻するばかり、と漸く決心して「美ちやんは先生のお家へあがりましたつて、お父樣にも母樣にもよく申上げておくれ」と、言ひふくめて達ちやんをかへした。お玄關からお座敷までは夢中、途途先生にはかう誌友の姉樣方が先に行つてらしつてたらかうと、考へてつた挨拶は一言も出ず、ゆでたこの樣になつて、默禮がやつと、自分ながら自分のベービーに驚いた。暫くは眼のやり場と手の置き所もなくつてたゞ氣まりが惡い。先生が先へ行つてらしつたお三人の方にお引き合せ下すつても、其の方々を見るどころぢやない、出して下すつた新刊の女子文壇をひろげて、目をおとして居る。ふつくりしたお蒲團へのつて火鉢に手をかざす樣になつてからは、色々お話も出來る樣になつた。日頃からお懷かしいと思つて居た先生のお顏も心から親しむ事が出來る樣になつた、誌友の方も追々に居らつしやる、日本橋のます子樣をしんがりにおあつまりになつた方々は、白百合の樣に清く秀でた千とせ樣、清らかなる白菊は八重子樣　薔薇の面影麗はしきは鏡子樣、それにたいして白薔薇の氣高きは君子樣、姫百合の樣な愛らしい妹君を伴れられた花子樣は、椿の八重、おぼろ夜にかすむ梅花は筆子樣やなぎの枝に牡丹を咲かせた樣なはます子樣、ほころび初めた緋桃の花は靜江樣、私はまだ名も知らぬ花の堅いつぼみ。もう皆樣は一とほころびで花嫁樣、スイートホームの甘き香りに包まれさうな方ばかり、私はまだ肩上もあるしどうしても一番のベービーらしいごくうすく無形のものに繫がれてゐた友愛の情も、今は一室にあたゝめられて、さすがは始めての集ひだけに、お口數は少ないけれど、お嬉しさうなほゝ笑は絕ず絕ず皆樣の面てにあふれて居る。私は長らく幻にのみゑがいて居た先生にお目見えしたばかりか、生れて十七年めに思はず此んな美しい優しい多勢の姉樣方にお目にかゝつたと思ふと嬉しくつて。あゝ此の深き喜びの情は長く日記にとゞめよう、先生が色々誌友會のことについてお話を始められたところへ當分先生のお家に寄宿して居らつしやると伺つてお目にかゝりた

いと思つて居たくに子様がお歸りになつた。私は十二三の頃からくに子様のみ名は少女鏡と云ふ雜誌の上で覺えて居たが、お目にかゝるのは始めてお聲にもおしぐさにも、美はしき面てにも、きつぱりした快活な御性質はあふれて居る。先生が誌友會の其の日の接待がかり餘興がかり受付がかりと云ふ風に、其れ〴〵皆様に役割を仰やると、「私にはとても」と御謙遜なさるとくに子様が快活な調子で、お一人りが御辭退なさると皆様もなさらなくなりますから、どうぞ皆様運命とあきらめてと、詩人は、やつぱり詩人らしい事を仰しつやる恥かしいと、謙遜と、ほゝとほゝ笑との內に夫れ夫れ役割は定まつて五時頃おいとまする。近いからと思ひながらも歸へりにはとう〳〵電車の中へ寒い風に送り込まれて終つた。廣尾行にのり換へてからは、右側はこんなにも人が死んだかしらと、今更に驚くほどつゞきにつゞく奧津城、左側は三聯隊の原、私には何時までも其の死んでる樣な淋しい、哀れな、冷めたい姿を見て居る事は出來なかつた。絕えず色彩の變り行く西の空のあかるい方にのみ目はそゝがれて居た。

生大師

篠原しげ子

明日は生大師がお出でるさうな、如何なる病氣でも全快せぬと云ふ事はない、盲目の目が俄に開いたり、啞子が俄に物を言ふたり、籠に乘つて來た重患の病人が俄に步いて歸つたりするさうな、何と有難い事ではありませんか、內の子供も眼が惡いから明日は連れて行つてなほして頂きます、いや私も胃が惡いから、いや私も胸が惡いから、と家の內外、道ばた、又は井戶側などに大人も子供も老人も集ると、頻りに生大師のうはさして居る。此を聞いた母樣は、それぢやお前も近頃は健康が優れないから明日は一つ行つて見よと仰る、よもや其な事はあるまいと思つたけれど、何は兎も角行つて見ようと思ひ立つた。

翌日早々支度して半里許りの道を步いて行つた、財産家の奧樣も、村長の奧樣も、官吏も子供も來て居る又五里十里と云ふ遠方から草履脚袢の足拵へをした男や、丸髷に子を背おつた女や、若い男や廂髮の娘やぞろ〳〵打ち續いて居る、お稻荷樣のお祭りにでも參るやう、恐らく何百といふ人が皆其家に集つて來る、ま

あ生大師樣がお出でて助けて下さると聞きやしてわざわざ尋ねて來やした、あなた何處でありやすな、へえどこそこでござんす、大さう遠方でありやすな、とべチヤ〳〵と平たい舌でなめた樣な聲や又底枯れた女の言葉や、折々カラ〳〵と笑ひ聲が入り交つて耳に這入る、生大師樣は未だお出でぬさうな。私は一人ぶら〳〵庭を歩いてると裏の方では此家の主人が大鯛を料理して居る、まあ生大師樣は魚は食べないのかと思へば、さうぢやない、人間が生きて居て魚を食はねば衰へて了ふ、魚や酒や幾らなりと食へ飲めといはれるのださうな、そして此鯛は生大師樣に進んぜると云つて料理して居るのだ、私は呆れて了つた、愈々怪しいなあと思つた、やがて正午となつて此家では飯に鯛の味噌汁をして此見ず知らずの數多の人に食ばせる、されど私は食べなかつた、又遠方から來た人々には此夜のお宿をすると云つて裏の何疊間かの廣い座敷に白や青や紺の裏のついた蒲團を一ぱい高く積み上げて、實に親切なるお心には感服する、午後一時頃となつて、さあ生大師樣がお出でたと皆の者はぞろ〳〵迎ひに出る、ガラガラッと俥に乘つて來る姿を、私は一人庭木の影で見て居た、紺色のはげて茶色になつただら〳〵しい衣を着て、口のゆがんだ眼の鋭い大きな體格の恐ろしさうな人間だ一目見ると私はあゝと叫んだ。生大師は二階に上つて、鼠色になつた白襦袢を片はだぬいで、酒を飲んで居る。ゆがんだ口に肴を食つたり酒を飲んだりしながら庭の數多の人を見下して居る。如何にも憎さうな顏つきだ、暫くして襖をはづしてある大廣間に出て來た、えい皆さんとギロリと鋭い眼を光らせて私がまじないをしたら如何なる病氣でも全快せぬと云ふ事はないです、禮は一厘も頂かないです、しかし線香代として大師樣に進じ下さるのは御勝手です、と大聲に饒舌つた、此から皆さんのお年とどこが惡いと云ふ事を仰つて下さいと云つて一々紙に書き止める、そして弘法大師樣の小さい像のついた掛物を七八ッ並べてかけ、前に段々を拵へて書いた紙を供へ、其前に賽錢入だと云つて淺い柳行李の蓋を置き、三十本許りのらふそくに火を點じて何やらお經みたよな事を大音に唱へ出す、人々は圓い物を紙に包んでパラリ〳〵とさいせん入の中に投げ込んで皆手を合して有難さうに頭垂れて居る、濁つた汚ない空氣の中にあんなにして居ると思へば何とも云ひ知れぬ感がする、やがて經を終へて此度はほうろくに線香や何か臭い物を一ぱいくす

べ出した、ぼーと室內は眞白く煙に包まれた、えい皆さん、と煙の中で姿は見えないが聲のみは鋭い、此煙を手に受けて眼が惡ければ眼、腹が惡ければ腹、身體ぢうどこなりと惡い所をおなでなさい、きつと病氣が取れます、と云ふ、すると皆は口の中で何やら唱ひながら、胸をなでたり腹をなでたりして居る、中に煙にむせんでコホン／＼と咳き入つて居る者もあれば、煙が這入て眼が開かないと頻りに手ですつて居る者もある、誠に愚かな／＼仕業である、私はもうぢつと此樣を見るに堪へかねてすぐ此所を去つた、いそぎ／＼て漸く夕暮迄に歸つた。

翌日かの生大師と云ふ僧は何れへか逃げ去つて了つた、巡査が非常にさがして居るさうな、と云ふうはさが又其所此所に起つた、あゝ私の思ひ通りだつた。

村の朧夜

吉田紫花

柳の葉も動かぬ程靜かな朧月夜の宵であつた、長い／＼センチメタルな手紙を書き終つた妾は、頭の中が苦ほしい程みだれにみだれて何も解らなくなつたのでぢつと目を閉ぢた、其刹那、靜かな空氣を破つて、ワッといふ聲が一聲耳に入つた、丁度乾いた土地へ水が流れ込んだ樣に、曇つてゐた頭はハッキリと冴え返つて其の聲のした方に耳をすました、すると又一聲情ないわ――續いてガヤ／＼と騷々しい人聲、妾は夢中で椽の障子を開けて庭に下りて見ると、妾の家から麥畑一枚隔てて可成大きな池がある、其の池の向ふ側で四五人の黑い影がうごめてゐる、朧月に若い男といふ丈けがほのかに分る、何をして居るのかそこらをバタバタ走り廻つて居ると思ふと軈て皆が土の上で塊になつて轉ぶ、起き上つては又走る、其間には情ないわ――、とさも口惜しさに堪へぬ樣な聲でわめくのである、私は知らず／＼石を傳うて低い石垣のそば迄來て居た、

大方お酒の上で若い連中が惡戲をするのだらうと思つたけれど、少しも聞き覺えのない聲許り、百戶に足らぬ狹い自分の村では曾つて聞いた事のない聲なので、多分隣村の若い衆があそびに來たのに相違ない、それにしても何であんなにして居るのか、もう皆寢靜まつて居るのにと思つて一寸父を起さうかとも思つて見たが折角安らかに眠つて居るのに、まさか大した事もあるまいとぢつと見て居ると、あまり騷々しいので起されたのか、傍の家に戶を開けて誰れか出て來た、

ゴホン〳〵と聞き覺えのある其家の主人の咳の聲が聞える、そして何でも譯を尋ねてゐるらしいので、耳をすましてゐると、よくは聞えぬが妾の推察の通り、他所村からわざ〳〵あそびに來たのに門まで行くと內から戶を閉められたのが口惜敷いので暴れるのだといつてるらしい、他所の村から來て…………情ないッ村の若い者全體の顏…………戶を閉めた奴……………其女………情ないワア……など切れ〳〵に聞える、出て來た主人は一人で持て餘して居るらしい、誰れかも一人來ればいゝのにとハラ〳〵思つて居た、然し暫くするとどう得心させたものか風が變つた樣に靜かになつた、そして口々に「ヘイ解りました、ヘイもう解つてゐます、挽臼石だよヘイ解りました……矢鱈に解りましたを並べて皆がこつ〳〵頭を下げて一時にどッと崩れる樣に笑つた、主人はもう安心したのかゴホン〳〵と咳を殘してガタンと戶をしめて這入つて仕舞つた、皆は打ち揃うてそろ〳〵動き出した、もうあれで靜かに引き上げるのか知らと思つてゐると、軈て又池の傍へ舞ひ戾つて來て、

「實に情ない、………もう生きて居られん　名譽をとり返すために此の池へ身を投げる、云ふかと思ふと早飛び込む眞似をする、すると他の一人が後から抱き止める樣にして、オット早まるなッ、短氣な心を起すのには深い譯があるだらう、などとまるで芝居の樣な事をするので、終には一人で笑はずには居られぬ樣になつた、仲間內でも堪らなさうに笑つてゐる、もう暴れるのに飽いたのであらう、どんな相談をしたものか、思ひ付いた樣に又打ち揃うて往來の方へ出かけた、朧氣な月光を受けて墨繪の樣な影が流れる樣に動いてゆく、又どこかへあそび場所を變へたのであらう、少し行くと思ひ出した樣に一人が神田節を謠ひ出した、

男持つなら片目の男……卵……見るの——にアノ世話がない、……醉される樣ないゝ聲である。

「片目の男……」、丁度道が曲つたので、影はかくれて折々歌だけが切れ〳〵に聞えて來るあたりは又元の朧月夜にかへつて何の影もない、土の底で蚯蚓がじいじいと佗しうないてゐる。

コート

酒向登志子

昨年の春だつた、〇〇洋服店のお上手番頭がお兄樣の洋服を仕立て來た序に、是非お孃樣是をといつて見

せたのが高等優美縞綾セルコート地――水のたれさうなチック頭をなんぞと云へばへー〳〵と面白いやうにかゞめては長たらしう言譯をする、要はお定まりの東京貴婦人令嬢向は此品より外には一品も無いだの、或はおとなしいハイカラ的だのとお口上澤山に、何だか三越しタイムスとでも首引して來たらしく思はれて、ふき出したくも成るのをヂッとこらへて、五枚の見本切を私はつく〴〵と見た。そりや番頭の云ふ通り、一番高價なのが品質は元より色合と云ひ柄合と云ひ一點の打處は無い、けれどコート一着へ二十五圓のお錢は何だか惜しいやうだ、けれども十五圓の分と比較して見ると一寸見には見本切だから格別も無いやうだけど、手ざはりの相違は隨分と驚く程である、處が番頭すかさず『お屋敷樣へはとても此十五圓の分はおむき致しません、とは萬々承知で御座りますけど、まあ一寸品質をお比べしてお目におかけ申しましやうと存じまして』などと云ひ乍ら、わざ〳〵障子をあけてお日樣に照らして、この通りで御座いますと先生大の得意顔をする、此時ばかりは私も可笑とも思はずに眞面目で見比べた良い方はシットリとして光澤が實に好いたらしいけど、一方は何だか日影者とでも名づけ度く綿まじりつてことは、一目で見わけられるので、何だかあき〳〵した。本統にこれはつまらないわと云ひ乍ら私は復見くらべた、……イヤ〳〵二十圓は三十圓出ても惜しむにたらずだ、人生花の盛りを泣く〳〵十五圓出してこしらへても無い友の前ではどれ程嬉しい誇を覺える事であらう………それをこゝの洋服店では最上等だと云ふ品を、苦もなく買つて頂く事が出來るのだもの、人生若い内の誇と云ふ者が二度とくり返し得られるであらうか…、泣く〳〵こしらへたんでも無い人の前ではやはり無上に誇るではあるまいか、この誇でも少女にとつては永遠に忘れられないのだもの、それを其上の調子の誇を私は安々とあじはひ得らるゝからには二十五圓を惜しむのは若い内を求めてほろぼすと同じ事ではあるまいか、後悔先にたゝず………なあにコート一着だもの、餘計な躊躇は實にいらぬ事である、で私は卽座に寸法を書いて最新流行半裏付き六分袷仕立に至急仕立よと命じてやつた、先生頭をさげ腰をかゞめて有難う御座いますを下女にまでいつて歸つて仕舞つた。

　それから三日目の正午だつた、立派なたとう紙を開いてにこ〳〵着て見たのは。まあひとつお庭へおりて

で覽、と云はれて其まゝ私は庭下駄つゝかけて、かぐともなし沈丁花の香をかいでた、と皆様はまあいゝ事、よくうつる事、お金の出た丈は實にいゝなーなど一言一句いつも乍ら聞くお言葉だけど耳新らしうにきかれて嬉しい、だつて一日着てるわけにも行かず、幾度か姿見と首つ引の上丁寧に簞笥に仕舞つて置いた、が花の春はつひ着る日を得なかつた、夏はあの通り私は病氣したので——土用ぼしの時に始めてニッコリえもん竹に通して、風鈴のなる竹縁のかもゐに五時間ばかりつるして風通しした、そしてやせた體へと着て見た、何だかだぶ〳〵するやうで悲しかつた、あゝ病氣はすまいもの、此上もしもやせたら私はどうしやう——などとたゝんだコートをみつめてほろつとした事はあゝ今でも思ふと寂しいわ——、次は秋あゝゝゝ一度も私は簞笥から出さなかつた、何故だつたらう、コートとも思はなかつたのは——!、病後のつかれた鋭い神經は、絶えず〳〵悲しい方面にのみ走つて却てコートの事など思ひ浮かべるのを敵のやうにはがゆく思つた、可愛相にコートは一時見捨られて居つたのではあるまいか!、するうちにコートの全盛時代ともいひたい冬の日がやつて來た、と同時にこゞえやうと思つてた神經がなあに雪などにおぢますものかとをかしいぢやあないか眞面目に反抗をとなへ出した、かうなるとなか〳〵勢力の有つたもので、北風の寒い日でもおゝ今日は丁度いゝお寒むいから彼のコートを着て一寸遠い何子様のお宅迄行かうかしら、イヤそれよりも〇子様の方がいゝわ、でも宅からは本統にそこだもの、あんまり道が近くてもつまらないわ、秋の悲しい關門をどうなりかうなりぬけて出て、フイとこんな豫算を立てた丈はあれでも反抗の意にも叶つたで賞めてもおかうがあゝ豫算はうたかた、やつぱりつひ外出の實行は出來なかつた、今日は着て出やう、今日は着て出やうと或一日などろ〳〵お仕事もしないで、そわ〳〵思つて居た事があつたに、それに、それに、ひねつくれ子は仕様の無い者、遂に〳〵暗い簞笥の冷い空氣にばつかり逢はして、ふびんにも年を越させて仕舞つた、或はコートは私を恨んで泣いたかも知れないわ……。

扨世は新たまつての初春、はからずも〇子様が御無音づとめに被入つた、云はずもがな六分袷のコートで私はにこ〳〵嬉しくお迎ひした、然し私は罪なき友を欺むいた、欺むいたとも——友は私のにこ〳〵を解剖したらうか?、いゝえ友はそんなまがつた事は屹と

なかつた、まだよりかどがあるつて友はぢきに歸つた、私は後見送つて思はず頷いた。

大安心に伴なうかすかな〱寂みを思へば、何だか今にでも彼のコートを着て歩き度も思ふけれど、もうもう私はせかないでゆつくりと着て出る日を待たう、〇子樣をまかした私の彼のコート、もう〱大安心だ、彼のコートに敵するコートとは夢一着ないわ。

天晴れ若き日の誇りよ一代に一度となき若き日の誇りよ親しき數人の友が誇を一時に人の知らぬ間にうばひとつたが私の誇よ、罪あるほこりと云ふ人のあらば云へ！私は永久に私が若い日のそしてはなやかな胸にひめやう。

御稻荷樣

さくら

崩れ目を青苔で閉ぢた石階を上ると、稻荷大明神とした旗が、幾流も春風にひるがへつて居る、鳥居もなく社らしい物もなく茅ぶきの大きい家が唯一軒あるばかりだ、御祖母樣は「は入つて見ようか」と被仰る、私も好奇心に驅れて「はい」と返事した、御祖母樣は先に立つて「御免」とお入り遊ばす、私も後から、何だか濕つぽい陰氣な家だ事、煤けた障子には爪形が澤山ついて居る、家の猫のより細くて長い、狐ぢやないか知ら……と思ふとぞつと寒氣がする、何とはなしにおそろしくなつて御祖母樣にぴつたり密着いてすわる、髮をぼう〱とのばしひげだらけの赤黑い顏で目ばかり光る人が「善う御出で」と奧から出て來た、未だ見た事は無いけれどアイヌつて此樣なのぢやないか知らと思ひながら挨拶する、と御祖母樣が「此子を一つ見て戴きたいので」と被仰る、「まあ私なら澤山御祖母樣見てお貰ひ遊ばせ」と云はうと思つたけれど身も心も縛られた樣で聲が出ない、と何だか肩が重くなつてくる狐ぢやないか知ら、私はあまりのお恐しさに御祖母樣の御ひざに手を乘せた、そしてつく〴〵來なかつたら善かつたと思つた、「はゝあ縁談かな」と髯の人は云ふ、「いゝえ其樣分ぢやありませんけれど今年は厄年でもありますから」「はゝあ宜しい伺つて見ませう」髯の人は神前に坐る、巾二間の大きい神棚の中は薄暗くつてよく見えないけど、狐の姿の掛物がかゝつて居て其前にも燒物の狐が二つづゝ大きいのと小さいのと置いてある、おそろしく目が光つてて生てる樣だ、御供物はお定りの油揚に赤飯其外御魚やら何やら澤山上げてあ

る、其右と左には今にも消えさうな御明りが不氣味にのゝいて居る、格子の外には紅白によつた鈴の緒が二本丁度髯の人の頭とすれ／＼に垂れて居る、唱ひ言がすむと、「今年十九才になります太郎作の娘勝と申します者運勢は如何で御座いませう」さあ始まつた、彼の前には一尺に一尺三寸位の箱が置いてある、上と云うて其箱に手を掛ける、上らない、藍萬筋の羽織の肩へかゝつた長い髪がぴりゝとふるふ、上の下中の上、上つた、「はあ中の上で御座りますか」「其れでは親とは如何で御座いませう善い暮しを致すで御座いませうか」箱は上つた、「えゝと貴女は御運が善いな親御様より善い暮をすると仰被る」とむかうを向いたまゝ云ふ、「では縁談は」「御祖母様もう澤山、早く歸りませうよ」「何ですね」と笑はれた、でも氣味が惡くつて、雨戸をしめ切つた眞暗な次の間の方で時を置いてはがた／＼がさ／＼云ふ、「あの音何でせうね」「あれは猫だよ」御祖母様は事もなげに被仰る、と「今年」と耳に入る、はつと見ると「第二で御座いますかでは第一の縁は明年で」箱は上つた「はゝあでは一月、二月、三月、四月」何だか氣がもめる、とたんにがつたり、私は御祖母の御膝へつつぷした、てはぐそうつと顔を上げると障子の破れからやせた／＼猫がこつちをのぞいて居る、何の事だ人を馬鹿にして居る、此樣な奴にびくついて居たんかと思ふとをかしくなつた、と「はゝあ七月で御座いますか」私はどきつとした、「して之は人から云うてくるので御座いませうか」上らない、「兩親が見立てるので御座いませうか」上らない、「では本人が自分とさがすので御座いませうか」上つた、おや／＼驚いた／＼私は御祖母樣と思はず顔を見合せた、何も此樣な事始めから信用してやしないけど之には驚かざるを得ない、戀愛の神聖を唱ふるのは我田引水的の人だと一人できめて私は始終其反對を叫んで居たのに、不謹愼な自分でとは、僞か眞か知らないけれどあんまりなさけないぢやないか、時計を出すと五時、「御祖母樣もう歸りませう、聞いてると何を云ふか知れやしませんよ」未だ何つてやると云ふのを辭して三十錢包んで二人は御稻荷樣を出た、後の森にはもう夕べの色が匂うて居る、鶯の聲が寒さうだ、私は妙に後から何者にか追掛られる樣な氣がして、不安で／＼たまらない、歸りにこそと思つてた、すみれや蓮華草も摘み得ないで、ともすればおくれ勝ちなお祖母樣を引張つて家へ急いだ。

流れ星

末摘花

（不思議ですわねえ……）と若い女は言つた。かすかな星は、さびしい光りを放つて疲れた町を照してゐる、寂寞の夜だ。

（不思議ですわねえ……）と又若い女は言つた。怖れの星は白銀の尾を引いて今西から西へサーッと幻の樣に流れた、若い女の眼は輝いた。

（不思議ですわねえ……私は斯の樣な夜なつかしい人の聲を聞きました面影も見ました）と若い女は三度獨言の樣に言つた。

（私は遺傳だと思つてゐます父から妹までさうです、時代は私を殘していつたのですよ）

若い女はつぶやいた、其の聲は顫へを帶びてゐる樣だ。

（私はそれで滿足してゐます………あれ星が流れました）若い女は叫んだ、顏は紅くなつてきた。

瞬間、黑目がちなパッチリした眼を瞳を据ゑて、うつとりと星を眺めた。

乾度！夢に入つた昔の美くしい人を追想してゐるのだらう。

夜は深くなつた、沈んだ空氣は地の物を壓して、そこには知られぬ悲しみが潜んで斷れ斷れに吐息してゐる樣だ。

若い女は默つてゐる。

不圖、祖先の血？私にはどんな血が！私はたまらなくなつかしくなつた。

どうしても解らない、何物かゞ囁いて呉れるかと思つた……だめだ、刹那の暗示があるかと星を視た。異樣に輝くそのまたたきには、何等かの神秘があるらしいけれど私の頭は熱する斗りだ、矢張りだめだ、私には永遠に解らないだらうか……と、私は暗い物に包まれて遠く線外に獨り殘された樣な、寂寥にひし〳〵と堪へられなくなつた。

星は又流れた。

若い女は無心に眺めてゐる。

中道輪子
みだれ髪つめたき朝の食卓にさめたる乳をつく〴〵と見る

櫻井了子
何ごとも君がみ言葉そのまゝに從がふ我をあはれと思せ

まつ子
ほのかにも君と語らんものとこそ思ひつゝ居ぬ電話室にて

白鳥

田中落葉子

沈黙――
たゞ沈黙
あらゆる靜寂と悲哀とを
溶かした夜の大氣
呼吸をやすめて
萬象は目を瞑つて居る
只死んだ樣に――

青玉の大杯を倒にした大空
その美しい杯の底に月が一つ
白い玉が――その淋しい〳〵輝きよ
甘い〳〵酒を湛へた池
吸ひつけられる樣に
ひとり私の思ひは池の周圍を逍遙ふ
あゝこの瞬間
澄み切つた池と靜かな私の心と
互に沈黙して居る
と見て居る暇に我が心ならぬ眞の池に
夢の樣にズーと浮いて來た
二羽の水鳥――
眞白い雪の樣な柔かい羽を
互に觸れ合せつゝ
折々甘さうなこの水を吸つて居る
さまよつて居た私の思ひはやう〳〵と
柔かい鳥の背にもたれた
鳥はたゞ浮いて居ると思ふまに
透明な水面に幾つかの紋波を描いて
靜かに水にもぐり込んでしまつた
私のおもひもともに――
水の上は物もない

あゝ――
あゝ――
夢の樣なもの白鳥と私の若い思とは
冷たい水の底に沈んでしまつた
もう永久に浮いては來ないのか
白鳥よ――
私の若い思よ――　（入賞）

眼

和泉花葉

溶けるやうな表情の
潤味のある綺麗な眼が
私の空虚な頭腦を覗く

極度の嬌媚をふくんだ
哀求の艶いたしたゝりが
ぽとり、ぽとりと、
白椿の花のやうに落つる。

吾が胸の曠野に
蓮翹の花の
しづ心なくしだるゝやうな
波打てる戀の薫風よ！
赤きハートの鼓動よ！

目を瞑ると、
ほのかな、春の日に匂ふ靄の中に
美しい女の瞳が歌を歌ひながら

快活に金絲鳥のやうに歩いてゆく

病室の印象

むらさき女

黄色き病室の空氣の重さ
溷濁せるバクテリアの
その蕃殖のはやきを見よ
周圍の床の熱管より
たえず熱は傳りて
やゝに濕りつゝゆく空氣の中を
下等の性慾をほしいまゝに
あゝバクテリアはをどり狂ふ

あな青白き患者の額よ
濁れる血液は遲く皮膚の下に流れて
惱ましき肉の白さ、髮の乾ける
見よ、横はれる其面に惡夢は
灰色にきざして色なき唇より
迸り出づる血の叫び
波うちて低くよわきを……。

悲しげに唱へる枕時計の俗歌は
靜けく靜けくふりそゝぎて
喧噪の中に白き細き道を得て
たゆたひつ又めぐる
あゝ葬式の奏樂のごとくも……
あはれ窓硝子にあへぎつゝ
取つく水粒の數滴
患者の額ににじみいづる脂のしびれ……

電車のうち

せゝらぎ

濁れるまちのどよめけるひと時
樂器抱ける放浪の子の
つかれたるまなざし
銳き胸に痛くうつりて
ふと正面なる扉みあげぬ

そこか、あな
瞬間の青き國
消えてはまたも
たまゆらにうつる國、青きくに

象なき國
影のくに
かいまみし自由のくにの幻影よ
瞳はゆるく見まもりて
消えゆくかげを逐ひてゆく

轟きよ——
ブレーキの音たちまちに耳を亂しつ
されどもくにはなほも映れり——
おほひなき硝子扉のくもれる面に。

ほしいまゝに

川島登子

こゝろもとない一みやくの疲れが
ほの暗い——窓の外を覗つめてうたひ、
どこかに衰へたゆうべの甘たるい
やさしい嘆きのハモニカをきく。
石のはしらのもとに
面を俛れたさびしい花、
すみれの色はしだいに眸をとぢ

映えた赤い壁もねむりゆくつかれ、
たゞ獨りくれゆくこゝろ。

眼を瞑つて——白い顔が忘れゆく……
彼の日は悲しげにおとづれ
腹這うてゆく石甃のわかぐさ、
たゞ默し、甍の上に鳥は動かぬ、
あゝ擾れた心おとろへつゝ
逃げ後れ……殘るさびしさ。

夜の慄ひ

玉岡

目のあらいカーテンを透して
クリーム色の月が
忍びやかにのぞいてゐる

今盲ひ行く私の顔にも
青白い光をあびせながら……
私は
何かに襲はれたやうに
思はず眼をひらいた時
なつかしい月はかくれてゐた、そして
あたりはたゞ
薄暗い影が迷うて居るばかり……

しづかに
靜かに、時のたつのが意識される

夕空

孤舟子

落日の光を受けて
紅に染みたる空の
刻々と薄るゝ黃昏
手を組みて花やかなりし
昔の戀を思へる時
露草の花を啣へし
鳥一羽我が眼の前を
飛び過ぎて微かに消えぬ。
戀に疲れし我が心
にほひ消え行く夕の空
靜かに暗に包まれぬ——。

灰色の波

原田琴子

○

わが家の壁に襖にこと〴〵く君が姿のうつりたるかな

○

たゞ一つ酒をみたせる杯を宴のあとに見るがうれしき

○

かの夕卓ごしに吸はれたるそのおどろきの今もやまぬか

○

恨むるは女の家と酒肆とかく隣らせし神のあやまち

○

われ少女いまだ何をも爲すことのあらざる故に物思ひする

○

世の少女鈴を打ち振る然れどもそを賣る店をわれは知らねば

○

わが玉の半を君が持てるゆゑそをとらむとて日頃わづらふ

○

み心をうつさむとしてみがきたる鏡を君にとられけるかな（入賞）

○

信濃　石山照子

梅雨去りぬ長精進の果てしごとかろき一重を着よそひてゆく

○

あさましき白粉の香を移し來む袖をおもひて手だに觸れなく

○

河音の或日はことに君嘆くごとく悲しう胸にひゞきぬ

○

戞々と玉の觸れあふ響して河原に白き秋風きたる

○

夕まぐれ木挽の小屋の鋸屑に山ざくらちる連翹のちる

○

ほの暗き心の祠夕されば青き愁の灯をばかゝぐる

○

東京　美耶

たえがたきなやみ悶へも安きかな君をし見れば夢の如きゆ

○

君思ふ思ひの丈を問はれなば限り知らじと答へ奉らん

○恥かしと俯向く君の小女氣を我は愛すとのたまひにけり

伊賀　山村龍子

○我に君あるを知れるや知らざるやそはともかくもいたづら男

○人妻は手毬ほどあるぬけ髪を捨てもかねつゝ手の上に置く

○火の如き歌を多くもよむために君と戀する我ならなくに

○美き男世には數あり一人を戀ふなる我は賞めらるゝらし

○喜びて或夜は寢ねぬ悲しみてある夜は寢ねぬ我れは戀の子

羽前　伊達まつ子

○今までのかなしびに似ぬかなしびを君におぼえぬこの悲しびよ

○あたゝかき君がみ唇にくちつけしまゝ安らけき夢に入る夜毎

○添臥にわかれて幾夜今宵またつめたき床に髪やつれゐぬ

○接吻の甘き香りにゑひはててうつくしう寢るわかき二人よ

○接吻もせずはや君は夢に入るこのものたらぬ夜のさびしさよ

飛驒　眞砂子

○運命てふ神のおん手に囚はるゝ先それまでは戀はむ思はむ

○牡丹よりさうびよりなほ美くしと見たまふほどに心かざりぬ

○戀ならぬ言葉なれども美し女と語りてあればねたましきかな

街樹

信濃　川端　周子

○

海の音としほの香ひをなつかしみ春の灯の下にまろねす

○

なよ〳〵と草の芽萠ゆる千曲野の春の匂ひの中にイむ

○

群集のみだれてさわぐ春の夜のまつりの中の砂ほこりかな

上毛　もと子

○

亂れたつ煙たゆれば淋しかる彼の淺間山我が心かも

○

紅椿落ちぬさながら疲れたる戀の心かかぐろき地に

○

戀てふは何の快樂ぞ少女なるをかしき日をぞ悶え暮せる

○

戀の歌あまたえさすとわがためにいつはり言ひし君なりしかよ

山口縣　川島　登子

○

歌へども花のかず〳〵むしれども絹引き裂けど悲しきこゝろ

○

わがあたりもの怖づさまにたそがれぬむかふ限りは黄なる日搖れて

○

靜けさよ今なにごとかもたらしの聲あるごとく宵のまちゆく

○

あかつきや思ふことなきこと〳〵も靜かに香る茴香の花

牛込　平塚白百合

○

風ふけば裏山の竹そらなりて口笛かとも胸とゞろけり

○

武藏野の木々の若芽は紅と緑をふくみ春の雨ふる

○

雨上りやゝあかるみし木の間など暮春のうすきかなしみは浮く

新潟市　北澤　昌子

たゞ空のあを　　より白き黒き雲のちらばる日をばよろこぶ

○

男等の心をうばひ女てふ吾を忘るゝ面白さかな

○

ひるは町のどよめきをきゝ夜は海のなげきをきゝてみゝやすまらず

○

林にて木によりかゝり目をとぢて春の小鳥のよき聲をきく

佐渡　古藤いえ子

○

さ緑の草の香のなつかしき故郷の野に似たる心よ

○

紅白の花あまた咲く丘の家に鶯きゝて我は育ちぬ

信濃　山口破魔子

○

登記所の門をくゞれる二人連れ指輪嵌めしが賣手なるらむ

○

「人妻になれよ」と母の宣るを聞き嬉しくもあり悲しくもあり

○

罪なればとれよと君は宣へど肩揚げとるはいと惜しきかな

宮城　野菊子

○

人に怖ぢ世をはゞかりしわが戀のおたけばかりはのびつくせども

○

わが乙女夢のやうなる初戀と知らぬがゆゑにこがれつくしぬ

○

古女夕さりくれば人去りし花にかくれてもの思ひする

東京　梅村　咲子

○

あまりにも裾の出たればなをせよと母にいはれて悲しうなりぬ

○

大通り並木のやなぎ芽ばえして馬車のひづめのこゝろよきかな

○

工場の笛に夜のあけ夜に暮れる本所の町の空のくらさよ

信濃　吉川多美子

○

滿潮のひた〳〵岸にくちづくるほとりに立てば若き日おぼゆ

○
雉子啼けばわがふるさとの痩山の眼に浮び來ぬ母もおもほゆ　常陸　木村那賀子
○
花咲きぬ鳥は歌ひぬかゝる時君を思ひて一人笑みしぬ
○
五インチのリボン飾りて化粧してよく死を語る君をば憎む
○
おん胸に抱かれて泣く其れもよし一日思ふ淋しさもよし　金澤市　むらさき女
○
若き子はきよき衣きて日ねもすを小鳥の如くさえづりてゐぬ
○
いとはゆき瓦斯の光りにおどろきて闇に走れる少女ありけり
○
大らかに戀物語する人をわれあざむきてさけてこしかな　麻布　花子
○
我れに似し人もあるかな闇の中に人を尋ぬる人にしも逢ふ
○
現世の果わきまへぬ我が思ひこれより先きに行かむすべなし
○
黑闇の夜に咲き出でし花ならぬ黑き衣きし憎惡の心　大阪　わたつみ子
○
我心おもひのまゝにふるまひぬされどもつひに君にとられし
○
世のつねの人にまじりて美き衣をしなさだめするわれなりしかな　信濃　大平　直枝
○
毒草とをしへられしにいちはやく取りて食へど命は死なず
○
むらさきの花あまた咲くすみれ野の中に一本白き小さき
○
水色の明けゆく空に白き花ちる心持男に似たり　越後　星野　白露
○
日は照りぬ道あらはれぬ雪とけて土の香匂ふ春の眞晝よ
○
かの山の峰の白雪消ゆる如君は我をば忘れ給ひぬ　徳島縣　中村　玉野
○
うらさびし海を隔てしはなれ島燈臺守る灯をともす夜は
○
誰ぞやふと我の心の奥よりぞ足音偷みちかよる人は
○
宵の灯に向へる二人たゞ默し默してあればさびしけれども　西多摩　三ケ島葭子
○
心地よく雨に打たれてねむるかな綠する木も花さく草も
○
三里ほどまた遠き地に行くといふ死なざるうちは逢はれざらまじ
○
きはまれるわが行く道よ白雲は月の上ゆき月の下ゆく

屋根の草

○
二十にもならずに妻とよばるゝは苦るしければといつはりをいふ　福井縣　やまざと
○
二十四時胸の中にて吾一人吾一人よとさけびつゞけぬ　新潟　白薔薇
○
靑き白き濤のみだれに海鳥の見え隱れする淋しき渚　靜岡　藤澤あや子
○
夕闇や怪しう潮の遠鳴りに罪ある如く我身をのゝく
○
君がため憂き罪を負ひ月を負ひ行かむとぞする淋しけれども　伊豆　幽喜子
○
難波津につとめする子を一人のせて霧はなれゆく滿潮出舟　大阪　春の日
○
大風のやみたるあとの草原と己がこゝろのすさみ果てしと　磐城　繁子

○　田舍娘
君去りしあとの一室に鶯の聲のみきこえまひる靜けき
○　佐賀縣　交野小萩
朝の海船はゆら／＼潮の香に包まれて立つ海士乙女かな
○　赤坂　露木あき
如月や車も人も通るなる小舟町にも若草燃えぬ
○　小石川　田村ゆかり
我が胸に根ざしもふかく撫草をうゑずてにして君培はず
○　麹町　みつ子
我が思ふ人のみのこし春の日はいと花やかに暮れにけるかな
○　群馬縣　包子
わが向ふ机の上のともし火の油はへりぬ音たてつゝも
○　札幌　清川ゆき子
しみ／＼と語るか山羊に今日もまた聖書讀むまを柵にもたれて
○　土佐　寂靜子
春雨は或宵我れに涙せしやさしき人のおもかげもきく
○　駿河　池田藤子
がた／＼と馬車搖ぎ行く石道や晝風乾き草は日に死ず
○　信濃　矢崎俊子
春の日の砂にまじりて貝あまた光るが中にねころびてゐぬ
○
空を見て林の遠に海を見てたゞ立ちてあり日はかぎろひぬ
○　秋田縣　加藤うん子
春の野の花のさかりにあゆむごと君ありし夜は心よろこぶ
○　大分　冬野花子
神がもつ尊き玉のそれよりもや・意味深きわが玉の乳よ
○　和泉　金田代志子
美しき處女のほこりうすれ行くと心しながらなほあこがるゝ
○
泣きたさににぎはふ街を後にして夜の海邊を一人さまよふ
○　山口　酒向登志子

御寺の扉に艶うせし願立の黒髪ゆれぬ白椿落つ
○　呉　碓井呉竹
星あまた輝く夜なりわが魂は海越え山越え誰たづねゆく
○　京都市　松原きぬ子
悲しき日呪の花は我が胸の錆しとぴらに額たれて咲く
○　千葉縣　峰島よし
さすらひの身にはをり／＼悲しみと妬みの心わきいでにけり
○　下關市　山田くに子
我が泣くに君は笑み給ふ淋しさよ小さき蕾を土に落しぬ
○　越後　枯尾花
かりそめのちぎりはしたれ春草のかげにしのびて會ふをいとひぬ
○
山茶花のほろりとちりし夕べより君なきものと思ひけるかな
○　富山縣　石黑たみ子
人づての誠しからずおもへどもしばしなぐさむわが心かな
○　紀伊　三栖鶴江
この淡き愁の波のたつ胸も白日の光滿ち滿ちてゐぬ
○　宮城縣　佐藤きく子
快く開かせ給へその御厨子秘めにし胸もわれはあけしに
○　姫路市　菅原靜野子
かくも我をいぶかりたまふ君にしてその自らを信じますにや
○
君思ふ思ひよりさめつと窓に恁りし夕を夕雲はえぬ
○　葉末女
逢はばやと出でにしものを子供らと土筆つみつゝいつか歸りぬ
○　信濃　淺田千代子
河原路白く枯れたる[illegible]花のいさゝかゆらぐもの悲しさよ
○
如月や駿河の國に入りけりと封じて送る白梅の花
○　鹽汲　車
行かゝり小股にあゆみしなづくりふと思ひけり妻てふものを

○
三月や紋ある蜜柑うる女海苔うる女ゆき違ひけり
○　飛騨　知代子
日と月のめぐるがやうに我こゝろ君を思ひて幾とせをへぬ
○　宮城縣　結城末代子
人の子の暗きに消ゆる黄昏を日の大神は瞳を閉ぢぬ
○　愛知縣　早川　勢以
雲もなくなきたる朝の花の野や都の姉はさぞつらからむ
○　富山縣　むらさき
戯言をのたまふうちに針のごと強き言葉のあると知りけり
○　北海道　むらさめ子
ふくらかに鬼灯ならす若き頰の幸ながかれと撫でゝみるかな
○　美濃　橋村　國子
たそがれの悲しみうつすずべなきやふとせしことも涙の出る
○　下總　小澤まゆみ子
泣き疲れ今日も遠海ながめつゝ茫然とあり海の少女は
○
翼重うくゝみ聲して砂濱の砂船をめぐるあはれ白鳥
○　相模　氷の花
儕々と君は歸りぬ吾が胸にいとも寂しき物を殘こして
○
ふと淡き悲しみ胸を掠む時君のみ歌をとり出でゝよむ
○　安木　春子
誇り多き處女の肌と黒髪をすつる日のなど嬉しかるべき
○
かゝる折なほたはむれをのたまはす憎き君かもさらば思はゞ
○　徳島縣　野　菫
かゝる事今きかんより情あらば別れし朝に泣きたるものを
○　鳥取市　糸澤　敏子
恐ろしき夢し襲はゞ彦の男よ疾くかけ來り我が乳をいだけ
○　千葉縣　朝倉　久子

萬象は美し春は玉琴の高張る音にも似たりとおもふ
○　備中　篠原しげ子
物みなの美しう見ゆ月の夜に君と語りし嬉しさ思ふ
○　信濃　紅ゆり子
白き頰に涙流して御佛おろがむ君を床しと思ひぬ
○　埼玉　せつ子
何となう涙ぐまるゝ文よみてこよひばかりは戀しと思ひぬ
○　若狹　前川蝶夢子
執着の男の子に似たり黒き蛾は灯影を戀ひてあまたゝび來ぬ
○　成田　文子
夢なれや花よりはなにあこがれて春もくれゆく今日となりけり
○　青森　初枝子
花みれば花なる我にまたなりぬかつては捨てし戀も欲しきよ
○　山城　木の花
忘れんと思ふ心は君も知る今日春雨のふる日となりぬ
○
相思ひ若づくりせしその日よりたゞ木蓮の散るが悲しき
○　十勝　蔦柳まりや
この少女ひたもとめけるものを得し如く火鉢の吸ひがらを吸ふ
○　長岡市　秋月すゞ子
降雪や電光淡き夜半の街門のやなぎは微かに動く
○　日本橋　松岡千代子
ふりかへり〱つゝ春の夜の月ふむ君を見送りて居ぬ
○　下總　岩井　白子
思ふことたのしみしこともならぬ世に鈴菜の花はたゞ咲にけり
○　芝のつゆ
遠々と海山越えて春は來ぬともにといひし人を歸して
○　長野　宮坂あき子
山國に住みならひたるかなしさは海原ながめ身うちをのゝく
○　信州　原　芳子
古寺にうたふ鶯聲さびて深き春とぞなりにけるかな

木の芽

芝波留子

○

袖に占めて人懐しき落花哉
白魚や京に求めし小杯
一澤は石紫に木芽ふく
あやまちし鞠水にあり春の風
湧きあまる泉のほとり木芽ふく
木の實植ゑて夜は土龍とる仕掛哉
乙鳥や船の骨組む濱日和
鹽田の汐汲む日なり鳥雲に（入賞）

越後　藤原鍋女

○

雛の客人形も裝束とやら
早熟の早老の民や青飢飯
樓上の四眼樓下の三起かな
徒に黃金の鈴や猫の春
天人の褌に花見虱かな
駕近くつゝじの娘召されけり
臨床の法語尊し時鳥

島根　森千代子

○

淡雪に白魚消ゆる思ひかな
蛤の口あくまじと誓ひけり
灯や蛙の夕草の宿
汐干狩御座船近う拜みけり
舞折々落花をさそふ扇かな
海棠に灯くらき恨かな
錦織る窓うらゝかに旭かな

相撲　とよ子

○

酒少し膝に泌みたる餘寒かな
梅寒し餅黴びず皆干割れたる
囀や塾に古りたる四書五經
木の芽時古疵を復なやみけり
花辛夷空海を乞食と誤ちし
耽讀す古き禮記や虻の聲
金時の怪力となりし若葉かな

麴町　みつ子

○

子子やガーゼに下水とゞこほる
女學校に參觀人や春の暮
桃咲くやタオルに我が子抱きけり
藤の花わが髮に似てながき哉

日本橋　松岡千代子

○

顔そりて來て春寒う思ひけり
つれられて芝居見にゆく春の宵
朧夜や買物もなく歩きけり
春雨や箏の緒しめてもらひけり

備前　中道輪子

○

餌をあさる雞白し春の風
韓人の鷄賣る聲も日永哉
鷄の子の鳥屋を出て鳴く春日かな
赤門をくゞる揚羽の蝶々哉
京へ一里石の塚有り桃の花
黃昏るゝ大棧橋や春の雨
貝類を移植す灣や山霞

府下　春風

○

うたゝねの空氣まくらや春の風
花に客女はさけのしたくかな
櫻がり母がなさけの辨當かな

しとやかに見せて手踊の上手哉
神戸市　松本靜子

○

欄に干す能の衣裝や松の花
生垣の杉の低さや揚雲雀
菜の花に開け放ちたる産家哉
貝潜む穴に酒つぐ汐干かな
嫁す迄の身を顧る柳かな
時鳥名所となりし烽火臺
呉市　碓井呉竹

○

春雨を芝居歸りの濡れて居ぬ
團扇骨けづる親子や子規
春の山順禮に御ほうしやとうたひけり
よき風呂をわれ一人してつかりけり
春雨や傘さして入る外の風呂
春の夜の琴柱を渡る鼠かな
和泉　金田よし子

○

青春に別るゝ人や春の月
君を得て歸る野路や春の月
春風に桃の花散る泉かな
春雨に音無く落ちし椿かな
雛節句となりから呼ぶ晝の風呂
雛樣の寢ざめがちなる一室かな
堺市　白桃

○

午の春の赤き幟や春の風
物干しの晴れ着を吹くや春の風
三味線をひく春の夜の物貰ひ
紅梅や村落の壁白くして
硝子越しに比叡の雪見る餘寒哉
將軍の師統べし野の霞かな
靜岡　篠澤綾子

○

山間の夕山ざくら灯の見えて
矢ひろひの聲やちらほら散る櫻
おぼろ夜や人あしげきくるわ町
若草や雨後の小なかれ覗く牛
永き日を似而非俳人の句會かな
黎明の風うすさむし神の梅
夜さくらや黛句ふ小傾城
夜櫻や銀燭暗き能舞臺
下關市　山本芳子

○

地震ゆつて柳に鈍き日ざしかな
頭剃る子が泣く宵や猫の戀
春の夜を伏見の人の長湯かな
陽炎や耕しの地に坐す晝餉
菜の花や太平の城美しき
高き低き妹山脊山かすみけり
千葉　峰島よし

○

麻刈りてあかき障子や秋の風
滿潮や蟲の鳴きやむ磯の草
君がため春の月夜の使かな
四五日の雨に氣を置く櫻かな
白萩の傘にまつはる小雨哉
埼玉縣　野巻若葉

○

萍によき魚や寢ん春の月
美しき袖もつれゆく春の雨
湯戻りの素足に泥や春の雨
月の暈沼に靄たつ柳かな
春の浪大きく寄せぬ珊瑚礁
伊豆　鈴木矢壽子

○

行春のいぶせき髮を切りにけり
初袷料れど鯉の尙生きて
五月雨の水見る丘や草の丈
いづ地行く船の汽笛ぞ明け易き

雑報

新社會劇を觀る

中村君の歸朝以來、第一着の創作脚本『牧師の家』を、新社會劇團の諸子が東京座で演じた脚本も新しい、俳優も新しい、自分も新しい眼を以て觀やうと思つた。

觀たところ脚本本位の劇であると云ふことが從來の劇よりも心持が宜かつた、俳優が凡て新しいだけ吾等は俳優に囚はられる憂はなかつた。而かも彼等は技の巧拙は兎に角、團員一致して非常に熱心に、極めて眞面目に演じてゐた、此の熱心と眞面目とは新社會劇團諸子の世に誇つても可なる處であらう。

『牧師の家』は新聞で讀んだ時よりも、更に上場したのを觀た時の方が感動が深かつた、新聞で讀んだ時は少しかたくるしすぎて、如何に考へさせる劇だからとて、これでは論文にした方が早くのみこめると思つた位であるが、偖て劇に上せてみると必ずしも然うでない、筋も通つてゐる、人間も動いてゐる。只、餘りに思想を壓搾し、技巧をかためすぎた結果、內容を辿るのに苦しいやうな氣もする、併しそれだけ內容のある劇を作り得るものは、今のわが脚本作家の間に甚だ少い、此意味に於て中村君の才分を異數とする、劇としては五時間內外の間に近代人の抱いてゐる大いなる懷疑思想を、これだけ巧みに纏め得たのは服するに足ると思ふ。

當く大いなる問題を捉えてゐる劇ではあるが只一つ吾等との交涉を隔ててゐるやうに思ふものゝあるのは何であらうか、それは此劇の中心となつてゐる基督教的の神と云ふこと、なほ適切に云へば牧師の生活と云ふこと、牧師の信仰の破壞と云ふやうなことは、基督教國民にあらざる吾等に取つては、此まで大事件のやうに思はれない、却つて基督教國民が見て深い感動を與へられるかも知れない、牧師の家に代ゆるに今少し日本國民に痛切なる現實生活を以てしたならば、此劇は一層の生彩をも添へ、また見物の多數者を會得せしめ、啓發せしめ得たであらうと思ふ、今後の作には多少此點にも思ひ及ぼして貰ひたいものである。

次に此劇の役々に扮した俳優に就いて一言したいが、聞く處によると、此新社會劇團諸子は殆んど素人ばかりであつて、土肥春曙君が監督の下に、急に此脚本を選んで第一回の興行を初めたと云ふことである、素人と云ふ以上は、兎や角の藝評は今暫くおあづかりにして置いても宜いが、中尾鶯夢君初め、其熱心な事は前言つた通りだ、東京には目下最新進俳優が方々で養成されてゐる、此間に介在して一派を興さうとするには餘程の覺悟を要する。

鶯夢の扮した蹈子は 此劇で一番むづかしい役た、迚も滿足にこなし得る者はなからう、輕快には演じてゐたが、表白と、動作とが餘りに間隔がありすぎる、最も矛盾した性格ではあらうけれど、動作にも今少し神秘的な冥想的な處があつても宜いやうに思ふ、よくつてよ、よくつてよが多すぎて氣になつた。牧師はあれ位なら無難な方であらう、牧師夫人は初めから夫人らしくないやうな氣がした、植田老牧師は全然其人になつてゐたやうに思ふ、惡魔の潮は技巧がうまいので芝居になりすぎた、普通の見物には此一人が能く眼に着いたらうと思ふ。（醉茗）

○**秀英舍の火災** 女子文壇の印刷所たる秀英舍は前月二十五日夜突然火を失して全燒の厄に遭つた、幸ひ本社の雜誌は殆んど損害を蒙らず五月號も例の如く定期日に發行した、秀英舍は都下有數の大印刷所、一朝丙丁童子の爲に災されたのは深く同情する處である。

○**青森の大火** 青森市は五月三日大火の爲に殆んど全市八九分通り燒失した、此頃は東京に大火が少くなつて、地方に大火が多い、今又東北有數の都會を燒く、同地方には本誌の讀者もあることですから、定めて災に罹られた方もあらうと察する、痛心の次第である。

○**彗星近づく** 有名なるハレー彗星は本月十九日最も地球に近づいて、其尾は我々人類の棲息する地球を包んで餘りありとの事である、併しながら危險はない、今までにも例のあつたことだから我等は安心して彗星の尾に包まれて宜い

○**夢二の旅行** 竹久夢二氏は前月來、京都、奈良を經て、若狹に入り、北陸の海岸を傳つて金澤の市街を見、それから東京に歸る豫定で旅途に上つた、歸來夢二畫集「旅の巻」が出來るのであらう、因に畫集「夏の巻」は「春の巻」以上の好評で、發行以來間もなく數版を重ねたさうである。

編輯通信

報酬に就いて

今回の『都會の婦人』の投稿に對しては、創作欄は別として、他は

掲載したる原稿の全部に對して報酬を呈す

寄稿の性質上、一等より幾等までと甚しき懸隔を置きかぬる理由もありますから、總額は豫定の報酬額より增加しても、掲載したる投稿全部に報酬を贈呈して、公平を保たうと思ひます、報酬は正金を以て例の通り來る六月中に發送します。

創作の入賞は左の通りです。

一等	卵（小說）	淚花子
二等	山みち野みち（散文）	章子
三等	白鳥（詩）	田中落葉
四等	灰色の波（歌）	原田琴子
五等	木の芽（俳句）	波留子

右は物品を以て同じく六月中に發送いたします。

批評を求む

『都會の婦人』全體の內容に就いて、讀者諸孃に批評文を募ります、二十四字詰五十行以內締切は本月三十一日、都會の婦人批評と題をつけて置くこと、七月號の新論文欄に發表します　天地人の三者に賞を呈す

餘れる題材

『都會の婦人』の編輯を終つて、つく〴〵考ふるに、此一冊は文士の見た都會觀と婦人觀と、婦人の見た都會の印象錄とが、大部を成してゐる隨つて內容のある雜誌になつた、都會の表面的活動に伴ふ內部の心持が表白されてある、此心持は更に深く味はねばならぬ、此雜誌に依つて多少のヒントを與へられた都會の若き女子は更に多くの餘れる題目に就いて思索を費さねばならぬ而して我等は每に其れを聽かんことを望んでゐる、都會の婦人と銘打つた雜誌は此一冊が出たばかりだけれど、我等は平素の『女子文壇』紙上に於ても所謂都會の婦人、就中若き女性の僞らざる告白を聽きたいと思ふ、今の處、動搖して爲に若き婦人の心持は筆に表はすのが最も宜いやうである。（一記者）

第三増刊投稿の參考

第三增刊『地方の婦人』には如何なる投稿を歡迎するか、參考として二三の題目を左に揭ぐ（委細廣告欄參照）

△地方の婦人の現在の生活狀態

△地方にある若き婦人の精神上の動搖を有のまゝに告白せるもの

△田樂生活の福音

△農村又は山村の生活實寫

△女の見たる地方の天然の印象

△方言又は俗謡又は傳說の類にして女に關係あるもの

△地方の小都會の劇場、寄席其他娛樂場の記事

△女の手に成れる紀行文

△地方の女實校の現在

△地方の年中行事

△隱れたる珍しき出來事

△其他――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

投稿規定

▲原稿は一切女子文壇社宛に送ること▲原稿には女子文壇原稿の文字を書添えて下さい▲文字は能く分るやうに書くこと▲小說と詩と短文には振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は同字詰三十行以內、日記、論文も同上、書簡文は同字詰二十行以內、詩は行數制限なし、和歌と俳句とは一人一首限り、短文は十六字詰七行限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、凡て半紙、原稿紙、罫紙等に限る▲圖畫は二寸に三寸の大さきにて薄き日本紙に限る▲投稿は凡て女子に限る▲定期號の投稿は毎月十五日堅く締切る

○（女子文壇投稿各種）懸賞定額

▲特別賞金五圓（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲甲種（短篇小說、散文）
天賞金參圓。　地賞金壹圓五拾錢。　人賞金七拾錢。

▲乙種（家庭日記、論文、書簡文、詩）
天賞金貳圓。　地賞金七拾錢。　人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、圖畫）
天賞金壹圓。　地賞金五拾錢。　人賞金貳拾錢。

◉各種とも金壹圓以上の價格の當選者には相當の吳服物。小間物。文房具、日用具等凡て物品にて贈呈す。壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◉賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽竊したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

○定期發行分（毎月一回（一日定期發行））

一冊（一回分）	定價金拾五錢	郵稅一錢五厘	計金拾六錢五厘
三冊（三月分）	前金四拾三錢五厘	同四錢五厘	計金四拾八錢
六冊（半年分）	前金八拾四錢	同九錢	計金九拾三錢
十二冊（壹年分）	前金壹圓五拾六錢	同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分（年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊））

一冊（一回分）	定價金貳拾錢	郵稅一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）	前金三拾八錢	同三錢	計金四拾壹錢
四冊（壹年分）	前金七拾二錢	同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部（十六回）

四冊（三月分）	定價金六拾三錢五厘	郵稅六錢	計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）	前金壹圓三拾二錢	同拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六冊（壹年分）	前金貳圓二拾八錢	同二拾四錢	計金貳圓五拾二錢

▲申込注意（振替にて拂込む時は誌代の外に壹錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絕）、凡て前金拂込に限る

振替貯金口座　東京第壹七貳九番

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……部數多く有効に
上等	一頁廿五圓	半頁……比し無類の割安
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓　二行四拾錢

〆切　毎號十五日前

特約取扱○日本電報通信社○明治廣告社○博報堂○弘報堂○東京勉强社

明治四十三年五月十三日印刷
明治四十三年五月十五日發行

（本號限り）定價金貳拾錢

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郞
印刷者　東京市京橋區宗十郎町十五番地　松本[illegible]
印刷所　東京市京橋區宗十郎町十五番地　國文社

不許轉載

發行所　東京市京橋區大鋸町十一番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

第六年第七號
（五月十五日第二增刊）

女子文壇
（都會の婦人）

（明治四十三年
五月十三日印刷納本）

百聞一見に如かず

一日發行 五月號 要目

少女

（毎月一日發行）定價一册拾錢 送壹錢 半年郵税共六拾三錢 （口繪挿畫澤山）

少女小說 海上の女（五）……磯萍水
（愈々面白し―危機一髪―短銃を持つた手―滴る血汐）

少女小說 花子の記憶……小川未明

少女の手で作り上げる五千萬圓の輸出品……田上孤舟

仇を討つて主人の鬱憤を霽らした女中お初の美談……河井醉茗

少女文壇 繪さがし 懸賞 應募あり 面白い

少女小品 鳳仙花……佐藤緑葉

芳枝と八重子……一色醒川

少女小品 無言の鞭……西崎花世

少女小說 暗い心……犬麻呂

電信はどうしてかゝるか……眞下夕陽

蟻の一等好きな色……北谷知孝

草や木はどうして寢るか……鯉岳小史

發行所 東京京橋區大鋸町 女子文壇社 （振替口座東京第壹七貳九番）

最寄書店になくば直接御申込を乞ふ